三百六十五日

山手樹一郎長編時代小説全集＝71

春陽堂

三百六十五日

山手樹一郎長編時代小説全集＝71

春陽堂

作品案内

文芸評論家　石井富士弥

のめりこむように熱中させられた小説に、最後のページをめくるのがこわいという経験をお持ちの方も多いであろう。主人公たちには一応のしめくくりがついても、そのとき夢中にさせられたあの楽しさをもう一度という気持ちは、ひとりの気に入った作家のファンなら共通のものだ。

いつでも読者とともにある山手文学は、この辺の読者の願望を心憎いほど心得てかなえてくれるところに妙味がある。同じ場面を二度新鮮に書くことは至難なことだが、わが山手樹一郎はあえてそれを試みることで、読者の期待を終始裏切らなかった稀有な作家だ。

本全集第27巻「青空剣法」の質屋の後家お世紀・曽我平九郎の色模様に陶然とした人々に、もう一度同じ雰囲気で〝始めてのように〟堪能させてくれるのが本編だ。梅日和の江戸は浅草観音様の境内から、奇縁で倉橋屋の権高な後家お浦の用人棒になった風雷太郎は、めまぐるしい事件に遭遇する。さわやかな庶民生活の三百六十五日が豊潤なエロティシズムとともに還ってきた。

三百六十五日

山手樹一郎長編時代小説全集＝71

春陽堂

春陽堂●定価440円
0193-200471-3066

三百六十五日

山手樹一郎長編時代小説全集

71

春陽堂

三百六十五日

山手樹一郎長編時代小説全集

71

春陽堂

三百六十五日

山手樹一郎長編時代小説全集

71

春陽堂

三百六十五日

●編集／解説
尾崎秀樹

●巻末付録執筆者
井口朝生
一条明
伊藤文八郎
風巻紘一
木屋進
郡順史
多勢尚一郎
竹村篤
中村豊秀
永岡慶之助
*松永義弘
水野泰治
*本巻執筆者

敵討ちがしたい娘

江戸はこの四、五日、梅日和ともいいたい早春の晴れた日がつづいていた。

関東第一の霊場浅草の金竜山浅草寺は、今日も朝から善男善女の参詣でにぎわっている。が、仲見世から仁王門にかけてのおびただしい人の流れは、仁王門をくぐると大半はただ遠くからちょいと観音堂へ頭をさげただけで、さっさと奥山の盛り場へ流れこんでいく。

わざわざ正面の階段をあがり、暗い本堂へ入って心から観世音に両手を合わせてぬかづいていく信者は仁王門へ流れこむ人波の一割にすぎないくらいだが、それでも階段をのぼりおりする人足は絶え間がないのだから、浅草の観音さまの人気はさすがに豪勢なものである。

身に親の敵討ちという大望のあるお加世は、無論、わき目もふらず階段をあがって本堂へ入っていった。

明るい外から入ると広い本堂は急に暗くなって、しばらくはなにも見えず、奥のほうにろうそくの灯がともっているのが神々しく目にしみる。お加世はそっちのほうへ合掌して、一心に祈願をこめてから、おみくじを引いて、明るい東の回廊へ出てきた。さっそくおみくじを読んでみるためにである。

黄八丈の着物に博多の帯をしめたお加世は、娘としてはすでに薹の立った二十で、やや大柄な体つきもすっかり女になりきっている。それだけに、一日も早く本望をとげて、長い間の肩の重荷をおろしたいあせりを感じてきていた。

そのあせりを今日のおみくじでなんとか納得のいくように一挙に解決したい気持ちがあるのだ。しかし、ひらいてみたおみくじは、

「第二十三番、凶、賢人も時にあわざる形なり。わが知恵をもって世に交わらんとすれば、かえって人に憎しみをうけ災い来る」

と出ていた。

これではどう考えようもない。まったくがっかりである。

「観音さまもあんまりつれなすぎるわ」

お加世は我にもなく口に出してつぶやいた。

「まあそう気にしないことだね」

ふいにうしろから声をかけてきた者がある。

「だれ――？」

振りかえってみると、年ごろ二十五、六とも見える着流しの若い侍が、にっと白い歯を見せてわらっていた。一口にいえば、どこか旗本の家柄のせがれらしく、そののんびりとした顔つきに少しも悪気は感じられないが、男のくせにあまりにもなれなれしいのが、勝ち気なお加世にはなにかいやらしい。

「お武家さんはどなたでしたかしら」

「いや、おまえとは今日ここではじめて会った男なんだ」

「あたしもそんな気がするんですけれど、いまなにかおっしゃいましたね。あれはあたしにおいいなすったんですか」

「うむ。そのおみくじを見てがっかりしているようだから、そんなものはあまり気にしないことだといった」

「失礼ですけれど、このおみくじをどうしてあたしが気にしてはいけないんでしょう」

「いや、気にしていけないということはないが、がっかりするなとなぐさめてやったんだ。お節介だったかな」

こんどは苦わらいをしながら、その目がなんとなくこっちをあわれんでいるように見える。

「お節介ですわ。このおみくじが凶であろうと吉であろうと、それはあたしのことなんですもの、他人になぐさめてもらいたくありません。いいえ、なぐさめてもらったってどうにもならないことですわ」

虫の居どころが悪かったせいか、お加世はつい八つ当たりがしたくなっていた。そして、怒るんなら勝手に怒るがいいと思った。

「そうか。じゃ、おまえはここの観音さまとは親戚なのかね」

「なんですって――」

「たとえば、観音さまと親戚にもせよ、観音さまに敵を討たせてくれとたのむのは少し無理かもしれないよ」

「まあ――。あなたは一体だれなんですよう」

お加世はどきりとせずにはいられなかった。なんの縁もない者が、そんなこっちの秘密を知っているはずはないからである。

「そんなに驚かなくてもいいんだ。わしはさっきおまえが観音さまを拝んでいるすぐそばにいた。だから、一日も早く敵を討たせてくれますようにとおまえがたのんでいるのが、つい耳に入った。ただそれだけのことなんだ」

男は正直にいって、ちらっと気の毒そうな顔をする。

「あら、あたしそんなこといったかしら」

「あるいはわしの空耳だったかもしれない。しかし、これが武家の娘ならともかく、町家の娘のようだから、敵討ちという言葉はおだやかでない。黙って見ていると、おまえはわき目もふらずこんどはおみくじを引いてこっちへ出てきた。そして、おみくじを見てがっかりしているようだから、あまり思いつめないようにと思って声をかけたんだ。それでも、おまえ、怒りたいかね」

「すみません。――でも、強情のようですけれど、あたしやっぱりいい気持ちはしません。そんなことただ口先だけでなぐさめられたってなんの足しにもなりはしないし、いっそ黙って見のがしておいてくれたほうがましだと思います」

「まあ歩きながら話そう。こんな高いところでいつまでも人の見せ物になっていることはない

だろう」

若い男と女の立ち話は目につきやすい。そろそろ人立ちがしてきそうなので、男はゆっくりと階段のある正面の廊下のほうへ歩き出した。

お加世はともかくも自分の大事を知られてしまったのだから、この男の素姓がなんとかもう少しわかるまでは別れるわけにはいかない。黙って男の後からついていくと、男は正面の階段をおりて、仁王門のほうへは行かず、人のすくない東の随身門のほうへ歩いていく。

随身門を出ると馬道へぬけるのである。

「おまえ、さっきのおみくじをわしに見せてごらん」

男は肩をならべてきながらいった。

「これよ」

別にかくす必要もないから、お加世はまだ手に持っていたおみくじを男にわたした。

「なるほど、これはちょいとこたえただろうな」

男はおみくじに目をとおしてから、

「しかし、ものは考えようだよ。これは時節を待てと教えているんだ。ひとりよがりは慎んで、すなおに人の忠告を聞けといっている。思いあたることはないかね」

と、わらいながらそのおみくじをまるめて自分のたもとに入れてしまう。

「なんだか皮肉をいわれているみたい。あなたはその凶のおみくじをもらってくれるの」

「そのほうが安心だろう。いやなら無理にとはいわないがね」

「あなたはおみくじなど子供だましだと思っているようね」

「まんざらそうでもないんだが、支那の人はね、おみくじを引いて凶が出ると、それをすてて、自分の気に入った大吉が出るまで何本でも引くという話だよ」

「それじゃ、なにもおみくじなんか引かなければいいじゃありませんか」

「さあ、一本のおみくじでくよくよしているの

と、何本でも吉の出るまで引いて安心して忘れてしまうのと、どっちが得な生き方だろうな」
「あたしのは損得じゃありませんのよ。あなたは敵討ちまでばからしいというの」
「町家の敵討ちは公儀で禁じている。わしは討つなとはいわないが、おきてにしたがって、善悪は公儀に裁いてもらうほうが常道だと思っている」
「ばからしい。公儀にそれだけの正しい目があってくれれば、なにもあたしは一人でこんな苦労はしやあしません」
「そうか。そういうことがまるっきりないともいえないだろうな」
男は人のことだと思って、はじめから至極冷静で、むしろ冷淡にさえ見えるくらいなのだ。
それなら余計なお節介をやいてなぐさめてやるんだなどと口幅ったいことをいわなければいいのにと、お加世はまたしても中っ腹になってくる。
「お武家さん、御親切ついでに、たった一つだけうかがいたいことがあるんですけれどね」
「どんなことだ」
「女は親の敵を討つためにならどんなことをしてもいいでしょうか。女一人の手では、とても討てそうもない相手なんです」
今日はその腹をきめようと思ってわざわざおみくじを引きにきているのだから、男の冷淡さに腹を立てながらも、お加世はついそれが口に出てしまう。
道は馬道を突っ切って寺町へ入り、この辺までくるとさすがに人通りもまばらになってくる。ここを通りぬけると花川戸の大通りへ出るのだ。
「そうだな、昔こんな話がある。女が親の敵を討つために、どうしてもその手段がなくて、敵のめかけに入りこんだんだ。それでも敵は少しも油断をしないんだな。三年ほどたつうちに、女は敵の子供を宿して産んだ。子供ができると、

敵もいくらか油断してきたので、女はまず子供を刺し殺してから、敵を討って、ようやく本望をとげたというんだ。これは作者の作り話かもしれないが、もし本当にあったことだとすると、その女はかわいそうな気ちがいということになるな」
「どうしてその女は気ちがいなんです」
お加世はなにか頭の中がかっと熱くなってきた。その女を気ちがいと簡単に片づけられてしまったのが、妙に気に入らないのである。
「普通の女にはそんな非情なことはできない。だいいち、そんなわが子を殺すようなむごたらしいことをして敵を討ったって、だれもよろこびも感心もしないだろう」
「だって、敵討ちなんだからしようがないじゃありませんか。敵討ちは人をよろこばせるためにするんじゃありません」
「いや、自分だってそんなことは後味が悪いと思うんだがね」
「違いますってば、敵討ちは親の霊をなぐさめるためにするんです」
「さあ、今の女のような場合、親の霊がよろこんでくれるかな」
男はあいかわらず冷静な口ぶりである。
「あんたのような薄情な人に、敵討ちの気持ちなんてわかるもんですか」
お加世は小利口ぶった男がむやみに憎らしくてたまらなくなってきた。
「そう腹を立てなくたっていいよ。わしは別におまえの敵討ちのじゃまをする気はないんだ。じゃ、ここで別れようかね。おまえここから一人で家へ帰れるだろう」
ちょうど花川戸の大通りへ出てきたところである。
「あんたのお名前を聞いておきたいわ」
「それはやめておこう。わしもおまえがだれだかまだ知らない。そのほうがおたがいに後腐れがなくていいんだ。ただな、今わしが話した女

のような気の毒な気ちがいにはならないほうがいい。自分がかわいそうだからな」

男はいかにも同情するようににっとわらってみせてから、いまきた道のほうへくるりと踵をかえしていった。

観音さまの棒

――かわいそうに、親の敵討ちなどと、因果な娘だ。

男がその因果娘に別れて、いまきた寺町のほうへ引きかえそうとすると、

「あっ、だんな、お早うござんす」

と、すぐうしろから歩いていたらしい若い男が、びっくりしたように立ちどまって、あわてておじぎをした。

どこか大店の番頭といった身なりだが、その体つきになんとなく小粋でやくざっぽいところがある。

「わしになにか用か」

その男があまりこっちの顔をまじまじと見ているので、こっちは思わず聞いてみた。

「すんません。だんなはいま娘さんと仲よさそうに歩いていやしたね。お知り合いなんですか」

「いや、別に知り合いというわけではないが、わしは暇人で、少しお節介のほうだから、あの娘を観音堂からここまで送ってきてやったんだ」

「すると、だんなは御浪人さんですね」

「うむ、浪人だ」

「まさかあの娘さんをくどこうとしたわけじゃないんでしょうね」

「いや、わしはそんな行儀の悪い男じゃない。わしのはただ義侠心から、あの娘の不幸をしょってやっただけの話だ」

「気に入りやした、だんな。こいつはすばらしいや。失礼でござんすが、お名前を聞かせていただくわけにはいかないでしょうか」

やくざっぽい男は、案外人のよさそうな目を輝かせながらいう。

「それは名前を教えろというのなら教えてもいいが、人の名前を聞く時はまず自分から名乗るのが礼儀じゃないのか」

「うれしいねえ。こいつはまったくびたりだ。いいえね、わけは後で話しやすが、あっしは馬道の忠太といいやす」

「遊び人か――」

「どういたしやして。これでも拾い屋でござんす」

「ふうむ。拾い屋っていうと、なにを拾って歩くんだね」

「そいつも後で話しやす。さあ、こんどはだんなの番だ。どうかあっしをがっかりさせねえように、ひとつ立派な名前を名乗っておくんなさい」

拾い屋の忠太は真顔になってうながす。

「そうか。しからば約束だから名乗ってつかわそう。いいか、姓は、風、名は雷太郎」

「風の雷太郎さんですね」

「そうだ」

「風っていうと、空っ風の風なんですか」

「そよ風の風でもいい」

「雷太郎さんは雷でござんしょうね」

「本当は到来物の来なんだが、雷のほうが強そうでいいだろう」

雷太郎はにこりとわらってみせる。

「上出来、上出来。気に入りやした、だんな。風の雷太郎、いい名でござんすねえ。さあ、まいりやしょう」

忠太はいそいそと馬道のほうへ歩き出す。

「どこへ行くんだね」

「失礼でござんすが、あっしがおひるをおごりやす」

「そうか。それは、忠公、すまんなあ」

「あれえ、あっしは忠太と名乗ったはずですがねえ」

「遠慮するな、忠には孝がつきものだ」

「あいにくあっしにはもう両親とも死んじまっていねえんでさ」

「孝のやり場がないというわけか。まあいいだろう、おまえは拾い屋なんだから、無理に孝を捨てるにも及ぶまい」
「口がうまいなあ、だんなは」
忠太はちょいとあきれているようだが、雷太郎もまた忠太がなんで見ず知らずの男に昼飯をおごろうというのか、その目的がどうも解せない。名前が立派だから昼飯をおごるなどという人間はどこにもいないはずだ。
「忠公、拾い屋というのは、まさかぼん引きのことじゃないだろうな」
「気になりやすか、だんな」
「うむ、少し怖い」
「本当のことをいいやすと、今日はだんなのような浪人さんを拾いにきた拾い屋なんでさ」
「わしを拾って、どこへ売りこむつもりなんだね」
「あっしのお主筋のお店へ用心棒にはめこむつもりなんです」
「おどろいたなあ。本当か」
「本当です。このごろ江戸は浪人強盗ばやりで、三人組みだの、五人組みだのってのが方々を荒らしているでしょう、悪い世の中になりやしたからね」
去年の秋ごろから、江戸に凶悪な浪人強盗が出没しているのは事実で、こんどの特徴はたいてい三人組みだの五人組みだのと徒党を作って荒らしまわる。無論、金持ちの家ばかりをねらって押しこむのだが、そのやり方がなかなか神出鬼没で、まだどの一組みもつかまっていない。たぶん去年大坂で旗あげをした大塩の乱の残党が江戸へ入りこんだのだろうというわさなのだが、こういうことはつかまらないとなると、後からまねをするやつが出てくるから、いよいよ物騒になってくるのだ。
それにしても、たった昼飯のおごりぐらいで人をそんな物騒な用心棒にはめこもうというのは、この男も少し虫がよすぎるようだと、雷太

郎は内心苦笑しながら、
「それはだめだ。わしはそんな用心棒がつとまるほど強くはない」
と、一応逃げを打ってみた。
「義侠心のあるだんながそんなことをいっちゃいけませんや」
「しかし、義侠心と腕前とは別物だからな」
「いまさらそんなことをいったって、もういけやせんや。だんなを用心棒にきめたのは、なにを隠そうこのあっしじゃなくて、観音さまなんですからね」
「はてな、するとおまえもおみくじを引いたのか」
雷太郎は思わず目を丸くする。
「おみくじじゃありません。あの仁王門のわきに出ている天明堂っていう占いの先生なんでしてね。実は、その用心棒をたのみたいってお店は、後家さんが主人で、これがまたすごいような大年増ときていやす。それだけに変な用心棒はたのめない。もしその後家さんにいたずらされちゃ大変ですからね」
「しかしなあ、忠公、もしその後家さんのほうからいたずらがしたいといったらどうするんだ」
「しょってるなあ、だんなは。そんな甘っちょろい後家さんとはわけが違いまさ」
忠太はむきになって口をとがらせるのだ。
「まあ待て——。わしはまだ用心棒を引きうけたわけじゃない。したがって、別にしょってるわけでもない」
「それがもうだめだっていうのに、だんなも強情だねえ」
「いや、おまえのほうが手前勝手すぎるんだ。そんなことは独りぎめにするもんじゃない」
「だから、あっしがきめたんじゃなくて、観音さまがきめたんだっていってるでしょう。何度いったらわかるんだろうなあ」
「観音さまがどうきめたんだね」
「つまりですね、あっしが天明堂先生に見ても

らったんでさ。どうすればいちばんいい用心棒が拾えるでしょうってね。すると、さすがに易者は易者だ。それは尋ね人のうちに入るなといって、易を立ててくれやした」

「尋ね人じゃない、おまえのは尋ね棒だ」

「けっ、まぜっかえしちゃいけやせん。ここが大切なところなんでさ。ようござんすか、天明堂先生がいうには、これはきっと見つかる、おまえさんの探している棒は、もう目の先まできているはずだ。お昼からではいけない、ぜひお昼前に探しなさいというんです。それであっしがどっちの方角をさがしたらいいでしょうって聞くと、まず観音さまへおまいりをして、よくお願いしてから、どこへも寄り道をしないでまっすぐお店のほうへ歩いてみなさい。そして、いちばん最初に行きあった武士がたぶんおまえさんの探している棒だから、こっちから声をかけてみろというんです」

「妙なことをいうなあ。すると、おまえが観音堂からさっきのところまで歩いてくるうちに、いちばん最初に出あった武士はわしということになるのか」

「つまり、そうなんです」

「この辺にはそんなに侍がすくないのかねえ」

「それなんでさ。いつもなら侍なんか掃いて捨てるほど歩いているのに、今日ばかりは一人も行きあわない。あっしもおかしな日だなあと思って寺町までくると、だんなが娘さんと向こうへ歩いていくうしろ姿が目に入った。けど、向こうへ行くんじゃあっしの探す棒にゃならない。こっちへくる棒でなくちゃだめだと、半分がっかりしているうちに、だんなはあそこで娘さんに別れて、急にこっちへ引きかえし出した。あっ、これだと、あっしはどきりとしちまいやしてね」

「そうか。それで、おまえ、あんなにびっくりした顔をしていたのか」

「こいつは逃がしちゃ大変だと思って、すぐに

声をかけたんでさ。というのは、四つのことを聞いてみなくちゃならないんです」

「四つのことというと――」

「第一に、浪人でしかも暇人でなくちゃ棒の役には立ちやせん」

「それはそうだな」

「第二に、義侠心がなくちゃいけない」

「第三は、なんだね」

「第三は、用心深いこと」

「第四は――」

「こいつがいちばん心配だったんでさ。第四は、姓名が上のほう、天に縁のある字が一字ついていないと、おまえさんの棒にはならないと、天明堂先生から念を押されてきているんです。ところが、だんなは、姓は風、名は雷太郎、風も雷もこれは天のものだ。あっしはしめたと思いやしたねえ」

それはだめだと口まで出かかったのを、雷太郎は言葉にはしなかった。風雷太郎は無論とっさに思いついた偽名で、風来坊をもじったふざけた思いつきなのである。

雷太郎ははじめからそんな用心棒などになる気はないが、観音さまにしろ天明堂にしろ、偽名の男を用心棒に選ぶはずはない。残念ながら、自分には棒の資格はないのだ。

しかし、いまさら風雷太郎は偽名だよといってみたところで、忠太はそれを逃げ口上だとしか取らないだろう。

「困ったなあ。おまえがいくらしめたと思ったところで、わしにはそんな棒になる自信はまるっきりないんだ。それは自分がいちばんよく知っている。どうだろうな、忠公、まだお昼前だし、おまえもう一度観音さまから出なおして、本当の棒をさがしてみては」

「よしておくんなさい。あっしはなにも犬も歩けば棒にあたる、いろはかるたの棒をさがしているんじゃありやせんや。観音さまのありがたい棒は、たった一本きりしかない。それがだん

ななんでさ」

案の定、忠太は雷太郎を信じきっているようだ。雷太郎は当惑せざるをえない。

「さあ、だんな、ここだ。あっしがおひるをおごりやす」

ちょうど馬道通りへ出てきて、忠太はそこのなわのれんの店へ入っていく。

男に惚りた女

それは松葉屋というこぎれいな一杯飲み屋で、ここは新吉原への通り道になっている上に、すぐそこに奥山という盛り場をひかえているから、昼にはまだ少し間のある時刻だが、土間に二側にならべた台のまわりはもうほとんど客でふさがっているほど繁盛していた。

「いらっしゃい。忠さん、切り落としがあいてるわよ」

忠太はここの常連らしく、顔を見るなり小女が正面の三畳ほどの切り落としの座敷を教えてくれた。

「おまえ、ここではだいぶ顔がいいようだな」

そこへ落ち着いてから、雷太郎が感心したようにいうと、

「あっしはこれで地まわりなんかと違って、勘定のほうはいつもきれいにしてありやすからね」

と、忠太は正直に自慢していた。

まもなく、ここの娘だという二十三、四の小粋な年増が、紅だすき赤前垂れというきりっとしたかっこうで酒肴の膳を運んできて、

「忠さん、今日は珍しいお連れさまとごいっしょなのね」

と、これも心やすげに声をかける。

「珍しいのなんのって、たったいま観音さまのお告げでそこで拾ってきたばかりの棒でね、姓は風、名は雷太郎。どうだ、お高さん、すばらしい拾い物だろう」

「観音さまのお告げでねえ」

お高は客なれた笑顔で雷太郎のほうへ会釈をしながら、お愛想に一つ酌をして、

「棒にもいろいろありますけれど、なんの棒かしら」

と、忠太のほうへ聞く。

「なるほど、棒にもいろいろあるなあ。心張り棒、てんびん棒、二本棒、でくの棒。けど、そんなんじゃねえ。だんなのは用心棒っていうたのもしい棒さ」

「あら、どこの用心棒さんなの」

「そいつはこれからここできめるところなんでね」

「ああ、わかった。忠さんは花川戸のお店からたのまれたのね」

「まあその辺のところだ」

「うちでも用心棒が一人ほしいにはほしいんですけれどね」

「いいとも——。このだんなのほうは先口があるんでだめだが、あっしがきっと心がけておいてやろう」

「どうぞお願いいたします」

お高はわらいながら板場へ去っていった。

「どうです、だんな、ちょいとした年増でござんしょう」

拾い屋の忠太は声をひそめながら得意そうな顔をする。

「そうだな。あのねえさんがたってたのむというのなら、しばらくここの用心棒になってやってもいいな」

「いけねえや、だんな。そんな二本棒はおこしっこなしさ。だんなにはちゃんと観音さまのきめてくれた先口があるんですからね」

「なんだ、顔色が変わったぞ。さては、忠公、おまえここの棒になりたい野心があるんだな」

雷太郎はにやにやわらい出しながら忠太に杯をさす。

「御冗談で——。あのねえさんは町内でも評判の男ぎらいでしてね、これまで、婿になりてえ、

嫁にほしい、だんなになってやろうかって、いい口がたくさんあったんだが、見向きもしねえっていう変わり種なんです。うっかり手なんか握ろうものなら、横っ面を引っぱたかれるのが落ちでしょうよ」

「ふうむ。すると、体にかたわなところでもあるのかな、かわいそうに」

「ずばりとおっしゃるぜ。おあいにくさま、そんなんじゃねえんでさ。なんでも一度ひどく男で懲りたことがあるんだって話でしてね」

「そうか。まあ本当にしておこう」

忠太があまりにも熱心なので、雷太郎はついちゃかしたくなる。

「本当にできねえようだね、だんなは。男に懲りて男ぎらいになるって女は、なにもここのお高ばかりじゃない。あっしはほかにもそういう女のいるのを知っているんだ。本当ですぜ」

「ひらきなおったな、忠公」

「ひらきなおりやすとも。なにをかくそう、あっしはそういう後家さんの家へだんなを用心棒にはめこもうっていう腹なんでさ」

「おれはまだ棒になるとはっきり承知したわけではない」

「まあ一通り話を聞いてからにしておくんなさい。花川戸に倉橋屋っていう大きな質屋がありやしてね、先代は伝兵衛さんてだんなでしたが、なかなかのやり手で、自分は大名旗本に金を貸すのを本業のようにしていたんです。これが五年ばかり前、ある大名に五万両ほど融通するについて、だんなはその時分おかみさんに死なれていたんで、そこの奥に仕えていた三浦さまというお中臈さまを後妻にいただけないかと望んだんですね。そのころだんなはもう五十四、五、三浦さまはまだ二十三だったんです」

「つまり、そのお中臈さんはすこぶる美人だったというわけか」

「そうなんです。しかも、三浦さまは歩く姿がなんとやらっていうようなそんな柳腰の美人じゃない。体つきもすらっと大柄なほうで、まあ芝居の先代萩に出てくる政岡といったような気位の高いしゃっきりとした美人なんで、だんなはまずその体つきにほれこんだんでさ。ところが、三浦さまのほうにすれば、たとえいくら金持ちでも、いまさらそんな質屋のおやじなんかの後妻になりたくない。なんでもそこの奥方さまが手をあわせんばかりにしてたのむんで、しかたなく後妻を承知した。そのかわり、おかみさんと呼ばれるのはいやだ、奉公人や出入りの者たちにも、お浦さまと呼ばせてくれっていう注文つきだったんです」

「そうか、その伝兵衛だんなってのはよほど脂ぎっていて、そっちのほうも相当に強い狒々おやじだったんだろう」

雷太郎は先まわりをして平気でそんな無遠慮な半畳を入れると、

「いけねえや。だんなはどうしてそうずばずばっとものをいっちまうんだろうな。そういうのを憎まれ口っていうんですぜ」

「いや、おれはあいにく世辞や追従のいえない男なんだ。まあ気にするな」

「そりゃあっしは別に気にゃあしやせんがね。気にする人は気にしやすからねえ」

「おまえも案外苦労性のようだなあ」

「だんなのほうが世間知らずすぎるんでさ。もっとも、あんまり世間ずれがしていても困りものですがね。——とにかく、倉橋屋のだんなはおもいをかけたお浦さまが手に入ったんで、たいへんなよろこびようだったようです。そして、三年目に、まさかそのためにというわけでもないでしょうが、風邪をひいたのがもとでぽっくり死んじまいました。まあ果報負けがしたとでもいうんでしょうかねえ」

「それで、どうした」

「はてな、なんの話でしたっけねえ、だんな」

忠太はちょいと困ったような顔をしている。

「男に懲りて男ぎらいになる話だ」

「ちげえねえ。そのお浦さまがそれなんでさ。倉橋屋の身代がそっくりそのまま自分のものになったんだから、こんどこそ好きな亭主を持ってだれもなんともいう者はねえんですが、もう亭主なんかいらない、男より商売のほうがおもしろくなったといって、先代に仕込まれた金貸しをやりながら後家をとおしているんです」
「どう男に懲りたんだろうな」
雷太郎は意地悪く突っこんでいく。
「つまり、あんまり先代にかわいがられすぎたんで、男が怖くなったか、それともうるさくなったか、そんなところなんでしょうよ」
「それをずばずばっというと、先代は相当に脂ぎった狒々おやじだったということになりはしないか」
「憎まれ口をきけば、そういうことになるかもしれやせん」
忠太はそんな負け惜しみをいいながら苦わらいをしていた。

「先代にはせがれはないのか」
「伝吉さんていうあっしとおない年のせがれがいるんですが、もう七、八年も前に勘当されて、それっきりいまだに行方がわからねえんです」
「ただの女道楽などではなさそうだな。賭博のほうか。それとも、けんか凶状かな」
「両方なんです。しかも、男と女を殺しているんで、こいつはいくら先代が金を積んでも首はつながりやせんや」
さすがに忠太は声をひそめている。
「忠公は倉橋屋とどんな縁故があるんだ」
「あっしのおやじは先代より少し前に死にやしたが、ずっと倉橋屋の大番頭をつとめていたんで、いまでもお浦さまの前へ顔を出しさえすれば、まあ小遣いぐらいにはなるんです」
「そうか、それでそのお浦さまに棒をたのまれたというわけか」
「そうなんです。あっしにとっては義理のかさなっているお店でござんすからね。ぜひ、だんな、ひとつうんといってもらいたいんでさ」
「まあ待て——。浪人組強盗よけの用心棒だとすると、こっちも命がけの仕事ということになるからな」
口ではそういったが、雷太郎は浪人組強盗が怖いわけではなく、いま話に聞いただけでも、倉橋屋にはなにか暗い因果がつきまとっているような気がする。そんな因果にまきこまれるのはあまりうれしくない。
「それになあ、忠公、おれは狒々だんなほどではなくても、決して女ぎらいのほうじゃない。相手がそういうきれいな後家どのだと、ついくどいてみたくならないとはかぎらない」
「その心配はいりやせんや。あちらさまは男に懲りて男ぎらいになっているお浦さまなんですからね」
「あちらさまが乗ってこないというのか」
「たぶんね。けど、もしくどき落としたとしても、そいつはかまいやせんや。だんなは観音さまに選ばれた男なんだし、あちらさまは後家さんなんですから、どこからも文句の出る心配はない。つまり、だんなの腕しだいってことになるんでさ」
忠太はだめだとわかっていて、そんな思わせぶりなことを口にする。
「なるほど、腕しだいということになるかなあ。一体、日当はいくらぐらいなんだ」
「そいつはこれから先さまへ行って、お浦さまにじかに掛けあってもらえばいいんです」
「住みこみか、通いか、どっちなんだろう」
「それもじかにお浦さまと掛けあってみておくんなさい」
話がこんな風に運んでくると、一度はそのお浦という後家に会わなくてはならない羽目になってきそうだ。
——まずい口をきいてしまったなあ。
雷太郎が内心いささか当惑していると、がらりと表の油障子があいて、いかにもならず者ら

しい人相のよくないやつが三人ばかり、どやどやと店の土間へ押しこんできた。
「おう、みんな、本所の殿さまの御入来だ。さっさと立って出ていってくんな。今日は殿さまがこの松葉屋の店を買いきりになさるんだ」
一人が大声にわめき立てると、
「さあ、みんな、立ったり立ったり」
と、後の二人が店中をにらみまわしながらせきたてる。

勝負は改めて

思いもかけないこの暴れ者三人の出現に、松葉屋の客はびっくりして、たわいもなく総立ちになった。
中には、ねえさん、勘定はいくらだと正直に聞いている奇特な客もあったが、
「今日の勘定は負けといてやらあ。そんなものは払わなくたっていいから、さっさと出ていくんだ」
と、いかにも相撲くずれらしい大きなやつに頭からかみつくようにわめきたてられると、もうひとたまりもなかった。客たちはみんなそそくさと表の往来へ逃げ出していく。
ここの娘のお高が、板場から店との仕切りののれんの前まで出てきて、青い顔をしながら、気丈にも暴れ者たちのほうをにらみつけている。
「畜生め、とうとうここへやってきやあがった」
拾い屋の忠太も一度はは っと中腰になりかけたが、まだこっちがのんびりと座っているのを見ると、吐き出すようにいいながら、そっと座りなおしている。
「あれは何者なんだ、忠公」
雷太郎はあきれながら聞いてみた。
「なあに、あの三人はばかの見本みたいな地まわりなんですがね、表に大河原伝内っていうすごい悪旗本がついてきているんでさ」
「本所の殿さまってのは、その悪旗本のことなのか」

「そうなんです。本所石原町に屋敷のある百五十石取りの小普請旗本なんですが、いくらまじめに骨を折ってみても役づきにしてもらえない。それからぐれ出して、屋敷を賭場に貸してそのあがりで好きなことをやっていたんですが、そのうちに人の店先へ座りこむって手を考え出しゃあがった」
「座りこむ手っていうと――」
「つまり、あいつらのような命知らずのばか野郎ども四、五人と、居候浪人二、三人をつれて、なるべく大店の店先へ黙って座りこむんでさ。別にそうあばれるというわけじゃないが、そんなのに座りこまれちゃ、客が怖がって寄りつかない、どこでもたいてい包み金を出して帰ってもらう。こいつは結構いいかせぎになりやすからね」
「ああ、もらい屋というやつか。すると、こじきの殿さまということになるな」
「うまいなあ、だんなは。けど、こんなわのれんをねらったっていくらにもなりやせんからね。ことによると、今日のねらいはお高あねごかもしれねえ」
忠太はちらっと悔しそうな顔をする。
土間の客はもうみんな出ていって、残ったのは切り落としの雷太郎と忠太の二人になった。店は急にがらんとしてくる。
「おう、そこの二人――」
こっちが立ちそうもないと見ると、相撲くずれのやつがどんぐり眼を光らせながらつかつかとそばへ進んできた。
「おめえたちも早く出ていってくんな。今日は本所の殿さまがここを買いきるんだっていってるのがわからねえのか」
「おまえ、いい体をしているなあ。相撲取りあがりか」
「なにをぬかしやがる。てめえは本所のお相撲鉄を知らねえな」
「ああ、鉄というのか。大関ぐらいまでは取っ

たのかね」
「この野郎、黙って早く立たねえか」
「あいにく、おれは仕切りの長いほうでな。まだ気合いが乗ってこないんだ」
こっちが少しも怖がってやらないので、鉄はおやっというように目をむいていたが、そこは無知で命知らずを売りものにしている無法者だから、
「野郎、お相撲鉄を甘く見やがったな。立てといったら立たねえか」
たちまち凶暴な面がまえになって、右足を土足のまま上がりかまちへかけ、いきなり相手の胸倉を取りにきた。
とたんに、雷太郎の手刀が無言でさっと土足の向こう脛を払う。忠太の目にはさほど力が入っているとも見えなかったが、
「う、うっ、いてえっ」
その一撃でずうたいの大きい鉄は悲鳴をあげて、どっと土間へしりもちをつき、脛をかかえこみながらたわいもなく体をえびのように折り曲げてしまう。
「あっ、やりやあがったな、若僧」
「やっちまえ、くそっ」
向こうで見ていた仲間の二人が血相を変えて同時に七首を抜いたのは、まさか鉄がこんなに簡単にやられるとは思いもかけなかっただけに、恐怖半分かっと頭へきて死にもの狂いになったのだろう。
「おまえたち、そんなものを振りまわすと、自分がけがをするだけだぞ」
雷太郎は刀を腰にして、すっと土間へおりて立つ。
「なにをぬかしやがる、青二才め」
「やっちまえ、兄貴」
無法者二人はそれぞれ七首を構えはしたものの、正面からぶつかったのでは抜きうちが怖いので前へ出ることができない。
「殿さまあ、大変だあ、顔を貸しておくんなさい」
一人がたまりかねたように開けっ放しの戸口から往来へ呼んだ。
その声を待ってでもいたようにぬっと土間へ入ってきたのは、五分月代着流しの山犬のようにとがった面がまえの陰険そうな浪人者である。
「どうした、吉五郎」
「へい、鉄兄貴があの若僧にやられちまったんで――。敵をとっておくんなさい、渡辺先生」
山犬浪人はそこに顔をあげえずうずくまったきりの鉄のほうをじろりと見て、その目をまっすぐ雷太郎に向け、
「おぬしはどこの馬の骨だ」
と、ふてぶてしく挑戦してきた。
「本所のもらい屋で、こじき殿さまの伝内さんというのは御貴殿かね」
雷太郎はわらいながらやりかえす。
「なにっ」
相手はこっちの思いきった憎まれ口に一瞬唖然としたようだ。
「すごみをきかせて人の店先へ座りこみ、包み金をもらって歩くとは、うまい稼業を考え出したものだ。しかし、こんなわのれんをねらうのは自分でこじき殿さまの格を落とすようなもので、損じゃないかな。どうせ一つ間違えば首の飛ぶ稼業なんだから、どこか大大名の表玄関へ座りこんで勝負と出た方がおもしろいんじゃないか。だいいち、そのほうが天下の旗本らしくて、江戸中の人気があつまると思うんだがな」
「てめえはどこの馬の骨だと聞いているんだ」
山犬の目が殺気立ちながら、じっとこっちの強弱を瀬ぶみしているようだ。
「おれは馬の骨じゃない。姓は風、名は雷太郎、風来坊という棒のほうなんだ」
「よし、表へ出ろ」
「表へ出るとどうなるんだ」
「うぬのその思いあがった舌の根を引っこぬい

「忠公、てんびん棒を一本借りてくれ」
雷太郎はそこにあっけにとられて突っ立っている忠太にけろりとした顔つきでいう。
「やるんですかい、だんな」
「さあ、どうなるかな」
「いまのはねえ、だんな、伝内じゃねえんだ。あいつは渡辺の綱っていう伝内の子分で、腕は伝内より強いって話なんです」
「そうか、殿さまにしちゃいくらもらい屋でも少し下司っぽい面だと思った。じゃ、本物は表にいるんだな」
「忠さん、はい。これでいいかしら」
お高が気をきかせて、板場からてんびん棒を持ってきてくれた。
「やあ、あねごか。あねごは表へ出ないほうがいいぞ。けがでもしちゃつまらない」
「でも、風来さんは大丈夫なんですか。表には伝内のほかに、まだ坂田の金時もついてきているって話よ」

てやる」
「ああ、おれがあんまり本当のことをいうんで、御貴殿はこの口が怖くなったんだな」
「いいから、黙って表へ出ろ」
「ちょいと待て——。こんな大きな馬の骨がここにいちゃじゃまだ。ついでにこいつを表へ持っていけ」
雷太郎はずうたいの大きい鉄のえり首と帯へひょいと手をかけると、まるで炭俵でもあつかうように無造作につかみあげて、
「あいててっ、助けてくれえ」
鉄が縮みあがるように悲鳴をあげた時には、もう九尺ほど離れた山犬浪人の足もとへどさっとほうり出していた。
「うぬっ」
ぎょっと目をむいた山犬浪人は、これもあっと逃げ腰になっている地まわり二人に、
「鉄をかつぎ出せ」
といいつけておいて、往来へ出ていく。

お高の顔は興奮して、紅を刷いたようにいきいきとしている。
「なあに、大丈夫だ。おれはこれでもいざとなると鹿よりも速い足を持っているんだ」
「あら、逃げちまうのね」
「時と場合によってはな」
雷太郎はお高からてんびん棒をうけとって、ゆっくり往来へ出ていった。
この辺はずっと片側町で、前は寺の土塀が何軒もつづく。往来はもういっぱいの人だかりで、やや上手の土塀の下に、茶羽二重の紋服、仙台平の袴という堂々たる身なりの、それが大河原伝内だろうと一目でわかるやつが、いま渡辺の綱と、もう一人坂田の金時というごろつき浪人二人を左右にしたがえて、じっとこっちを見ているようだ。
鉄と仲間二人はどこへ行ったのか、その辺には見えない。
雷太郎が一応あたりを見まわして、さてこっちから向こうへ行ったものか、仕掛けられたけんかなのだから向こうからこっちへくるのを待ったものかと、ちょっと軒下に立ちどまっていると、右手の野次馬のほうからつかつかとこっちへ進み出てきたやくざ風の男がある。
「だんなは風雷太郎さんでござんすね」
男は小腰をかがめながらじろりとこっちの顔を見あげる。鋭い目だ。
「うむ。おまえは——」
「あっしは本所の渡世人で定十といいやすが、あそこにおいでの大河原の殿さまにいいつけられて口上を持ってまいりやした。お聞きくださるでござんしょうか」
「聞こう。どんな口上だね」
「ありがとうござんす。大河原の殿さまがおっしゃるには、白昼観音さまのおひざもとで血を流すのはおもしろくない。この勝負は場所を改めてこっちから果たし状を出すことにしたいが、こちらさまの御意見をうかがってきてくれ

ということでござんす。どんなもんでござんしょう」

まったく人を食った掛け合いだが、

「そうか、いいだろう。おれも野次馬の見せ物になるのはあまり感心しないんだ。承知したといってくれ」

と、雷太郎はあっさりのみこんでやる。

「さっそくの御承知でありがとうござんす」

渡世人定十はていねいにおじぎをしてから、向こうの大河原のほうへ手をあげて合図をした。と見る間に、驚いたことには、大河原伝内は大きく一つうなずいて、堂々と花川戸のほうの横町へ歩き出したのである。

棒のお目見え

雷太郎はその日八ツ（二時）すぎまで、松葉屋の帳場をかりて、正直に大河原組からの果たし状を待っていたが、本所の殿さまからはまだなんのあいさつもこなかった。

松葉屋の帳場は板場と向かいあった六畳ほどの切り落としの座敷になっていて、そこを貸してくれた娘のお高はともかく店の災難を救ってくれた恩人なのだから、雷太郎にすっかり好意を持ってしまったらしく、

「雷太郎さんさえよければ、このままうちの用心棒になってもらいたいわ」

と、いそいそしているのがだれの目にもよくわかる。

「そいつは、お高さん、いけねえや。だんなには観音さまのお告げで、ちゃんと先口がきまっているんだからね」

これだけは拾い屋の忠太が承知しない。

「そんなことかまわないのよ、おじさん。花川戸よりうちのほうが観音さまにもずっと近いんだもの。あたしが行ってお願いしてくれば、観音さまはきっと承知してくれます」

「いけねえいけねえ。そんなことをされちゃおれの男の義理が立たなくなっちまう」

忠太はどうもおもしろくないようだ。

「ねえ、だんな、男に惚りて男ぎらいになったなんて、こうなると当てにならなくなってきやすね」

お高が座を外して店へ出ていくと、忠太はそんなことをいって苦わらいをした。

「がっかりしたか、忠公」

「がっかりしやさあ。あの娘の目の色は、もう男ぎらいなんてもんじゃありやせんや。でれっと目じりがさがって見られたもんじゃねえや」

「まあそう嘆くな。総じて男のきらいな女などはあるまい。人一倍男が好きな女ほど男が怖いんだ。つまり、自分から男に夢中になるのが怖いから、わざと男ぎらいになって用心しているんだろう」

「おっしゃるぜ。けど、花川戸のお浦さまのような本当の男ぎらいだって世の中にはありやすからね」

「さあ、そのお浦さまにしても裏から見るとどういうことになるかな」

忠太はそれで思い出したらしく、急にこれから花川戸へいっしょに行ってくれといい出したのである。

「おじさん、せっかくここで本所からのあいさつを待っていてくれる人を、なにもわざわざつれ出さなくたっていいじゃありませんか。花川戸のほうのお目見えは今日にかぎったことはないんでしょ」

お高は顔色をかえて反対したが、

「そうじゃねえんだ、お高さん。あっちは今日はほんのお目見えだけで、すぐに帰ってくるんだ。早くあっちをすましちまわねえと、だんなは酒にさえ手を出さねえ。ほんのしばらくの間だから、まあ待っていてくんな」

と、忠太にうまく持ちかけられて、

「じゃ、夕方までにはきっと帰ってきてくれますね。そのころにはうちのおとっつぁんももどっているだろうし、お酒の支度をして本当に待

っていますからね」
と、お高もやっと承知したのだった。
「松葉屋のおやじというのは、どんな男なんだ」
雷太郎は表へ出てから聞いてみた。
「あそこのおやじさんは松吉といいやしてね、元は駒形の親分でとおった腕っこきの岡っ引きなんでさ。四、五年前にその岡っ引きの株を子分の亀五郎というのにゆずって、娘のお高と二人でいまの松葉屋をはじめたんです」
「そうか。岡っ引きという稼業は、あまり後生のいい仕事ばかりじゃなさそうだからな」
「松吉親分もなにかそんなことを考えたんでしょう。今じゃつりだけをたのしみにしているようです」
花川戸の倉橋屋は、表通りから川っぷちのほうの横町へ入ったいちばん奥の右手にあって、その横町は川っぷちの往来に突き当たっている。
見たところかなり大きな店がまえで、その店の横手を通りぬけると、黒板塀をめぐらした母屋になって、台所口へ入る木戸から四、五間行った先に内玄関へ入る屋根門がついていた。
「だんな、お浦さまはさっきもいったように、お中蔟さまあがりで、気位の高いほうでございますからね、気をつけて口をきいてくれなくちゃ困りやすぜ」
その門のくぐりから中へ入る時、忠太はあらためてもう一度念を押していた。
「心得たよ」
雷太郎は別に自分から倉橋屋の用心棒を望んだわけではないのだから、特に言葉づかいに気をつけようなどとは思わない。しかし、話の様子ではかなり変わっている後家のようなので、一度会ってみてやろうという興味はあった。
くぐりから三間ばかり入った内玄関は格子造りで、
「今日は。——ごめんなすって」
土間へ入った忠太が案内を請うと、はいと答

えてすぐに十六、七ばかりの小間使いらしい小娘が出てきて、そこへ行儀よく三つ指をついた。
「ああ、お梅さん、今日は夜詰めの先生をおつれしやしたんで、玄関へかかりやした。お浦さまによろしくお取り次ぎを願いやす」
忠太はここでの言葉づかいをちゃんと心得ているようだ。
「しばらくお待ちくださいませ」
小間使いはていねいにおじぎをして、一度もこっちの顔は見ようともせず、しとやかに立って奥へ入っていく。
「あれはなかなか上玉だな、忠公」
雷太郎は小声でいったつもりだが、家の中が夜中のようにしいんとしすぎているので、忠太の耳には大きくひびいたらしく、
「いけねえったら、だんな」
と、いきなり怖い顔をしてこっちをにらんでいた。
「ああ、そうか。上玉は少し下品だったかな」
「下品ですってさ。あの娘さんは口数がすくなくて、利口者で、芯じまりときているから、とてもお浦さまのお気に入りでしてね」
「そうだろうな。あれはたしかにお職の張れる大した娘だ」
「いけねえっていうのに。困っちまうなあ」
まもなく二人が通されたのは、玄関の間からまっすぐ南へのびた廊下にそった、手前が八畳、奥が十畳の、その十畳のほうの客間である。
南の回り縁のほうの障子に日がさしているから、座敷はあかるい。
「忠公、いま玄関の間から出た廊下の左手に杉戸がしまっていたな。あれから奥がお浦さまの本部屋なのか」
「また始まった。けど、だんなは勘の悪いほうじゃなさそうだね」
忠太はにやりとわらってみせる。
「もしここの棒になるとすると、いちばん大切な本陣ということになるからな。念のために聞

いておくんだ」
「そのとおりです。あの杉戸の向こうが六畳と八畳に内蔵がついているお浦さまの本部屋なんでさ」
「あの小間使いが夜はその本部屋へいっしょに寝るんだな」
「いいえ、お梅さんは別で、本部屋はお浦さま一人なんだそうです」
「ふうむ。すると、狒々おやじが生きていた時から、他人は寄せつけない、そういう習慣になっているんだろう」
「といいやすと――」
「お浦さまはあの杉戸の中の本部屋で、夜となく昼となく狒々おやじに泣かされていたということだ」
「しっ、だんな」
忠太が目を光らせて座りなおす。廊下にきぬずれの音がしたからだ。
お浦さまは八畳のほうの廊下から入って、しとやかに客間の席へ着く。
それは掻取りのかわりに紫縮緬の被布をはおり、ぬれぬれとした大丸髷が行儀よくぴたりと板についている。お部屋さまといったようなすごいほどの美人だが、その表情の冷たさが人にはいかにも気位の高い顔に見えるのかもしれない。
「忠太、御苦労ですね」
お浦さまは座に着くと、忠太のほうへ鷹揚にいって会釈をした。
「へい、おたのみをうけていました夜詰めの先生が今日やっと見つかりましたんで、おつれしてみやした。御浪人さんで、姓は風、名は雷太郎、年は二十六だそうでして」
忠太が引きあわせてくれる尾について、
「風雷太郎です。お見知りおき願いたい」
と、雷太郎は軽く会釈をした。
「風、雷太郎さんでございますね」
「そうです」

「お国はどちらでございます」
「江戸です」
「江戸の御浪人といいますと、元は御直参だったのでございますか」
「いや、その直参の家来だったと思ってもらってかまいません」
「御家族はおありですか」
「親兄弟、妻子、なんにもない男だと、これもそう思ってもらってかまいません」
「では、本当はいくらか身寄りの者がいることになるのですか」
お浦さまは冷たい目でじっとこっちの顔を見ている。
「さがせば腹違いの兄弟ぐらいは出てくるかもしれないが、そういう身寄りのことで当家へ御迷惑をかけるようなことは絶対にありません。その意味での係累はないと思ってもらっていいということです」
「身元引受人はございますか」
「忠太がなってくれると思います」
「忠太とはどういう御縁なのでございます」
「忠太は今朝、どういう用心棒をさがせばいいか易者に見てもらって、まず観音堂へ参拝したそうです。その観音堂を出て花川戸の当家へ向かって歩け、そこで第一番目に出会った侍がいちばんいい用心棒だと、これがその易者の言葉だったそうで、つまり、わしは忠太につかまった用心棒というわけです」
「そのとおりでござんして、つまり、だんなは観音さまがあっしに選んでくれた用心棒なんでござんす」
忠太はまじめな顔をして口をそえる。
「失礼ですが、風さまは棒になるつもりで今日町を歩いていられたのですか」
お浦さまがにこりともしないで聞く。
「いや、そんなことはありません。退屈だから観音堂へ行ってみて、それからなんとなく花川戸のほうへ歩いていたんです」

「今のところはありません。しいていえば、あなたの美人すぎるのが用心棒としていささか気になるぐらいのものです」

雷太郎はのんびりと冗談のようにいう。

「だんな、いけやせんや、そんな失礼なことをいっちゃあ。困っちまうなあ」

そばから忠太が当惑したように口を入れてきた。

「しかしなあ、忠太、よく考えてみろ。美人にはとかく虫がつきたがるものなんだ。用心棒としては、その虫よけの役も一つふえるわけだからな」

「いいえ、そんな虫は自分でよけます。あなたに御迷惑はかけません」

お浦さまはあきれたようにぴしゃりと出てきた。

「では、用心棒は夜詰めの役だけをつとめればいいわけですな」

「そうです。夜分五ツ（八時）までに詰めていただいて、翌朝の明け六ツまで不寝番をつとめてもらいたいのです。申すまでもございませんが、御酒を召しあがってきていただいては困ります」

「庭もまわるのですか」

「いいえ、その八畳のほうへ詰めていて、なにか怪しいことがあった時だけ見まわってもらえばよいのです」

色後家は次の間を目で教えて、

「お礼は月に一両さしあげます」

と、はっきりいう。

一両という礼金は、大工が朝から晩まで働いて一日三匁（三銭五厘）の手間賃にくらべて、決して悪くはない手当ということになる。

「それでよろしかったら、今夜からでも二、三日は目見えということにしてきてみてください。こちらでももしお人柄に気にいらないことがございましたら、おことわりしなければなりませんものね」

「では、忠太につかまってわけを聞いてから、棒になってもいいとお考えになったんですね」

「そうですなあ。正直にいうと、わしは別に棒などになろうとは考えちゃいない。ただ、忠太が困っているんなら、人助けのためにしばらく働いてやってもいいと考えています」

「すると、ひやかし半分に忠太についてきたというわけでもないのでございますね」

「ひやかし半分ではありませんが、もし当家に気に入らないところがあれば、無論、棒のほうは辞退するつもりで、忠太についてきています」

雷太郎はわらいながら、自分の立場だけははっきりさせておく。

押しかけ娘

「いかがです。この家になにかお気に入らないところがおありでございますか」

お浦さまの冷たい目がきらっと光ったようだ。

これはさっきのおかえしのつもりのようだ。忠太がいっていたように、この色後家はたしかに人一倍気位も高いし、底意地も強いようだ。

「今夜はわしのほうに少々都合もあるので、明日の晩から出仕することにします」

「それで結構でございます」

お浦さまは用談がすむとすぐに小間使いのお梅を呼んで、こっちを玄関まで見送らせていた。

「だんな、なんだってあんな虫よけの話なんか持ち出したんです。お浦さまが怒り出しやしないかと思って、あっしはひやひやしちまった」

表へ出ると忠太はいきなりそれを切り出してきた。

「いや、あれははじめからちゃんと念を押しておいたほうがいいんだ。あのくらいの色後家に虫がつかないなどということはありえない」

「冗談でしょう。ああ気が強くちゃ、虫のほうでよけて通りまさ。だいいち、用心深くて店の者だってめったに本部屋へは入れねえんですか

「けっ、もっともらしいことをおっしゃるぜ。あんまり甘く見てお浦さまの手なんか握ろうものなら、とんだ恥をかきやすぜ、だんな」
「いや、おれはこう見えても、案外女には行儀のいいほうなんだ」
その言葉はまんざらうそでもないらしく、
「忠公、おまえの家はどこだ」
と、ふっと思い出したように聞く。
「馬道の裏長屋ですよ。松葉屋から北へ一町ぐらい離れているかな」
「どうだ、おれを当分居候におかぬか。倉橋屋の用心棒料一両はきっと飯代に入れるがなあ」
「飯代なんかいりやせんが、どうせ居候になるんなら、だんな、松葉屋の二階のほうがよかありませんか。お高が大切にしてくれやすぜ」
「その大切にされるのが困るんだ。いくらおれが女には行儀のいい男でも、遠くて近きはなんとやらでな、そばにいればついどんな気にならないでもない。せっかく忠公がねらっている女らね」
「しかし、世の中には本所のこじき殿さまのようにずうずうしいやつだっている」
「まあだめでしょうよ。そんなのは決してそばへ近づけないようにしているんだから」
忠太は色後家の男ぎらいをあくまでも信じきっているようだ。
「そうか。いずれにせよ、おれは虫よけの役まではつとめなくてもいいんだからかまわないが、あの後家どのはおまえがいうほど男ぎらいではなさそうだとおれは見ている」
「だんなも強情だねえ。どうしてそんなことが、ただ顔を見ただけでわかるんです」
「それはあの肌のいろつやを見ればわかる。自分では一生懸命男ぎらいになろうとしているようだが、年増盛りの健康な血まではなかなかごまかしきれない。ああいう女は一つ間違うと愛欲地獄へおちかねないような激しい女になる。早く身をかためたほうが無事なんだ」

と妙なことにでもなると、男の義理が立たない」
「その遠慮にゃ及びやせんや。及ばぬこいの滝のぼりならまだいいが、あっしのなんかふなの滝のぼりのほうで、もうとっくにあきらめているんでさ。本当ですぜ」
忠太は半分真顔で苦わらいをしている。
「そうか。まあいいだろう。おれは忠公の家の居候のほうが気が楽だから、これからつれていってくれ」
「だって、だんな、今夜は松葉屋でのむ約束でしょう。お高が待っていやすぜ」
「おれは人からちそうになるのはあんまり好きじゃない。今夜は遠慮しておこう」
「そうかなあ。お高ががっかりするだろうなあ」
「それをなぐさめてやるのはふなの役目だ。ついでに、本所からなにかいってきたら知らせてくれるようにたのんでおいてくれ」
今朝の大河原組のことで店の者からあまり騒がれるのは照れるので、雷太郎はその夜いくら忠太がすすめても松葉屋へは顔を出さなかった。
忠太の家は八百辰という八百屋の横の路地を入った五軒長屋のいちばん奥の一軒で、その路地の突き当たりは奥山の柵になっていた。
四畳半と二畳と台所っきりの長屋だが、道具も一通りそろっていて、わりにこぎれいにして住んでいるのは、もとは倉橋屋の大番頭のせがれで、身を持ちくずしてから生活はだらしがないが、人間は小器用できれい好きな性分なのだろう。
雷太郎はそこの二畳のほうを借りて、浪人早早の第一夜を明かした。
「だんな、あっしはこれからちょいと松葉屋へ行って様子を聞いてきやすからね、あっしが帰ってくるまでどこへも出ないでおくんなさいよ」
朝飯をすませて、その跡片づけがすむと、忠太はそういいおいて台所口から出ていった。

奥山の見せ物小屋から、もう笛、太鼓、三味線のはやしがはっきりと耳についてくる時刻で、この長屋は案外にぎやかである。

――おれも浪人早々、昨日は妙なことにばかりぶつかったもんだな。

雷太郎は忠太がこしらえていってくれたこたつにひざを入れながら、世の中というものは思ったよりいそがしくて、事件の多いところだと思った。

昨日はまず第一に、観音堂でおみくじを引いた敵討ち志願の娘にぶつかっている。その凶と出たおみくじだけをもらってやって、名も所も聞かずその娘とは別れたが、そのもどり道でこんどは拾い屋の忠太につかまり、松葉屋へ引っぱっていかれて、本所の大河原組とけんかをする羽目になった。

その次が忠太につれていかれて倉橋屋の色後家との対面ということになり、今夜は五ツからそこの用心棒をつとめにいくことになっている。

――なにか仕事のあるのは、ただ遊んでいるより張りあいがあっていい。

どうせ一生浪人ときめて、家名も身分も自分からすてきた雷太郎は、出世欲も持たなかったが、いちばん心配したのは退屈しはしないかということだった。

その点、雷太郎は恵まれていると思った。たとえ、なにがしかでも自分のような不要な命が世の中の役に立ってくれれば、雷太郎はそれで満足なのである。

「今日は、――雷太郎さん、おいでになる」

台所の障子があいて、松葉屋のお高が声をかけながらもうさっさと茶の間へあがってきた。

「やあ、お早う。忠公がいまそっちへ行かなかったか、あねご」

雷太郎はなんの屈託もなく、もう十年からの付き合いのように明るくお高を迎える。

「いま忠さんに会って、あんたが家にいると聞いたから押しかけてきましたのよ」

お高は昨夜約束を破ったこっちを詰問するつもりで多少意気ごんであがってきたようだが、こっちの思ったよりのんびりと明るい顔を見ると、なにか勝手が違ったような様子で、

「雷太郎さん、ひどいわ。ゆうべはとうとう待ちぼうけをくわして」

と、精いっぱいこっちの顔をにらみながら、差し向かいのこたつへ自分もひざを入れた。

「まあそう怒るなよ。これにはいろいろわけがあるんだ」

「あら、どんなわけがあるんです。なにかあたしの家に気に入らないことでもあるんですか」

「そうじゃないんだ。おれは昨日浪人をしたばかりで、これから先のことをいろいろ考えておく必要があってな」

「じゃ、あんまり考えないうちに倉橋屋さんの家の用心棒を引きうけてしまったんですか」

お高はちょいと悔しそうな顔をする。

「いや、倉橋屋のほうも考えておかなくちゃならないし、あねごのほうだって考えておく必要があった」

「あら、あたしのなにを考えてくれたんです」

「だいいち、あねごはもうしばらく一人で外へ出ちゃいけない。本所のこじき殿さまはあねごをねらっているという話だぞ」

「ですから、倉橋屋さんのほうの用心棒はことわって、うちのほうへきてくれればいいんですわ」

「実はそれも考えたんだ。倉橋屋のほうは忠公の義理もあるしな。だから、忠公の家へ居候をすることにきめたんだ。ここなら松葉屋へ近いから、昼間はあねごの家の用心棒をつとめ、夜の五ツから明け六ツまで倉橋屋のほうの義理をすます。どうだ、うまい考えだろう」

「雷太郎さんはどうしてそう口がうまいのかしら。いやだわ、あたし」

お高はぷっとふくれてみせるのだ。

「とにかく、家まで送ってあげよう。もう店をあけているんだろう。あねごが遊んでいてはいかん」

雷太郎は気軽に立ちあがる。これ以上二人きりでいるのはあぶないと見たからだ。それほど今朝のお高は恋心を露骨にして、かくそうともしないのである。

「いやっ、あたし。そんなにじゃまにしなくたっていいじゃありません」

お高はあざやかに突っかかりながら、まだ立とうともしない。日ごろの男ぎらいをすっかり忘れているようだ。

凶状持ちの若だんな

「はてな、忠公が帰ってきたようだ」

雷太郎はふっとどぶ板を踏んで路地へ駆けこんでくる騒々しい足音を耳にして台所へ出ていった。

案の定、足音は家の前でとまって、がらりとそこの腰高障子があき、

「あっ、だんな、大変だ」

と、忠太はこっちの顔を見るなり叫ぶようにいったが、その目が素早く土間にぬいである派手な女物の下駄に気がついて、

「あれえ」

と、もう一度こっちを見なおしている。

「それはお高あねごの下駄だ。なにをそんなにびっくりしているんだね」

雷太郎がわらいながらいうと、

「こいつはいけねえや。とんだところへ飛びこんできちまったんじゃねえかなあ」

と、忠太は正直にどぎまぎしている。

「いいのよ、忠さん。ここはあんたの家なんですから、遠慮なくおあがりくださいまし」

お高がこたつの中からすかさずやりかえす。そこは気の強い娘だけに、もうすっかり度胸をきめてしまったようだ。

「ありがとうございます。おじゃまじゃありやせんか、お高さん」

「そんな気はつかってもらわなくてもいいんですのよ。あたしはあんまり気にしないほうなんですから」

「驚いたなあ。こういう時は、だんな、どうすればいちばん娘っ子にほめてもらえるんでござんしょうねえ」

「そうだなあ。おまえの大変だが、そう大した大変でなかったら、まあまあがってゆっくり考えてみるんだな」

「あっ、いけねえ。本当に大変なんだ、だんな。すんませんが、あっしとすぐいっしょに行っておくんなさい」

忠太は急にあわて出したようだ。

「どこへ行けというんだ」

「花川戸の倉橋屋さんなんです。本所のこじき伝内が、今日は花川戸の店先へ座りこみにきているんでさ」

「ふうむ。大河原がねえ」

雷太郎もちょいと真顔になる。

「あっしはお高あねごのところへ顔を出したついでに花川戸へまわってみたんですがね、お店中がなんとなくごたついているようだ。いそいで台所口へまわってみると、お粂さんていうばあやさんが、忠さんいいところへきてくれたといいやしてね、いま大河原が店先へ座りこんでいる、それもただの座りこみじゃなくて、あそこの勘当息子の伝吉のことについてお浦さまに会いたい、会わせろといって座りこんでいるんだっていうんです」

「その伝吉という勘当息子は、たしか凶状持ちだといっていたな」

「そうなんです。ひどく気性の荒っぽい若だんなでしてね、六年ばかり前に女のことで駒形の地まわりで定という男とけんかをして、こいつを刺し殺し、その女をつれて高飛びをしようとしたら、女のほうが怖くなってきて、いやだといった。かっとなって、またその女を一突きに

して行方をくらましてしまったという若だんなんでさ」
「相当気ちがいじみている男のようだな」
「伝兵衛だんなも、このせがれはほっておくといまに親の首になわをかけるやつだというんで、その時はもう人別帳から名前が抜いてあったくらいなんです。そうはいうものの、親子は親子なんですからね、あの時もだんなは陰でずいぶん金をつかったようです」
「大河原はその伝吉がどうしたといっているんだ」
「うそか本当かはわからねえが、その伝吉がいま屋敷へころげこんできている。番所へつかまればどう せ首のつながらない男だ。もうしばらく命をつないでおいてやりたいから千両出してやってくれと、店先へ座りこんでいるんだって話なんです」
「倉橋屋ではどうするつもりでいるんだ」
「いま大番頭さんの富右衛門さんが応対に出ていて、お浦さまとも相談の上、十両包んで出したんだそうですが、大河原は手に取ろうともしないで、奉公人では話がわからんから、お浦をここへ出せとすごんでいるんだそうです。すんませんが、だんな、すぐに行ってやっておくんなさい」
　忠太は簡単に雷太郎を引っぱり出そうとするのである。
「つまり、おれに口をきいてくれというんだな」
「そうなんです。たのんます」
「おまえ一存でおれを呼びにきたのか」
「そうじゃありやせん。大番頭さんをそっと呼んでもらって、実はこれこれだと昨日のだんなのことを耳に入れてみやすと、だんなが今夜からお店へ用心棒に詰めることは大番頭さんもお浦さまから聞いて知っていたようで、それならぜひだんなに来てもらってくれって、大番頭さんからたのまれてきたんです」
「しかしなあ、忠公、この掛け合いは大番頭の依頼だけではうっかり口をきけないんだ。たとえ人別帳からは抜かれていても、伝吉は先代の実子なんだからな。倉橋屋の女主人お浦後家から一切をおまかせしますという一言がないと、大河原に揚げ足を取られる。おれが出ても大した役には立たない」
「そいつは、だんな、向こうへ行ってからあっしがきっとお浦さまに話を通しやす」
「そうか。それならとにかく出向いてみることにしよう」
　雷太郎は忠太にいってから、
「お高あねご、いま聞いていたとおりだ。おれはこれから出かけるから、ついでにあねごを家まで送っていってやろう」
　と、こたつの前のお高をうながした。こんどはお高もうなずいてすなおに立ってくる。なんとなく青い顔色だ。
「どうした、あねご、そんな顔をして」
「心配なのよ、あたし」
「なにが――」
「今日はどうしても刀を抜くようになるんじゃないかしら」
「大丈夫だよ。倉橋屋にだっててんびん棒の一本ぐらいはあるだろう」
　雷太郎はそんな冗談をいいながら忠太の後から路地へ出る。
　今日も外はからりと晴れた梅日和だった。
「忠さん、若だんなは本当に大河原の屋敷へきているのかしら」
　表通りへ出てから、お高は前を歩いている忠太に聞いた。
「あっしはたぶんうそだろうと思うんだ。つかまれば首のつながらない人間が、わざわざあぶない江戸へ舞いもどるはずはねえ。大河原はどこからかそんな昔の話を小耳にはさんで、さっそくこんなあくどい狂言をこしらえやがったに違いねえ」
「そうかしら。大河原組は何人ぐらいきている

の」
「昨日の顔ぶれとおんなじらしいな。もっともお相撲鉄は出てこられねえだろうけどね」
「雷太郎さん、本当に大丈夫なの」
お高は肩を寄せて歩きながら、ひどくうかない顔をしている。
「心配しなくてもいいよ。おれは観音さまの棒なんだから、いざとなれば仁王門の仁王さまが助太刀にきてくれるからな」
お高とは松葉屋の前で別れた。
「忠さん、後で雷太郎さんをつれてきてくださいね。きっとよ」
別れぎわにお高は忠太にそう念を押すことを忘れなかった。
「だんな、だんなはもうお高の手ぐらい握ってやったんですかい」
二人きりになって寺町のほうへ曲がると、忠太がさっそく聞いてきた。内心それが気になってしようがないのだろう。
「それだけはやめておいた。ふな忠ががっかりすると悪いからな」
「そんな遠慮はいりやせんや。けど、驚いたねえ。娘が一人で男の家へ入りこむなんて、こいつは相当なもんでさ」
「なあに、相手が行儀のいいおれだから、安心して押しかけてきたんだ。それよりな、忠公、お高は伝吉の顔ぐらい知っているのか」
雷太郎はそれとなく聞いてみる。
「そりゃ顔ぐらい知ってるでしょうよ。あの時分お高はたしか駒形のみやこ屋っていう一杯のみ屋へ手伝いに行っていたはずですからね」
「そうだ、ついでに伝吉のことをもう少し聞いておこう。伝吉が殺した女ってのは、どこの女なんだ」
「いまいったみやこ屋の女主人でおまきっていうんですがね、これはだれかのめかけだったんです。腕もすごいが、いい女でしてねえ、つまり、若だんなはおまきの間夫気取りになっていたんですが、裏から見るといいように金をしぼられていたってことになるんです」
「その時分、家のほうはもう勘当されていたんだろう」
「そんなことに驚くような若だんなじゃありやせん。おやじが留守の時をねらっちゃ、金を取りに行くんです。手づかみで持ち出すんですから、奉公人だってどうしようもない。そのうちに地まわりの定ってのが、おまきをくどいたとか、居間へ押しこんだとか、とうとうけんかになって、御厩河岸で突き刺してしまったんです」
「その時分、お高のおやじの松吉はまだ駒形で岡っ引きをやっていたわけだな」
「そういうわけです。あの時は裏からかなり倉橋屋のために働いているかもしれねえんです」
「忠公はどうだったんだ。おまえももうそのころは拾い屋に出世していたのか」
「ずばりとおっしゃるなあ、だんなは。あっしはその時分しばらく旅まわりをしていたんで、事件のあった時は江戸にいやせんでした」
「そうか。考えてみると、ふな忠の恋もかなり長いことになるわけだな」
「あれえ、変な話になりやしたね、だんな」
「まあそう照れるなよ。当時お高は十六、おまえは二十四ぐらいだった」
「頭がいいなあ、だんなは。かなわねえや」
忠太は苦わらいをしながら手のひらでぶるっと一つ顔をなでまわしている。
「忠公、ことによると伝吉は本当に江戸へ舞いもどっているかもしれないぞ」
「なんですって――」
「人殺し凶状とはいっても、伝吉のはたかが痴情ざただし、殺されたほうもそれだけの因果がある。それから六年もたてば、もうほとぼりはさめているし、少し気のきいた岡っ引きなら、伝吉がなにか騒ぎでもおこさないかぎりたいていは見ないふりをしてくれる」
「なるほど」

「それに、伝吉という男は気ちがいじみた度胸を持っている上に、すでにやけくそになっているから、身の危険などはそう考えの中には入れていない。自分のやりたいことは平気でやってのける無法者になっているだろうからな、おれたちの常識では考えられない男なんだ」

「恐ろしいことをいいやすえ、だんなは」

忠太の顔色がなんとなく変わってきた。

「それになあ、いくら大河原がずぶとくても、なにかそれだけの種をつかんでいなければ、いきなり千両という金は吹っかけられない。その辺がどうもくさいようだな」

今日の掛け合いはかなり面倒になりそうだと、雷太郎はその時すでに気がついていた。

奥との掛け合い

雷太郎は忠太の案内で花川戸の倉橋屋の内玄関へかかると、小間使いのお梅が取り次ぎに出て、すぐに昨日とおなじ十畳の座敷へ通された。

もともと奥は無人でいつもひっそりしている家だが、今日はことに店のほうまでいやにしいんとしているようである。

こっちが忠太といっしょに座につくとまもなく、店のほうから大番頭の富右衛門が出てきて、

「これはこれは御苦労さまでございます。手前が当家の大番頭をつとめております富右衛門でございます」

と、いんぎんに初対面のあいさつをした。やがて六十に近い年配で、ものなれてはいるが、いかにも律儀そうな人柄である。

「わしはこれなる親友忠太の口ききで、今夜から当家の夜詰めをつとめる約束の風雷太郎という浪人者だが、忠太の話では本所の大河原伝内がいま店先へきて座りこんでいるそうだな」

雷太郎はさっそく切り出していく。

「はい、とんだ厄病神に舞いこまれまして迷惑をしております。風さまのお力でなんとか話をつけていただければと存じ、忠太に使いに立っ

てもらったようなわけでございましてな」

「あらましの話は道々親友から聞いているが、伝吉という勘当息子は、本当に当家の人別帳から名をのぞいてあるのかね」

「それは、六年ばかり前、まだ先代の生前に名が抜いてございます」

「そこでな、大番頭さん、これは念のために聞いておきたいんだが、あんたの一存で、もし本当に伝吉が困っているならここで相当の金を出して助けてやりたいという考えがあるのか、それとも人別帳にない人間なのだからそんなことはしてやる必要はないと考えているのか、どっちなんだろうな」

「ごもっともなおたずねでございます。これは手前一存のことですが、伝吉さんが本当に困っているのでしたら、なんとでも相談相手になってあげたいと思っています。しかし、御当人が人別は抜かれていてもおれはここの跡取り息子だ、こっちのほしいだけ金を出すのが本当だというつもりの無心でしたら、それはどぶへ金をすてるようなものですから、おことわりするほかはないと考えております」

富右衛門の腹はっきりしているようだ。

「大河原は十両出したらうけとらなかったそうだねえ」

「あちらさまは、伝吉さんにたのまれてきた、ぜひ千両出してやってくれというのですが、それはどうも本当とは思えませんので、こちらは厄払いのつもりで、主人とも相談しまして十両出しました。あちらさまは、こんなはした金では帰れない、主人を出せといって座りこんでいるのでございます」

「よろしい、大番頭さんの話はわかった。わしが口をきいてみることにするが、その前に一度お浦さまに会っておきたいな。当家の責任者に無断でわしが勝手な口をきくわけにもいくまい」

「ごもっともでございますが、主人がなんと申しますか」

富右衛門はちらっと当惑そうな顔をしたが、
「しばらくお待ちを願います」
といって、自分からお浦後家の居間の杉戸の前へ立っていったようだ。
「だんな、お浦さまに会うのはちょいと難しいかもしれやせんぜ。なにしろ、つむじがだいぶ曲がっているお局さまでござんすからねえ」
大番頭の顔色を見ていた忠太は、急に心細そうにそんなことをいい出す。
「しかしなあ、親友、お局さまの気位だけじゃ大河原は追っ払えない。そんなわがままをいうんなら、自分でじかに店へ出てみるほうがいいんだ」
「しっ、声が大きいや、だんな」
忠太はどぎまぎしながらあわててたしなめていた。
まもなく大番頭がもどってきて、
「風さま、主人はあちらでお目にかかりたいそうです。どうぞおいでになっていただきます」
と、ほっとしたように告げた。
「そうか、じゃそうしよう」
雷太郎が気軽に立って廊下の杉戸の前まで行くと、そこにお梅が三つ指をついて出迎えていた。
お浦さまの居間は六畳と八畳の二間つづきで、お浦後家はその六畳のほうへこたつをおいてひざを入れていた。さすがに今日は昨日よりずっとふきげんそうな顔色で、
「風さま、あたくしになにか御用だそうでございますね」
と、頭から一本きめつけてきた。
「はてな、用はお局さまのほうにあるんじゃなかったかな」
雷太郎は敷居ぎわへ座って、わざとそらっとぼけた顔をしてみせる。
「ああ、あなたはわたくしに、どうぞ大河原のことはよろしくお願いいたしますと頭をさげさせたいのでございますね」

「頭をさげるのはいやですか」
「いやです。あたくしは大河原や伝吉などに因縁をつけられる弱みはなにもないのです。あたくしは理屈にあわないことは大きらいなのでございます」
「いや、わしはなにも大河原や伝吉に頭をさげろといっているんじゃないんだ。むしろ、頭をさげさせないためにあんたの名代として大河原の前へ出るんだから、よろしくお願いしますという一言がないと、口をきくわけにいかないんだ。わしの一存で大河原の前へ出るのは、余計なお節介ということになりますからな」
「では、あなたはあたくしが大河原や伝吉にきっと頭をさげなくてもいいように口をきいてくれますか」
「無論、そのつもりです」
「あたくしはこちらへまいります時、先代から、伝吉は勘当したのだからどんなことをいってこようと相手にしなくてもいいのだと、はっきりいわれているのです。ですから、いまさら千両よこせとゆすられる理由は少しもないのです」
「実は問題はそこなんだ。わしはまだ伝吉に直接会ってはいないが、話に聞いたところだけでも、かなり頭が変になっているんじゃないかと思う。だから、こっちはなんの関係もない人間だと思っていても、当人は倉橋屋はおれのものだと思っているかもしれない。事実、伝吉はおとなしくしていさえすればこの倉橋屋を自分のものにすることができたんだ。その点をくんでやって、伝吉の出ようによっては、こんどだけ百両ほど恵んでやる、そんな気持ちにはなれないだろうかな」
「そんなこと、いやでございます。あたくしは大河原などを使ってゆすりによこしたのがだいいち気に入りませんの。あたくしはお金が惜しいのではございません。そんな無法に負けるのが悔しいのです」
お浦の目がなんとなくつりあがってきて、こ

れも今日ははじめからだいぶ興奮しているようである。

「それは、無法に負けるのは負けるほうも悪い。わしは大河原の無法には絶対負けないつもりだが、伝吉の場合は多少違うと思うんだ。無論、これはわしが伝吉に会ってよく説得した上の話だが、その時たとえそれがうそにもせよ、伝吉がおとなしくわしの説得をいれた場合、一度だけは承知の上でだまされてやってもいいような気がするんだ。ここで百両ほどすてておくのは、むしろお局さまのためにもいいんじゃないかと思うんだがねえ」

「どうしてです。ここであたくしが百両すてませんと、あたくしのためにどんな悪いことがおこるとおっしゃるんです」

「正直にいえば、血のつながりがないからお局さまは伝吉に冷淡なんだと世間の目は見るだろう。まして、伝吉は公儀の手で召し捕られると首のつながらない哀れな男なんだ。百両ぐらいは倉橋屋の身代から見ればなんでもない金だという腹が世間にはある。まあ世間の口などはどうでもいいとしても、わしのいちばん心配するのは、伝吉は先のない凶状持ちなんだ。やけになって七首でも振りまわされると、お局さま一人では防ぎきれないんじゃないかと思うんだ」

この最後の一言はさすがにぎくりと胸へこたえたらしい。お浦はあっと目をみはっていたが、

「しようがございません。あたくしはたとえ殺されても曲がったことはきらいなのでございますから。こういたしましょう、こんどのことで口をきいていただくお礼としまして、失礼ですけれど風さまに百両差しあげます。それで話をつけていただきたいと思います」

と、どうやらいくらか折れてきたようだ。

「承知いたした。それではこれから店へまいって、大河原に会ってみよう」

「どうぞお願いいたします」

お浦は我にもなくとうとう行儀よく頭をさげている。

いくら気丈で気位が高いの、男まさりといっても、気がたかぶってくるとつい常軌を逸して普通の女とそう変わらない生地が出てくる。たわいのないものだなと思いながら、雷太郎がもとの座敷へもどっていくと、

「だんな、ちょいと手間がとれやしたね」

と、忠太がさっそく心配そうに聞いた。

「うむ、お局さまはとても御立腹のようだ」

雷太郎はあっさりわらってから、

「大番頭さん、店へ行って大河原に会ってみよう」

と、富右衛門のほうへうながす。

「ありがとうございます。どうかおたのみいたします」

富右衛門は待ちかねていたように立ちあがって店へ案内する。

店はお浦の居間の杉戸の正面に中廊下があって、右手は台所、左手はいま座っていた奥座敷の八畳のほうの壁になって、その中廊下の突きあたりになっている。

店座敷は客の出入りする土間を持ったかなりの広さで、一方に帳場格子で囲った番頭たちの机がならび、番頭や中僧小僧は十人ばかりみんなそっちへ集まってしんとしていた。

土間の上がりかまちへゆうぜんと腰かけているのは、昨日見たとおりの羽織袴姿の本所の殿さまこと大河原伝内で、そのわきに坂田の金時というやつが腰かけ、柄の悪いやくざが三人ばかりこれは土間にしゃがみこんでいる。

座敷へあがってたばこ盆を前に座りこんでいるのは渡辺の綱一人で、これが伝内にかわって掛け合いを一手に引きうけているのだろう。

綱は富右衛門のうしろから雷太郎が出てきたのを見て、内心はっと目をみはったようだ。

「お待たせいたしました。主人にかわりまして奥の取り締まりをしております風雷太郎さまがお目にかかるそうでございます」

大番頭がそう引きあわせるのを待って、
「渡辺さん、昨日は失礼した」
雷太郎は気さくにあいさつをしながら綱の前へ座った。
「なんだ、おぬし、また出てきたのか」
綱はじろりと雷太郎をにらんでから、
「おい、番頭、おれはこんな用心棒なんかに会わせろといったんじゃない。女主人のお浦にここへ出てあいさつをしろといったんだ。あんまり大河原組を甘く見ると、倉橋屋のためにならねえぞ」
と、富右衛門のほうへすごみをきかせようとする。

今夜の暮れ六ツ

「渡辺さん、わしは当家の主人の名代でここへ出てきたんだが、それでも話しあいはことわるかね」
雷太郎は渡辺の綱の山犬のようにいきりたっている顔へわらいながら話しかけていく。
「ことわる。ここの大番頭でさえらちのあかぬ話が、おぬしのような用心棒にさばけるはずはない。赤恥をかかないうちにおとなしく引っこんだほうが利口というもんだろう」
綱も今日は千両という金がかかっているだけに、くそ度胸をすえているようだ。
「らちがあくかあかないかは、談合してみなければわからないと思うんだがなあ。それとも、にらめっこのほうがいいんなら、わしのほうはそれでもかまわない」
「ふざけるねえ。こっちはどうしてもお浦がここへ出てこられねえと強情を張るようなら、こっちからお浦の居間へ押しかけていく覚悟でいるんだ」
「つまり、刀にかけてもというわけだな」
「そのほうが話が早いかもしれない」
「それはまずいだろう」
「なにっ」

「たとえ町家でも人の家へ押しかけて暴力に出れば、こっちは公儀へたのんで役人にきてもらうことができる。無論、乱暴を働いたほうが牢屋へ送られるだけの話だ。わしのほうとしては、ともかくも伝吉という男がからんでいる掛け合いだからなるべく穏便な談合にしたいと考えているんで、わしはこれでも自分では話のわかる男だと思っているんだがねえ」
雷太郎はあくまでもおだやかに出てみた。
「よし、それじゃおぬし、黙ってここへ千両出してみろ」
「その千両は伝吉がつかう金なのかね」
「そうだ。伝吉はここの家の先代伝兵衛の実子だ。おとなしくしていさえすれば、ここの身代はそのままそっくり伝吉のものだった。それが凶状持ちになったばかりに、倉橋屋は先代のめかけお浦のものになった。その伝吉がこんど本所の殿さまの屋敷へころげこんできて、おれはこの世でもう少し金をつかってから死にたい、すみませんが倉橋屋から千両ばかりもらってきてくれませんかと殿さまのそでにすがったんで、どうせ長くもない伝吉の命だと殿さまも不憫をかけられ、こうして今日わざわざここへ足を運ばれているんだ。その顔に対しても、千両ぐらい黙って出すのが世間の人情というものだ。おぬしが話のわかる男なら、どうだ、余計な文句は抜きにして、きれいにここへ千両出してみろ」
綱は一気にのべ立てて、もっともらしくたたみこんでくる。
「話は一通りわかった。しかし、渡辺さん、千両は少し多すぎるようだな」
「なんだと――」
「それに、そういう話は、伝吉をいっしょにここへつれてこなければ掛け合いにはならないんじゃないかね」
「おぬし、本所の殿さまをこけにする気か。承知しねえぞ」
綱はかっとなって、凶暴な目が血走ってきた

ようだ。店の者たちは一瞬どきりとしたようにみんな息をのんでいる。

「そういきなり腹を立てては困るな。談合というやつは、そっちの話を聞くかわりにごっちのいうことも聞いてもらわなくては話にならない。腹を立てるのは、よくこっちの話を聞いてからにしてもらいたいんだがなあ」

雷太郎は冷静な声でやりかえす。

「ぬかしおったな。よし、聞いてやるから話してみろ。そのかわり、あんまり人をこけにしたことを並べると、こんどこそ我慢はしねえからな」

どうすごんでみても相手が落ち着き払っているので綱は勝手が違うらしく、それでも太刀を引きつけて形だけはつけてみせる。

「いや、わしは筋のとおらないことは口にしない男だ。伝吉は凶状持ちだから、江戸で商売をやるというわけにはいかぬし、また少し派手に遊んでも役人の目について怖い。そういう男がなんに千両つかうつもりか。千両という金は、おそらく伝吉にはつかいきれない金だとわしは思う」

「待て――。伝吉が千両をなんにつかおうと、そんなことはおぬしの知ったことじゃない。それこそ余計なお節介というもんだ」

「それはいかん。分にすぎた大金は、身に災いをおよぼすだけのことで、決して当人のためにはならない。目にあまることは意見をしてやるのが識者のつとめなんだ。余計なお節介とは違う。わしは百両でも多すぎるくらいだと思うんだが、せっかく大河原さんが仲に立っているんだし、伝吉は今は倉橋屋とはなんの縁もない男にもせよ、先の短い気の毒な人間なんだから、その辺の事情をくんで百両だけこの店から出させることにしよう」

「なにっ、たった百両だと――」

「さよう。それも、わしが伝吉に直接会った上、よく意見をしてわたすことにしたい。しかし、凶状持ちの伝吉を真っ昼間ここへつれてきてくれといっても、それはあなたがたが迷惑だろうから、今日の暮れ六ツすぎ、日が暮れてからこっちも吾妻橋の上まで出向くから、そっちも伝吉をつれて金をうけ取りにきてもらいたい。わしのいうことは間違っているか、渡辺さん」

雷太郎はきっぱりと話の筋をとおしていいきる。

「ならねえ。こっちのいい出しのは千両だ。それをたった百両ばかしで手が打てると思っているのか」

「いや、わしは渡辺さんに手を打ってくれといっているんじゃない。百両で納得するように伝吉を説得してみてくれとたのんでいるんだ。大体、今日の千両の掛け合いは大河原さんの胸から出たわけじゃなくて、伝吉にたのまれたから足を運んでいるんじゃないのかね」

理屈からいえば、大河原組は伝吉の代理できているのだから、こっちの話を独断ではねつけるわけにはいかないはずなのだ。それを独断ではねつけて居直れば、大河原組が伝吉を種につかって倉橋屋をゆすりにきたことになる。

大河原伝内のゆすりなら、雷太郎は腕にかけても断然はねつける腹をきめていた。

それがはっきりこっちの顔色に出ているので、渡辺の綱もちょっと一存では返答ができなくなってきたのだろう。

「殿さま、どういたしますかなあ」

綱が大河原のほうへ聞くと、大河原もここで刀を抜いては、たとえ勝負に勝っても家名も身も立たなくなるとわかりきっているから、ちらっと隣の坂田の金時に目くばせして立ちあがった。

「綱、殿さまはこの話は、今夜、吾妻橋でつけろとおっしゃる。必ずその男に吾妻橋へ出てくるように念を押しておくがいい」

金時が大河原にかわって綱に答え、自分はそのまま伝内について表へ出ていく。

あいかわらず堂々たる引きあげぶりである。

「おい、この掛け合いはおぬしのいうとおり、今夜、吾妻橋でつけろという殿さまのお言葉だ。おぬし間違いなく出てくるんだろうな」
　綱はあらためて雷太郎のほうへ念を押す。
「わしは必ず出向く」
「暮れ六ツすぎだぞ。いいか、万一すっぽかすようなことでもあると、そのたたりは倉橋屋のほうへかかる。わかっているだろうな」
　綱は店中の者をにらみまわして、そっちへもすごみをきかせながら、すっと立ちあがって土間へおり、やがて大河原たちの後を追っていった。
「長松、早く店へ塩をまくんだ」
　番頭の一人がほっとしたように小僧にいいつける。
「へえい」
　長松は威勢よく塩を取りに台所へ駆けこんでいった。
「風さま、どうもありがとうございました。どうぞこちらへ」
　大番頭の富右衛門もほっとした顔つきで、すぐに雷太郎を元の座敷へ請じる。
「先生、おかげで店は助かりましたが、あなたさまは今夜大丈夫でございましょうかなあ」
　座がきまると、富右衛門はさっそくそれを心配しだす。
「いや、そんな心配は無用にしてくれ。これが用心棒の役目なんだから、棒にはまた棒の考えも覚悟もある」
「さようでございますかなあ。なにしろ、大河原組にはすごいやくざ浪人どもがいつもごろごろしているというわさなんで、今夜お一人で吾妻橋へ出かけるというのはどういうものでございましょう」
「なあに、大河原伝内にしても、話さえわかればなるべく血なまぐさいことはやりたくないはずだ」
　そこへ小間使いのお梅が茶を運んできて、

「大番頭さん、お浦さまがお呼びでございます」
と告げた。
「そうかえ。先生、ちょいと失礼します」
　富右衛門はいそいでお浦の居間へ立っていく。
「だんな、いい度胸だねえ。あっしはすっかり感心しちまった」
　二人きりになると、忠太があらためてしみじみとこっちの顔を見ていた。
「そうか、そんなに度胸がいいか」
「いいえね、だんなの強いのは昨日でよくわかっているんです。けど、あんなすごい野郎を相手に、別に大きな声ひとつ出すわけじゃなく、ぴたりぴたりと話をきめていく。すごんでほえている綱のほうがだんだん人間が小さく見えてくるんだから、おかしなもんですねえ」
「人間が小さく見えるのは頭が悪いせいだろう。もっとも、頭がよければ大河原の子分などにはならないだろうからな」
「そうかもしれやせん。実はね、お浦さまがさっきそっとのぞきにきて感心していたようですぜ。ああぴたぴたと話がついていきゃ、だれだって聞いていて胸がすっとしやすからね」
「ところがなあ、忠公、今夜おれのほうはそう心配しなくてもいいんだが、ひょっとすると伝吉が暴れ出すかもしれない。おれはそれを心配しているんだ」
「へええ、伝吉がどう暴れ出すんです」
「伝吉はさっきもいうとおり常軌を逸している男だ。もし大河原にけしかけられると、一人で今夜倉橋屋へ暴れこむ。こいつはなまじ先代の実子という縁があるだけに、奉公人の手ではおさえきれない」
「おどかしちゃいけねえや、だんな」
　忠太はあきらかにどきりとしたようだ。
「伝吉はここの身代をまだ自分のものだと思っているだろうから、そこをけしかけられると山犬のように狂い出すおそれがあるんだ」

「だって、そいつはだんながなんとかしてくれるんでしょう」
「それは、おれがいればなんとでもしてやれるが、おれのいない時を気をつけなくちゃいけない。といって、忠公だって伝吉にぶつかれば、もとの若だんなんだから頭があがらないんじゃないのか」
雷太郎がひやかすようにいってわらうと、
「そのとおりでさ。あの若だんなとくると、平気で気ちがいじみたことをやり出すんだから、とてもかないませんや」
と、忠太は急にしょぼんとしてしまう。

暮れ六ツ迫る

「先生、お浦さまはなんですか急に気分が悪くなりましたそうでな、失礼させていただくそうでございます。つきましては、まことにすみませんが、今夜吾妻橋へお出かけになります前に、お約束の百両は用意いたしておきますから、どうぞお立ち寄りくださいますようにと、このように申しております。いかがなものでございましょうな」
まもなくお浦の居間からさがってきた大番頭の富右衛門は、当惑したような顔つきで申し訳なさそうにいうのである。
大番頭の気持ちでは、ともかくもやっかいな大河原組を店先から退散させてくれた上に、今夜吾妻橋でなんとか話をつけてくれることになったのだから、一応女主人が自分で座敷へ出てきて雷太郎に礼をいうのが本当だと考えていたのだろう。
「いや、わしのほうはそれでかまわぬ」
雷太郎は気さくに答えて、忠太といっしょに倉橋屋を辞した。わがままに慣れてしまっている女を、本気になって相手にすることもないからだ。
「おかしいなあ。お浦さまはなにをそんなにへそを曲げてしまったんだろうな」

忠太は興ざめた顔をして、ふしぎそうに小首をかしげている。
「そんなことは気にするな」
「そうはいきやせんや。正直にいって、こっちは命がけの掛け合いを引きうけているんですからねえ。自分で出てきて、一言礼をいわないって法はありやせんや」
「いや、そのおれの掛け合い方が気に入らなかったかもしれないな。伝吉に百両やるのは多すぎる。十両でたくさんだと考えているのかもしれない」
「そうですかねえ。けっ、もしそれが本当なら、あっしはあの女を見そこなっちまった。なんでえ、倉橋屋の身代で百両ばかし」
その足で二人は約束だから馬道の松葉屋へ寄ってみた。雷太郎はついでにお高の父親松吉に会って、伝吉の当時の話をもう少しくわしく聞いておきたいつもりがあった。
やがて昼に近いので、松葉屋はあいかわらず繁盛しているが、お高の顔が店に見えない。
「お高さんがみえないようだね、ねえさん」
切り落としの座敷へ陣取ってから、忠太がさっそく小女に聞くと、
「なんですか、ねえさんはさっきめまいがするといって、二階でやすんでいるんです」
と、意外な返事だった。
「あれえ、ここでも急にへそが曲がったかな」
「いいえ、おなかじゃありません。めまいなんです」
「そうか。わかったわかった。お大事にといっておいてくんな」
忠太は苦わらいをしている。
「ねえさん、ここのおやじさんはまたつりかね」
雷太郎がそれとなく聞く。
「ええ、そろそろふなの季節だもんですから」
「ふうむ、ふな忠がつれる季節か」
「いいえ、のっこみぶななんですって」
小女はまじめに答えて、いそがしそうに板場

へ駆けこんでいく。
「だんな、悪いしゃれでさ。けど、こっちもへそを曲げたとすると、こっちはやきもちのほうかな」
忠太が目でわらいながらいう。
「そんなこともないだろう。お高はさっき別れる時から顔色が悪かったようだ」
そのお高は小女に知らされたとみえて、まもなく店へ出てきた。なるほど、なんとなくさえない顔色である。
「忠さん、板場のほうからくればいいのに」
「けっ、そいつはだんなのほうへいうせりふだろう、お高さん」
「いやな人――。女にそんな恥をかかせるもんじゃないわよ。それで、倉橋屋さんのほうはどうなったんです」
上がりかまちの前に立ったまま、お高はさっそく切り出してくる。
「そいつはだんなのことだからぴたぴたっと片づいてしまったんだ」
「じゃ、お浦さまがさぞかしおよろこびになったんでしょう」
お高はちらっと雷太郎のほうをしり目にかけながら、そんないやみを口にする。
「ところが、お局さまはどうへそを曲げたか、居間に引きこもったきり顔も出さねえんだ。もっとも、話はすっかり片づいたってわけじゃない。今夜だんながじかに伝吉若だんなに会って、それで話がきまることになっているんだがね」
「じゃ、伝吉さんは本当に大河原の屋敷へかくまわれているのかしら」
「どうもそうらしいんだ」
「見つかると、まだ体があぶないんでしょう」
「それはそうなんだが、ああいう気ちがいじみた若だんなのことだから、もう破れかぶれになっているんじゃないかな」
「それで、倉橋屋さんでは千両出すことになったんですか」

「いや、だんなが仲へ入って、百両で話をつけようとしてるんだ」
「承知するかしら」
「その答えは今夜伝吉に会ってみなければ、だれにもわからない」
雷太郎がそばからそう口を入れると、
「あの人は怒らせると怖いから、気をつけてくださいね」
と、お高はひどく浮かない顔をしていた。
その日の暮れ六ツ前に、雷太郎は忠太をつれて、約束どおり倉橋屋の奥をたずねた。
こんどはお浦も大番頭といっしょにすぐに座敷へ出てきて、
「風さま、今朝ほどは失礼いたしました」
と、座に着くなり普通のあいさつをした。
「いや、そんなことはかまわないが、今朝のわしの掛け合い方になにか不満があるようなら、はっきりいってもらいたいな」
雷太郎は意識してきっぱりと出た。こっちからたのんで用心棒になりたいわけじゃない。たのまれたからこんな危ない仕事を引きうけようとしているので、その点、卑屈になる必要は少しもないと思ったからだ。
「いいえ、風さまに不服があるわけではございません。あたくしは大河原や伝吉さんという人などにいわれもなく負けるのが悔しいのでございます。こちらになんの弱みもないのに、脅迫されてお金を出すなど、どう考えてもあたくしには我慢ができません。ですから、あたくし今日一日中考えました。その上で、これはあたくしが負けるのではない、伝吉さんという人が気の毒だから百両施してあげるのだ、やっとそう決心がつきましたので、ここに百両用意してまいりました」
お浦はそういって、重そうなふくさ包みを盆の上へのせて出し、
「風さま、どうぞお願いいたします。この百両を伝吉さんという人にあげて、今後は二度とこ

んなことのないようによく話をつけてきていただきたいと思います。あたくしのいま申しましたことは間違っているでございましょうか」

と、きつい顔をしていいきるのだ。

「いや、間違っていません。無論、わしは伝吉にも大河原にも必ず話をつけてきます。しかし、相手はゆすりが稼業の大河原組と、半気ちがいの伝吉なのだから、その場は納得したように見せかけても、勝負はまだ後へ残るかもしれない。闘いはわしが引きうけるが、あなたにもその点十分覚悟してもらわなければならないと思う。それだけは承知しておいていただきたい」

「あたくしは大河原や伝吉さんに会うのはいやでございます。そんなことのないようにしていただくわけにはいかないのでございますか」

「無論、できるだけそういうことにします。それが用心棒の役目ですからな」

「きっとお願いいたします」

「承知いたした」

ここで理屈のこねっこをしていてもしようがないので、雷太郎は一応承諾しておいて、

「忠公、店からてんびん棒を一本借りて、わしといっしょに行ってくれ」

と、忠太にいいつけた。

「あっしがいっしょに吾妻橋へ行くんですか」

忠太はどきりとしたように目をみはった。

「おれは伝吉の顔を知らないから、偽者をつかまされては困るんだ。そのかわり、首実検の役目がすんだら、おまえはすぐここへ引きかえして玄関へ詰めるんだ」

「なるほど――」

「大番頭さん、わしがここへもどってくるまで、店の者も油断なく奥を注意していてもらいたい。こういう時は用心をしているに越したことはないんだ」

「かしこまりました。よくわかりました」

富右衛門は何度もうなずいていた。

そこで、雷太郎は百両のふくさ包みを取って

ふところへおさめ、忠太をうながして倉橋屋を出た。

町はもうほとんど暮れかかって、東の空に十四日ほどの月が明るくのぼっていた。花川戸から吾妻橋まではほんの目と鼻の間である。

「忠公、どうやら少しわかりかけてきたようだぞ」

表通りに出てから、雷太郎はわらいながらいった。

「へえ、なにがわかりかけたんです」

てんびん棒をかついで肩をならべている忠太が、いくぶんこわばったような顔をして聞く。

「おまえ、伝吉は苦手なんだろう」

「そりゃ、まあね」

「苦手だから、会うのはちょいと怖い」

「ひやかさねえでもらいたいな、だんな」

「いや、おまえをひやかすんじゃない。実は、さっきのお高も、いまのお局さまも伝吉を怖がっているんだ」

「なんですって――」

「お高は伝吉を知っている。だから、余計怖い。父親のこともあるしな」

「お浦さまはまだ伝吉に会ったことはない。それがどうして怖いんです」

「会ったことはなくても、話はよく聞いている。伝吉はなにをやるかわからない男だけに、それが怖いんだ。といって、勝ち気だから怖いとはいいたくない。だから、わかったようなわからないような理屈がこねたくなるんだ」

「じゃ、だんな、伝吉は百両ぐらいじゃ納得しない。どうしても暴れ出すっていう見こみなんですね」

「いや、いうなりに千両出したって、暴れ出すことはおなじだ」

「どう暴れ出すんでしょうねえ」

「まず倉橋屋をねらうだろうな」

「本当ですか」

「次にはお高がねらわれる」

「どうしてお高がねらわれるんです」
「そいつは自分で考えてみろ。お高は伝吉が殺したおまきの店で働いていたことがある。そのころお高は十六だった」
雷太郎は我にもなく暗い声になりながら、
「しかし、たとえ凶状持ちでも人間一匹、おれがてんびん棒で片づけてしまうというわけにはいかんしな」
と、ついそれを口に出していた。
忠太はもう口がきけないようである。
道は雷門通りへ出て、吾妻橋がすぐそこにくっきり目についてきた。

狂人と悪党

雷太郎が忠太をつれて吾妻橋へかかるころ、ちょうど浅草寺の鐘が暮れ六ツをつき出していた。昼間は人の流れの絶えない吾妻橋も、いまは閑散として、明るい月かげが七十六間の橋板を青く染めている。

夜はまだ川風が寒かった。
「だんな、大丈夫かなあ」
忠太がまたしても心細そうな声を出す。
「なにがだね」
「なにがって、大河原組は悪党の寄り集まりですからねえ。どんなひきょうなことをたくらんでいるかわかったもんじゃねえ」
「そんなことなら心配するな。おれは観音さまの棒だ。悪党を怖がっていたんじゃ棒の役はつとまらない」
「そういえばそうですがね」
「さっきもいうとおり、おまえは伝吉の首実検がすんだらさっさと引きあげるがいい。つまらぬ義理立てなど無用のことだ」
吾妻橋をわたりきった正面は、細川侯の下屋敷だった。その塀の下に立っていた三人の男が、こっちが橋をわたりきろうとすると、つかつかと橋たもとの月あかりの中へ出てきた。
前に立った二人は浪人者で、一人は渡辺の綱、

一人のほうは新顔である。そのうしろからついてきた手ぬぐいをぬすっとかむりにしたやくざ風の男が、倉橋屋の勘当息子伝吉なのだろう。
「風雷太郎、よく出てきたな。金は持ってきたか」
渡辺の綱はいきなり切り出してきた。
「うむ、持参した。当人をつれてきたろうな」
相手がはじめからけんか腰なので、こっちもそのつもりできっぱりと出る。
「よし、――伝吉、約束の金をうけとれ」
綱がうしろへいうと、ぬすっとかむりの男が前へ出てきて、
「約束の百両、うけとろう。出してくんな」
と、横柄に右手をさし出す。
「おまえが伝吉か」
「そうだよ」
「かぶり物を取って、顔を見せろ」
なにをっというように、伝吉は剃刀のような目を光らせたが、思いかえしたように、
「ふん、たった百両ぐらいで、御念を入れやがる。――これでいいか」
と、左手で手ぬぐいをむしり取って、悪たれた顔を突き出してみせる。
色の青白い、思ったより華奢な目鼻立ちだが、その顔全体に凶暴な暗いかげが人を威圧するようにみなぎっているから、争われないものである。
うしろで忠太があっと顔をそむけたようだ。
「よかろう。では、百両わたしてつかわすが、一言念を押しておく。今後倉橋屋では一切かような無心に応じないことにするから、そのつもりでいてくれ。いいだろうな」
「そうか。二度と無心はいけねえか」
伝吉は手早く元のぬすっとかむりになりながら、ふてぶてしくいう。
「うむ、いかん」
「しようがねえ。じゃ、二度と無心しねえことにする」

「男の約束だろうな」
「くどいねえ。わかったよ」
「それ、金をうけとれ」
雷太郎はふところから金を出して、ふくさ包みごとわたしてやる。
それをうけとった伝吉は、すぐにふくさ包みを解いて、二十五両包みが四つあるのをたしかめ、その中の一つだけを取って、残りの三つ七十五両を、
「渡辺さん、わたしたよ。殿さまによろしくいってくんな」
といいながら、無造作に綱の手にわたした。
「よし、たしかにあずかった」
「ところで、倉橋屋の用心棒さん、おれは二度と無心には行かねえが、金がほしくなったらいつでも倉橋屋へ勝手に取りには行く。倉橋屋の身代はおれのものなんだからね。お浦や大番頭にそういっておいてくんな」
伝吉はぬけぬけといってのけて、せせらわっている。
「そうか。それではこっちも前もってことわっておくが、勝手に押しこんできたやつは、このてんびん棒でたたきのめすことにする。かたわになりたかったら、いつでもくるがよい」
雷太郎は忠太からてんびん棒をうけとって、とんと橋板に突いてみせた。
「ふん、わらわしちゃいけねえ。おれがそんなてんびん棒を食うほど間抜けだと思っているのか。たかが用心棒のくせに、うぬぼれていやがる」
「伝吉、もういいだろう。ちょいとさがっていろ」
金をふところへしまった綱が伝吉をさがらせて、
「雷太郎、そっちの用がすんだら、もう一人おぬしに用のある人間が今夜はきているんだ」
と、挑戦してきた。
「それはだれだね」

「ここにいる御仁だ。——おい、浅沼」
綱は連れの浪人者のほうへ目くばせする。
「心得た」
その男はぎょろりとこっちへ目を向けて、
「おい、おれは浅沼五郎兵衛という剣客だが、貴公は昨日馬道の松葉屋でおれの門弟のお相撲鉄を手玉に取ってくれたそうだな」
と、そんな見えすいたいいがかりをつけてきた。
「すると、浅沼先生は相撲のほうの指南もされるのかね」
雷太郎はついからかってみたくなる。
「なにっ」
「あのお相撲鉄という先生の門弟は、無頼の仲間に入っているようだ。どうも、ゆすり、たかり、いやがらせなど、弱い者いじめをして困る。ちと先生からしかってやってもらいたいもんですな」
「黙れっ。貴様は倉橋屋の色後家のしりをねらってごまをすっているくせに、大きな口をたたくな」
「そうやけるところを見ると、先生はわしがうらやましいに違いない」
「うぬっ、抜け。その憎まれ口をふさいでくれる」
「先生、もっと怒ったほうがいい。わしはこのてんびん棒でたくさんだ」
綱が選んでけんか犬につれてくるくらいだから、浅沼は大河原組の中でも相当以上の腕にちがいない。が、悪たれそこねて自分のほうからこう怒り出すようでは、腹の底が知れている。雷太郎はわざと冷笑しながら、持っていたてんびん棒をひょいと青眼につけてみせた。
「くそっ、行くぞ」
案の定、敵はそれに誘われたように、ひらりと飛びさがって間合いを計りながら、さっと抜刀した。
「えいっ」

「とうっ」
なるほど、人間は下司だが、腕はたしかなようだ。雷太郎ももうむだ口はきいていられない。しかも、綱が横合いからじっとこっちの様子に目を光らせているから、そっちへも十分気を配っておく必要がある。
「どうした、若僧、おれが怖くなったか」
こんどは浅沼がこっちを嘲笑してきた。
それにつられてうっかり前へ踏んごんでいくと、ちょうど綱が横合いから一気に抜きうちをかけて出られる攻撃圏内へ入っていくことになるのだ。無論、浅沼のねらいはそこにあるのだろう。
が、こっちが少しでもちゅうちょの色を見せると、敵はいよいよ図に乗ってくるばかりだ。むしろ、てんびん棒ではどうしようもあるまいといくらか甘く見ている敵の意表をついて出たほうが勝ちだと雷太郎は見たので、
「おうっ」
とっさにすり足を使って、こっちから一気に、す、すっと間合いを詰めて出た。
その出足があまりにも素早く大胆すぎたので、浅沼は一瞬明らかに気をのまれながら、
「とうっ」
狼狽気味に一刀を青眼から上段に振りかぶろうとした。その変化のすきへ、
「えいっ」
てんびん棒が籠手をねらって火のように飛んだ。
「う、うっ」
小技ではあるが、腕力のある雷太郎の一撃だから、その一本で浅沼の籠手の骨は折れたらしく、がくんと両ひざから落ちて、そのまま気絶してしまったようだ。
「うぬっ」
綱は刀の柄へ手をかけたものの、抜きうちに出る暇さえなく、
「渡辺さん、浅沼先生は骨が折れたかもしれな

い。つい力が入りすぎたんだ。早く手当をしてやってもらいたいな」
雷太郎がそっちを向いていうと、思わずそっと柄の手を放して、啞然としていた。
伝吉はどこへ行ったか、すでに姿を消している。
「忠公、おまえまだいたのか」
雷太郎は吾妻橋を雷門のほうへ引きかえしながら、つと肩をならべてきた忠太を見て、とがめるようにいった。
勝負はほんのわずかな間だったが、橋の上にも本所河岸のほうにも道をせかれた人たちがもう何人か立ち止まってこっちを見ているようだ。
「だって、だんな、あっしはだんなの様子を見とどけないうちは、どうしても駆け出す気にはなれねえんでさ。けど、だんなはやっぱり強うござんすね。あっしはあきれちまった」
忠太は今になって手ぬぐいでそっとわきの下の冷や汗をふいている。
「強いのなんかはなあ、忠公、少しも自慢にはならないんだ」
「どうしてです」
「どんなに強くても、その上の強いやつにかかると、こんどはこっちが負ける番になる。いちばんいいのは、なるべく話し合いで事をすませることなんだ」
「そりゃまあ、それに越したことはありやせんがね。相手のほうが横車を押してくりゃしようがありやせんや」
「無法者の横車はまだよけて通るという手もあるが、伝吉のような気ちがいになるとなんとも始末が悪い」
雷太郎は我にもなく暗い声になっている。
「だんな、伝吉は本当に倉橋屋へ押しこんでくるでしょうかね」
「あの男は意地でも一度は押しこんできそうだな。話し合いのきかない男だけに困ったもんだ」

煩悩地獄

お浦は居間のこたつの中で暮れ六ツの鐘を聞いて、

——今ごろあの男はもう大河原組に出会っている。

と、我にもなくどきりとした。

そして、あの男のことでこんな余計な気をつかうのはばからしいと、すぐに意地強く自分をおさえつけていた。

こっちはちゃんと百両の金を持たせてやってあるのだから、いくらあくどい大河原組でも、それで話がつかないはずはない。たとえば、相手がどんなに無法に出てきても、それに負けるような男では用心棒の役には立たないのだ。

お浦ははじめからそう割り切っているつもりだった。

それなのに、なんとなく雷太郎という男のことが気になって、ともすればぼんやりとそのことばかり考えている。

姓は風、名は雷太郎などと、無論偽名にちがいない。偽名をつかうような男は用心しなければいけない。よっぽど昨日のうちにことわってしまおうかと思ったのだが、見たところなんの邪心もなさそうな澄んだ目をしているし、その人柄も浪人ずれがしているところなどどこにもない。出は旗本で、それも相当な家柄に育っている。

——ひょっとすると、家名を出したくないための偽名。

そうも考えたので、ともかく二、三日置いてみる気になったのだ。

そして、今朝、店での大河原組との掛け合いぶりをのれんのかげからのぞいてみた。少しちゃめっけがありすぎるような気もするが、いうことはしっかりしているし、なによりもあの胆力がたのもしい。

——これなら置いても大丈夫そうだ。

そうこっちの腹がきまったとたん、お浦はふっと不安になってきた。

ああいう坊ちゃん気質の男は、こっちが少しでも甘い顔を見せると、どんな気を起こすかわからない。一本気なだけにそれが怖いと気がついたのだ。

だから、今朝はあの後でわざと会わずに、大番頭の取り次ぎだけで帰したのだった。

が、その後で、どうして自分はあの男をそんなに怖がって用心しなければならないのだろうと考えてみた。正直にいうと、好きだのきらいだのという女の感情はもうとっくに捨てている。それを捨てなければ、親子ほども年の違う商家の男のところへ後妻に入る気にはなれなかった。まして、その先代が死んでからは、もう男を男と思ったことは一度もない。それが、雷太郎だけはふっと男に見えてきたのだ。

たのもしいと思う心の底に、きらいでないという感情が動いている。あの男のいきいきとし

「そいつはいけねえや。やっぱり番所へたのんでおいたほうがよかあないでしょうか」

「しかし、番所へつかまれば首のない男だ。倉橋屋としては、思いきってそうもできかねるだろう」

「伝吉はお高もねらうんでしょうか」

「わからんなあ。まあ気をつけることだ」

「ひとっ走り行って知らせてやったほうがいいでしょうか」

「それとなく注意しておいてやるほうがいいな。しかし、そういう忠公も今夜伝吉に顔を見られている。油断はしないことだ」

「おどかしちゃいけやせんや、だんな」

忠太はぞっとしたような顔をしていたが、花川戸通りへ入って倉橋屋の横町の前までくると、とうとう我慢できなくなったように、

「あっしはちょいと松葉屋へ行ってきやす」

と、そこから馬道のほうへ駆け出していった。

た清潔さに、なんとなく新鮮な魅力さえ感じている。

そういう相手にもし強引にいいよられでもしたら、こばみきれるだろうか。お浦には自信が持てないような気がして、それが怖いのだ。

——間違いを起こしたくなかったら、できるだけ冷淡にかまえて、絶対に二人きりにならないことだ。

お浦は今日それをはっきり自分にいい聞かせていた。

大河原組のゆすりや伝吉の無法などは、いやらしくはあっても、そう恐ろしいとは思わない。そのために天下にはおきてというものがあって、正しい者をまもってくれるからだ。

それより女にとっていちばん怖いのは男に負けることだ。一度男に負けると、それがどんなにきらいな相手でも、女体はその男に征服されて自由を失ってしまう。

——あたくしは二度と男などにこの体を縛られたくない。

そうだ、あの男に負けたくなかったら、思いきり憎まれることだ。こっちからあの男をいじめてやろう。

お浦はそんなことを考えながら、そのくせ、一度雷太郎という男に目をひらかれた今は、つい女体の不満がその相手に向かってうずき出し、我にもなく遠い昔男に負けたとき経験したあの甘美な感情さえ、まざまざと体によみがえってくる。

——どうかしてしまったのかしら、いやらしい。

自分でもびっくりしてまゆをひそめてみたが、体中が甘くゆるんでいて、どうにも正気にかえれない。

そのうっとりした目が、突然異様なものを見た。

音もなく廊下の障子があいて、ぬすっとかむりの男がぬっと居間へ入るなり、素早くうしろ手で障子をしめきっている。

「あっ」

お浦は息をのみながら急には声も出なかった。

ぬすっとかむりの中の男の目は、へびのようにこっちを冷たく見すえながら、

「おめえがお浦っていうのか」

と、低い声でいう。

「だれ、そなたは——」

「思ったよりいい女だなあ」

男はにやりとわらいながら、

「おれはここのせがれの伝吉だ。声を立てると殺すぜ」

と、ふてぶてしくいいきる。

お浦の背筋へぞっと悪寒が走ってきた。凶悪なその目の色を見ただけでも、この男は平気で人が殺せそうである。

「そなたには今夜、百両あげたはずですが、あの人に会わなかったのですか」

目を逃げるとあぶない、そんな気がしたので、お浦は必死に相手をにらんでいる。

「あの用心棒になら会ったよ」

「では、百両はとどいたのでしょう」

「それも受け取った。その時いった野郎のせりふが気に入らねえから、じかにおめえに掛け合いにきたんだ」

「どう気に入らないというんです」

「野郎は、二度と無心はならねえ、倉橋屋へ顔を出すとたたっ切るとぬかしやがった。冗談じゃねえ、この倉橋屋はおれの家なんだ。そんな他人のお節介はうけねえ。おれは金がほしくなったらいつでもここへ取りにくるから、承知しておいてくんな」

「あたくしはそんなお話はうかがいたくございません。早くお帰りください」

「用がすめば帰るよ」

「まだなにかあたくしに用があるのですか」

「うむ。おれはおめえがいけねえといっても自

分で勝手に蔵から金を持ち出す術を身につけているんだ。だから、一度おめえに会って、はっきりそれをことわったらおとなしく帰ってやろうと思っていたんだが、こうやってにらめっこをしているうちに、ただ帰るにはちょいと惜しい大年増だと、そんな気がしてきた。どうせおめえ空き家なんだろう」

「なんでございますって」

「それとも、もうあの用心棒にかわいがられているんかね」

濁った目が妙にぎらぎらと燃え出して、臆面もなくこっちの体中を見まわしてくる。

「失礼な。早くお帰りにならないと人を呼びます」

「おめえは用心深いとみえて、あいにく廊下の杉戸は中から桟がおりているようだね」

伝吉はせせらわらいながら、

「声を立てると殺すと、おれはさっきもことわっている。殺されてもいいのか」

と、男はこっちをからかってたのしんでいるようだ。

「殺されても、いやらしいまねをすれば声を立てます」

「強いんだなあ、お局さまは。おとなしい女を抱くよりは、少しはあばれる女を手ごめにするほうがおもしろいんだ。殺されたけりゃ、声を立ててみな」

なんとも恐ろしい男である。伝吉はにやにやわらいながら、もうすっとそばへ寄ってこようとする。

「あっ、だれか、助けてえ」

お浦は恐ろしさ、いやらしさに目がくらみそうになりながら、思わず金切り声をあげていた。

「ふ、ふ、そんな声を立てたって、だれがくるもんか」

伝吉の動作はまるで豹のように敏捷だった。こたつをまわって、するりとうしろへ出るなり、

こっちが夢中でこたつの上へ突っ伏して身をまもろうとするのを、ぐいと肩をつかんで引っぺがすように引き起こして、左腕がもうお浦ののどへやんわりからみついていた。

「いけない、——許して」

必死に身もがきしながら、お浦はたちまち息が詰まってくる。

「ふ、ふ、いい体をしてやがる」

獲物につかみかかった伝吉は、もう野獣になりきっていた。右手で豊かな内ふところをさぐりながら、じっとこっちの力のつきるのを待っている。

——もうだめ。

お浦はごうっと頭へ血がのぼってくるのを感じながら、しだいに意識がかすんできて、それでも体が仰向けに倒されたまではわかっていた。

「おめえの体がいろっぽすぎるからいけねえんだ」

野獣は獲物の体をずるずるとこたつの中から引きずり出して、素早くすそ前へ両手をかけている。

「おい、もうその辺でやめておいたらどうだ。目がつぶれるぞ」

すっと廊下の障子があいて、たしなめるように声をかけてきた者がある。

「だれだ」

伝吉はかっとなりながら、とっさに立ちあがっていた。

雷太郎がてんびん棒をついてわらいながらそこに立っている。

「うぬっ、用心棒だな」

伝吉は狂暴な目を血走らせて、いきなりふところの匕首を抜いた。

「よしたほうがいいだろう。匕首よりてんびん棒のほうが少し長い」

声も顔色も落ち着き払っていて、動じたところはみじんもない。

「畜生」

七首を両手で胸へかまえた伝吉は、無論、体ごと相手にぶつかっていく気だったのだろうが、相手があまりにも冷静すぎて、ちょいと勝手が違ったのだろう。

「惜しい女だが、今夜はあきらめておこう」

ふてぶてしくそうつぶやきながら、七首の手をおろしてしまう。

「そのほうがいいだろう。ここでかたわになっては、先のたのしみが消えてしまう」

「おぼえていろよ。おれは一度ねらった獲物はきっと取らずにはおかねえからな」

「それまでおまえの娑婆があるかどうか。まあ生きている間は命を大切にすることだ」

「なにぬかしやがる。人の命よりてめえの命に気をつけろ、ばか野郎」

伝吉はよっぽどお浦に未練があるらしく、そんな悪態をつきながら後じさりをして、内蔵の前へ出るふすまをあけるなり、さっとそっちの廊下へ姿を消していった。

お浦の難題

「お局さま、もう大丈夫だ。伝吉は出ていったようだ」

裏廊下へ姿を消した伝吉は、無論足音ひとつ立てなかったが、気配でなんとなくそれがわかったので、雷太郎はお浦に声をかけてやる。

お浦は伝吉の手が体から離れたとたん、くるりとうつぶせになって、花のようにかき乱されたあられもないすそ前をとっさにかばったまま、まだぐったりとなったきり返事もできないようだ。呼吸が大きく背中で波打っている。

「一人で起きられるかね」

もう一度聞いてみたが、返事がない。

そばへ行って助け起こしてやることは知っているが、気位が高いつむじ曲がりだから、うっかり余計なまねはできない。すんでのところで目がつぶれるあたりまで荒らされた恥ずかしい姿を男に見られて、悔しまぎれにすねているのかもしれない。雷太郎はふっとそんな気もしたので、自分が手をかけるより早く人を呼んでやったほうがいいと思いかえし、いそいで廊下の杉戸をあけにいった。

それにしても、この奥座敷はあまりにも用心がよすぎてかえって物騒だと思った。こっちが杉戸をあけて、

「お梅さん、お梅さんはいないか」

と、台所のほうへ呼ぶまで、奉公人たちはここでこんな騒ぎが起こっていることをだれも気がついていないようだった。

「まあ、先生――」

台所から走り出てきたお梅は、そこに雷太郎がてんびん棒を突いて立っているのを見て、怪訝そうに目をみはった。

「お梅さん、すぐに大番頭さんにきてもらってくれ」

「あのう、お浦さまがどうかなすったんでしょうか」

「うむ。しかし、騒いではいかん」

お梅はさっと顔色をかえて店のほうへ走り出す。

――この分では、おれがもう一足おそいと、お局さまは助からなかったな。

雷太郎はまだ目端に残っているお浦の白々とした脛からひざのあたりをちらっとまぶたにおもいうかべて、苦笑せずにはいられない。

「風さま、なにかあったのでございますか」

まもなく、あたふたと駆けつけてきた大番頭の富右衛門は、息をのみながら聞く。

「伝吉が押しこんできたんだ」

「な、なんでございますって」

「まあ、こっちへきてくれ」

雷太郎は先に立って居間の前へもどり、そこの障子をあけた。

お浦はもう起きなおっていて、いつものようにこたつへひざを入れていたが、まだ青ざめた顔をうなだれたまま、こっちを見ようともしな

い。
「お浦さま、伝吉さんが押しこんできたそうでございますな」
大番頭はそこへひざまずいておろおろと声をかけたが、お浦はくちびるをかんだまま答えようとしない。体中で怒っているようだ。
「先生、伝吉はどこから押しこんできたんでしょう」
「厠のそばの戸袋口の雨戸からだ。——お梅さん、手燭の支度をしてくれ」
「はい」
「先生は吾妻橋へお出かけになったんでございましょう」
「それは行った。向こうで伝吉に会って、金もわたした。しかし、おれが大河原組のごろつき浪人一人とわたりあっているほんのしばらくの間に、伝吉はどこかへ消えてしまっている」
「なるほど——」
「伝吉はこっちが考えていたよりはるかにずぶとい悪党になりきっている。ここの家の門の前までもどってきたが、どうもそれが気になるんで、ついでに裏木戸のところまで行って木戸に手をかけてみたんだ」
「あの木戸はふだんは使いませんから、いつもしまりがしてあるはずです」
「それが、すっとあいたんだ。おかしいと思って、そこから入り、厠のそばの戸袋口の前まできてみると、そこの雨戸が三寸ばかりあいている」
「そこはさっきあたしがちゃんとしめて、しまりをしたところです。本当です、先生」
手燭に灯をうつしてきたお梅が、言葉に力を入れていう。
「いや、伝吉というやつは、どんなしまりでもあける技を心得ているんだろう。大番頭さん、いっしょにきてみてくれ」
雷太郎はお梅の手から手燭をうけとって、南の廊下を東へ突き当たる。座敷の八畳はまわり縁になっているから、そこを左へ折れると、北の

突き当たりが厠になって、そこに戸袋口がある。
来てみると、伝吉はそこから出ていったらしく、雨戸が半分ほどあけっ放しになっていた。庭は明るい月夜で、どこにも人かげはない。
「どうしてここの戸じまりをあけることができるんでしょうな」
大番頭はその戸をしめて、上下の桟をちゃんとかけてみながら、当惑したように小首をかしげている。
「伝吉はもう立派なぬすっとになりきっているんだろう」
「お浦さまはなんにも物音を聞かなかったんでしょうか」
「そうらしいな。おれが入っていった時は、あぶなく伝吉に手ごめにされかけていた」
雷太郎は居間のお浦に聞こえないように声をひそめていう。
「へええ、そんなことまで——。かりにも義理ある母親に当たる人なんですがねえ」
「伝吉はお局さまを先代のめかけぐらいにしか考えていないんだろう。一度ねらった女はきっとおれのものにしてみせるから、おぼえていろと、そんな未練がましいことをいって今夜は帰っていった」
「困ったことになりましたなあ」
富右衛門の顔がたちまち苦渋にゆがんでくる。
「まあ、こっちへ行ってみよう」
厠の前から裏廊下へ曲がって、内蔵の前へ出てきた。
「今夜はここへは手をふれなかったようだな」
雷太郎は錠をしらべてみてから、
「大番頭さん、伝吉は勘当される前から、時々黙ってこの蔵から勝手に金を持ち出したことがありゃしないか」
と、念のために聞いてみた。
「二、三度はあったようでございます」
「そうだろうな。おれの考えでは、伝吉はここ

の金はみんなおれのものだから、ほしい時には勝手に取りにくるといっている。つまり、伝吉はここへ忍びこむ道を前からちゃんとこしらえてあるか、それともどこかへ細工でもしてあるか、元は自分の家なんだからたぶんそんなことじゃないかと思うんだがねえ」

「恐ろしいことをおいいなさる」

大番頭はあきらかに愕然としたようだ。

雷太郎はすぐそこのふすま口から居間へ入らず、もう一度ぐるりと廊下をひとまわりして、表廊下の障子の前へもどってきた。なるべくお浦の気のしずまる時をかせいだのである。

「お局さま、えらい目にあいましたな」

そこまで出迎えたお梅に手燭とてんびん棒をわたして、居間へ入った雷太郎はあらためてお浦にあいさつをした。

「どうも、とんだことでございました」

並んで座った大番頭は、いかにも申し訳なさそうである。

「風さま、賊はやっぱり厠のそばの雨戸をあけて入ったのですか」

お浦はきつい目をあげて、詰問でもするように聞く。

「そのようです」

「どんなふうにしてあの戸じまりをあけたのでございましょう」

「今のところまだそこまでは見当がつきませんが、お局さまは無論怪しい物音などは聞かなかったわけですな」

「なにも聞こえませんでした。ですから、あたくし恐ろしいんです。これからどうすればよろしいんです」

「そうですなあ。ここは少し用心がよすぎるようだ。とりあえず、廊下の杉戸はあけておいて、お梅さんに次の間へでも寝てもらったらどうでしょう」

「そんなことぐらいであの賊がふせげますかしら。賊はまたきっとくると、はっきり申してい

ました。あたくし、いやでございます」

「用心すれば大丈夫です」

「どうして風さまはさっき賊をつかまえてくれなかったのでございましょう。そうしていただけば、いちばん安心だったのでございますのに」

「それはたしかにそうなんだが、相手が伝吉なので一度だけは見のがしてやろうと思った。無用の人情だったかもしれませんな」

今になってみると、たしかにそんな気もしてくる雷太郎である。

「おっしゃるとおりでございます。こっちはいいなりに百両わたしていますのに、その後からすぐに押しこんできてあんな無法なまねをしようとしました。風さまはそれをちゃんと見ておいでになって、あんな気ちがいのような賊を見のがしてしまったのです。あたくし、不服でございます」

お浦の目はだんだんつりあがってくるようだ。

「たしかに、今夜はわしの失敗だったかもしれません」

雷太郎はすなおにあやまっておくよりしようがない。

「きっと御自分の失敗だったとおみとめになるのでございますね」

「みとめましょう。気ちがいを野放しにしておくのはあぶない」

「では、約束をしていただきたいと存じます」

「どんな約束です」

「あの気ちがいが野放しになっている間は、あたくしの体に間違いのないように、必ずあたくしをまもっていただきます。よろしゅうございましょうね」

「承知しました」

「夜だけでなく、昼間もでございますよ」

「まさか、昼間は大丈夫でしょう」

「いいえ、気ちがいに夜も昼もございません。いつ押しかけてくるかわかりませんもの、油断

はできません」
「なるほど――」
おおげさにいえば、そこまで心配するほうが正しいかもしれない。が、夜も昼も体を縛られてしまったんではこっちがたまらないので、
「よろしい。では、そう約束するかわりに、わしのほうにも一つだけぜひあなたに守ってもらいたいことがあります」
と、わらいながら申し出てみた。
「どんなことでございましょう」
「それは、わしがお局さまの体を引きうけている間は、わしのいうことには絶対にしたがってもらう。わがままはいわないと誓ってもらいたいんです」
「なんでございますって――」
さすがにお浦もぎくりとしたようだ。うっかりそんな約束をすると、どんな無理を押しつけてくるかもしれないと、ちょいと不安になってきたのだろう。
「わしのいうことをきかないで勝手なまねをされたのでは、用心棒としての責仕は持ちきれませんからな」
雷太郎は涼しい顔をしてお浦の返事を待っている。

五日目の宵

雷太郎が倉橋屋の用心棒に住みこむことにきまってから、忠太もその手伝い役として夜の五ツ（八時）から翌朝の明け六ツまで倉橋屋の奥へ夜番に通うことになった。
日当は雷太郎とおなじく月一両だから、忠太としてはそう悪い仕事ではない。
その忠太は、毎日、馬道の松葉屋で晩飯を食ってから倉橋屋へ出かけることにしていた。伝吉はどうしても一度はお高をねらいそうだから気をつけていてやれと雷太郎にいわれているからである。
お高は雷太郎が昼夜倉橋屋へ体を縛られたと

聞いてあまりいい気持ちはしなかったようだが、現に伝吉が倉橋屋へ押しこんで、お浦を手ごめにしようとした事実がわかっているので、不服らしいことは一言もいわなかった。それに、意地っぱりのお高は、口にこそ出してはいないが、内心ひどく伝吉を恐れているようだから、今は人のことどころではないのかもしれない。
「どうなの、忠さん、お局さまはまだそんなに伝吉を怖がっているのかしら」
今夜もお高は忠太の顔を見るとそれとなくその話を持ち出していた。
「うむ、あんまり顔色にゃ出しちゃいないが、怖いには怖いようだね」
「だって、観音さまの棒がいつもそばについているんでしょ」
「それはおなじ屋根の下にいつもいるにはいるんだが、だんなは昼寝ばかりしているらしいんだ」
「どこで昼寝をしているの」
「それがおかしいんだ。これはごく内緒なんだが、お局さまは伝吉にねじ倒された自分の居間がすっかり怖くなってしまって、そっちを用心棒の詰め所にあてがい、自分はいつも表座敷を使っているんだ。もっとも、奥の二間は用心がよすぎてかえって不用心だとわかった。伝吉が押しこんでそんなにどたばたやっているのに、家の者はだれも気がつかなかったというんだからね」
「杉戸をしめて、ごていねいにかぎまでかけてあったんでは、気がついたって急の間にはあいやしません」
お高はちらっと皮肉な目つきになりながら、
「じゃ、お局さまは本当にあぶなかったんですね」
と、たちまち真顔になってくる。
「まったくあぶないところだったんだ。なにしろ相手は半気違いなんだから、いきなりうしろからお局さまののどをしめて、ずるずるとこた

つから引きずり出し、気が遠くなってぐったりなったところを、上からのしかかってきたというんだ。これは小間使いのお梅から聞いたんだが、そんなあられもないところをだんなに見られてしまった。だからまあ事なくすんだにはすんだんだが、ふだん人一倍行儀よくしているお局さまだけに、それが恥ずかしくてしようがない。それでお局さまはだんなにわざと怖い顔ばかり見せているんだというんだがね」

「あら、お局さまは雷太郎さんにそんなに冷たくしているの」

「腹じゃそれほどでもないんだろうが、見たところかなり冷淡で、憎まれ口ばかりきいているようだな」

「雷太郎さんはちっとも怒らないの」

「だんなは人間が大きいからね、相手にしていないようだ」

「そんなやせ我慢なんかすることはないじゃありませんか。こっちからたのんで用心棒にしてもらっているわけじゃなし、——お局さまはうぬぼれているんだわ」

お高はわがことのように悔しがっている。

「いや、だんなのはちょいと違うんだ」

「どう違うんです」

「だんなはあの時、なまじ伝吉に同情して、気の毒なやつだと思ったから、一度だけ見のがしてやる気になった。それを後悔しているんだね。ああいう半気違いは、野放しにしておけばおくほど、世間が迷惑をする。やっぱりあの時つかまえておくほうが本当だったとね」

お高はどきりとしたように息をのむ。

「あのとき伝吉は、おれはもう一度ここへきてお浦をきっと自分のものにしてみせてやると、そんな悪態をついて帰った。ああいう執念深い男には妙な意地があるから、本当にくるかもしれない。おまけに、倉橋屋はもと自分の家だったんだから、どこかにいつでも忍びこめるような細工がしてあるかもしれないとだんなは見て

いるんだ」

「まあ怖い。本当にそのくらいの細工をしているかもしれないわ。あの時だって、ちゃんと雨戸をあけて入ってきているんでしょ」

「そうなんだ。どんなふうにして外から桟を外したか、後であっしもいっしょに調べてみたんだがね、どうしてもわからないんだ」

「どこかに抜け穴でもこしらえてあるんじゃないかしら」

「なんともいえないねえ。——とにかく、伝吉はもう一度くるとして、その時はやっぱり奥の間のほうから押しこんでくるにちがいない。お局さまを表座敷へ移したのには、そういうわけも一つあるんだ」

「じゃ、雷太郎さんと忠さんは奥の間に寝ているわけなのね」

「本当は寝ずの番なんだから寝ちゃいけないんだ。あっしは時々こたつの中で居眠りをするぐらいのもので、寝ろといったってなかなか寝られるもんじゃない。それを、だんなはごろりと横になって、大きないびきをかき出すことがあるんだ。これだけはお局さまが怒り出すのも無理はないと思うね」

「ふ、ふ、よくお払い箱にならないわね」

「なあに、そのためにあっしはだんなのそばにつけられているようなものなんだから、腹ん中じゃまあしようがないと思っているんだろう」

「どうなの、忠さん、伝吉はどうしてももう一度お局さまをねらうかしら」

「なんともいえねえなあ。というより、江戸にいりゃきっとやってきそうな気がする。あっしだけじゃねえ、それだけはお局さまもそういう気がしているらしく、だから内心は怖くてしようがないんだ」

「伝吉はまだ江戸にいるのかしら」

「いるような気がするな」

「いれば、本所の大河原の屋敷なんでしょ」

「そいつはわからない。二十五両という大金を

持っているんだから、江戸にはもぐりこんで遊んでいられるところがどこにだってあるからなあ」

「そういえばそうねえ」

お高はひどく浮かない顔になっていた。

「まあそう心配しなさんな。そのうちには雷太郎だんながきっと半気違いをつかまえてくれる」

忠太はそんな気やすめをいって松葉屋を出た。もうそろそろ花川戸の倉橋屋へ出かける時刻になってきたからだ。

——ああ伝吉のことを気にしているようじゃ、やっぱりなにかあるんだな。

雷太郎は、駒形のみやこ屋のおまきが伝吉に殺された時、そこの店を手伝っていたお高は十六だったと、なぞのようなことをいっていた。そんななぞを無理に解きたくはないが、このごろのお高のさえない顔色を見ていると、お高はそのころなにかのことで伝吉にいたずらをされているのだと考えずにはいられなくなってくる。

一度男にひどいめにあったから男ぎらいになったという世間のうわさも、それならなるほどとうなずける。

——かわいそうになあ。

そう思うにつけても、忠太は伝吉が憎くなってくるのだ。いや、半分はたしかに怖くもある。吾妻橋で見た時の伝吉の顔は、昔ながらの女のように華奢な目鼻立ちにそう変わりはないが、それがすっかりすさみきって、ぞっとするような凶悪な妖気をただよわせていた。

あんなやつにねらわれたお浦も、妙な因果をしょいこんでしまったものだ。

「おめえ、思ったよりいい体をしているなあ」

伝吉は平気でそんなことを口走っていたと聞いたが、たしかに色後家の白々とした肌は男を悩殺するだけの妖艶さを持っているのだ。それを一度わが物にしかけている伝吉にすれば、命がけでもおもいをとげなければ承知できない執念に駆られているだろうことは火を見るより明らかだ。

——色後家のほうに大きな未練があるから、今のところはお高のほうを忘れているのかもしれない。

いずれにしても、あの晩から今日で五日ほどになるのだ。執念の鬼になっている伝吉が、一度ねらった女をそういつまでもほっておくはずはない。

ひょっとすると、今夜あたりなにかたくらんでいるんじゃないか。忠太はふっとそんな気がして、急に身ぶるいが出てきた。

今夜の月の出は九ツ（十二時）すぎになるだろうから、押しこんでくるとすれば九ツ前があぶない。

そんなことを考えながら、忠太が暗い寺町横町の中ほどへかかってきた時、

「おい、待っていたぜ」

ふいにそこの寺の門の下からぬすっとかむりの男が足音を立てずに出てきて前へ立った。

——あっ、伝吉。

一目でそれとわかった忠太は、ぞっと背筋へ悪寒が走るおもいだったが、もうしようがねえととっさに度胸をきめて、

「どなたさんでしたっけね」

と、わざとそらっとぼけて聞いた。

「勘の悪い野郎だな。まあいいや、いっしょに歩け」

伝吉はぴたりとこっちの右がわへ体をつけて、ゆっくり花川戸通りのほうへ歩き出す。

どこへつれていく気だろう。倉橋屋かなと忠太は考えながら、黙ってついていってみることにする。

「忠公、あのお浦って女な、もう用心棒とできているのか」

案の定、伝吉はお浦をねらう気のようだ。

「ああ、あんたは若だんなだね」

「やっと気がついたのか」
「どうもすんません。あっしは昔から勘のいいほうじゃないんでね」
「手癖だってあんまりいいほうじゃねえ」
「御冗談で——。あっしはまだ人の物に手をかけたことだけはありやせん」
「うそをつけ。おめえは松葉屋のお高をねらっているっていうじゃねえか。あれはおれの女だと知らないはずはねえだろう」
ずばりと切り出してくる伝吉だ。
「はあてね、そいつは初耳だなあ。もっとも、あっしはあの時分、江戸を売っていやしたからね」
「帰ってきてから、お高から聞いているはずだぞ」
「それが、ふしぎとなんにも聞いちゃいないんでさ。お高は口のかたい女ですからね」
「そうか。まあそんなことはどっちでもいいや。それより、お浦はあの用心棒とどうなんだ。正直にいってみろよ」
「その前に、お高は本当に若だんなの女なんかね。あっしにとっちゃそのほうが大切なんだ」
忠太は我ながらだんだん腹がすわってくる。
「ふん、おめえそんなにお高にのぼせているのか。かわいそうなやつだなあ」
「なんですって——」
「お高はおれと夫婦約束のある女だ。あきらめたほうが利口だぜ」
伝吉は鼻の先でわらっている。

執念の男

——この野郎はやっぱりお高を手ごめにしていやがったんだ。
それが伝吉の口からはっきりわかってくると、忠太はかっと激しい怒りに駆られてきた。そして、どうしてくれようかと、思わず両手のこぶしをかたく握りしめながら、おれはこんどこそ死んだってこの野郎からお高をまもってみせてやると、全身に男の闘志がみなぎってくる。

「ふん、怒ったな、忠公」
それをふれている肩で感じたらしく、伝吉がこばかにしたように挑戦してきた。
「別に怒ってなんかいやせんよ。あっしはこれでも男ですからね」
「なるほど、おめえはたしかに男だ、女のしりの番をするな」
伝吉はせせらわらいながら、
「おめえは毎晩、倉橋屋へ夜番に行ってるんだろう」
と、そんなことまでちゃんと知っているようだ。
「おまえさんはなんでも知っているようだなあ」
「あたりめえよ。おれの目は見とおしだ」
「じゃ、おまえさんはもうお浦さまの寝部屋をのぞいているわけだね」
忠太はすかさず逆手をとっていく。
「それがどうしたってんだ」
「なあにね、女のしりの番は外で見張ってるよりいっしょに寝てるほうがいちばん安全だからね。そいつはおれの役じゃないんだ」
「ふうむ。すると、お浦はもうあの用心棒といっしょに寝てるっていうのか」
伝吉は案の定むきになってきたようだ。
ざまあ見やがれと、忠太はちょいといい気持ちになって、わざと黙っている。
道は寺町横町から花川戸通りへ出て、そこの右手の筋向かいに倉橋屋のある横町の角が見えてきた。
「忠公、おめえは毎晩、奥のどこに詰めているんだ」
「おれは玄関の間だ」
「用心棒は——」
「お浦さまの部屋ですよ」
「お浦は——」
「いっしょにしりの番をしてもらっていまさ」
「うそじゃねえだろうな」

伝吉はそう念を押しながら、ゆっくりと表通りを突っ切って、倉橋屋の横町のほうへ足を向けていく。

忠太は妙にどきりとしながら、

「そういやあ、おまえさんはこの間の晩お浦さまのしりをねらったって話だね」

と、軽く話をかわそうとした。

「はっきりいっておくがな、お浦のしりはもうおれのものなんだ」

「本当かね、若だんな」

「おれがうそをつくかよ。あの女の肌はちょいとすごかった。あれはもち肌といってな、男を気ちがいにする肌ざわりを持ってやがった。お高の肌も悪くなかったが、あの時分はまだ十六だったからな」

「本当にできねえなあ」

「なにが本当にできねえんだ、忠公」

「おまえさん、この間は、目のつぶれるところまでは拝んじゃいないって話だったぜ」

「そいつはお浦の口からは恥ずかしくってそこまではいえねえんだろう。お高がおめえにおれとのことをかくしているのとおんなじことよ。男が女の体に組みついていけば、その手がまずどこをねらうか、わかりきっているじゃねえか」

伝吉はせせらわらっている。

「なあんだ、たったそれだけのことか」

「うむ、それだけのことだ。そこでな、もう一度聞くが、お浦はたしかにあの部屋で用心棒といっしょに寝ているんだな」

「そうらしいね」

「あの廊下の杉戸はどうなっているんだ」

「このごろは開けっ放しになっているんだ。しめきっておくのはかえって不用心だっていうんでね」

「そうか」

伝吉は倉橋屋の横町へ入って、平気でそっちへ歩いていく。

「おまえさん、どこへ行くつもりなんだね」

忠太はたまらなくなって聞いてみた。

「家へ帰るのさ」

「家っていうと――」

「忠公、おめえ忘れたのか。おれの家ってのは昔から倉橋屋よりほかにねえはずだぜ」

忠太はどきりとしながら、これだけはうっかり返事ができない。今は違うといってみたところで、半気違いの伝吉には通じないだろうからだ。

「おめえ、なにか不服そうだな」

「そんなこともないが、家へ帰ってどうしようっていうんだね」

「おれはな、いまおめえのいったことが本当かどうか、お浦に会って聞いておきてえんだ」

「なんですって――」

「用心棒は家にいるんだろう」

「そりゃいやすよ。お浦さまが少しもそばを放さないんでね」

「そいつもお浦に会って聞けばわかることだ。いいか、忠公、おれは裏木戸のところで待っているからな、おめえはだれにもわからないようにお浦を裏木戸まで呼び出してくるんだ」

あっと忠太は思わず息をのむ。

「おい、返事をしろよ」

「もしいやだといったらどうするね」

「おめえの命をもらうだけさ」

伝吉は平気でそういえるだけの腕力をちゃんと持っているのだ。

「お浦さまのそばにはいつも用心棒がついている。だいいち、お浦さまがそんなことを承知しねえだろうから、だれにも知れないようにつれ出すってのはちょいと無理かもしれねえな」

「そこがおめえの知恵の働きじゃねえか。おめえはお浦に信用があるって話だ。なんとかうまく吹きこんでみろ」

「そいつは難しいなあ」

「まあやってみろ。やってみなくちゃわからねえ」

伝吉は強引に押しつけてきながら、
「おめえがおれを裏切ったとわかると、おれは松葉屋へ火をかけてお高をつれ出すぜ。そのかわり、おめえが今夜うまくやってくれりゃ、お高とおめえの仲は大目に見てやってもいいんだ」
と、そんなすごいことをいい出すのだ。
「おまえさん、そんなにお浦さまに執念があるんかね」
「だから、さっきもいったろう、お浦の肌は男を気ちがいにするんだとね。おれはどうしてもお浦をおれのものにしなくちゃ虫がおさまらねえ。それがだめなら、殺してしまうだけの話だ」
道はいつか倉橋屋の横を通りぬけて、通用口の木戸の前から門の前へ出ている。そこを通りぬけた黒板塀のいちばん外れに裏木戸がついているのだ。
そこから家数にして二軒ばかり行くと、川っぷちの往来へぬけられるようになっている。あいにく横町は夜になるとめったに人通りがない。
「どうした、忠公、まだ腹がきまらねえか」
伝吉はその裏木戸の前へ立って忠太をうながす。忠太はどう返事していいのか、さすがにちょいと決断がつかない。
「よし、待っていろよ」
裏木戸のわきの塀の上からもう芽を吹きはじめた柳の木が枝を垂れている。伝吉はそのあたりをじっと見あげながら、さっと塀に飛びついたと見る間に、もうするりと身軽に向こう塀を乗りこえていた。
——畜生、やりやがったな。
そのくらいの芸当は忠太にだってやれるから、塀を乗りこしたことには別に驚きもしないが、庭にどんな見張りが出ていないとはかぎらない。それをまったく無視しているようなくそ度胸が怖いのだ。
忠太がなんとなくわきの下に冷や汗を感じて

いるうちに、中から木戸が音もなくあいて、
「おい、おれはこの中で待っているからな、お浦をうまく呼び出してきてくれ。いいだろうな」
と、伝吉はぬすっとかむりの顔だけ出していうと、こんどは返事も待たずに、すっとその木戸をしめてしまうのだ。
——こうなったら、もうしようがねえ。
忠太はそこから門のほうへぼんやり歩き出す。
とてもお浦をだましてつれ出す気にはなれないし、また忠太の口車にのるようなお浦ではないのだ。とすると、いきおい伝吉を裏切らなければならないことになる。
——おれのことはかまわねえが、お高にたたりがいっちゃかわいそうだからな。
それがなにより怖い。
門のくぐりはこのごろしまりをしたままになっていて、忠太は台所の通用口からいつも入ることになっている。
——そうだ、おれは用心棒だんなにさえすがっていればいいんだ。
忠太の腹はやっときまった。知恵も腕もある雷太郎に相談して、その雷太郎の力でどうにもならないことは、もうあきらめるよりしようがないと考えたのである。
「やあ、今晩は、お梅さん」
台所口から入っていくと、ちょうど小間使いのお梅が炭を取りに出てきたところだった。
「御苦労さまでございます」
お梅はいつも行儀がいい。
「お浦さまはお座敷ですか」
「はい」
「だんなはいつもの部屋でしょうね」
「そうのようでございます」
「お梅さんは早くお座敷へ帰っていておくんなさい」
「なぜでございますの。どうかしたのでございますか」

お梅はすぐこっちの顔色に気がついたようだ。

「わけは後で話しやす。とにかく、お浦さまを一人でおいちゃいけねえんだ」

忠太はそういっておいて、いそいで台所から中廊下へ出た。右へ行けば店だし、左へ行けば奥の杉戸に突きあたる。もっとも、このごろ杉戸はいつも開けっ放しになっていた。

そこを奥へ入りながら、右の廊下のほうを見ると、お浦が居間に使っている十畳の間の障子にあかるく灯がうつって、まだ別に変わったこともないようだった。

が、とにかく伝吉はすでにここの庭へ入りこんでいるのだから、いつどこから家の中へ忍びこんでくるかわからないのだ。

忠太は気が気ではない。

「だんな、いやすか」

六畳のほうの障子をあけてみると、いつもお浦がひざを入れていたこたつのところに雷太郎が座っていて、

「どうした、忠公」

と、わらいながら聞いた。

「大変だ、だんな伝吉が忍びこんでいるんでさ」

こたつへしがみつくようにして小声でいうと、

「なに、伝吉がか」

雷太郎はまだ本当にできないような顔つきである。

用心棒はつらい

「伝吉はあっしに、お浦さまを呼び出してこいといって、裏木戸の柳の木の下に待っているんでさ。すごいのなんのって、——どうしたもんでしょうね。だんな」

忠太は目ばかり光らせながら、かなり度を失っているようである。

「まあ落ち着いて話してみろ。おまえは伝吉とどこで出会ったんだ」

こたつの雷太郎はわざとゆっくりかまえて、わらいながら聞いた。

「だんな、だんな、そう落ち着いていちゃいけねえや。伝吉はもうそこの裏庭まできて待っているんですぜ。本当にしねえのかなあ」

「いや、本当にはしている。しかし、待っているやつは勝手に待たせておけばいいんだ。おまえが一人でそうあわてることはないだろう」

「けど、もしここへ暴れこんできたらどうしやす。相手が相手ですからね」

「心配するな。そのために観音さまの棒がここに控えているんだ」

「そういやあまあそうなんですがね」

忠太はぽかんとこっちの顔を見なおしながら、それでもいくらか気がしずまってきたようだ。

「忠公、おまえよっぽど伝吉におどかされてきたようだな」

「おどかされやしたとも。なにしろ、寺町横町までくると、いきなり伝吉が出てきやがって、お高はおれの女だっていうんでさ」

「ふうむ。じゃ、伝吉はおまえが松葉屋から出てくるのを待ち伏せしていたわけか」

「そうらしいんです。あの野郎はやっぱり前にお高を手ごめにしてやがるんだ。かわいそうに、だからお高は野郎が怖いんでさ。畜生、あっしはもう度胸をきめちまったんだ、だんな」

忠太は急に悔しくなってきたようである。

「よかろう、気違いなど怖がることはない。それで、伝吉はお高をどうしようっていうんだね」

「そいつがおかしいんだ。野郎はいまのところ、お高のことよりだんなのほうが気になるようでね、つまり、しりの用心棒はもうお浦さまと寝ているのかって聞きやがる。だから、あっしはわざと、しりの用心棒はいっしょに寝ているほうがいちばん安全なんだっていってやりやすとね、やっぱりあの部屋かって聞きやがる。それがとても悔しそうなんで、おめえさんそんなに

お浦さまに夢中なのかってからかってやると、あの女の肌は男を気ちがいにする肌だ、おれはあの時この手でなでまわしてちゃんと知っているんだっていいやしたぜ」

忠太はくすぐったそうにちらっとわらってみせてから、

「それから後がいけねえんでさ。あっしをここの裏木戸の前まで引っぱってきやがって、おい、だれにも知れねえようにお浦をここへつれてこい、おれのいうことを聞かねえとお高をそのままにゃしておかねえぞとすごみやがってね、自分で塀を乗り越え、さっさと裏木戸をあけて顔を出して、早く行かねえかってあっしをにらみつけやがったんです」

と、さすがにぞっとしたような顔つきであたりを見まわしている。

「しかし、伝吉は用心棒がここにいることを知っているんだろう」

雷太郎は念のために聞いてみた。

「そりゃ知っていやす。用心棒はこのごろ昼も倉橋屋へ詰めて、お浦のしりの番をしているんだってなって、自分のほうから聞いたくらいなんですからね」

「そうか。——じゃ、たぶん伝吉はもうどこかへ消えているだろうが、とにかく一応見まわってやろう」

雷太郎は立ちあがって、いつもそこに用意しておく木剣を取りあげた。

「あっしもいっしょに行きやしょうか、だんな」

「いや、おまえはそこの戸袋口のところで待っていてくれ」

「だんなはどこから出るんです」

「わしは台所口から横町へ出て、裏木戸へまわってみよう」

「大丈夫でしょうかねえ」

「なにが——」

「だんなの出ていった後へ野郎に押しこまれると、あっし一人じゃとてもかないやせんからね」

忠太はひどく心配そうだ。

「しっかりしろ、忠公。わしは裏木戸からすぐここへまわってくるんだ。そうびくびくしているようじゃ、お高はまもりきれないぞ」

「あっ、そうだった。すんません」

この一言は相当きいたようである。

雷太郎は台所の通用口から一度暗い横町へ出た。どこにも人影はないようだ。

——困ったことになりそうだな。

雷太郎は塀にそってゆっくり裏木戸のほうへ歩きながら、思わずまゆをひそめていた。

今夜の伝吉は、なにかたくらむことがあって、その後の倉橋屋の様子を自分で瀬ぶみにきたに違いない。

いくら伝吉が狂人に近い無法者でも、まだ宵をすぎたばかりで、ちゃんと用心棒がそばについているのに、お浦をそっと忠太に呼び出させるなどということは到底できない相談だぐらいのことがわからぬはずはない。

要するに、忠太は今夜、伝吉にうまく道具に使われたことになるのだろう。

では、伝吉が今夜こんな芝居をやったのは、どんな目的があってのことなのか。

まず考えられることは、自分のこしらえておいた忍びこみ口の仕掛けが無事かどうか、それを調べにきた。ついでに、お浦の寝ている部屋と夜番の配置をたしかめておく必要があったのだろう。

ということは、伝吉は他日をねらっているということになりそうだ。伝吉は金もほしいだろうが、むしろ今はお浦の体をねらっている。それがあるから、お高には手を出さずにいるのだ。

——相手はどんな常識外れでも平気でやりかねない気違いなんだから始末に困る。

裏木戸口まできて、木戸に手をかけてみると、案の定すっとあいた。

中へ入ってみたが、ここにも人影はない。柳の枝が黒々と夜風にゆれていた。

雷太郎は木戸のしまりをして庭のほうへ進む。町中の商家だから、そう広い庭ではなく、庭木も梅の古木を中心にして数本入っているだけだから、人のかくれていられる場所はないといっていい。

雷太郎はこのあいだ伝吉が押しこんだ厠のそばの戸袋口から軒下づたいに一応お浦のいる座敷の雨戸の外までまわってみた。

特にお浦の座敷の前では、雨戸に耳をあてて中の気配をうかがってみたが、ひっそりとしていて別に変わったこともないようだ。

——おれが伝吉だったらどうするだろう。

ふっと雷太郎はそれを考えてみた。

この雨戸が音もなくあけられるとする。

十畳の間に一人で寝ているお浦は、寝入りばなで気がつかない。お梅は次の間のほうに寝ている。自分たちの詰めている部屋は、廊下の杉戸こそこのごろは開けっ放しになっているが、ここからはやや遠い。伝吉はいきなりこの間の時のようにお浦ののどをしめて失神させ、お浦がはっと気のついた時にはもうどうしようもない体勢に組み敷かれている。

——いや、息を吹きかえしてくれればまだいいが、伝吉はそのままお浦を絞め殺すかもしれないやつなのだ。

そうなってから伝吉を取りおさえたところで、後の祭りということになる。

雷太郎はなにか背筋に寒いものを感じながら、足音を忍ばせて、忠太が中で待っているはずの戸袋口の雨戸の外まで引きかえしてきた。

ここの雨戸になにか仕掛けがあるような気がするのだが、いまだにそれは発見できないでいる。

——そうか、伝吉はまだお浦はこっちに寝ていると思っているだろうし、ねらえばやっぱりここの雨戸だな。

それならお浦がいきなり絞め殺されるという心配はないはずだと、なにかほっとした気持ちで、

「忠公——」

と小声で呼びながら、軽く雨戸をたたいた。

「あっ、だんなですね」

すぐに中から雨戸があいて、忠太が顔を出しながら、

「どうでした、伝吉はやっぱりいやせんでしたか」

と、自分でも暗い庭中を見まわしていた。

「うむ、だれもいなかった」

雷太郎は廊下へあがって、ぬいだ草履を取りあげ、裏あわせにしてそこへおく。

「おかしいなあ。じゃ、伝吉はあっしがだんなにみんなしゃべったと感づいて、逃げ出したんでしょうかねえ」

忠太は手早く雨戸をしめきりながら、なんとなく落ち着かない様子だ。

「いや、そうじゃあるまい。今夜ははじめから逃げる考えで、ただここの様子をさぐりにきたんだろう」

「そうでしょうかねえ。お高のほうは大丈夫でしょうか」

忠太はそれが心配でたまらないのだろう。

「お高にはおやじの松吉がついている。松吉はもと岡っ引きの親分なんだろう」

「それはそうなんですがね、なにしろ相手が相手ですからねえ」

「そんなに心配になるんなら、おまえ松葉屋へ行って見てきてやってもいいよ」

雷太郎はわらいながらそういってから、

「しかし、また途中で伝吉につかまって、こんどはお高を呼び出せといいつけられるかもしれないな」

と、ちょいと真顔になる。そんなことをやりかねない伝吉なのだ。

「おどかしちゃいけやせんや」

忠太もはっとそこへ気がついたようだ。

「風さま、お浦さまがお呼びでございます」

廊下を居間のほうへ引きかえしてくると、杉戸のところに立っていたお梅が切り口上でいった。
「あっ、いけねえ。さっきからお浦さまがお待ちかねなんだ。だんな、早く行ってあげておくんなさい」
忠太が急にあわて出す。
「おまえはどうする。松葉屋へ行って見てくるか」
「さあ、どうしたもんでしょうね。だんなはどっちがいいと思いやす」
「そうだなあ」
雷太郎もすぐには返事ができない。
「お梅、――お梅」
座敷のほうから甲高いお浦の声が呼んだ。こんなとがった声を出すのは珍しい。よっぽど気が立っているのだろう。
「風さま、困ります」
お梅がすがるような目をしていう。
「よし、忠公しばらく待っていろ。あちらさまのほうから先にすませてこよう」
雷太郎は木剣を忠太にわたしておいて、そっちの廊下へ出た。
「失礼します」
外から声をかけて障子をあけて中へ入ると、置きごたつにひざを入れて座っているお浦の目はいつもよりつりあがって、黙ってこっちをにらみつけていた。

恐怖の波紋

「お局さま、用心棒まかり出ました」
雷太郎はわざとそんなとぼけたようなあいさつを口にする。気のたかぶっている女にまともにぶつかっていってもしようがないからだ。
「風さま、いま家になにかあったようでございますね。どうして忠太は顔色など変えているのでございます」
そういうお浦こそすっかり顔色を変えて、じれきっているようだ。
「別に大したことじゃありません。気にしなくてもいいのです」
「そうはまいりません。倉橋屋で起こったことは、何事によらずいちばん先にあたくしの耳に入れていただかなくては困ります」
「いや、用心棒の責任ですむことはまかせておいたほうが、余計な苦労をしないですむと思うんですがねえ」
「そんなことはいけません。あたくしはきらいです。忠太が顔色を変えているのは、なにかあの男のこと、伝吉のことではないのですか」
女の敏感さで、お浦はもうそれをぴんと感づいているようだ。というより、お浦はこのごろ絶えず伝吉の恐怖からのがれきれないでいるのだろう。
「そう図星をさされたんではしようがありませんな。実は、忠太はさっき寺町横町で伝吉につかまって、ここの裏木戸まで引っぱってこられたんだそうです」
「まあ、裏木戸へですか」
お浦は毛虫にでもたかれたように、たちまち身ぶるいをして見せながら、
「どうして伝吉はそんなまねをしたんです」
と、こっちを責めるように聞く。
「つまり、あなたをそっと裏口まで呼び出してこい。いやだというんなら殺してしまうと、忠公を脅迫したんだそうです」
「なんでございますって」
「伝吉は狂人ですからな、しようがない」
「あたくしを裏口へ呼び出して、どうしようというつもりなのです」
「さあ、どこかへつれて逃げる気があったかもしれない。お局さまの体は男を気ちがいにすると自分でいっていたそうですからな」
「失礼な」
お浦はこの間の晩のあられもない姿を思い出したらしく、さすがに目を伏せながら、

「あたくしはそんなみだらな女に見えるのでしょうか」

と、怒ったようにいう。

「いや、お局さまはいつも行儀がいい。正直にいうと、あまり行儀がよすぎるんで、男というやつはかえってあさましい煩悩を起こしてみたくなるんですな。気にしないほうがよろしい」

「それで、伝吉はどうしたのです」

「塀を乗りこえて裏木戸うちへ入ったというんで、わしはいま台所口から表へ出て裏木戸へまわってみました。なるほど、木戸のしまりはあいていたが、伝吉はもうどこにもいませんでした」

「伝吉は庭の中へ入ったのですね」

お浦は思わずあたりを見まわしている。

「大丈夫です。わしはここの雨戸の前まできて念入りに調べているんだから、もう逃げてしまったことはたしかです」

「でも、また引きかえしてきているかもしれないでしょう。怖い、あたくし」

とうとう強がりきれなくなってきたようだ。

「わしはそのための用心棒なんだから、まあまかせておくがよろしい」

「あたくし恨みます。あのとき伝吉をつかまえておいていただきさえすれば、こんなに心配しなくてもすんだのですもの」

「あれだけはわしの失敗だったようですな」

「あれは魔物のような男ですから、いつどこからここへ忍びこんでくるかわかりません。あたくし、どうすればいいかしら」

「それは少し取越苦労をしすぎるようですな。そこまで心配したんじゃ体がたまらない。どうです、夜よく眠れますか」

「眠れませんの。眠っても怖い夢ばかり見るのです」

そういえば、たしかにどこか顔色がさえないようだ。

「困りましたなあ。いくら伝吉が魔物でも、まさか風のように戸の透き間から出入りできるわけはないんだから、もう少し気を楽に持てませんか」

「風さまは時々いびきをかいておいでのようですね。うらやましいと思います」

愚痴をこぼしながらも、そんな皮肉は忘れない女である。

「わしは自分のいびきで目がさめるほうだから、用心棒向きにできている男なんですな」

「では、いびきが聞こえてきたら安心していてよろしいのでございますね」

「そうです。わしがいびきをかいている間は、伝吉は近くにいないと思ってよろしい。これだけは断言できます」

「本当でしょうか」

お浦はあきれたようにこっちの顔を見ている。

「本当です。伝吉はわしという用心棒が怖い。だから、今夜も用心棒はどこに寝ているんだと何度も忠太に聞いていたそうです。忠太はいいかげんにごまかしておいたそうだが、用心棒はいつもお局さまのそばで寝ずの番をしているんだと吹きこんでおいたそうです」

「まあ、そんなことをですか」

「怒っちゃいけません、忠公には忠公なりの考えがあったんだから」

「どんな考えでございます」

「伝吉が雨戸の外まで忍びこんだとする。中へ耳を澄ましてみて、わしのいびきが聞こえると、今夜はだめだとあきらめて帰っていく。わしのいびきにはそれだけの功徳があるんです」

雷太郎はうまく話をかわしてしまう。

「風さま、それでは今夜から夜詰めの場所をこの隣へ移していただきます」

お浦は真顔でそんなことをいい出す。ここの隣の八畳の間には、ふすま一重でこのごろお梅が寝ているのだ。

「さあ、わしも一応そう考えてはみたんだが、ふ

すま一重ではわしのいびきは少し大きすぎる。かえってあなたが眠れなくなっても困るし、わしはもし伝吉がこんど押し込むとすればやっぱりこの間の戸袋口からだと見ているんです。だから、夜詰めの場所は今までどおりがいいでしょう」

「そうでしょうか」

お浦はちょいと不服そうな顔つきだ。

なるべく男をそばに近づけたがらない主義のお浦にしては珍しいことだと思わず顔を見ていると、

「そんなにあたくしを迷惑がらなくたって――」

と、うっかり口に出たらしく、ほんのりとほおへ血の気がさしてくる。そして、それを取りつくろうように、

「あたくしは伝吉が怖いのです。伝吉から身をまもるには、本当はおなじ座敷へ詰めていただいていたほうがいちばん安心していられると考えました。あたくし、二度とあの男にあんな目にあわされるのは死ぬよりいやなのです」

と、またしても気がたかぶってきたようだ。

「いや、それだけはわしが命にかけて引きうけます。あなたも御殿勤めをしたお局さまなんだから、正直にいいましょう。伝吉が今夜忠太を待ち伏せしてわざわざここの庭へ忍びこんだのは、今夜すぐあなたをどうしようというんじゃない。そんなことができるかできないかぐらいは、伝吉にだってわかっている。伝吉は今夜、その後のここの様子をさぐりに来たんだ。本当に仕事をするのはこの次だろうとわしは見ている。だから、取越苦労はする必要はないが、覚悟だけはしっかりきめておかなくてはいけません」

雷太郎は、なまじそれをかくしておくより、はっきりいっておいたほうが、お浦はお浦なりに腹がきまるだろうと考えたのだ。

「この次の仕事って、伝吉はなにをするつもりなのでしょう」

「はっきりいえば、伝吉のは金ではない、あなたの体をねらっているんだと思う」

「あたくしはそれが怖いのです。あの男はへびのような目をしていました。風さま、やっぱりあたくし、今夜からここで夜詰めをしていただきます」

「困ったなあ」

「なぜでございます」

「では、忠公と二人で詰めることにしましょうかな」

「いけません。あたくしはほかの男に寝姿など見られるのはいやでございます」

どうやらお浦はかなり常軌を逸してきているようだ。要するに、雷太郎ならもう一度あられもないところを見られているのだからかまわないという腹もあるのだろう。

「それではこうしましょう。わしは今夜から一刻ごとにこの廊下まできて声をかけてあげます。それでも心配でたまらなくなったら、いつでも手をたたきなさい。すぐにきてあげます」

こいつは大変な仕事だぞとは思ったが、おびえきっているお浦を安心させるにはそれよりしようがないと思った。

「きっとそれを約束していただけますか」

「わしはうそはいわない男です」

「それなら、そうきめていただきます」

お浦があまりにも当然だというような顔をしているので、

「お局さまは美人すぎるから怖い。わしだってこれでも煩悩を持っている生身の男ですからな」

と、ついからかってみたくなる。

「いいえ、風さまはとても行儀のいい、男らしい男だと、あたくしは信用していますの」

そんな人をおだてるようなことも平気でいえるお浦なのだ。年の功なのだろう。

「とにかく、できるだけ御期待にそうことにし

ます」
雷太郎は内心苦笑しながら詰め所に引きさがってきた。
「だんな、だいぶしかられやしたか」
ぼつねんと一人でこたつにあたっていた忠太が、顔を見るなり小声で聞いた。なにか浮かない顔をしている。
「どうした、松葉屋へは行かなかったのか」
「それがね、気にやなるんですが、だんなのいうとおり、また途中で伝吉につかまると、こんどはお高を呼び出せってくるかもしれねえ。元の若だんなだけに、あっしはどうもあいつが苦手なんだ」
忠太は正直にいってしょんぼりとしている。お高のことが心配でたまらないのだろう。
「それは、今夜は自重したほうがいいんだ。むしろ、そっとしておいたほうが今夜は安全なんだ」
「そうでござんしょうかねえ」
「おれがいっしょに行ってやれるといいんだが、そいつがわかると、その留守にこんどはお局さまがねらわれる。伝吉というやつは好んでそういうすごいことをやりたがる魔物なんだから油断はできない」
雷太郎は忠太をなだめるようにそういいながら、いまさらのように内心ぞっとしてくる。相手が気違いだけに、常識では考えきれないものがある。
——お浦が怖がるのも無理はないな。
とにかく、変なまわりあわせにぶつかってしまったものだと、さすがに気が重い。

春のあばれっ風

雷太郎はその夜から約束どおり、四ツ(十時)と九ツ(十二時)の二度廊下の前まできて、
「お局さま、用心棒見まわりに参上」
と、声をかけてくれた。
お浦はそのはじめの時、御苦労さまとうっかり口まで出かかったが、思いなおしてわざと返事はしないことにした。いちいち返事をするとなると、起きている時と眠っている時がはっきりわかってしまう。男にそんなわがままなことをたのんでおいて、こっちは気楽に眠りこけていると思われるのは、さすがに気がとがめるからである。
しかし、雷太郎がちゃんと約束をまもってくれるとわかってから、お浦はなんとなく安心して、このごろはぐっすりとよく眠れるようになっている。
どうしてだろうと、お浦は時々我ながらふしぎな気がする。いや、正直にいえば、そういう自分の気持ちをお浦はもう自分ではっきり知っていた。
伝吉というへびのような男が怖いのは今もおなじだが、それよりお浦は自分のわがままをなんでも聞いてくれる雷太郎とこうしておなじ屋根の下にいられることが安心でうれしかった。雷太郎から身をまもろうなどという気持ちはいつの間にか消えてしまって、今はむしろ、いつ雷太郎が生身の男の煩悩をおこしてくれるかしらと、内心それを待っているのだ。ただそうなると年が年だし、後家だというひけめさえ出てきて、こっちから裸になって男の胸の中へ飛びこんでいけないだけなのである。
だから、このごろはまくらにつくと、そんな男のことばかりあれこれとおもいつづけながら、いつか甘い眠りに誘われていくのが毎晩の癖のようになってしまっているのだ。
二月も末になって、その夜は春によくありがちな強い風が夜っぴて江戸中を吹きまくっていた。
——こんな晩は火事が怖い。
お浦は店のほうへも台所のほうへも火の始末をきびしくいいつけてまくらにつき、それでも一度はうつらうつらとしたようだが、雨戸をたたきつけてくる風の音に目をさまされると、もうどうしても目がさえてしまって寝つかれなか

った。

もし火事で家でも焼かれてしまうと、女一人の手ではとても倉橋屋の再建はおぼつかないだろう。そうなったら、自分はだれをたよりに生きていけばいいのかしらと、床の上へ起きなおって、ぼんやりそんな心細いことを考えていると、

「お局さま、用心棒見まわりに参上」

と、障子の外へきてふいに雷太郎が声をかけてくれた。風の音にまぎれて、まったく足音さえ気がつかなかったので、お浦は妙にどきりとしながら、

「ああ、風さま――」

と、思わずそっちへ呼んでいた。

「目がさめていられたか。ひどい風でござるな」

男はすぐに返事をしてくれたが、慎み深くまだ障子をあけようとはしない。

「お願いがございますの。どうぞお入りになって」

そうはっきり口にしてから、自分のしどけない寝まき姿に気がつき、こんなかっこうで不謹慎かしらと、さすがに少し気がとがめはした。

「失礼いたす」

もう一度声をかけてから、ゆっくり障子をあけた男はいつものとおりちゃんと木剣を手にしている。

「こんなかっこうですみませんけれど」

「いや、かまわんです」

男はさりげなくいって中へ入り端近に座ったが、うしろの障子は遠慮してしめようとしない。

まくらびょうぶの外に有り明け行燈がついているだけだから、座敷の中は薄暗かった。

「寒い、あたくし」

お浦はわざと肩をすぼめてみせながら、急にあやしく胸がときめいてきた。

「閉めますかな」

男は打てばひびくように手をのばして障子をしめてくれる。その男らしく落ち着いた物腰がたのもしくてたまらない。

「火事は大丈夫でございましょうか。あたくし、それが心配で」

「まあ大丈夫でしょう。こういう時はだれしも火の元に気をつけるものです」

「そうでしょうか。怖い怖いと思っていると、目がさえてしまって、風の音ばかり気になりますの」

「そうでしょうな。この風はいささかひどすぎるようだ」

「まだ九ツごろなんですか」

「九ツはもう少しまわっているでしょう」

男はまっすぐこっちの目を見ながら用事を待っているようだ。

早くなにか用事をこしらえないと立っていってしまいそうだ。

「あたくし、いつも黙っているでしょう」

「なにをです」

「本当はお見まわり御苦労さまといえばいいのですけれど、このごろは安心して眠ってしまうものですから」

「そのことならそれでいいんです。わしはそのための用心棒なんですからな」

また話が切れそうになる。

暴れっ風がごうっと雨戸をたたきつけてきた。

「あの男のこと、その後はなんにもわかりませんか」

「わかりません。あれっきり忠太も会わないそうです」

「でも、油断はできないのでしょう」

「それはできません。実をいうと、わしは今夜は火事より伝吉のほうが気になるくらいなんだ」

「怖い、そんな――」

お浦はぞっとして薄暗い座敷の中を見まわしながら、たちまちそれをいい口実にして、

「今夜はわたくし、御迷惑でも夜が明けるまであなたにここにいっしょにいていただきます」

と、思いきっていいながら、もう女のありっ

たけの感情をかくしきれなくなってきた。
「つまらないことを口にしたかな」
男は苦わらいをしながら、それでもいっしょにいてやるとはいってくれない。
「あなたは、あなたはあたくしをやっかいな女だと思っているのでしょう」
お浦はやるせなく目を伏せながら、どうにも切なく泣き出したくなってくる。その伏せた目の下に、むっちりとした女盛りの乳房が淡紅色のしこきに締めつけられて、豊かな丸身をくっきりと浮き彫りにしている。この乳房がこんなに命がけで恋いこがれているのに、この人はどうしてもあたしが好きになれないのかしらと、お浦が絶望しかけた時、
「お局さまは意地が悪い」
と、男が軽く切り出してきた。
「なぜでございます」
「わしを煩悩地獄へおとしておいて、後でわらってやろうと思っているんだ」
「まあ、あたくしがそんな――」
うらめしそうに目をあげながら、お浦はかっと全身の血が一度に燃えあがってくるのをはっきり感じた。
そのこっちの熱い目を、男はわらいながらしっかりと愛情の目でうけとめて、お浦がうれしいと思ったとたん、急に男の顔がきびしくなって、廊下へ耳を澄ましたようだ。
「いかん」
雷太郎は素早く木剣を取って、ひざですっとこっちへ進みながら、
「伝吉かもしれない」
とつぶやくようにいって、くるりと障子のほうを向く。
「あっ」
恋しい男の背中がすぐ手のとどくところにある。お浦は思わず中腰になってその男の肩を両手でつかみながら、恐怖の目を障子へ向ける。
ごうっと風が雨戸へたたきつけてきた。

たのもしい男の肩へ体ごとしがみついていきたい。もうこの肩は自分のものなのだと、お浦は障子の外を恐れながらも胸がわくわくしている。
「どいていろ、お浦」
落ち着いた雷太郎の声がささやくようにいった時、すっとそこの障子があいた。案の定、ぬすっとかむりの伝吉がそこにぬっと立っていて、
「畜生、やっぱりここにいやがった」
と、焼きつくような目が雷太郎をにらみ、まだ男の肩につかまっているこっちの顔をずぶとく見おろしている。
――いやらしい男。
お浦は憎悪をこめて、そのへびのような目を見かえしてやる。
「くそっ」
伝吉がふところの匕首を引き抜くなり狂ったように一足座敷の中へ踏んごんできたのと、
「ばか者」
一喝して雷太郎が片ひざ立ちになって、さっと木剣を右手なぐりに横に払ったのと同時だった。
「う、うっ」
雷太郎の目測は正確に相手の胴を打ちこんで、伝吉はたわいもなく廊下へのけぞり倒れていく。
「怖いっ」
勝ったと思った瞬間、お浦は張りつめていた体中の気力が抜けていく感じで、こんどこそ夢中で男の肩へ力いっぱいしがみついていった。
「待て、お浦。賊は一人じゃなさそうだ」
「えっ」
そういえば、どこからか風が廊下へ吹きこんできて、障子をがたぴしゆすっている。
「しっかりするんだ」
雷太郎はすっと立ちあがった。
「怖い、行かないで」

「わがままをいっちゃいかん」
男はこっちの腕を引っかかえるように次の間のふすまをあける。
「怖い、先生」
お梅は床の上へ起きなおってがたがたとふるえていた。
「心配しなくてもいい。二人ともここを動くんじゃないぞ」
雷太郎はお浦をお梅のほうへ押しやっておいて、伝吉の倒れている廊下のほうへ引きかえしてきた。
伝吉は完全に気絶しているようだ。肋骨が一、二本折れているかもしれない。
こっちは大丈夫と見たので、雷太郎は廊下を足早に杉戸のほうへ進んだ。
家中はまだしんとしている。風はたしかに奥の間のほうから流れてくるようだ。
「えいっ」
廊下を夜詰めの部屋のほうへ曲がろうとしたとたんに、杉戸のかげからふいにもろ手突きをかけてきたやつがある。
そんなこともあろうかと十分注意していたところだったので、雷太郎はとっさに一足さがって、空を突いた賊の体が前のめりになった背中のあたりへ、
「とうっ」
ぴしりと一本痛打をくらわす。
「う、うっ」
賊はひとたまりもなく前のめりにぶっ倒れていった。

血のにおい

雷太郎は見張りの賊を倒すと、ちゅうちょなく夜詰めの座敷へ進んでいった。忠太のことが心配になったからである。
そこは廊下の障子も、次の間とのふすまも、正面の内蔵の前の裏廊下へ出るほうのふすまも、みんな開けっ放しになっていて、案の定、

忠太は自分の帯でうしろ手に縛られ、手ぬぐいでさるぐつわまでされて、こたつのそばへころがされていた。
賊の姿は見えないが、金蔵の戸があいていて、中に灯がともされているようだから、おそらくそこへ入りこんでいるのだろう。
「しっかりしろ、忠公」
雷太郎はまず忠太のそばへ走り寄って、手早く縛られている帯を解いてやる。
「賊は蔵の中か」
「へい。すんません、だんな」
忠太は自分でさるぐつわの手ぬぐいをむしり取って、ふらふらと立ちあがる。
「伝吉と見張り一人は倒したが、賊は何人ぐらいなんだ」
「それならあと二人です。あっしの見たのは四人でした」
真っ青な顔つきだが、目の色はもういくぶん落ち着いてきているようだ。
「よし、おまえは早く奥のお局さまのところへ行っていろ」
「へい」
忠太は足を踏みしめるようにして、
「畜生、——畜生め」
と口走りながら、すぐに表廊下へ出ていった。
ごうっと蔵の前のほうへ風が吹きこんでいるのは、例の東がわの戸袋口の雨戸が開けっ放しになっているに違いない。
「あっ、用心棒——」
ふいにそっちの裏廊下のほうから出てきた覆面しりっぱしょりの浪人者が一人、ひょいとこっちをのぞいて、どきりとしたように棒立ちになった。
「なにっ、雷太郎だと」
おなじような覆面の顔がもう一人、すぐに前のとならんで、これもはっと鋭い目をこっちへ光らせる。二人ともがっしりとした体つきの強そうなやつだ。

「やりますかな、強盗うじ」
雷太郎が木剣を取りなおしながらにやりとわらってみせると、
「うぬっ、庭へ出ろ。ここじゃ狭い」
後からきたほうがとっさにそうわめくなり、相棒に目くばせして、どかどかと戸袋口のほうへ引きかえしていく。
——なにかたくらんでいるな。
雷太郎は油断なく二人を追って裏廊下へ出た。もっとも、二人で同時にかかってこっちを倒そうという腹なら、屋内は狭いから、無論、敵としては庭へ出たほうが働きいいことになる。
が、はじめからそんな気があって庭へ誘い出すようでは、賊たちにはたがいに相棒をたよろうとする下心があるのだから、こっちとしてはそう恐れることはないのだ。
まもなく、裏廊下は戸袋に突き当たって、右へ曲がるようになる。見ると、戸袋口から二枚目の雨戸がぽかりと一枚外されていて、風はそこから黒々とうずをまいて吹きこんでいた。しかも、そこの廊下に千両箱がすでに二個おいてある。察するに、賊たち二人はそれをここまで運び出して、もう一度金蔵へ引きかえしてきたところだったに違いない。
いきなり庭へ飛びおりては、一足先に出た賊たちに、左右から足をなぎ払われるおそれがあるので、雷太郎はさっと三枚目の雨戸を引きあけて、そこから一気に庭へ飛んだ。
——はてな。
暴れっ風が砂ぼこりをまいて庭中を吹きすさんでいるが、賊たちの姿はどこにも見えないようだ。
「逃げたかな」
雷太郎は念のために裏木戸のところまで行ってみた。そこの木戸が開けっ放しになっている。逃げ道のために横町の木戸を開けっ放しにしておくはずはないから、いまここから逃げ出した時、あとを閉めずに逃げたと見ていいだろう。

木戸のそばの柳が黒髪を振り乱すように風にもみくちゃにされている。
これ以上追ってみてもしようがないので、雷太郎は木戸のしまりをして元の廊下のほうへ引きかえしてきた。
「先生、——先生はおいでになりませんか」
「風さま、雷太郎先生」
だれか二人で、八畳の間のほうから呼んでいる。
「おれはここにいる」
雷太郎は足袋の裏を手ぬぐいで払って、廊下へあがっていった。
「あっ、先生」
「強盗は、強盗はどうしました」
そこの障子があいて顔を出したのは、寝まき姿の番頭たち二人である。
「賊は二人だけ裏木戸から逃げた」
「逃げたんですか。浪人強盗は三人組みだったそうですね」
番頭たちはまだがたがたと震えがとまらないようである。
「一人は杉戸のところに倒れているはずだ」
「へい」
「あんたたち、ここの雨戸を入れて戸じまりをしてくれ。この千両箱はまだこのままにしておいたほうがいい」
「かしこまりました」
「賊はもう逃げてしまったんだから、落ち着いて、火の元だけは十分気をつけてくれ」
雷太郎は番頭たちにいいつけて杉戸のほうへ引きかえしてみた。
そこにさっきたたき伏せた覆面浪人の一人が、だれかにうしろ手に両手を縛られて、うつぶせに倒れたまま、骨にひびでも入ったか、時時苦しそうなうめき声をもらしていた。
「ああ、風さま、とんだことでございまして」
伝吉の倒れている廊下のほうから、大番頭の富右衛門が走り寄ってきた。さすがに大番頭は

もうちゃんとふだん着にきがえている。
「大番頭さん、血のにおいがするようだな」
雷太郎はふっとそれを鼻に感じて、大番頭の顔に聞いた。
「はい、若だんなが、いいえ、伝吉が胸をえぐられていまして」
「なにっ」
雷太郎はどきりとしながら、つかつかとそっちへ寄っていった。
伝吉はさっきのまま雨戸のほうを頭にして、仰向けに倒れ、倒れたかっこうはそのままだが、なるほどみぞおちのあたりを鋭利な刃物で一突きにされたらしく、そこからおびただしい血が流れ出している。
——だれがこんなまねをしたんだろう。
雷太郎は啞然としながら、
「大番頭さん、忠公はどうしたね」
と、ついてきた富右衛門に聞いてみた。
「忠太はいましがた番頭の米吉といっしょに花川戸の自身番へまいっています」
「そうか——」
「風さま、——風さま」
まだ障子が開けっ放しになっている寝間の次の間からふすま越しに、お浦のいらいらしているような声が呼んだ。真っ先にそばへ行ってやらないので、またつむじを曲げているのだろう。
「大番頭さん、賊二人はもう裏木戸から逃げてしまった。廊下へ千両箱を二つ持ち出しているから、とにかく一応金蔵を調べてみてくれ」
「かしこまりました」
富右衛門がそそくさとそっちへ引きかえしていくのを見送ってから、雷太郎は寝間をぬけて次の間へ入っていった。
八畳の間はお梅の寝床が片づいていて、寝まきの上からいつもの被布を羽織ったお浦が一人で座っていた。
「お梅はどうした」
「火ばちの火をこしらえにやりましたのよ」

まだ顔色は青いが、そうふきげんな様子でもない。
「ちょいと失礼するよ」
雷太郎は被布の上から懐剣をさしているらしい形が見えるので、木剣をそこへ置くと、いきなりお浦のひざの横へ寄っていき、被布の前から右手を突っこんでそれをさぐり取る。
「まあ、なにをさるの」
お浦は別にこばもうとはせず、男の手で胸をさぐられて、むしろ体中に火がついてきたような顔になってくる。
「お局さまは用心がいいんだな」
雷太郎はそんな冗談口をききながら、手は素早く錦の袋のひもをといて懐剣を抜いてみていた。
これは御殿勤めをしていた形見にしまってあるものらしく、相当の業物のようだ。
——お浦じゃないようだ。
懐剣に血ぐもりのないのを見とどけて、ほっとしながら鞘におさめ、すると伝吉を刺したのは忠太かもしれないと雷太郎は思った。
「お局さま、さっきここへ忠公がきたろう」
「いやですわ、もうお局さまだなんて」
お浦は目にあふれるような媚をふくんでうらめしげにいう。
「困ったことがあるんだ」
雷太郎はそれどころではない気持ちである。
「なにがでございますの」
「あんたはまだ知らないのか。伝吉は胸を一突きにされている」
「えっ」
「わしは木剣で打ちすえただけだから命には別条はないはずなんだが、だれかが後で七首で刺し殺しているんだ」
「本当ですか」
「そこに倒れているんだから、見ればわかる」
「怖いっ、あたくし」
お浦はたちまち恐怖におびえて、男の腕にす

がりついてくる。
「早く、早く向こうへつれていってくださいまし、ここにいるのは怖い」
「ああ、そうか」
雷太郎は思わず苦わらいをしながら、
「なるほど、死骸といっしょじゃ怖いかもしれないな。よし、立て。向こうへつれていってやろう」
と、腕を引っ立てるようにして立ちあがった。
お浦はその胸の中へ精いっぱいしがみついてくる。
「それじゃ歩けないじゃないか」
甘い女体にまつわりつかれて思わず肩をおさえつけると、しんなりと柔軟な年増盛りの肌の感触が濃厚に男心をゆさぶってきた。
「お浦――」
一瞬、雷太郎は燃えあがる激しい情熱をおさえきれなくなって、前後を忘れ、左腕を女のうなじにからんであごに手をかけるなり、ぐいと顔を仰向けにさせて、そのくちびるへのしかかるように口を重ねていった。
男の胸の中へ抱きすくめられて思いきり口を吸われたお浦は、魂まで吸いとられてしまったように全身から力がぬけ、自分もまた熱い息づかいになって、ただ切なげにあえぎ出す。
が、それはほんのわずかな間の激情のたわむれで、
「さあ、お局さま、しゃっきりするんだ」
と、雷太郎はたちまち我にかえって、お浦の体を放した。現実はそんな甘い夢にいつまでも酔っていられる場合ではないからである。

八丁堀のだんな

お浦を元の奥の八畳の座敷へ移して、一応跡片づけのすんだところへ、三番番頭の米吉といっしょに花川戸の自身番へ出向いていた忠太が一人で駆けもどってきて、
「だんな、ちょうど番屋へ八丁堀の臨時回りのだんながまわってきやして、いま米吉さんがここへ案内してきやす」
と、息を切りながら告げた。
「そうか、それはよかった。大番頭さん、店まで出迎えたほうがいいだろう」
生け捕りにした浪人強盗も、伝吉の死骸も、町奉行所の役人に出張ってもらわなければ勝手に手をつけるわけにはいかないのである。
「では、そういたしましょう」
世慣れた富右衛門は万事心得て、すぐに座を立っていった。
「忠公、ちょいときてくれ」
雷太郎は忠太を呼んで、内蔵の前の板の間へ出た。
「なんです、だんな」
「伝吉を匕首で刺したのはおまえだろうな」
小声でずばりと突っこんでいくと、忠太は一瞬あっと上目づかいになって、こっちの顔色を見ながら、
「お高がいじめられちゃかわいそうだと思って、急にやっちまう気になったんでさ。いけなかったでしょうかね、だんな」
と、正直に白状してしまう。
「おまえの気持ちはよくわかるが、八丁堀の前ではそれではとおらない」
「どうしてでござんす」
「伝吉は気絶していたんだ。番所へ引かれていけばどうせ重罪はまぬがれない男でも、それを刺したとなると、おまえもおとがめはまぬがれなくなる」
「本当ですか、だんな。黙っていりゃだれがやったかわからねえんじゃないでしょうかねえ」
忠太はそんな虫のいいことをいい出す。
「それはだめだ。なまじ隠そうとするのは、かえってよくない」
「じゃ、どうすればいいんです。困っちまったなあ」
「だから、八丁堀にもし事情を聞かれたら、あ

のとき奥は無人で、お浦さま一人しかいなかった。もし伝吉が息を吹きかえすと、お浦さまの命があぶないと思って夢中で刺してしまったと、はっきり返事をするんだ」

「つまり、お高のためにじゃなくて、お浦さまのためにだといえばいいんですか」

「うむ、そのほうが筋がとおる」

「ありがてえ。そういやあおとがめはねえんでしょうね」

「それは八丁堀の人柄にもよるだろうが、たぶん無事にすむだろう」

「たのんます、だんな。あっしまでとばっちりを食ったんじゃ、割にあいませんや」

忠太はいまさらのように青くなっていた。

忠太のほうはそれですみそうだが、雷太郎はもう一つ気まずい問題をかかえていた。

それは伝吉の倒れている位置で、だれが見てもお浦の寝所から一撃を入れたとわかる。この夜更けに用心棒がどうしてそんな女主人の寝間へ入りこんでいたのかとそれを問題にされると、大番頭の富右衛門はすなおにこっちの説明をうけとってくれたが、役人や世間はそう簡単に納得してはくれないだろう。

もっとも、お浦の口まで吸っている今となっては、二人の仲をどう見られようとそれは五十歩百歩で、そうむきになって強弁する必要もないが、役人の皮肉の一つぐらいは覚悟していなければならない。

忠太が店のほうへ出ていってから、六畳の間の火ばちの前へもどってくると、次の間でこたつにひざを入れていたお浦が、

「ねえ、あたくしもお調べをうけるのでしょう」

と、もう他人ではないような顔をして聞いた。

「うむ、それはかなりくわしく事情を聞かれるだろうな」

「なにを聞かれたってかまいませんけれど、あのことはどう答えればよろしいんですの」

「あのことって、おれが寝間へ入りこんでいたことか」

さすがにお浦は顔を赤らめながら黙ってうなずいてみせる。

後家という張りつめた意地が消えてしまったお浦の顔つきも体つきも、いまは深沈たる情熱をじっと胸の中でかみしめているような濃艶(のうえん)なまめかしさを惜しみなく見せて、目に媚(こび)さえあふれているようだ。

「そうだな、用心棒がずうずうしくお局(つぼね)さまをくどきに入りこんでいたといえばいいだろう」

「まさか、そんな。——あなたは少しもあたくしをくどいてはくれませんでしたもの」

「そんなことはない。あの時とんだじゃまさえ入らなかったらどうなっていたかわかりはしなかった」

「もうよろしいんですの。あの時は、あたくしがあなたを呼んで台所の火の元を見まわってくれるようにたのんでいたといってはいけませんかしら」

年だけにお浦はそんなうまいことをいう。

「それでいいだろう。しかし、事実は台所の火の元よりお局さまの胸の火のほうがずっと強かった」

「その火はもうすっかり吸いとってくれたお方がございますので、あたくしは安心ですのよ」

「そんなことをいうと、またそばへ行くぞ」

お浦は行儀よくわらっただけで、きてはいけないとはいわなかった。

暴れっ風は多少勢いが弱まったようだが、まだごうっと絶えず雨戸を鳴らしている。

「だんな、八丁堀のだんながたが表座敷へお通りになりやした」

障子の外へきて忠太が知らせてくれた。

「よし、いま行く」

雷太郎は木剣を手にして立ちあがる。

「あたくしもあいさつに出なければいけませんでしょう」

「それはこの家の主人がいちばん先にあいさつ

をするのが本当だ」

雷太郎はお浦といっしょに表座敷の八畳の間のほうへ入っていった。そこに、大番頭と一番番頭の源吉がかしこまっている。

十畳の間のほうの火ばちの前に立って、中年の同心が手下二人と岡っ引き一人を指図しながら廊下の伝吉の死骸を検視しているのを見ているのは、まだ三十前らしい苦み走った与力で、

――おや。

と、雷太郎はその顔を見なおした。

北の臨時隠密回りの与力市村鶴吉で、若手のうちではきけ者といわれ、雷太郎とは御徒士町の道場友達であるばかりでなく、屋敷の出入り与力という深い関係もあった。

――困ったなあ。

この男に顔を見られると、屋敷へつれもどされる心配があるのだ。そのかわり、この事件に関するかぎり、余計な心配はいらなくなった得もある。

「御出役、御苦労さまに存じます。倉橋屋の後家、浦と申します」

お浦はそこへ両手をついて、元はお局さまらしい折り目正しいあいさつをした。

鶴吉はじろりとお浦を見て、ついでにそばから目礼をしたこっちの顔を見ながら、一瞬おやという顔をしかけたが、

「さようか。わしは北の市村鶴吉だ。検視中だから、しばらくそれに控えていてくれ」

とあっさり答えて、廊下のほうへ目を向けてしまう。

「あばらの骨が二本折れているようでござんす」

手下の一人が伝吉の死骸を調べながらいう。

「打ち傷だな」

同心が帳面に筆を走らせながら聞く。

「へい、棒か木剣のようなもので打った傷でござんす」

「みぞおちの突き傷は真ん中らしいな」

「さようで。――こいつは倒れてから匕首よのものでひと突きにした、そういう血の流れ方でござんす」

「駒吉、その死人の顔はたしか伝吉に相違ないか」

こんどは土地の岡っ引き花川戸の駒吉に聞く。

「へい、七年ばかり前に倉橋屋から人別を抜かれた伝吉に相違ありやせん」

「よし」

同心は帳面をつけ終わると、

「市村さま、大体すみました」

と、鶴吉のほうへいう。三十五、六の練達した同心のようだ。

「そうか。じゃ、一通りうちの者の口書きを取るから、立ち会っていてくれ」

「はい」

市村ははじめて火ばちの前へ座った。

同心は少し離れたところへ席をかまえて筆を持ちなおす。

「お調べ中は言葉があらたまる。一同さよう心得るように」

「はい」

お浦が代表して答える。

「風雷太郎――」

市村は正面を切って雷太郎を呼んだ。

「はっ」

「その方は倉橋屋の用心棒、夜詰めに雇われているそうだな」

「はい」

「いつから当家へ雇われたのか」

「今月の十四日に目見えをして、十五日から住みこみました」

「年は――？」

「二十六歳になります」

「風雷太郎は偽名だな」

「さようです。家名の恥になりますので、実名の儀はおゆるし願います」

「すると、浪人というわけではなく、親もとは直参か、それとも陪臣か」
「直参の勘当息子です」
「おなじことでも、家出息子のほうが聞こえがいい。どっちだね」
市村は味なことをいう。
「正直に申せば、家出のほうです。家出はしても家名にかかわるようなことはしませんから、お見のがし願います」
「殺された伝吉とは、富右衛門の話では前に一度会っているそうだな」
「十五日の夜、二度会っております」
「伝吉の素姓はよく承知しているわけだな」
「大番頭富右衛門と夜番の相棒忠太とから聞いただけの事情は知っています」
「十五日の夜、吾妻橋の上で伝吉に百両わたしたそうだな」
「当家の後家お浦にたのまれて、余儀なく使いに立ちました」
「伝吉は凶状持ちだ。それを承知していて、なぜ番所に届け出なかったのか」
「当家の勘当息子ゆえ、こんどだけはいい分をとおしてやってくれと大番頭からたのまれましたのと、その時はまだ本当に伝吉が出向いてくるかどうかそういう疑いもありましたので、黙って使いに立ちました。申し訳ありません」
「多少の疑いはあっても、一応番所に届け出るのが本当だ。今後はあいならん。よいだろうな」
しかるところはしかっておいて、こっちには口をひらかせずに、
「二度目には、同じ夜、伝吉は裏木戸から忍びこんで、お浦を手ごめにしようとしたそうだが、それに相違ないか」
と、すかさず切りこんでくる。
さすがにうまいもんだなあと雷太郎は感心した。

屋敷はすてる気

「伝吉は半分気の狂っている男で、人別をぬかれてからも倉橋屋の身代は自分のものだと思いこんでいたようです。その節も、店のほうでは情けをかけてやるつもりで、わしが吾妻橋まで出向き、百両だけわたしてやったのですが、頭から不満だったようで、わしがもどるより一足早く、いやがらせをいいに裏木戸からここへ押しこみ、お浦を見ると急に煩悩をおこして、手ごめにしようとしたのです」
雷太郎は伝吉が凶暴な半気違いだったことだけははっきり申し立てておく必要があると思った。
「三度目は、忠太という者にいいつけて、お浦を裏木戸へ呼び出させようとしたんだそうだな」
市村はすでに一通りのことは店の者から聞いて承知しているようである。
「さようです。しかし、その本当の目的は、今夜の仕事のために、どこにだれが寝ているかというようなことを下調べにきたのではないかと思います」
「今夜は浪人組強盗が三人いっしょだったそうだな」
「伝吉がいちばんじゃまになるのは用心棒のわしだったようです。そこで、今夜は浪人組にわしを切らせ、自分はお浦をさらって逃げる気で、この前の時とおなじ奥の戸袋口の雨戸を一枚外し、そこから押し入りました。前にお浦が居間にしていた内蔵のまえの六畳へ踏んごんでみると、忠太が一人で夜詰めをしている。これを縛って、伝吉はすぐにこっちの廊下へ押しこんできたようです。わしはこのごろ一刻ごとに奥を見まわって歩くことになっているんで、ちょうどここへきてお浦から火の元をもう一度見てまわってくれるようにとたのまれていたところで、伝吉がわしを見るなり匕首を抜いてかかってきたので、とっさに木刀で打ち倒しました」

「伝吉はなぜ一人でこの廊下へきたんだね。用心棒を倒すのは浪人組の役ときめてあったはずだが」
「無論、伝吉は浪人組がいっしょについてくると思いこんでいたのでしょう。事実、一人だけはいっしょについてきて、伝吉が倒れるのを見るといそいで杉戸のかげにかくれ、わしが奥へ引きかえそうとするところをふいにもろ手突きをかけてきました」
「なるほど、一人だけつかまっているのはその男なんだな」
「そうです。それから、夜詰めの部屋へ行ってみると、忠太が縛られているんで、それを解いてやりました」
「忠太、その方は伝吉に縛られた時どうして大声を立てなかったんだ」
市村はふいに忠太のほうへ聞く。
「へい、すんません。伝吉は気違いですから、そんなことをするとずぶりとやられてしまいますんで」
「伝吉が雨戸を外した時、そんな物音に少しも気がつかなかったのか」
「いいえ、おやっと聞き耳を立てて立ちあがった時は、もう伝吉が部屋へ飛びこんできていたんです」
「雷太郎、後の浪人強盗二人は庭から逃げ出したのか」
「さようです。わしが忠太の帯を解いている時、賊二人はもう千両箱を二つ逃げ口の廊下まで運んでいました。そこから引きかえしてきて、わしの顔を見ると、庭へ出ろとすごみながら、先に立って庭へ飛び出していき、後からわしが出ていってみると、すでに裏木戸から外へ逃げてしまっていました」
「伝吉のみぞおちに匕首のようなもので突き刺した傷がある。あれはどうしたんだ」
尋問はいよいよそれに触れてきた。
「へい、あれはあっしがやりましたんで。だんなに帯を解いてもらってから、すぐにお浦さまのところへ行きやした。お浦さまはこの八畳のほうに小間使いのお梅さんと二人きりでいるんで、だんなは賊を追って庭へ出ているし、伝吉が息を吹きかえすと大変だと思い、夢中で一突きにして、それからお店のほうへ知らせに駆けつけたんです。どうもすんません」
忠太は一生懸命に答えて、ぺこりとおじぎをする。
「お浦、その方は忠太が伝吉を刺したのを知っているのか」
「いいえ、少しも存じませんでした。ただ恐ろしくて、忠太に早く店のほうへ知らせるようにといいつけるのが精いっぱいだったようでございます」
「雷太郎、伝吉はいつもおなじ雨戸口から忍びこむようだが、なにか外からはずれるように仕掛けでもしてあるのか」
「さっき気がついたばかりで、まだ自分では試していませんが、戸袋から二枚目の雨戸の上を削って甘くして、外からくぎのようなものでこじあければすぐに外れるようにしてあるんじゃないかと思います」
「なるほど。——小林、さっそく試してみてくれ」
市村は同心にいいつけて、
「一同は一応さがってよろしい。雷太郎だけは残るように」
と、これで取り調べは終わったようだ。
「富右衛門、家の中を一通り見ておきたいから、案内してくれ」
同心小林勝次郎は大番頭にいいつけて奥の廊下のほうへ立っていく。
後へ一人だけ残された雷太郎は、市村に目で招かれて、そっちの火ばちの前へ寄っていった。
暴れっ風は一時ほどではなくなったがまだかなり強く、家中の雨戸をがたびし鳴らしている。すぐそこに伝吉の死骸がある十畳の座敷はなん

となく陰気くさかった。
「若だんな、妙なところでぶつかったもんだねえ」
市村鶴吉は小声でいいながら、その目が皮肉そうにわらっている。
「だんなはまたどうしてこんな夜更けに花川戸あたりをうろついていたんだろうな」
「そいつは、雷太郎、言葉がすぎるぜ。だれが道楽や物好きでこんな場末をうろついているもんか。風のひどい晩は、いつもこうして火の用心をしてまわるのがおれたちの役目なんだ。これでも御用出役なんだ」
「これは失礼——。お役目御苦労に存ずる」
「しかしな、おかげで浪人強盗の片割れをつかまえた。こいつはちょいとした役得になるかもしれねえ」
「それなら、あとの二人もついでにたたき伏せておくんだったな」
「なあに、そういそがなくても、あの二人は五人組みぐらいになってここをねらうかもしれない。千両箱の山をちゃんと見ていっているんだからな」
まんざら冗談でもなさそうな鶴吉の顔色である。
「本当か、鶴だんな。あんまりおどかさないでもらいたいな」
「ところで、若だんな、おまえさんもうあの色後家にかわいがられているんかね」
「いや、そんなことはない」
「隠しなさんな。伝吉がここへきた時、若だんなは色後家の寝所へ忍びこんでいた。この座敷から打ちこんだんでないと、あんな倒れ方にはならない」
鶴吉はにやりとわらってみせる。
「それは、寝所にいたことはいたんだがね、まだそこまではいっちゃいない。正直いうと、くどかれている最中というところかな」
「なるほど、そういうこともあるな。おれと違って、若だんなはちょいと毛ぎらいをするほうだからな」
そういう鶴吉はさばさばと女に引っかかってさばさばと別れていくといったその道の達人なのである。
「さあ、これからは本気だ。若だんな、おまえさんはどうして家出なんかしたんだね」
鶴吉は真顔になって、あらためて座りなおす。
「おれは旗本というやつを毛ぎらいしたのさ。浪人者のほうがのんきでいい」
雷太郎はあっさりといってのける。
「じゃ、もう本当に一生屋敷には帰らないつもりか」
「うむ、帰らない。おれが帰らなくたって、屋敷には弟がいる」
「実はその栄二郎さんがひどく心配しているんだ。自分に家督をゆずるために兄さんが家出をしたんなら、自分も家出をするとまじめに考えているらしい。おれはまさかそんなことはないだろうと答えておいたが、こいつはどうしても一度若だんなに会って聞いてみなくちゃおれの責任がすまないんで、この間うちからおまえさんをさがしていたところなんだ」
「なあに、おれのはそんなに深い考えがあるわけじゃないんだ。ただ気ままにのんびりと世の中が暮らしてみたい、それだけなんだから、栄二郎に会ったら、つまらないことは考えないで、兄貴の好きなようにさせておいてやれと、だんなからそういっておいてもらいたいな」
「それはまあそういっておくよりしようがないが、若だんな、おまえさんおれにも本当のことはいえないんかね」
鶴吉の目が急にきびしくなってきたようだ。
「おれの毛ぎらいのひどいのは、だんなもよく知っているはずだぜ」
雷太郎は苦わらいをしているよりしようがない。
「毛ぎらいねえ」

鶴吉はふっと悲しそうな目になって、
「じゃ、もう一つだけ聞くが、若だんなはこの色後家は毛ぎらいしない気か」
と、じっとこっちの顔色を見すえてくる。
「そいつがおかしいんだ。本当なら毛ぎらいしそうなものだのに、今のところそうでもなくなっている。つまり、おれのはわがままなんだな。まあ、もう少し見のがしておいてもらいたいな」
「若だんなも半分気違いの部じゃないのかね」
「そうかもしれない。ひょっとすると、いまに自然に正気にかえる時がくるのかもしれないな。すまないが、もうしばらくほっておいてくれ」
「よし、わかった。つまり、病気がなおるまでそっとしておいてくれというんだな」
「うむ、たのむ」
「じゃ、病気がなおったら家督をつぐかね」
「いや、家督は弟のものだ。おれのような病人が家督をついだってしようがないし、おれは家名なんかにはなんの未練もない」
「本心だろうな」
「本心だとも。そうだ、栄二郎にそんなことをいったってなかなか納得しないだろうから、兄貴は女ができて、それと別れられないんだといっておいてくれ」
「さあ、それで納得するかどうか、とにかく骨を折ってみよう」
鶴吉のほうはそれでどうやら納得してくれたようだ。
「ところでな、鶴だんな、さっきの浪人組強盗のほうだが、本当にもう一度ここの金蔵をねらいそうな見こみか」
「それはねらいそうだな。ひょっとすると、ついでに色後家もさらっていくかもしれない」
「からかっちゃいけない」
「あれえ、若だんなは本気で色後家のことを心配しているのか。こいつはたのもしい」
鶴吉はひやかすようにわらい出すのである。

女ごころ

市村鶴吉が生け捕りの浪人強盗と伝吉の死骸を引き取って手下の者たちと倉橋屋を引きあげたのは、やがて真夜中の八ッ（二時）に近い時刻だった。
ともかくも一応ざっとでも掃除をしなければ、寝ることもできない。女たちや番頭たちが手分けをしてすぐに掃除にかかり、ことに血で汚れた表座敷の廊下は忠太が先に立って血を水で流し、何度もふき清めにかかる。
その間しばらく店の間で待っていたお浦は、奥座敷の二間のほうをいそいで先にすませたので、大番頭と雷太郎がついて、六畳の居間へ移されているこたつのところまで送っていった。
「大番頭さん、そこの杉戸をしめておいてください」
表座敷のほうはまだ掃除の最中なので、お浦は廊下の杉戸をしめさせてしまう。血のついた廊下からなるべく遠く離れていたいというつもりもあるのだろう。
「風さま、いろいろと御苦労さまでございました」
居間へ落ち着くと、富右衛門はあらためて雷太郎に礼をのべた。
「大変だったなあ、大番頭さん」
「はい。手前どもは忠太が知らせにきてくれるまでまったくなにも気がつきませんでした。申し訳ございません」
「いや、そのために用心棒がついているんだし、この暴れっ風じゃ気がつかないのがあたりまえだ」
「年がいもなくてお恥ずかしゅうございます」
一つ間違えば今ごろは地獄の騒ぎになっていたのだから、大番頭としては心からほっとした気持ちだったのだろう。
「今夜のお係の市村さまはお知り合いの方のようでございますね」

「うむ、道場友達なんだ」
「おかげさまで、お調べのほうも無事にすみまして、大助かりでございます」
「今夜は風が強いんで、番所でも方々へ見まわりを出しているんだそうだ。ちょうど市村がこっちへまわってきていたのは、まあ運がよかったんだろうね」
こたつの中のお浦が、ちらっと雷太郎の顔を見ている。
「そういえば、大番頭さん、市村が妙なことをいっているんだがねえ」
「とおっしゃいますと――」
「今夜浪人強盗は二人逃げた。しかも、そいつらは金蔵の中から、千両箱を二つ廊下まで持ち出している。この金に未練が残って、ひょっとするとまたここへ押しこむかもしれないという」
「んだ」
「いやですわ、そんな。――怖い」
お浦がさっと顔色をかえる。
「本当でございましょうかなあ」
大番頭もどきりとしたようだ。
「無論、こんど押しこむとすれば二人じゃこない。五人組みぐらいになってくるだろうという見こみなんだ」
「どうでしょう、風さま、逃げた二人の浪人強盗は今夜つかまった男の口からしりが割れないもんでございましょうか」
「そうなってくれればありがたいんだが、番所のほうでも十分警戒はするから、そっちでも当分気をつけていてくれるようにといっていた」
「それはもうできるだけ気はつけますが、そうなりますと、また風さまにおすがりするほかはございません」
「もう一つ、これはまだ市村にも話してないんだが、逃げた二人はどうもわしを知っているようなんだ。伝吉は本所の大河原のところへしばらくかくれていたようだから、今夜の三人もその辺から集めてきたんじゃないかと思う」

「大河原にすれば、風さまがじゃまでしようがないでしょうからな」
「とにかく、当分まだ油断はできないということになるんだ」
廊下の杉戸があいて、だれか障子の外へきたようだ。
「大番頭さんはこちらでしょうか」
「ああ、米吉どんか。掃除がすんだのかえ」
「はい。一通りすみました」
「そうか、いま行きます」
米吉はそのままさがっていった。
「お浦さま、明日がありますので、もう店の者はやすませてもよろしいでしょうか」
富右衛門はお浦のほうへ聞く。
「そうさせてください。店の者へのあいさつは明日あらためてします」
「かしこまりました。それでは、風さま、なにかの相談はまた明日ということにして、なにぶん後のことはよろしくお願いいたします」
「承知した」
「では、おやすみなさいまし」
「御苦労でしたね、大番頭さん」
「どういたしまして」
富右衛門はおじぎをして出ていった。
風の音もだいぶ静かになってきたようである。家の中はしいんとして、真夜中の気配が濃い。
「なんですか、まだ怖い、あたくし」
お浦の目がひしとこっちへすがってくる。
「どうする、お局さん、ここでおれ一人夜番というわけにもいかないだろう。忠公を呼ぶことにするか」
大番頭は心得ているにしても、店の者への手前があるのだ。
「いやですわ、もうそんな」
お浦ははっきりとかむりを振ってみせて、ほんのりと目のふちを染めている。
「そうか。じゃ、おれは一通り戸じまりを見ま

わってくる」
それが用心棒の責任なので、雷太郎は気軽に立ちあがった。
お浦がすっかりその気でいるのは、口まで吸っておいていまさら後へはひけない。
——好きになるというやつは、こんなものかなあ。
雷太郎は自分で自分の気持ちがわからなくなってきた。
杉戸をあけて表の廊下へ出てみると、店の者はもうみんな店へ引き取ったらしくひっそりとしていて、どこからか線香のにおいがしてくる。
見ると、伝吉の死骸のあった廊下に線香があげてあるのだ。そこの障子があいていて、あかるく行燈がともっている。
「忠公、これは大番頭さんの指図か」
そこの十畳をのぞいてみると、そこに夜詰めのこたつができていて、忠太はそのこたつにも入らず、一人でぽつねんと廊下の線香に向かって座っているのだ。
「いいえ、あっしの手向けなんでさ」
「そうか。よくそこへ気がついたな」
「大番頭さんもそういってくれやした。死んじまえば仏さまですからね。今夜はあっしが一人で通夜をしてやります」
忠太は真顔になってそういっていた。
「そうしてやれば仏もよろこぶ」
雷太郎は線香のほうへ合掌してやってから、黙って戸じまりを見てまわり、奥へ引きかえしてきた。
杉戸はしめたが、無論かぎはかけなかった。
お浦はもう寝まき姿になり、こっちの寝まきまで用意して、こたつの前で待っていた。
その寝まきは女物である。
「今夜はこれで我慢しておいてくださいまし」
「用心棒が寝まきに着替えていいかな」
「よろしいんですのよ」
年だけに落ち着いたものである。

向こうでは忠太が死んだ伝吉に線香を手向けて、一人で通夜をしている。その愚者の心根に胸をうたれながらも、自分の心は強くお浦の女体にひかれて甘く燃えていく。
そういう自分の心を、雷太郎はひそかにじっと自分で見まもっていた。いや、正直にいえば、お浦という一人の女の姿をあくまでも見きわめようとしているのだ。
お浦は後家なのだ。その後家の心が自分にどう燃えてくるか、それが見きわめたい。
こっちが寝まきに着替えると、女物だからおかしなかっこうになったが、お浦はそれをわらいもしなかった。その時のお浦は心にもうそんなゆとりはなかったようだ。
ふすまをあけると、八畳の間のほうにちゃんと寝間ができて、まくらびょうぶの外に有り明け行燈がつけてあった。
「先へやすんでいてくださいまし」
お浦は脱ぎすてた男の衣類をちゃんと畳んで始末をしてから、そっちの行燈を吹き消して寝間へ入ってきたのである。
翌朝——。
雷太郎が目をさましたのは、日がのぼってからかなりたった時刻のようだった。
そばに寝ていたお浦はとっくに起き出したとみえて、そこに姿はなかった。
——おれは女が信用できない男だったはずなんだがなあ。
今朝の気持ちは我ながらふしぎだった。いや、そういう気持ちはお浦の口を吸う気になった時からずっと持ちつづけているので、お浦のすべてを知ってしまった今朝は、自分がうそのような気さえするのである。お浦という女のすべてに満足しているからなのだ。
いいかえれば、お浦が自分という男に対してどんなに真剣な情熱をたぎらせているか、昨夜はそれを肌で感じた。その満足感に酔っているような自分がちょっと意外なのだ。

お浦という女はすべてに控えめで、慎み深く、そういう性格が後家という立場をしっかりとまもりつづけてきたから、はたからは男ぎらいに見えたのかもしれない。昨夜も自分からはできるだけ感情をおさえつけようとしていたようだが、燃えあがる女体のほうがそれよりも激しくて、はては自制しきれなくなった瞬間が何度となくあったようだ。

「おまえ、どこの馬の骨かわからないようなおれに、そんなにほれてしまってもいいのか」

その後で、そんな残酷なからかい方をしてやったが、

「ふ、ふ、こうなってしまってからではもうしようがございませんでしょう」

と、年だけに平気でわらっていた。

「世間のうわさでは、お局さんは男ぎらいだといっていたようだがなあ」

「男はきらいですのよ、あなたのほかはどんな男でも」

「本当か、おい」

「いまにわかります」

「じゃ、おれが死んだら尼になるかね」

「尼になったぐらいであなたは承知しますの」

「そんなことは、男の口から強いるもんじゃないだろう」

「ですから、大丈夫ですのよ。あたくしはあなたが考えているよりずっと貞女なんですの」

お浦は冗談のようにいってから、

「本当は、あたくし、女というものはどうしても男に負ける、それがいやですから、ずっと男ぎらいでとおそうと思っていましたの。でも、あなたになら負けてもいいと思いました。どうしてなのか、自分でもわからない」

といいながら、ふいにこっちの手を取って、しっかりと胸の中へ抱きしめていた。

その言葉にうそのないのを、雷太郎は自分の肌で知っているのである。

一つ目がひらく

「あら、目がさめていらしたの」

ふすまをあけてそっと様子を見にきたお浦が、こっちの顔を見るなり、たちまち目に甘い微笑をうかべながらしっとりとそばへきて座った。

「お早うございます」

もうきちんと朝の身じまいをすませていつもの行儀のいいお浦さまになっているが、今朝はいきいきと若がえったようにひどくきれいに見える。

「ああ、そうか。今日は、お局さん、被布を着ていないんだな」

いつも取り澄ました被布姿ばかり見なれている目に、帯でしめつけられた豊かな胸のふくらみと白々とした襟元に合わせてある藤紫の半襟のあざやかな色彩が、昨日までのお浦とはすっかり違った感じに見えたのだ。

そういえば、案外肉づきのいいすんなりとした肢体にも、今日は女盛りのさわやかななまめかしさを惜しみなく見せて、全身に女の愛情をみなぎらせているようだ。

「あたくし、もう被布はやめましたのよ」

「どうしてだ」

「あれは御後室さまの着るものですもの」

「そうか、お局さんにはゆうべどこの馬の骨だかわからないだんなさまができたんだものな」

「そうですの。あたくしのだんなさまは、いつお屋敷へ帰ってしまうかわかりませんけれど、それでもかまいませんの」

両手を突いてこっちの顔を上からのぞきこみながら、お浦の目はあかるくわらっている。昨夜の市村とのやりとりを聞いていて、およそこっちの素姓はわかっているのだろう。

「いやなこった。おれはお局さんの骨までしゃぶりつくすまでは食いついていて放れねえ。おめえの肌は男を気ちがいにするんだって伝吉が

いっていたそうだが、おれは正気でおめえの生き血を残らず吸い取ってしまわなくちゃ気がすまねえ」

雷太郎は下からお浦の目へ目を吸いつけながら、思いきりそんな悪たれたことを口にする。

「本当ですかしら」

お浦の目に深沈とした情熱があふれてくる。

「怖くなったのか、お浦」

「いいえ、ちっとも――」

「しかし、用心棒のおれがここへ居すわってしまったら、番頭たちが承知しないだろう」

「番頭たちには今朝もう話をしておきましたのよ」

「ふうむ」

これはちょいと意外だった。

「なんと話しておいたんだ」

「あたくしは自分の身をずっと風さまに守ってもらう覚悟ですから、そのつもりでいてください。もしあなたがたがそれでは困るというのでしたら、遠慮なくいってください。あたくしはここを出て、ほかに家を持ってもいいのですからといっておきました」

お浦は座りなおして真顔になる。

「番頭たちはなんといっていたんだ」

「奥はお浦の城というはじめからの約束ですから、大番頭さんが一同にかわって、決して苦情はございませんと返事をしていました。でも、だんなさまがここではおいやなら、あたくしはあたくしのものときまったものだけを持って別に家を持ってもかまいませんのよ」

お浦の腹ははっきりときまっているようだ。

「おまえがこの店を出ると、倉橋屋はどうなるんだ」

「店ははじめから大番頭さんにまかせて、番頭たちがそれぞれ身の立つように、前からちゃんと取りきめができているんですの」

「そうか。じゃ、おれがおまえの骨までしゃぶっても、後で困るのはおまえだけで、店の者にはなんの迷惑もかからないわけだな」

「そうですのよ。あたくしだって少しも困りはしませんから、だんなさまの気ままにしてもらってかまいませんの」

「よし、わかった。忠公はどうした」

「一度家へ帰ってくるといって、さっきもどりました。忠太にもいっそ家へきてだんなさまに奉公してはとすすめておきました」

「しかし、あの男の体を縛るのは罪かもしれないな。遊び人癖がついているから窮屈だろう」

「勝手勤めでよろしいんですのよ。あなたのお供さえしてくれればいいんですから」

「つまり、通いでいいというわけか」

「そうですの。忠太はゆうべ死んだあの男の供養を一人でしていたようです。大番頭さんが感心していました」

「うむ、それはおれも見て知っている」

「あたくしはゆうべどうもお線香のにおいがするようだと思いましたの。大番頭さんかなと思っていたのですけれど、忠太だったのですって」

お浦は感心したような顔をしていう。

「おまえ、あんまりあの男が怖くなくなったようだねえ」

「もうなんでもありませんのよ。あたくしにはだんなさまがついていてくれると思ったら、その時から自分でおかしいほどまるで世の中が違ったように見え出しましたの。いまいちばん怖いのはあなたのことかしら」

「おれはおまえの骨までしゃぶる男だからな」

「ふ、ふ、骨までしゃぶりつくしてくれるまで、そばにおいていただけますかしら。それに、もっと心配なのは、だんなさまにけがなどされることですわ。もう一人用心棒をたのもうかしら」

「冗談いうなよ。そんなことされちゃ、世間のいいものわらいだ」

「さあ、お起きになりません。御飯にしましょう」

「いやだよ、起こしてくれなくちゃ」

姉女房だけに、ついわがままがいってみたくなる。

「そうそう、お寝まきもこしらえなくては」

お浦はうれしそうにいいながら、ひざを進めて、右手をこっちのうなじの下へ入れる。おおいかぶさるようになった女体から、甘い女の肌のにおいが鼻をくすぐって、雷太郎は我にもなくいきなりお浦を引き寄せていた。

「まあ、あなたは――」

お浦はびっくりしたようだが、その口を口でふさがれてしまうと、もうなんにもいわなかった。

「おれはおまえが好きなんだ。殺しちまいたいほど好きなんだ」

ばかだなあ、そんな安手なことを口にするやつがあるもんかと、別の心が苦々しげに自分をしかっていたが、激しく燃え狂ってくる若い情欲は、たちまち男を荒々しい野性のけだものにしていた。

「だんなさま。――だんなさま」

お浦は切なげにあえぎながら、少しも若い野獣に逆らおうとはしない。果ては強烈な歓喜に全身をくねらせながら忘我の世界へまきこまれ、陶然と酔いしれていったようだ。

「お浦、おれは気ちがいになったかもしれないぞ」

それが終わったとたん、雷太郎はなにか照れたような気持ちになって、わざとそこへ大の字なりに引っくりかえって目をつぶっていた。

「いいんですのよ、あたくしがそばについているのですもの」

「おい、一言だけ聞いておきてえことがあるんだ」

「どんなことですの」

「おまえ、本当におれに殺されてもいいんだな」

また安手になりやがったと照れながらも、それを聞いてみずにはいられない。

「あたくし、だんなさまの気まぐれにしてくださいとさっきも申しあげてありますわ」

「女って、だれでもそんな気持ちになるものなんかな」

「ほかのひとのことはわかりませんけれど、あたくしはその気持ちがなければ、だんなさまにはしません。あなたに会うまでは、男ぎらいだったのですもの」

お浦はわらいながら、こっちの顔を見ているようだ。

「わかった。もう二度とこんなばかなことは口にしねえ。かんべんしろ」

かっと目をあいてみせると、

「ふ、ふ、殺されてもいい人なんですもの、どんなばかなことをいわれても、あたくしはただうれしいだけ」

お浦はうっとりとこっちの顔を見かえして、わらいながら帯を取って立ちあがった。

――この女はどういう気持ちなんだろう。

雷太郎はまたしてもふしぎな気がしてくる。女がそんなことを本心でいっているのか、この場かぎりの感情をただ口にしているのか、どうにも納得がいかないものがあるのだ。

「お浦、ひょっとすると、おれは伝吉の気ちがいがうつったんじゃないかな」

これこそその場かぎりの、ひょいと思いついた放言だった。

「そんなことございません。いやですわ」

さすがにお浦は真顔になって、

「あの男の供養のことは、よく大番頭さんにたのんであります。あんまり気になさらないでくださいまし」

と、なぐさめるようにいう。

これもまったく立場が逆になっている。雷太郎は内心あっと目をみはりながら、

「わかったわかった。それでいいんだ。万事よろしくたのまあ」

自分でもわけのわからないことをいって、むくりと起きあがる。

「それから、途中を気をつけてくださらなくては」

玄関まで送って出ながら、あれこれと注意はしていたが、外出をいやがる風はどこにもなかった。

——すっかり人間が変わってしまいやがった。おれよりよっぽどしっかりしているくせになあ。

雷太郎は表通りへは出ず、花川戸河岸のほうへ歩きながら、いつまでもお浦の顔をまぶたに残している。じいんと胸の中が甘くうずいているようで、こんなことは生まれてはじめての経験のような気がした。

今日はゆうべとかわって、少しも風のないおだやかな春日和である。

あの男のうわさ

浅草駒形堂の少し川上に、つるやというしゃれた門構えの料亭がある。諸侯の留守居役などが時々遊びにくるような店だから、料理茶屋としては一流に近いほうだ。

お加世はここの看板娘で、仲居たちといっしょによく働くしっかり者として、近所でも評判の娘だった。

店へくる客の中には、お加世の気性を見こんで、せがれの嫁にとまじめに話を持ちこむ者や、ぜひ世話をしようと金でつろうとする好色の金持ちや楽隠居など、二十になった今でも後を断たないが、お加世はただわらっているだけで、一度もそんな話に耳を貸そうとしたことさえなかった。

つるやの亭主は源吉という五十がらみの板前あがりで、いまだに毎日板場へ出てにらみをきかせているが、お加世は子供のころから源吉をおじさんと呼んでいる。

源吉は五年ほど前に死んだお加世の母親お国と江戸へ出てきてから夫婦にはなっていたが、元はお加世の父親の家の下男で、お国もお加世もいわば主筋にあたる。その父親の大和屋嘉兵衛がなにかの嫌疑で牢中で急病死したので、お内儀のお国と、当時まだ生まれたばかりだったお加世をつれて、江戸へのがれてきた。

そんな事情があるので、お国は源吉と夫婦になって自分は女房として源吉に仕えたが、お加世にははじめから源吉をおとっつぁんとは呼ばせなかったようである。

市村鶴吉は、その日、このつるやの二階の小座敷で、雷太郎のくるのを待っていた。

「市村さま、ゆうべ花川戸の倉橋屋さんへ、四人組みの浪人強盗が押しこんだんですってね」

市村とは顔なじみのお加世は、その座敷へあいさつに出たついでに聞いてみた。

「耳が早いな。もうそんなことを知っているのか、お加世」

「だって、花川戸とは目と鼻の間ですもの。この辺じゃもうみんな知っていますわ」

「悪事千里を走るというやつかな」

「お着替えになります」

「うむ」

自分の身じまいをすませたお浦は、いそいそと次の間へ男の衣類を取りに行く。

——そうか、お浦にはおれが子供に見えるんだ。

雷太郎はふっとそこへ気がついて、苦笑しながら、なんとなく一つ目がひらけてきたような明るい気持ちがしてきた。

市村鶴吉が小者を使いによこして、話があるから駒形のつるやへ出向いてくれといってきたのは、おそい朝飯がすんでからまもなくだった。

「お出かけになりますの」

「うむ、行ってみる」

「どんな御用なんでしょうね」

「たぶん、ゆうべの事件の後の相談があるんだろう」

「夕方までには帰ってきてくださいましね」

「なあに、そうはかからないだろう」

「いいえ、あたしはその悪事でないほうのことをおうかがいしたいんです」
「というと――」
市村はちょいと目をみはりながら聞きかえす。
「ゆうべ強盗を二人たたき伏せた風雷太郎さんていう用心棒さんのことなんですけれど」
「なるほど」
「その人、年ごろはだんなとおなじくらいで、鼻筋のとおった、まゆげの濃い、背は高いほうで、がっしりとした男じゃありませんかしら」
お加世は我にもなく真顔になっていた。
「そのとおりだよ。お加世は雷太郎を知っているのか」
「たしかあの人はどこかお旗本の息子さんじゃないかと見ていたんですけど、浪人さんなんですか」
「両方だろうな」
市村はわらいながらこっちの顔色を見るようにして、
「ここへ飲みにきたことがあるのか」
と、そんな察しのいいことをいう。
「市村さまはあの人のことよく御存じなんですか」
「うむ、知っている」
「あの人は前に、馬道で大河原組の乱暴者を俵のようにつかんで投げ飛ばしたんですってね。本当かしら」
「さあ、つかんで投げたは少しおおげさだろうが、強いことはかなり強い。その上、強情っぱりで一本気で、多少変人で、あんなのにほれると女は苦労する。やめておくことだな」
「ふ、ふ、ほれやしませんけれど、たしかに変わっていることはだいぶ変わっているんじゃありませんかしら」
「お加世はどこで雷太郎に会ったんだね」
「この月の十三日、ちょうどあの人が大河原組とけんかをした日の朝なんです」

「ふうむ。すると、十三日の朝なんだな」
市村も急に真顔になってきたようだ。
「あたしは毎月十三日に、観音さまへ朝まいりをすることにしているのです。その日はおみくじをひきました。回廊へ出てひらいてみると凶なんです。無理をしないで時節を待て、無理をすると人に憎まれて災いがくるって、そんなことが書いてあるんです」
「つまり、お加世はなにか願いごとがあったわけなんだね」
「そうなんです。ですから、あたし、観音さまもあんまりつれなすぎるって、つい愚痴をこぼしてしまったんです。すると、うしろからふいに、まあそう気にしないことだなとのんびり話しかけてきた人がいるんです。それが、その雷太郎さんて人らしいんです」
お加世はその時のことを思い出して、なんとなくおかしくなってくる。
「それでどうした。お加世のことだから雷太郎に食ってかかったのか」
「ええ、大きなお世話ですっていってやりました。おみくじはあたしがひいたんで、気にしようとすまいとあなたの知ったことではないでしょうっていうと、しかし、おまえはそのおみくじが凶と出たんで、気にして怒っているんだろう。観音さまを恨んだってしようがない。まあそのおみくじを見せてごらんていうんです」
さすがに敵討ちのことは口にできないので、そこだけはぬかしておく。
「へえ、雷の字はおまえのおみくじまで見たがったのか」
市村はちょいとあきれた顔つきだった。
「それだけじゃないんです。あたしのおみくじを見てて、なるほど、これはちょいと気になるな、しかし、ものは考えようだ、これは時節を待てと観音さまがおまえに忠告しているんだ、怒っちゃいけない、とにかく、凶が気にいらないんなら、このおみくじはおれがもらってやろ

うといって、そのおみくじをたもとへ入れてしまったんです」
「驚いたなあ、雷の字は、なんのつもりでそんなまねをしたんだろう。お加世をここの娘と知っていたのかな」
「いいえ、あたしがあなたはどなたなんですと聞くと、いや、名前など聞かないほうがいい、おれもおまえの名は聞かない、そのほうが後くされがなくていいんだとわらっていました」
「なるほどねえ」
「あたしはそれで考えたんですけれど、あの人はあたしの凶のおみくじを持っていったから、その後で本所の大河原組とけんかをしたり、倉橋屋さんの用心棒になって浪人強盗とぶつかる羽目になったりするんじゃないかと思うんです」
お加世は今になって急にそれが気になってくる。
「まあいいだろう。あの男にはそういう変わったところが前からあるんだ」
「風雷太郎ってのは本名なんですか」
「いや、あれは偽名なんだ。あの男はれっきとした千石取りの旗本の跡取り息子なんだが、家になにかおもしろくないことがあって、このあいだ家出をした。それがこの十三日の朝だというから、その足で浅草の観音さまへおまいりに行って、偶然お加世に出会ったということになりそうだな」
「まあ、本当ですか」
お加世はそんな因縁があったのかと、妙にどきりとせずにはいられない。
「おれにも雷の字がどうして屋敷が気に入らないのかどうもはっきりしないんだが、実はあの男が六つぐらいのとき実父が旅先で急死した。そこで親戚中で相談して実父の弟が跡へなおって、家名をついで、栄二郎という弟が生まれたんだ。どうもその叔父とおふくろさまがいっしょになったというのが気に入らないんじゃない

かと思うんだ」
「だって、それはもう二十年も前の話なんでしょう」
「そうなんだがね、わきから見ていると、親子兄弟、別にどうという変わったところも見えない。うまくいっているようなんだが、雷の字ももう嫁をもらわなくちゃならない年だ。今年たしか二十六だから、決して早いほうじゃない。男っぷりだってあのとおりだし、腕も免許皆伝に近い。嫁をもらってくれという家は降るほどあるんだが、まだ早いの一点張りで、てんで相手にしない。——そういえば、そんなところはお加世に似ているんじゃないの」
市村はにやりとわらってみせる。
「あたしのは違うんですのよ」
「そうか、おまえのは男ぎらいってやつか」
「いいえ、いい人さえあれば、いつでもお嫁に行きます」
「雷の字も口ではそんなことをいっているんだが、ある時ひょいと、おれはどうも女が信用できないんだといったことがある。後で考えてみると、貞女二夫にまみえずという教えに背いて、おふくろさまが叔父といっしょになった。そのおふくろさまというのが、美人で評判の貞女だっただけに、それが不服だった。その子供のころおふくろを叔父にとられたという寂しい気持ちが、長ずるに及んで女の不信にかわってきた。おれはどうもそんな気がしてきたんだ」
「そんなの、男のわがままです」
お加世はむかっとして、我にもなく激しくきめつけていた。
「そうか、男のわがままか」
「わがままだわ。男は何人だっておめかけを持つくせに。——女だって、たった一人の男がいてくれなくちゃ生きていけやしません。そんな風におっかさんを見るのはかわいそうだわ」
お加世は自分の母親を思い出していた。子供のころ、おじさんは元実父の下男で、それが母

親といっしょになったのだとだれからか聞かされて、そのおじさんにきれいな母親が心からつくしているのを見ると、なにか悲しい気がした。が、母が死んでから、母はおじさんがいなくては生きていけなかったのだとだんだんわかってきて、そのおじさんに心からつくしていた母親をしあわせな人だったと思うようになった。男と女の愛情は、おなじように偽りさえなければそれでいいのである。お加世は市村に、いや、雷太郎にまるで自分の母親を責められているような気がして、その気持ちがまんざらわからないこともないだけに、かっと腹が立ってきたのだ。

「おれもそのおふくろさまを責めるのはかわいそうだという気持ちはお加世の味方になるよ。しかし、男は何人もめかけを持つくせにっていうのは、ちょいといただけないな。そういう男もいるし、そうでない男もたくさんいる」

市村は半分はちゃかすような神妙な顔をしてやりかえしてくる。

「市村さまはどっちの男なんです」

「おれは女にはだらしのないほうだが、おめかけは持たない組だな」

「正直におっしゃるのねえ。雷太郎さんはどっちかしら」

「たぶん、おめかけは持つが、お嫁はもらわないほうだろう」

「女が信用できないからなの」

「さあ、そいつはどうかな。いまに当人がここへくるはずだから、気になるんならじかに当人に聞いてごらん」

「あら、あの人がここへくるんですか」

お加世はなにかどきりとして、思わず顔が赤くなるのが自分でもわかった。

思わぬ拾い物

つるやのお加世が、後でぜひ雷太郎さんに会わせてくださいとたのんで、座を立っていくとまもなく、その雷太郎が仲居に案内されて、あいかわらずのんびりとした顔つきで入ってきた。

「やあ、さっそくの御来駕でかたじけのう存ずる」

鶴吉は如才なく迎えながら、それが職掌柄の癖で、素早く客の顔色に鋭い目を働かせている。

「ゆうべはいろいろ世話になった。ありがとう」

雷太郎はなんの屈託もなさそうな顔つきだ。

「なあに、わしは役目であんなことには慣れているが、そっちは後が大変だったろう」

「うむ。しかし、人手がそろっているから」

「どうだね、後家どのはなにかいいごほうびをくれたかね」

鶴吉はそれとなくわらいながら持ちかけてみる。

「くれた」

「どんなごほうびだろうな」

「みんなもらってしまったようなものかな」

雷太郎はあっさりといって微笑している。

「みんなっていうと――」

鶴吉は思わず聞きかえしながら、これは愚問だったとすぐに気がついて、

「驚いたなあ。若だんなは毛ぎらいの多いほうだったはずなんだがねえ」

と、いささかあきれた気持ちである。

「その毛ぎらいをすっかり忘れていたようだ」

「だから、こっちからごほうびをねだる気になったのかね」

「いや、向こうからもらってくれといったんだ」

そういえばお浦のほうが一つか二つ年上のはずである。

「若だんなはこっちの身分を打ちあけたのかね」

それがわかったから、後家も安心してつい気をゆるした、鶴吉の計算でいくとそんなことになりそうだ。

「いや、おれは屋敷のことはまだだれにも話し

ていない。これからも打ちあける気はないんだが、向こうはどこの馬の骨かわからないままでいいという気持ちらしいんだ」

「それでいいから入夫してくれというのかな」

「おれが倉橋屋へ入夫したところでなんの役にも立ちはしないし、無論そんな気持ちもないんだ。ただ好きだから夫婦になる気になった、そんなところなんだろうな」

雷太郎は邪気のない顔をしてわらっている。

「その夫婦っていうのは、一生のつもりなのか」

「一生のつもりだ」

「では、屋敷へはもうどうしても帰らないつもりなんだね」

「そのつもりだ」

「さあ、そううまくいくかなあ」

「おれはねえ、市村、正直にいうと、お浦の中に女というものを見つけたような気がするんだ。屋敷はおれがいなくてもちゃんと立っていくだろうが、おれはもうお浦がいないと寂しくてやっていけないんじゃないかと思う」

当人は大まじめのようだ。

「へええ、またすごいほれ方をしてしまったもんだなあ」

歯の浮くようなことをいうぜと、鶴吉は唖然とした。そんなことを臆面もなく口にできるのは、女を知らない世間知らずの若僧が、はじめて女を知ってのぼせあがっている当座の間だけのことなのだ。

「わしにいわせると、若だんなはお浦後家によって女というものに目がひらけた。これからは立派な女たらしになれると思うんだが、どうだろうな」

酒のきらいな男が酒の味をおぼえると、かえって大酒飲みになる例が多い。それとおなじだと鶴吉は思うのだ。

「なるほど、そうかもしれないなあ」

雷太郎はさすがに照れたように苦わらいをしている。

「あの後家どのはお局さまあがりで、おつに気取ってはいるが、あれでなかなか情が深そうだ。それに、若だんなからいえば姉女房だしな、まあ今のうちに精々かわいがっておもらいなさい」

「ありがとう」

客がきたら膳を出すようにといいつけておいたので、そこへ仲居がちょうど膳を運んできた。

「ねえさん、ちょいとやぼな用談があるんで、ここは勝手にやるから、しばらく昼寝をしてきてもいいよ」

鶴吉は仲居をさがらせて、自分で客に酌をしながら、

「時に、若だんな、困ったことができてしまってねえ」

と、用件を切り出した。

「というと――」

「ゆうべ、若だんながたたき伏せてくれた浪人強盗の片割れが、今朝番所の仮牢で血を吐いたんだ。前から労咳持ちだったらしいんだな」

「ふうむ、あれは労咳病みだったのか」

人のいい雷太郎は、もう気の毒そうにまゆをひそめている。

「つまり、労咳病みでそう先のある体じゃないとわかったから、やけを起こして強盗の仲間になったというんじゃないかな」

「それで、助かりそうもないのかね」

「だめらしいな。こっちはなんとかして逃げた相棒二人のことを口を割らせようとしているんだが、どうも意識がはっきりつかないらしいんだ。あるいは口を割りたくないんでわざと正気がつかないふりをしているのかもしれないが、とにかく医者は今日いっぱい持つかどうかというんでね」

「おれがもう少し手加減をしてたたき伏せておけばよかったんだな」

「まさか、あの場合、そんな手加減をしろといっても無理だろう。一つ間違えばこっちの命がないんだからな。とにかく、伝吉のほうはあん

なことになっているし、これであの片割れに死なれてしまうと、ゆうべの浪人強盗の手がかりはまったくなくなってしまうことになる。それで、ほかになにか若だんなのほうに気がついたことでもないか、今日はそいつを聞きにきたというわけなんだがね」

こっちはわらにもすがりたい気持ちで出てきているのだが、相手は素人の雷太郎だし、ゆうべは色後家いじりにうつつを抜かしていたのだとわかってみると、鶴吉はあまり期待は持てないような気がしてきた。

「どうだろう、逃げた二人のやつは、本物の浪人強盗なのか、それとも人がやるんならおれもやってみようという出来心のやつか、だんなの見こみはどっちなんだろう」

雷太郎がちょいと味なことを聞く。

「あの二人は本物くさい気がするんだ。大体、浪人強盗は押しこむとすぐ、家の者をみんな縛りあげてから、ゆうゆうと仕事にかかる。手向かいするやつはかまわず切りすてるという凶悪な手口なんだが、ゆうべのはまるでやり方が変わっている。というのは、ゆうべの浪人組は伝吉にたのまれて、用心棒の若だんなを切るのが第一の目的だった。それから、店へ押しこんで奉公人たちを縛ることにしていたんだろう。奥は無人だということも、間取りがどうなっているかということも、伝吉から聞いてみんなよく知っているわけだ。しかも、あの風では、奥で少しぐらい物音がしたところで店まで聞こえるはずはない」

「そのとおりなんだ。現に、大番頭も忠太が知らせに行くまではなんにも知らなかったといっている」

「ところが、いざ踏んごんでみると、肝心の後家どのの寝間が表座敷のほうへかわっていて、伝吉が押しかけていくと、そこに用心棒が入りこんでいたわけだ。伝吉は浪人組を呼べばよかったんだが、あんまりいいところを見せつけられたんで、ついかっとなってしまったんだな」

「いや、あの時はまだ別にいいことをするところまで話は進んでいなかったんだ」

雷太郎は正直に訂正を申しこむ。

「それはまあそうだろうな。いっしょに寝ていたんでは、若だんなのほうがやられていたかもしれないからね。とにかく、伝吉のほうは自業自得で、あっけなく飛んで灯に入る夏の虫になってしまったが、そこで、奥へ残った浪人組二人のほうだ。伝吉と労咳浪人が二人で表座敷へ飛びこんでいったんで、用心棒のほうはたぶん大丈夫だと見た。しかも、目の前に金蔵がある。二人のうちどっちかが、錠を破るこつを知っているんだ。だから、早いところ蔵のとびらをあけて千両箱を持ち出したんで、錠破りができるようなら、出来心のやつではなく、前にも押しこみの経験のある浪人強盗と見ていい」

「そうか、おれは蔵のとびらは伝吉があけたんだと見ていたが、なるほど、伝吉にはそんな暇もないし、まだ蔵をあける気などにはなれない場合だったな、あの時は」

「それに、千両箱を持ち出すようでは、やつらは花川戸河岸に舟をつけているし、無論、裏木戸の外に見張りが一人ついていたはずなんだ」

「なるほど――。すると、賊は四人組みではなくて、五人組みということになるんだね」

「どうだ、逃げた二人になにか気がついたことはないかね」

「あるにはある」

「あるか、若だんな」

鶴吉は我にもなくひざを乗り出している。

「ゆうべはついロに出しそびれていたんだが、あの二人はおれの顔を見て、雷太郎だなといっていた。たしかにおれを知っているやつなんだ。伝吉は本所の大河原の賭場にもぐりこんでいて、伝内に千両の無心をたのんでいる。まさか伝内が強盗を働くとは思えないが、大河原の屋敷にはいつも食い詰め浪人が何人か居候をきめ

こんでいるというからな」
「そうか。あの屋敷にはごっちも前から目をつけていたんだが、逃げた二人が若だんなの顔を知っていたとなると、これはたしかに臭い。二人に一人で、二人のほうが逃げ出したのは、若だんなの強いのを見て知っていたからだということになる」
鶴吉は急に目の前が明るくなってきたような気がした。
「だんなは本所に定十という渡世人のいるのを知っているかね」
「知っている。その定十というのが、大河原の屋敷を借りて賭場をひらいている親分なんだ。もっとも、小ばくち打ちのほうで、そう大した親分じゃない」
「おれが馬道で大河原とけんかになりそうになった時、その定十という男が間に立って口をきいたんだが、大物でなければなお御しやすいだろう。定十を使って、うまく大河原の居候どもの様子をさぐり出させるわけにはいかないかね」
「そいつはいいことを聞いた。ありがとう」
そうわかってみると、もうのんきに昼飯どころではなくなってくる。駒形の自身番に手下の者たちを待たせてあるのだ。
「若だんな、わしはちょいと中座して、さっそく小者たちに指図をしてくるから、しばらく一人で飲んでいてくれないか」
「いいとも、おれのことなら気にしてくれなくてもいいんだ」
「すまんな。そのかわり、今、わしのかわりに珍しい相手をここへよこすから、たのしみに待っていてくれ」
鶴吉は冗談のようにいいながら、もうさっさと立ちあがっていた。こっちはそんな変わり者同士をかみあわせて、のんきによろこんでいられる場合ではなくなってきたからだ。

わかった敵

「お加世、おれは急用ができて、ちょいと出かけてくる。すぐもどってくるから、おまえしばらく雷の字の相手をしてやっていてくれ」
市村にそうたのまれたお加世は、新しい銚子を持って、どんな顔をするかしらと、なにかわくわくするような気持ちで二階の座敷へあがっていった。
「ごめんくださいまし」
ふすまの外から声をかけて、わざと澄ました顔をして入っていくと、
「おやっ」
雷太郎は、案の定、びっくりしたように目を丸くした。
「いらっしゃいまし」
「驚いたなあ。おまえはここの娘だったのか」
「加世と申しますの。あたしはこの間うちから、風雷太郎さんて人のうわさを聞いて、ことによるとあなたじゃないかしらと、そんな気がしていました。ですから、さっき市村さんに聞いてみたんですけれど、やっぱりあなたでしたのね」
お加世は銚子を取りあげながら、やっと会えた、そんななつかしい気持ちでいっぱいである。
「市村におみくじの話をしたのか」
「話しました。あなたはあのおみくじまだお持ちになっているんですか」
「うむ、ここに持っている」
雷太郎はわらいながら左のたもとへ手をやってみせる。
「捨ておしまいになればいいのに。そんなおみくじを持っているから、危ない目にばかりお遭いになるんじゃないかしら」
「いや、これをおれが捨てると、おまえのところへまた凶が帰っていく。そんな気がしたんで、そのままにしてあるんだ。別にじゃまになるようなものじゃないしね」
「うれしいわ」

この男のそういう親切さが、倉橋屋の色後家の気に入ったのかもしれないと、お加世は小耳にはさんでいるそんなうわさをふっと思い出して、我にもなく急にねたましい気がしてきた。

「それで、敵のほうの手がかりはその後なにかついたのかね」

男もまたあの時の話を思い出したらしく、あらためて聞く。

「いいえ、敵の手がかりは前からちゃんとついていますのよ。ただ向こうの身分があんまり高すぎて、どうしても近づく手だてがつかないんです」

「ふうむ。そんなに身分が高いのか」

「そのころ、堺のお奉行さまだった人なんです」

「堺奉行ねえ。そんなお奉行さまが、なんでまた人から敵とねらわれるようなへたなことをやったんだろうな」

男は解せないといったような面持ちで、濃いまゆをひそめている。

「そういえば、雷太郎さんは敵討ちはきらいだって、この間いってましたね」

「おれは自分の手で相手を切る敵討ちは、もう時代おくれだと考えているほうなんだ」

「じゃ、こんな話をしてもつまらないんじゃないかしら」

そのくせ、お加世はこの男にだけは自分がしょわされている因果話をぜひ聞いてもらいたいような気持ちになっている。

「敵討ちはおみくじと違って、おれがもらってやるというわけにはいかないが、相談相手ぐらいにはなれるかもしれないから、話してもかまわないところだけ話してみろよ」

「話をお聞きになって、納得がいったら助太刀をしてくれますか」

「納得がいけば、無論助太刀をする」

「きっとですね」

「おれはうそはいわないことにしているんだ」

「たのもしいわ。この話はまだだれにもしていないんですけれど、うちの死んだおとっつぁんは、元、堺でも五本の指の中に入る唐物問屋だったんです。それが抜け荷の疑いをうけて奉行所へつれていかれ、牢内で一服盛られてしまいました。毒殺されるくらいですから、本当に罪はなかったに違いありません。おまけに、おっかさんの体まであぶなくなったので、そのころあたしはまだ生まれたばかりでしたけれど、下男に助けられて、おっかさんとあたしは江戸へ逃げたんだっていいます。その下男が今のおじさんなんです」

「それは何年前ぐらいの話なんだ」

「あたしは今年二十ですから、十九年前ということになります。おっかさんは五年前に三十六で死にましたが、その時あたしだけにその話をして、そのころのお奉行さまがおとっつぁんの敵なのだといいました。お奉行さまはうちの財産といっしょにあたしまで取りあげておめかけにしたかったのだ。だからおとっつぁんにありもしない抜け荷の疑いをかけて牢屋へ入れ、調べがはじまると面倒だから、すぐに毒殺してしまったんだ。幸い、おじさんが、お奉行さまはあたしまで召し捕るつもりだということをどこからか聞いてきて、その夜のうちに堺を立ってしまったから、無事にこうして生きられたようなものの、あたしはどうかしておとっつぁんの敵を討ってやりたいと、そのことだけは一日も忘れたことはない。けれど、おまえを育てるためにおじさんといっしょになってこの店をはじめてみると、店をやっていくというだけが精いっぱいで、敵討ちまでは手がとどかなかったというんです」

「すると、おふくろさまは夫の敵討ちのことはおじさんにはいっていなかったのか」

「おじさんにそんな相談をしてもとても無理なんで、いざという時までは黙っていることにしたんだといっていました。だから、おまえは立派な侍を夫に選んで、いっしょにおとっつぁん

の敵討ちをしてくれるようにっていう遺言だったんです」
「おまえもそのことはまだおじさんに話していないわけだね」
「あたしもその時がくるまでは、おじさんには打ちあけないつもりでいるんです」
源吉は実直な男で、死んだ母親や自分を大切にして、つるやをここまでの店に仕上げる腕はあっても、敵討ちなどというものにはおよそ縁の遠い人柄なのである。
「すると、お加世はいまの話を死んだおっかさんから聞いて、それをそのまま信じているわけだな」
「ええ、これはおっかさんの遺言なんです」
お加世はきっぱりといいかえす。遺言にうそはないはずだからである。
「父親が牢内で一服盛られた。盛ったのは時の堺奉行だという事実を、だれかもっとほかの者からも耳にしたことがあるかね」
「そんなこと、無理ですわ。おっかさんが死んだ時でさえ、もう十四、五年もたっているんですもの」
「じゃ、堺の店はいまどうなっているんだね」
「その後しばらく、おとっつぁんの弟がついていたそうですけれど、二、三年で店はつぶれて、その叔父さんも行方知れずになっているんだっていいます」
「そうか、この敵討ちは少し難しいようだな、お加世」
雷太郎は深いまなざしになって、気の毒そうにいう。
「どうしてなの、雷太郎さん」
「この間の観音さまのおみくじには、賢人も時にあわざる形なりとある。賢人をお加世になおすと、お加世も時にあわざる形なりとなる。そして、我が知恵をもって世に交わらんとすれば、かえって人に憎しみをうけ災い来る。つまり、自分の考えだけで敵討ちをしてはいけないと戒

めているんだ」
雷太郎はとんだところへおみくじを引き合いに出してくるのだ。
「ですから、あたし、雷太郎さんに相談しているんですわ」
「それなら、わしの考えをいってみよう。おまえの父親が堺の牢内で毒殺されたということは、ありえないことではなかろう。まあ事実だとしておいても、それが町奉行に悪意があって毒殺させたのか、下役の者が金で人にたのまれてやったことか、それをまず調べてちゃんとした証言か出てこないかぎり、だれが敵なのかわが知恵だけで勝手にきめるわけにはいかない。そうだろう」
お加世はあっと目をみはりながら、
「じゃ、おっかさんの遺言は信用できないっていうんですか」
と、思わず顔から血の気がひいてくる。
「おっかさんはそう信じていたかもしれないが、そのおっかさんも人から話に聞いただけでその夜のうちに堺を逃げ出しているんだから、自分で事実をつかんでいるわけじゃないんだろう」
「無理ですわ、そんなこと。おっかさんはぐずぐずしていればつかまってしまうんですもの」
「しかし、事実を調べる手だては、その直後ならいくらもあったわけだ。もし間違って敵討ちなどしたら、それこそ討たれた当人は気の毒だぐらいではすまなくなるからね」
理屈はたしかにそのとおりだが、いまさらそんなことをいわれたって、そのころの堺奉行が親の敵だと、長い間いちずに思いこんできたお加世の腹の虫は、どうにも納得できないものがある。
「それなら、雷太郎さん、今からでもその時の真相を調べ出す手だてがなにかあるというんですか」
「それはあるだろう。決してないことはないは

ずだ」
「もう十九年もたっているんですよ」
「しかし、敵はまだ生きているんだろう」
「それは生きています。敵に聞けっていうんですか」
「いや、敵にそんなことを直接聞かなくても、相手はともかくも堺奉行なんだ。当時の下役の間に、まだ生き残っている人間がいくらもいるはずだ。それを手がかりにして、それからそれへと糸をたぐっていく」
「じゃ、堺へ行くんですね」
「そうだ。座っていて敵を討とうなどというのはぜいたくすぎるからな」
「わかりました。あたし明日江戸を立ちますから、雷太郎さんもいっしょに行ってください」
お加世はかっとなって、そんなむちゃくちゃな言葉がつい口から出てしまう。
「おれにいっしょに行けっていうのか」
男はあきれた顔をしている。
「そうよ。あなたがそんなことをいい出したんですから、あなたにも責任があると思います」
「まあ待て――。一体、その敵というのはだれなんだ。おれは絶対に人には口外しないから、打ちあけてみろ」
「毒殺されたうちのおとっつぁんは大和屋嘉兵衛、毒殺した堺奉行は天野主膳、いま勘定奉行をつとめている天野和泉守です」
「冗談いうなよ」
男はびっくりしたような顔をして、
「そうか、そんな話があったのか」
と、まじまじとこっちの目を見すえている。
「じゃ、雷太郎さんは天野を知っているんですね」
「知っている。堺奉行だった天野主膳はおれのおやじで、当時江戸へ呼びもどされる途中、三島の宿で急病死している。いま勘定奉行の和泉守はその実弟で、兄の跡へなおったおれの叔父、いまはおれの義父ということになる」

お加世はどきりとして、こんどこそ本当に真っ青にならずにはいられなかった。

お雪という女

「妙なことになったもんだなあ、お加世」
二人が敵同士の縁につながれていたとは、お加世もびっくりしたろうが、雷太郎もまったく意外だった。
「雷太郎さん、もう一度はっきりうかがいたいわ」
お加世は激しい目で、必死にこっちを見すえてくる。
「よし、なんでも聞いてくれ」
「あなたのお父上は、本当にそのころの堺奉行の天野主膳さまなんですね」
「そうだ」
「その主膳さまは、江戸へ帰る途中、三島の宿で病死されているんですか」
「うむ、おれの七つの時の秋だ」
「いま勘定奉行の天野和泉守さまは、雷太郎さんの叔父上なのですね」
「つまり、主膳の実弟で、おれがまだ子供だったから、親戚が相談の上、兄の跡へなおって家督をつぐことになったのだ」
そのころは祖母がまだ健在で、親戚中が相談の上というより、祖母のたっての希望で、母がそれを納得したというのが事実だったようである。
「じゃ、あたしはだれを親の敵とねらえばいいんです」
お加世は底意地の悪い顔になって挑戦してくる。
「それは主膳の嫡子はおれなんだから、おれがねらわれることになるんだろうな」
「じゃ、じゃ、雷太郎さんはあたしに討たれてくれますか」
「おまえ、おれがぜひ討ちたいほどおれが憎めるかね」

雷太郎はいささかあきれながら、お加世のきつい顔を見なおす。

さすがにお加世もすぐには返事ができないようだ。

「さっきもいうとおり、お前の父親大和屋嘉兵衛は無実の罪で牢死させられた。それが事実だとすれば、その時の奉行は主膳なのだから、主膳にも監督不行き届きの責任はまぬがれない。しかし、大和屋をそういう無実の罪におとした直接の敵がほかにいた場合、それを見のがしておいて、主膳を敵とねらうのは少し見当違いということになりはしないか」

「あたしに本当のことをもっとよく調べろというんですね」

「無論、真相をはっきり調べる責任はそっちにもある。また、おれとしても、死んだおやじさまにそんな冤罪をいつまでも着せておくわけにはいかないから、できるだけの手はつくすつもりだ」

「あたしはどうしても一度、堺へ行ってこなければいけないんですか」

「そういうことになるんだろうな」

「十九年も前のことが堺へ行ってわかるかしら」

お加世は当惑をかくしきれなくなってきたようだ。

「それがわからなければ、この敵討ちは無理だ。おれだって無実の罪でおまえに討たれるのは困るからな」

「ですから、あたしといっしょに堺へ行ってください。そうすれば、本当の敵がわかるかもしれないんだもの」

「まあ待て——。おれのほうには幸い当時おやじさまについて堺へ行っていた用人が、健在で屋敷にいる。これに当時の事情を聞いてみることにする。おまえのほうにも、直接その事件に関係のある当時の下男源吉がおなじ家にいるんだ。おまえは源吉からできるだけその時のことを聞き出してみろ。両方の話の中から、思わぬ手がかりが出てくるかもしれない」

「そうね」

お加世はなにか浮かない顔つきである。

死んだ母親でさえ源吉には敵討ちのことを打ちあけていなかった。その源吉にそんな相談をしても、はたしてたよりになってくれるだろうかという不安がお加世にはあるのだろう。

「雷太郎さんはどうしてお屋敷を家出なんかしたのかしら」

お加世はふっと思い出したように聞く。

「そうだな。正直にいうと、屋敷にいると嫁をもらえといってうるさい。それに、おれは家督をつぐのが窮屈でいやなんだ」

「八丁堀の市村さまが、雷太郎さんは女が信用できないんだろうっていってました。本当かしら」

お加世の顔へ急にほんのりと娘らしい血の気がさしてくる。

「おれとおまえは敵同士で、場合によってはおれはおまえに討たれてやらなければならないんだ。うそをいったところでしようがないから、本当のことをいうとな、おれは叔父貴が決してきらいじゃない。しかし、その叔父貴に大切なおふくろを横取りされたような気がして、子供のころからこれだけは納得できなかった。それに、おれのおふくろは貞女型で、叔父貴に心から仕え、深い愛情さえ持っている。夫婦になったからにはそれが当然なんだが、なんとなくそれも気に入らなかった。つまり、父親を失った子供のひがみというやつなんだろうな」

いまはそれをさばさばと口にできる雷太郎になっていた。

「いまはどうなのかしら。女はやっぱり信用できないんですか」

「そんなことはない。おれも少しおとなになったようだ」

「お浦さまに仕込まれたのかしら」

お加世は目でわらってみせる。
「おまえ、娘のくせにずばりというんだなあ」
「それは、敵の娘ですもの。歯に衣はきせませんのよ」
「なるほど――。敵のせがれにおんぶして、敵討ちをしようという鬼娘だからな」
「おんぶなんかするもんですか。踏み台のつもりですのよ」
お加世はだんだん大胆になってくるようだ。
「やれやれ、お浦が聞いたら泣くだろう」
「お浦さまはそんなに本気なのかしら。お金持ちの浮気じゃないんですか」
「そうでもなさそうだよ。姉女房だからね」
「じゃ、あたしが踏み台にいっしょに堺へつれていくといっても、承知しないんじゃないかしら」
「いっしょについていくぐらいのことはいうかもしれないね」
「怖いなあ。あたしがあなたを討つ前に、あたしのほうがお浦さまに討たれてしまうかもしれない」
お加世はわざと肩をすくめてみせながら、
「うちのおっかさんも、おじさんを敵討ちの踏み台にするつもりだったのかもしれません。でも、女はだめなのね。おっかさんもいつの間にかおじさんの貞女になりきってしまって、自分でもそんな気をどうしようもなかったんじゃないかしら」
と、正直にかなしそうな顔をする。
「そうかもしれないな。その重荷をこんどは娘にしょってもらう。正直にいうと、少し無理なんだ」
「いいえ、無理でもあたしは鬼娘ですからおとっつぁんの敵はきっと討ってみせます」
お加世はまたしても反抗的になってきたようだ。
「よかろう。おれが敵とわかれば、いさぎよく討たれてやるし、もし真相がわかってほかに下

手人が出てきたら助太刀もしてやる。ただ大切なことは、あくまでも知恵で真相をさぐり出すということなんだ。それでないと、本当の敵討ちにはならない」
「いいわ、あたしにだって知恵はあります。親の敵討ちなんだもの」
おみくじに愚痴をこぼすような知恵では、あまりたよりになりそうもないとは思ったが、それは口にせずに、その日はお加世と別れた。
それにしても、死んだ父親がこの十九年来、お加世親子に敵とねらわれていたのは、まったく思いもかけないことだった。
とにかく、仏のためにもこの真相だけは明らかにしておかなくてはならない。
――用人田宮孫作がうまく当時のことを知っていてくれると事は簡単なんだがな。
それでないと、どうしても一度堺まで出向いてこなければならなくなりそうだ。
一方に浪人強盗というやっかいな敵にねらわれている場合なので、さすがの雷太郎もちょいと気が重い。
駒形のつるやを出て河岸っぷちづたいにやがて吾妻橋のたもとへ出てくると、時刻はちょうど八ツ（二時）さがりで、浅草広小路からの人の流れがまだぞろぞろと橋の上へかかっていく。
その人の流れの透き間を縫って、花川戸河岸のほうへ突っ切っていこうとすると、
「あら、兄さん、いいところで出会ったわ。うれしい」
広小路のほうからきた二十三、四のこいきな年増が、いきなりこっちの左腕をつかんできた。
「はてな――」
見知らぬ女だから、思わず顔を見ていると、
「いやだわ、そんな――。照れなくたっていいじゃありませんか。ぜひ話したいことがあるんです。いっしょに来て」
女はなれなれしくこっちの体を体で押すよう

にして、ぐんぐん吾妻橋へかかっていく。
まわりの者たちはにやにやとわらいながら歩いていたが、それも橋へかかるとたちまち人の顔が変わって、もう若い男と女の二人づれとしてだれも怪しまなくなっている。
「おまえはだれだっけなあ」
雷太郎はぴったりと寄りそって歩いている女に小声で聞いてみた。
「お雪っていうのよ。助けて、——悪いやつに追われているの」
女は早口にいいながら、顔は平気でわらっている。
「そうか、ただこうして歩いていればいいのか」
「それでいいのよ。少しぐらいかわいいと思ってくれなくちゃ」
「つまり、いい仲の二人と見せかける必要があるのか」
「わざわざ見せかけなくたって、こうして歩いていればもうみんなそうだと思っているわ」
これは大変な女のようだ。この女がどんな悪いやつにねらわれているのか、雷太郎は見当がつかなくなってくる。

きんちゃく切りの話

吾妻橋をわたりきると、細川家の下屋敷へ突き当たる。右へ行けば本所河岸が両国までつづいているし、左へ行けばまもなく源森橋をわたって向島土手へ出る。
お雪は雷太郎を誘って源森橋のほうへ足を向けた。この辺までくると、急に人通りがまばらになってくるから、正直なものである。
「あねご、約束の源森橋が見えてきたな」
右手は中ノ郷の草っ原になって、この辺には瓦焼き場の小屋がところどころに建っていた。
「兄さんはあたしに別れて、早くお浦さまのところへ帰りたいんでしょ」
「うむ、早く帰ってやらないと、お浦が心配するんだ」
決して品のいい女とはいえないが、ひどく色っぽい上に、ただの育ちとは違う度胸のよさを持っているようだ。
通りすがりの男が、みんなくすぐったそうな顔をしてこっちを見ていく。
「どこまで付き合えばいいんだね」
「そうねえ、源森橋へ出るころまでには、悪いやつが正体をあらわすかもしれない」
「おれはあんまり役には立たないぜ」
「おっしゃるわ。倉橋屋の後家さんの役にはずいぶん立っているくせに」
女は軽くとんと肩を肩へぶつけてくる。
「驚いたなあ。おまえおれを知っているのかね」
「存じあげておりますの。浅草界隈で風雷太郎さまを知らないのは、三社さまの氏子じゃございませんのよ」
「はあてな、それはお浦の声色か」
「まあ憎らしい。ちゃんとわかるのね。おやすくないんだなあ」
「女は若い御亭主を持つと、ほかの女にとられやしないかと思ってとても苦労するんですってね。お気の毒さまみたい」
「なあに、それで苦労するのがまた結構うれしいらしいな」
「おっしゃるわ、この人。そんなにでれっとするのおよしなさいよ、みっともない」
「やけるのか、あねご」
「いったな、憎らしい」
お雪は本気になって、いやというほどこっちの二の腕をつねってくる。
「痛いっ。乱暴なんだなあ、おまえは」
雷太郎があきれて苦笑した時、
「おい、お雪、ちょいと待ってもらおうか」
ふいにうしろから声をかけてきた者がある。
「あたしですか」
お雪はけろりとした顔つきでそっちを向く。
相手はきちんとした身なりだが、どこかやくざっぽい二人づれで、二人とも目が剃刀のよう

に鋭い。
「お武家さん、おまえさんはいまお雪につねられていたようだが、その女とはどんな仲のお方なんだね」
兄貴分らしい男っぷりのいいほうのやつが、横柄に雷太郎を見すえてきた。
「おまえたちの目から見ると、どんな仲に見えるね」
「よしてくんな。おれたちはここでおまえさんとお茶番の掛け合いばなしをやっているほどのんきな暇人じゃねえんだ。話はさっさと片づけてもらいたいね」
「そうか。一体、おまえたちはどこのだれで、おれにどんな用があるんだ」
「そんな立派な口をきくと、後でおまえさんとんだ赤い面をしなけりゃならねえぜ」
「せっかくだが、おれはさるにはまだ縁のない男だ」
「さあ、そいつはどうだかな。おれの目から見ると、おまえさんはその女にさる芝居の太夫にされているとしか思えねえ。おまえさんはその女が裸弁天のお雪という札つきの女きんちゃく切りだと承知の上で、そうやってでれついて歩いているんかね」
真っ向から一本びしゃりとやられて、雷太郎は内心ちょいと啞然とはしたが、
「いや、おれはただのお雪と友達になって歩いているだけだ」
と、軽くうけ流しておく。
「そうれ見なせえ。おまえさんはなんにも知らねえんじゃねえか。黙ってそのお雪をおれたちに渡してもらいたいね」
「すると、おまえたちは岡っ引きなのか」
「そんな者じゃねえ。おれたちは並木町の亀田屋一家の身内で、おれは仙太、連れは弟分の庄吉。その女はおれたち一家のなわ張りへあいさつもなく入りこんできやがって、おれたち仲間のはたいたやつをいつも横からきてさらってい

きやがる。やることがあんまり面憎いんで、今日は親分のところへ引っつかまえていって、見せしめのために仲間の仕置きをしてやるんだ。職のことはおまえさんたち堅気の知ったことじゃないんだから、おとなしく手をひいてもらいたいといってるんだ。これでもまだわからないかね」
仙太は臆面もなく嵩にかかってのべたてる。
「ふうむ。すると、おまえたちもきんちゃく切り仲間なのか」
「そうだよ。すりは職だからね、ぬすっとexcept違うんだ」
「そのすり職のおまえたちが、堅気の者のふところをねらってすったのを、このお雪がおまえたちのふところからまたすっていく、それがけしからんと怒っているのか」
「あたりめえよ。仲間が仲間のものをねらうなんてことは仁義にねえことだ」
「それは少しおかしいな。おまえたちは立派なすり職なんだから、せっかくすったものをこのお雪にわざわざすらせてやることはないと思うんだがね」
「なんだと――」
「すられないように用心をしていれば、すられなくてもすむんじゃないのかね」
「おやあ、おめえさんはどうしてもお雪の肩を持とうっていうのか」
「いや、別に肩を持つわけじゃないが、立派な男のすり職が、女一人の腕にかなわないから腕力でつれていって仕置きをしようというのは、おれは感心できないというんだ」
「だから、職のことは堅気の知ったことじゃねえとことわってあるじゃねえか」
「そんな理屈はとおらない。おまえたちは、すられた堅気は間抜けだからすられるんで、だからすりは職だとうぬぼれているんだろう。そのすり職がお雪にふところのものをすられれば、やっぱりすられたほうが間抜けということにな

るんだ。そうは思わないかね」
雷太郎はにやにやわらい出す。
「くそっ、ぬかしやがったな」
いい負かされた仙太は、かっとなってふところの匕首に手をかけたが、こんな時は弟分の庄吉のほうがもっと荒っぽくできているらしく、
「くたばれ、さんぴん」
早くも抜いた匕首を両手で胸にかまえ、だっと地をけって体ごとこっちへ体当たりにぶつかってきた。度胸一つの猛烈な殺し屋戦法である。
「あぶないっ」
雷太郎はわずかに上体を左へひらいて匕首をかわし、空を突いて前のめりになった庄吉の腰のあたりをとっさに一つ足蹴にしたので、
「わあっ」
庄吉はたわいもなく草っ原のほうへ横っ倒れにころがっていく。
「くそっ」
そのすきに仙太が匕首を抜いて、これも両手で胸へかまえて、目をつりあげて一気に体当たりに出ようとしたが、
「ばかっ」
それより早くお雪の甲高い罵声が飛んで、その手からなにか白いつぶてがはっしと仙太の眉間へ投げつけられていた。
「う、うっ」
白いつぶては卵の殻に仕込んだ目つぶしだったらしく、それがうまく眉間に当たってこわれたので、仙太は目つぶしにやられてがくんとそこへ両ひざをついてしまう。
「さあ、行きましょう、若だんな」
お雪は素早く雷太郎のたもとをつかんで、もうさっさと源森橋をわたり出す。
橋をわたった右手が水戸さまの下屋敷である。
「おどろいたでしょ、雷太郎さん」
お雪がわらいながら聞く。
「おまえはいい度胸のようだな。感心したよ」

「うそばっかし——。あたしが女きんちゃく切りだと聞いて、本当はあきれているんでしょう」
「正直いえば、少しびっくりした。あの二人につけられているとわかったんで、おれを道づれにしたのかね」
「それもあるんだけれど、実はこれからいっしょに行ってもらいたいところがあるのよ」
「やれやれ、するとまだ暇はもらえないわけだな」
「こんどはそんな危ないところじゃないから御安心なさいまし」
お雪はしっかりとたもとをつかんで歩きながら放そうとしない。
「あねごはどうしてすり職のうわまえなんかはねて歩くんだ」
「あたしはきんちゃく切りが憎いんです」
「というと——」
「こんなこと若だんなに話したってしようがないけれど、あたしのおとっつぁんはあたしの七つの時、すりに大切なお金をすられてからやけになって、身を持ちくずして死んでしまいました。それが悔しくて、あたしもいつか人のふところをねらうようになったんですけれど、十五の時、堅気の人のふところをねらったんではあたしもおとっつぁんのような気の毒な人をこしらえてしまうかもしれないと気がついて、それからはきんちゃく切りのふところばかりねらうことにしたんです」
「なるほど——」
「ふ、ふ、ばかな女だな、そう気がついた時、どうして堅気にならなかったんだと、あんたおなかの中でわらっているんでしょ」
お雪はじろりとこっちの顔を横目でにらんで、自嘲するようにわらってみせる。
「まあそうひがむなよ。人にはだれしも自分のいい分というやつがあるもんだからな」
こういう意地の強い女にまともな説法は通じないと見たから、雷太郎は軽くうけておくこと

にした。
「兄さんはものわかりがいいのね。その上やさしくて、しかも強いから、お浦さまにかわいがられるわけだわ」
「いや、それは少し違うんだ。おれはあんまり人がよすぎて、一人でほっておくと危ない。お浦にはそんな気があるんだな」
「あら、若だんなはそんなに人がいいの」
「どうもそうらしい。人がいいもんだから、こうしておまえにも引っぱりまわされているんだ」
「ふ、ふ、そういえばそうね」
お雪はおかしそうにわらい出して、
「お浦さまは兄さんの帰りがおそいんで心配しているかもしれないな。今日はどこへ行ってきたの」
と、からかうように聞く。
「今日はな、親の敵を討ちたいという娘のところへ行ってきた帰りだ」
「助太刀をたのまれたの」
「まあ、そんなところだ」
「およしなさいよ、ばからしい。他人を助太刀にたのむような人に、親の敵なんか討てるもんですか」
「なるほど、おまえは自分の手で親の敵を討っているんだからな」
「そうよ。あたしはすりは職だなんて鼻にかけているやつが腹が立ってしようがないんです。すりにお金をすられたために、うちのおとっつぁんのようになって死んだり、そのとばっちりを食ってあたしのようにぐれてしまうかわいそうな女がどのくらいあるかしれやしないんです。だから、あたしはすったやつからまたすりかえして、すられた人にかえしてやることにしているんです」
「ふうむ、すられた人にかえしてやるのか」
「そうよ。ところがね、そのかえし方がなかなか面倒なのよ。うっかりこれはあんたがすられた財布でしょなんてそんなものを出してやると、こっちがすりに間違えられてしまうことがあるんです」
そんな話になると、お雪の顔はいきいきと輝いてくるようだ。

貧すれば鈍する

江戸はまもなく花の季節をむかえようとしているから、向島土手の桜並木も枝いっぱいにつぼみが目立つほど紅を含んでふくらんでいた。
このあたり、対岸に待乳山から今戸河岸あたりを見わたす隅田川のながめも、風はまだ少し冷たいがめっきり春めいてきている。
「まもなくここも花が咲くなあ、あねご」
雷太郎は桜並木を見あげながら、ついのんびりとそんな言葉が口に出る。
「そうよ、またすり職どものかせぎどきがくるわ」
お雪は花の話などにはなんの興味もないらしく、ぴしゃりとやりかえしてくる。
「なるほど。——すると、あねごのはね職のほうもいそがしくなるわけだ」
「どうお、兄さん、花どきの間だけでも、あたしの相棒になってみない。おもしろいわよ」
「そうだなあ、お浦に相談してみよう」
「またお浦か。うんざりさせるのねえ」
「そこで、あねごはうんざりしながら、おれをどこへつれていこうというんだね」
「そんなに行く先が気になるの」
「おれはこれでなかなかいそがしい体なんだ」
「ふうんだ、早く家へ帰りたいんでしょ」
「それもある」
「だめよ。若だんなは親切でお人よしなんでしょ。だから、ぜひ面倒を見てやってもらいたい人があるのよ」
お雪はなにか一人できめてしまっているようだ。
「はあてね、まさか敵討ちの助太刀をしてくれというんじゃないだろうな」

「そんな景気のいい話じゃありません。こんどのはぐっとしめっぽい話なんです」
「あんまりしめっぽい話もおれは苦手なんだが、まあ話してみろよ」
「なんだか迷惑そうだなあ」
「迷惑はなるべく我慢しなくちゃ、男は親切なお人よしになれないんだ」
「そのとおりよ。若だんなはそれを種にしてまんまとお浦さまのところへ入りこんだんだから、少しぐらいは他人にも親切にしないと、食わせ者、うそつき、見かけ倒し、後家たらしになっちまうのよ」
「おまえははたくほうも名人らしいが、押しつけるほうも名人らしい。よし、そのしめっぽい話というのを聞いてやろう」
憎まれ口をたたきあっていてはきりがなさそうなので、雷太郎は苦わらいをしながら話の先をうながす。
「本気で聞いてくださいよ。去年の暮れ、あたしは浅草広小路である浪人さんが紙入れをすられるところを見たんです。それが、これから遊びにでも行くような金なら、相手はとにもかくにも二本差しなんだから、すりにふところをねらわれるなんてだらしがないなあとわらって見のがしたんだけれど、その浪人さんはかなり身なりもくたびれているようだし、ひどくなにか考えこんで歩いている。これは年越しの金をこしらえてきたんだなと見たんで、あたしはいたいたやつのふところからすぐにまた横取りしてやったんです」
「一体、その横取りってのはどんな風にやるんだね」
雷太郎はつい聞いてみたくなる。
「だから、相棒にならないかっていってるでしょ」
「まいった。——他人がはね職の秘訣を聞いちゃ悪かったな」
「秘訣なんて聞いただけでわかるもんですか。歩いているやつのふところをねらうのはたいてい人ごみの中で、すれ違いざまに軽くとんと突き当たる。ごめんなさいといって、相手の右がわをすりぬけた時は、もうすったものはこっちのふところかたもとへおさまっているんです」
よっぽどあまのじゃくにできている女とみえて、こっちが聞きたがらないと自分のほうから話し出すのだ。
「じゃ、おまえもその男に突き当たるのか」
「違うのよ。あたしのはすり職の跡をつけていてはたくんだから、すれ違うわけはないでしょ。ごめんなさいといって、うしろから突き当たって、敵の右がわを前へすりぬけるの。当人はうまくいったと一息ついている瞬間だし、まさかきんちゃく切りのふところをねらっているやつがあるとは考えてもいないから、つい油断している。そこにこっちの呼吸があるのよ」
「なるほど、相手の虚につけこむわけだな」
「そうよ」
「失敗したことはないのか」
「まあないわ。あたしにはその時の敵の体つきで、敵がどこで息をつくか、ここだという時が勘でちゃんとわかるんです」
「恐ろしいもんだな」
「その時も、紙入れをこっちへもらって、中をあけてみたわけじゃないけど、三両と少し入っているなとわかりました。浪人さんにとっては大切な金に違いないと思って、まさかその場でかえしてやるわけにもいかないから、黙って跡をつけていくと、その人、吾妻橋をわたりきってから、やっと紙入れのないのに気がついて、どきりとしたように立ち止まったんです。あたしはすかさず、お武家さん、紙入れを落としたんでしょうと、その紙入れを差し出しながらうしろから声をかけてやりました」
「よろこんだだろうな」
「いいえ。はたくよりもかえす時のほうが難しいんだって、さっきもいったでしょ」

「うむ」
「中には、紙入れがないと気がついたとたん、ああ、あの時すられたんだととっさに思い出している人があるんです。その時もそれで、あたしはじろりとにらまれてしまいました。あたしはかまわずに、いまこれをそこで拾ったんですけれど、お武家さんのでしたらうけ取って、中をあらためてみてくださいましといってやると、それでもかたじけないといってうけ取って、中をちょいと見てから、わしのに違いないと、ふところへしまいました。あたしはまたすかさず三囲さまへおまいりに行くところですから失礼しますといってさっさと歩き出すと、わしもそっちへ帰る者だといって肩をならべてきました」
「こんどはよろこんだだろう」
「それはうれしかったでしょうけれど、若だんなのようにお人よしじゃないから、すぐになんか顔へ出しやしません。おれは広小路でたしかにすられたような気がするんだが、やっぱり落としたのかな、貧すれば鈍するで、おれもおちぶれたもんだと皮肉そうにいうんです。いいえ、人間は七転び八起きといいますから、そのうちにはまたいいこともありますわと、こっちは知らん顔をしてなぐさめてやると、いや、おれにはもうそんな運はないだろう、正直にいうとな、おれは長命寺の裏の三軒長屋に住んでいる並川新之丞という浪人者だが、家内が労咳というやつで寝こんでいる、子供が一人あって、親子三人、なんとか年を越さなければならんので、家内がこれだけは母の形見で少しわけのある品だが背に腹はかえられないといって、髪の物を取り出し、これで金を都合してきてくれといわれた。それを売って三両という金はできたものの、おれに働く口がなければこの金は一時しのぎにしかならんと、そんなことを考えてぼんやり歩いていたんで、この大切な紙入れをすられたのか落としたのか、それさえわからない。た

とえすられたにもせよ、落としたにもせよ、おれにはもう運というのがないんだろう、愚痴のようだが、精も根もつきたというんです」
「年ごろはいくつぐらいだった」
「三十を出たばかりで、後で御新造さんに聞くと、剣術は相当できるんだっていうんですけれどねえ、江戸ではそのくらいの腕では食っていく道がないんですってね」
「おまえ、その家をたずねたことがあるのか」
「その日はお礼をしたいからというのをことわって無理に逃げ出したんだけれど、なんだかその労咳のおかみさんというのが気になるんで、正月になってからたずねてみたんです。並川さんは留守でしたけれど、きれいな御新造さんでねえ、とてもよろこんでくれました。新吉という七つになる男の子がいて、この子が一生懸命おっかさんの看病をしているんです。そして、お姉ちゃま、朝鮮のにんじんてのは高いんですってねなんていうんでしょ。あたしすっかり泣かされちまったわ」
「あの病気は朝鮮のにんじんでも難しい」
「でも、あたしはなんとかしてそれを買ってやりたいと思ったんだけど、まさかそのために職をやるのはいやだし、またそんな悪いお金でにんじんを買っていってやったって効くはずはないでしょ。だから、時々うなぎを買って持っていってやるのが関の山なの。ところが、今月に入ってからは、そのうなぎを買っていってやっても、お米のほうがないんです。あれじゃとても病気がよくなるはずはありゃしない」
「御亭主はどうしたんだ。あいかわらず働き口がないのか」
「その後並川さんには一度も会いませんけれど、やっぱりきまったかせぎはないらしいんです」
「そうか。町へ出て働くとなると、侍ほど不器用にできている者はないんだ。まあ人にもよるだろうが、要するに気位ばかり高くて、自分か

ら身を落とす気になれないんだな」
「そこへいくと、若だんななんかうんざりするほどお人よしすぎるから、うまく金持ちの後家さんのところへ入りこめたってわけなんでしょ」
「まあそういうことになるかな」
「ですからねえ、若だんな、そのお浦さまにあんたが甘い声を出して小遣いがないんだといえば、二両や三両はいつでも出してくれるんでしょ。そのお金を当分、病気の御新造さんのほうへまわしてやってもらいたいんだけれど、だめかしら」
「いや、二両や三両ならお浦にねだらなくても持っちゃいるが、それより並川さんの働き口をさがしてやったほうがいいんじゃないのか」
「うれしいことというなあ、若だんなは。それができれば文句なしよ。どうもありがとうございます。新坊がどんなによろこぶか。いいえ、いちばん苦労しているのはあの子なんです。早くどこかへ奉公できないかって、あたしが行く度にそっとたのんでいるのよ、かわいそうに。——さあ、いそいでください、若だんな」
お雪はこっちのたもとを引きつけて、急に足が速くなってきた。
「つまり、おまえはおれをその並川の浪宅へつれていこうっていうんだな」
「お安い御用でしょ。果報者ってものは、自分の果報を少しぐらい人にわけてやらないと、畳の上では死ねなくなるものなのよ。けど、今日は並川さん家にいてくれるといいんだけどな。つい二、三日前に行った時、おとうちゃまは昨日も家へ帰らなかったって、新坊が心配していたのよ」
ふっとお雪の顔が暗くなったようだ。
「お金ができないんで帰りにくいんだろう」
「たぶん、そうだろうと思うの。ただ心配なのは、それこそ貧すれば鈍するで、辻切りでもやる気になられると取りかえしがつきませんから

ね」
お雪がわらいながらいうと、子供は黙ってこくりとうなずいていた。
「このおじさまはね、坊や、こんどお父ちゃまのいい働き口を見つけてきてくれたのよ」
「本当、おじさま」
「うむ、本当なんだ」
ほおを真っ赤にして聞いてくるいかにも一生懸命な子供の顔を見ると、雷太郎も冗談いうなよとお雪をたしなめるわけにはいかなくなってくる。
「よかったねえ、新坊。あたしはこのおじさまをつれて一足先におかあちゃまのところへ行っているから、坊やはそこの長命寺へ行って、お茶菓子に桜もちをこれだけ買ってきてもらいたいのよ」
お雪はきんちゃくを出して、いくらかの小銭を手早く新吉に握らせてやる。
「桜もちだね、お姉ちゃま」
「お姉ちゃま、家へきてくれたの」
桜もちで有名な長命寺の手前までくると、川のほうの土手から七つか八つばかりの男の子がふいに土手へ駆けあがってきてお雪の前へ立った。身なりは貧しいが、そのわりにきちんとしていて、うれしそうに澄んだ目を輝かせている。
「今日は、新坊。そんなところでなにをしていたの」
「おかあちゃまが眠ったんで、川を見にきたんだ」
新坊はちょいとはにかんだような顔をして、はっきり答える。
「そうか、ついでにお父ちゃまを見にきたんだね」
「まさか、そんなことでもなかろう」
口では軽くうけ流したものの、雷太郎も妙にそれが不安になってくるのだ。

朱鞘の浪人

「そうよ。いそいでころんじゃだめよ」
「大丈夫だよ。行ってきまあす」
新吉はいきおいよく長命寺のほうへ駆け出していく。
「並川さんまだ帰らないらしいわ」
お雪はちらっと暗い顔になりながら、先に立って土手をおりはじめる。
「あの子は父親を迎えに出ていたのか」
「そうなのよ。おかあちゃまの胸のうちがよくわかるものだから、きっとじっとしていられないのよ。かわいそうに」
「しかし、子供にうそをいっちゃいかんな」
「だから、若だんなが働き口をさがしてくれればいいのよ。用心棒でも、帳つけでも、なんでもかまわないわ。お安い御用でしょ、若だんなら」
お雪は一人でのみこんでいるようである。
長命寺の生け垣にそってしばらく行くと、その生け垣のつきたところに貧乏くさい三軒長屋があった。前は道一つ隔てて小川に面し、まわりは明るい菜の花畑になっている。
——おれはなんだってこんなところへ来なくちゃならないんだろうな。
雷太郎は我ながらおかしな気持ちだった。
「おかあちゃまはほんとに眠っているのかしら」
お雪はいちばん手前の家の台所口へ立って、
「今日は——」
と、遠慮そうに声をかけながら、そこの腰高障子をそっとあけて家の中へ入っていく。
「あら、目がさめていらしたの、御新造さん」
「いらっしゃいまし」
「あたしはいま土手で新坊に会って、おかあちゃまは眠っていると聞いたもんですから。いいえ、今日はね、お客さまを一人おつれしたんです。——若だんな、どうぞ」
中から表へお雪が呼ぶ。
「失礼——」

雷太郎はとにかく腹をきめて、台所からあがっていった。
そこは四畳半の茶の間で、煎じ薬くさいにおいは鼻につくが、部屋は案外きれいに片づいていて、病人は寝まきの上から半纏を着て床の上へ起きあがっていた。髪をきちんとくし巻きにして、二十七、八とも見える。面やつれはしているが、なるほどうりざね顔の美貌である。
「御新造さん、この若だんなはあたしの心やすくしている風雷太郎さんという浪人さんで、この人にはいい親類がたくさんあるんです。それで、並川さんのことをお話ししたら、おれのほうでなんとかなるかもしれないと親切にいってくれるもんですから、今日おつれしてみたんです」
お雪はここでもさばさばとそんなことをいってのける。
「こんなかっこうで失礼いたします。お雪さんにはいつもお世話にばかりなっている並川の家内、つゆと申します」
おつゆは落ち着いて、ていねいに初対面のあいさつをしていた。
「突然おじゃまいたす。わしは風雷太郎です」
雷太郎は気軽にあいさつをかえしながら、はてな、この顔にはどこかで見おぼえがある。そういえば、声にも聞きおぼえがあるがと気がついたが、それがどこで見た顔なのか、ちょいと思い出せない。
「御新造さん、お米はまだありますか」
お雪は慣れているものとみえ、平気でそんな無遠慮なことを聞く。
「ええ、おかげさまで」
「ついでですから、おかゆをこしらえておきましょうか」
「いいえ、お隣のおばあさんに今朝こしらえていただいたのがまだ残っていますから」
おつゆはそう辞退しながら、さすがに寂しそうな顔をかくしきれないようだ。
「並川さんはあれからまだ一度も帰ってこない

んですか」
「ええ」
「どうしたっていうんでしょうね。せっかく若だんなにいい話を持ってきてもらったのに、——ねえ、若だんな」
「いや、男には男の意地というものがあって、こういうとき手ぶらではちょいと帰りにくい。並川さんにもなにかそんな事情があるんだろう」
雷太郎はそうでもいっておくよりしようがなかった。
「あのう、あたくしそれで余計心配していますの」
「だめですよ、御新造さん、つまらない取越苦労なんかしちゃ。それがいちばん病気にいけないんです」
「それが、いま、とても気になる夢を見てしまったもんですから」
おつゆは目を伏せて、もう一度その夢を追っているような沈んだ顔をする。
「ああ、その夢でいま目がさめたんですね。話してごらんなさいまし。いやな夢は早く人に話してしまったほうが、凶が消えて吉にかえるんだっていうわ。そうですねえ、若だんな」
お雪は軽くうけながして病人の気をかえさせようとする。毛色はだいぶ変わってはいるが、この女も根は人一倍お人よしにできているのかもしれない。
「そうだな、世の中には夢占いということもあるようだが、大体夢などというものはたわいのないことのほうが多いんだ」
「ですから、そんなたわいのない夢で心配なんかすることはないと思うわ。どんな夢を見たんです」
「聞いてくださいます」
おつゆはやっと決心がついたように、というより、悪夢は人に話してしまえば消えるというお雪の言葉にすがりたい気持ちが多分にあったのだろう、思いあまったような顔をあげて無理に微笑する。
「ええ、聞きますとも」
「あたくし、あのう、春の日ざしのほかほかとあたたかいきれいな山の上に座っていましたの。向こうにどこかの港が見えて、とてもいい景色でした。ふっと気がついて下を見ると、そこはぞっとするような深い谷で、黒い霧がうずをまいて流れているのです。ここへ落ちたら地獄へ行くのかもしれないと思って、こわごわのぞいていると、そこの岩の上に主人が座っていて、悲しそうにこっちを見あげているんですの。まあ、どうしてあなたはそんな危ないところにいるんです。お願いですから、早くあがってきてくださいと、あたくしは一生懸命呼んだのですが、その声がそこまではとどかないらしく、主人はなにかいいたげに、じっとあたくしを見あげているだけなんです。そのうちに黒い霧がだんだん主人をつつんできますので、あたくしは夢中になって主人を呼びながら、その谷へ飛びこもうとしました。すると、新吉がどこからか、おかあちゃま、おかあちゃまと必死に呼んでいる声が聞こえてきて、あたくしはあの子をおいていくわけにはいかないしと思いながら、もう一度下を見おろすと、もう主人の姿はすっかり黒い霧にまきこまれていました。あたくしは悲しくて、声をかぎりに主人を呼んでいる、その自分の声で目をさましましたの」
おつゆは話しおわって、またしてもまざまざとその夢を思い出しているように、がくりとうなだれてしまう。
すきとおるように白々とした襟足が妙に痛々しい。
お雪がちらっとこっちの顔を見てなにかいおうとしたが、まだそれを口にしないうちに、台所の戸がいきおいよくあいて、
「おかあちゃま——」
と、買い物の紙包みをかかえた新吉が座敷へ駆けあがってきた。

「どうしたのです、新吉」
母親がそのあわただしさをたしなめるように、きっとそっちへ顔をあげると、
「おかあちゃま、いまお父ちゃまがここへ帰ってきたでしょう」
と、子供はきょろきょろ家の中を見まわしている。
「いいえ、どうしてなの」
「おれ、いま、お父ちゃまが家へ入るのをちゃんと見た。だから、いそいで駆け出してきたんだけどなあ」
新吉は紙包みをお雪の前へ投げ出すようにおいて、いきなり台所と並んでいる二畳ほどの間の障子をあけてみる。
そこは子供の部屋にしてあるらしく、小机が一つおいてあって、片がわの古つづらの上に布団が一組みきちんとたたんでのせてあるのが目についた。
「新吉、お座りなさい。落ち着くのですよ」
母親が見かねて声をかけたが、
「いない。変だなあ」
子供はなにかに憑かれたようにつぶやきながら、もう一度台所へ引きかえし、あたふたと表へ出ていったようだ。
「夢でも見ているんでしょうか」
「そうじゃあるまい。あまり父親のことばかり思いつめていたんで、なにかそんなまぼろしでも見たんだろう」
「そうかしら」
お雪は顔色をかえていたが、急に心配そうに立ちあがって、
「あたし、行ってみてくる」
と、いそいで子供のあとを追っていく。
おつゆは暗い顔をして、じっと宙を見すえていた。
雷太郎はちょいとなぐさめてやる言葉もない。
まもなく、お雪が子供をなだめながら引きかえしてきて、
「新坊はどうしてもお父ちゃまがここへ入るのを見たというんですけどねえ。赤い刀の鞘だったから間違いないといい張るのよ」
と、当惑したようにいった。
「ふうむ、お父ちゃまの刀は朱鞘なのか」
雷太郎はどきりとした。

夫婦というもの

雷太郎は帰りがけにお雪を表へ呼び、小判三枚を紙包みにして、病人の薬代にしてくれるようにとわたし、一足先に並川の浪宅を辞した。
「若だんな、新坊のことはきっとたのみますよ。それがいちばん病人の気の張りになるんですからね」
お雪はまたしてもそれを口にして、あらためて念を押していた。
「承知した。必ず考えておく」
無論、新坊より並川の働き口のほうが先のはずだが、ことによると並川はもう帰ってこないかもしれないという予感がお雪にもあって、わざとそれは口にしなかったのだろう。
雷太郎は顔色にこそ出さないようにしていたが、並川が朱鞘の大小をさしていたと聞いてからは、なんとも胸が暗かった。
ゆうべ自分がたたき伏せた浪人強盗はたしかに朱鞘だったし、労咳があって番所へ行ってから血を吐いたという。労咳は長いあいだ看病しているうちに女房のおつゆのがうつっていたに違いない。おつゆがそれを知っているかどうか、一言聞きさえすればもっと事態ははっきりするのだが、さすがに雷太郎にもそれだけの勇気は出なかった。
おつゆが夫の夢を見たり、子供が父親のまぼろしを見たりしたのは、それぞれ心の中にあるものがたまたま夢になり、まぼろしにもなるのだと、雷太郎ははじめそう軽く取っていたが、並川が朱鞘の大小だったとすると、今はそれさ

えなにかの暗示だったかもしれないような気がして、ひどく後味がよくない。

——理屈ぬきにすれば、こんどこそおれは新坊の親の敵ということになるんだからな。

しかし、この事実は絶対にだれにも口外してはならないのだ。それはおつゆ親子をこれ以上むごたらしい生き地獄へ突き落とすことになるからだ。

並川もそれがあるから、番所で自分の名を口にできないでいるのだろう。

雷太郎が倉橋屋へ帰ったのは、もう夕方になりかけているころだった。

「お帰りなさいませ。思ったより早くすみましたのね」

お浦がいそいそと出迎えてくれる。

「おれはな、お浦、自分でもおかしいほど、せっせとこっちへ歩いていた。自分がこんなに二本棒だったとは、今までまったく知らなかった」

雷太郎は居間のこたつへくつろぎながら、我ながら苦笑が出る。

「ふ、ふ、二本棒でいいんですのよ」

お浦はわらいながら茶を入れてくれる。

「おまえ、おれが旅に出ても、一人で我慢していられそうか」

「あら、旅に出るんですの」

どきりとしたようにこっちを見すえる。

「いや、たとえばの話だ」

「それなら、だめかもしれません。一人ではもう寂しくて」

「夫婦ってやつはおかしなもんだな」

雷太郎は並川の帰りを待ちこがれているおつゆ親子のことを思いあわせながら、妙に気が沈んでいく。

「ああ、そういえばさっき花川戸の駒吉親分が店へきて、ゆうべつかまった浪人強盗は、番所の御牢内で血を吐いて死んだといっていたそうですの」

「ふうむ。やっぱり死んだか」

「労咳病みだったんですって。とうとう名前さえわからずじまいになったといって、親分は悔しそうだったといいますわ」

「そうか」

雷太郎はなにかやりきれない気持ちである。

「どうかなさいましたの、そんな浮かない顔をして」

「まあ自業自得でしょうがないだろう」

「死んだ強盗のことですか」

「こっちはまさか労咳病みだとは知らなかったしな」

「あなたのせいではありませんのよ。たとえば病気で死ななくても、強盗の罪は重いんですもの」

お浦はなぐさめ顔にいう。

「そのとおりだ。しかし、あの男は逃げた二人から見ると、まだ素人のようだった。素人だからつかまるようなへまをやったんだろう。つまり、魔がさしたとでもいうんだろうな」

「八丁堀さんの御用はなんでございましたの」

こっちの顔色を見ながら、軽く話題を変えようとする。

「市村の用は、いまの血を吐いた男の話だったんだが、その後でちょいとやっかいな事件にぶつかってしまったんだ」

「どこでですの」

「呼ばれていったつるやという料理屋でなんだが、人間なんてやつは自分で知らない間にどんな災難をしょっているかわからないもんだな」

「まあ怖い。あなたは御自分から人の災難までしょいたがる性分なんですから、これからは気をつけていただかなくては」

「たしかに、そういうお先っ走りのところがおれにはある。おまえもとんだ男を亭主に持ったもんさ」

「いいえ、あたくしはかまいませんの。好きでだんなさまになってもらったんですもの」

「おれは人間が甘いのかなあ。みんなおまえに

話してしまいたい気がしてきた」
「御夫婦なんですもの、それが本当ですのよ」
「考えてみると、おれがせかせかと家へ帰ってきたのは、早くおまえに甘ったれたかったからかもしれない」
「ですから、なんでもうかがいますわ」
そういうお浦の年だけにしっとりと落ち着いた顔を見ていると、これならなにを話しても大丈夫だという気がしてくるから、雷太郎は我ながらふしぎだった。
「お浦、おれはさっき旅へ出るかもしれないといったが、それはまんざら口から出まかせでもなかったんだ」
「かまいませんのよ。その時はあたくしもいっしょにまいりますから」
「ところがな、その旅はひょっとするとおれが敵を討たれるほうにまわるかもしれないんだ」
「だれに敵を討たれるんですの」
「今日行ったつるやのお加世という娘なんだがね、実はその娘とは、ここの用心棒になる日の朝、観音さまで出会っているんだ。その娘がおみくじを引いて、それが凶と出た。その娘はどうか早く親の敵を討たせてくださいと観音さまを拝んでいたんで、そのおみくじを見てがっかりしているようだ。だから、おれは、そうがっかりすることはない、敵討ちは時さえくれば、無理に自分で討たなくても、そのために天下には法というものがあるんだとなぐさめてやると、おそろしく気の強い娘でな、余計なお節介はやかないでくれと怒っていた」
「ふ、ふ、あなたは少し親切すぎますのよ」
「どうもそうらしい。そこで、親切ついでにその凶のおみくじをおれがもらってやって別れた」
「まあ、そんなおみくじをもらったんですか」
さすがにお浦はまゆをひそめてみせる。
「たしかに凶は凶で、そのためにおれは大河原組にけんかを売られたり、ここの用心棒になって浪人強盗に命をねらわれたり、散々な目にあった。しかし、凶は吉にかえるでな、そのあげくにおまえというすばらしい女房ができたんだから、おれはこれでそのおみくじはもう帳消しになったと考えていた」
「その娘さんがつるやの娘さんだったわけなんですか」
「そうなんだ。おれは顔を見てびっくりしたが、向こうはおれのうわさを聞いて、たぶん、あの時のお節介者はおれじゃないかと考えていたというんだ。それで、これもなにかの縁なんだから、おれに敵討ちの助太刀をしてくれという」
「引きうけたんですか、あなたはまた」
「いや、そんな簡単な話じゃないんだ。よく聞いてみると、お加世の親の敵というのはおれのおやじなんだ」
「なんでございますって――」
「お加世の父親は堺で大きな唐物問屋をやっていたんだな。それが今から十九年前に、抜け荷の嫌疑をうけて吟味入牢中に一服盛られたんだそうだ。その時の堺奉行がおれのおやじで、お加世の母親はおれのおやじを敵とねらって江戸へ出てきていたが、これは五年前に病死した。その時の遺言で、お加世もそれからおれのおやじを敵だと思いこんできたんだが、そのおれのおやじは堺奉行から江戸の勘定奉行に出世して、江戸へ帰る途中、三島の宿で急病死しているんだ」
「まあ、お亡くなりになりましたの」
「おれが七つの時だ。それで、おれの家はおやじの実弟、おれには叔父にあたる人が母のところへ入夫する形になって、おれには種ちがいの弟が一人ある。そこで、お加世にすれば、おれのおやじが死んだとなると、当然そのせがれのおれが親の敵ということになる」
「あなたはそれをその娘さんにすっかり話してしまいましたの」
「話した。お加世は、自分の父親はぬれぎぬで、牢内で一服盛られた、それは奉行の指図だと信

じている。おれはせがれとして、どうしても一度その真相を突きとめて、おやじのぬれぎぬを晴らしておかないと、子としてのつとめがすまない。それで、場合によっては堺まで調べに行ってくるようになるかもしれないんだ」

「その娘さんは、どうしても子供のあなたに敵討ちをするといっているんですか」

「本当に奉行に一服盛られたんなら敵討ちをするよりしようがないという腹らしいな」

「しかし、それはお奉行の責任ではございませんわ。だれか下役のほうに悪い人がいるのかもしれませんね」

お浦はもうすっかり落ち着きを取りもどして、きっぱりとそういいきるのである。

「おれもそれはそう信じている。しかし、なにしろ十九年も前のことなんで、その真相を調べるのはちょいと難しいんじゃないかと、そんな気もするんだ」

「お屋敷のほうにどなたか当時のことを御存じの方はありませんの」

「幸い、そのころおやじについて堺へ行っていた用人がまだ達者で屋敷にいる」

「くわしいことをおぼえていてくれるといいんですけれどね」

「もしおやじが指図をして一服盛ったんなら、そばについていた用人が知らないはずはないと思うんだ」

「それを知らないとすれば、お奉行さまはそのことになんの関係もないということにもなりますね」

お浦はそんな頭のいいこともいう。

「たしかにそれはそうなんだが、それだけではお加世のほうで納得しないだろうと思うんだ」

「そうかもしれませんね。けれど、御用人に聞けば、堺へどういう人をたずねていけばいちばんよいか、それぐらいはわかるんじゃないでしょうか」

「おれもそれを当てにしているんだ」

「では、早く御用人さまにお目にかかって、その当てがつきましたらいっしょに堺へ出かけることにしましょう。あたくしはもし本当にあなたがその娘さんに討たれるようなことになっても、その時はいっしょに討たれますから、ちっとも心配しなくていいんですのよ」

お浦は真剣な目をしていいきるのだ。

その真剣なまなざしは、今日のおつゆの目にもあった。それが夫婦の本当の愛情というものかもしれないのである。

職の敵

雷太郎はお浦にお加世の話はしたが、おつゆ親子のことを口にするのはやっぱりためらわれた。それを話すとなると、いきおい朱鞘の浪人強盗のことがついて口に出てしまいそうだからである。

しかし、並川新之丞がたとえその浪人強盗であったにもせよなかったにもせよ、生死のことだけははっきり調べて、おつゆ親子に知らせてやるのが本当だというような気がするのだ。

「お浦、これはたとえ話なんだがなあ、おまえはたしかにおれの女房なんだろうな」

翌朝、雷太郎は朝飯のすんだ後で、ふいにそんな風に切り出してみた。

「まあ、だんなさまはまだたとえ話の御夫婦のつもりでいるんですかしら」

お浦はちらっとうらめしそうな目になる。

「違うんだ。たとえ話はこれからはじまるんで、その前に、おまえは本当におれの女房になったつもりなんだろうなと聞いているんだ。つまり、夫婦は二世というから、あの世までいっしょに行く覚悟があるかと聞いているんだ」

「いやですわ。それなら、昨日も、もしあなたがその娘さんに敵討ちをされなくてはならなくなったら、あたくしもいっしょに討たれてあげますと、ちゃんと誓っていますのよ」

「よし、わかった。そんなことはあらためて聞か

なくたっておれにはよくわかっているんだが、それをもう一度念を押してからでないと、これからのたとえ話がむだになってしまうんでね」
「なんですか、気味が悪い。どんなたとえ話なんですの」
お浦はどきりとしたような顔をする。
「たとえばだな、おれが四日も五日も家をあけたとする。どこへ行ったか、いくらさがしてもわからない。死んだものか、生きているのか、その見当さえつかない。そのまま十日も二十日もたったとして、おまえはその生死がわかったほうがいいか、それとも今日は帰るか明日は帰るかと生死のわからないまま待っているほうがいいか、どっちが自分としてはいいと思うね」
「そんなことが本当にありますかしら、生死がわからないなんて」
「ないこともないだろう。たとえば、永代橋が落ちてたくさんの死人が出た。その死骸には身もとのわからない者もいて、そのまま葬られてしまう。その死骸の中におれがいたかもしれないとする」
「では、本当はその人は死んでいるわけなんですね」
「うむ、そう考えてもいい」
「あたくしなら、きっとその死骸をさがしに行きますわ。なにかのたよりを待っているなどと、とてもそんなのんきな気持ちにはなれませんもの」
「そうか、やっぱり生死はわかったほうがいいんだな」
すると、どうしても朱鞘の浪人強盗の素姓をできるだけ調べておいてやる必要があると、雷太郎の腹はきまった。
「あなたはまさかあたくしに黙って堺へ行ってしまう気ではないのでしょうね」
お浦がじっとこっちの目を見すえてくる。ひどく不安そうなまなざしだ。
「そんなことはない。おれは一人で死ぬのは寂しいから、おまえをつれていく」
「きっとですね」
「大丈夫だ。つまらない心配はしなくてもいい」
「お屋敷へ帰る時も、ちゃんと話してくれますね」
「おれは屋敷へは帰らない」
「そうですかしら」
「そんな疑わしそうな目をして、おれがそんなにいい加減なことをいう男に見えるのか」
雷太郎は思わず苦笑する。
「そうではございませんけれど、あなたは今日にもお屋敷の御用人さまに会わなければなりませんでしょう。あなたがいくらお屋敷へは帰らないといっても、御用人さまが承知しないと思いますのよ」
「いや、おれの腹はちゃんときまっているんだから、これだけは大丈夫だ」
「いいえ、あたくしは覚悟していますの。お屋敷のことだけは、あたくしの力ではどうにもなりません。ですから、あたくしはまだお屋敷のことはなにもうかがっていません。たとえお屋敷がどことわかっても、押しかけていくわけにはいきませんもの」
これだけはあきらめているといわぬばかりに、寂しそうな微笑をうかべる。
雷太郎はあっとひそかに目をみはった。たしかにまだ屋敷のことはなにも話していないが、それよりそのあきらめの微笑が昨日のおつゆの顔にもあったことを思いあわせたからである。
夫の生死を思い詰めている妻の切ない心、雷太郎はそれに胸をうたれた気持ちだった。
「お浦、おれの屋敷は小川町の天野主膳、死んだおやじも主膳で、その跡をついだいまの主膳は和泉守となって勘定奉行をつとめている。母は直、弟は栄二郎。おれがもしつかまって屋敷へつれていかれたら、いつでも押しかけてこい。遠慮なんかいるもんか」

「まあ」
お浦はびっくりした顔になりながら、
「つかまったら大変ですわ。なるべくつかまらないようにしてくださいまし」
と、とうとう本音が出てきたようだ。
「心配するな。おれはもう天野じゃなくて、浪人風雷太郎、お浦の亭主だ。市村鶴吉が承知しているんだから、つかまる心配もないだろう」
雷太郎は明るくいってから、
「そんなことより、おれにはほかにもう一つ気になることがあるんだ。用人の田宮孫作にも早く会わなくちゃならないし、これからちょっと出かけてくる」
と、あっさり立ちあがった。
「お帰りはおそくなりますの」
「いや、夕方までにはもどってくる。ここだってまだ安心というわけにはいかないんだからね」
「それはそうですのよ。お忘れになってはいやですわ」
口ではそういっても、出がけにいやな顔を見せるようなたしなみのないお浦ではなかった。
外は今日もよく晴れた春日和であった。
——さて、どうするかな。
いちばん気になるのは並川の浪宅のほうだが、そこを見舞う前にまず市村に会って、昨日死んだ朱鞘の浪人強盗のことをくわしく聞いてみる必要がある。
用人田宮孫作を呼び出すにしても市村の手を借りたほうがよさそうだし、石原町の大河原道場の調べはどうなっているか、これも無関係ではいられない問題なのだ。
そんなことを考えながら、花川戸通りから吾妻橋のほうへ出て、足は自然に川っぷちの道を駒形のほうへ向かっていた。つるやへ行っておかせに聞けば、市村の今日の行動がなにかわかるような気がしたのである。
——はてな。

どうもだれかにつけられているような気がする。そう気がついてみると、背後になにか殺気のようなものさえ感じる。
わざとうしろを振りかえらずに小一町ほど歩いてくると、
「こんちは、だんな」
こっちに油断のないのがわかったか、うしろから声をかけて、すっと肩をならべてきたやつがある。
「やあ、昨日の職人うじか」
それは昨日源森橋でお雪に目つぶしを食わされたすりの仙太だった。
「だんなはおれがつけているのを知っていたようだね」
仙太はずぶとく挑戦してくる。
「うむ、ふところはたかれてもかまわないが、命はかけがえないんでな、ひやひやしていた」
「けっ、そんなことまでわかったかね」
「わかるとも——。おれはこれで気が小さいから、往来を歩く時は油断しないことにしているんだ」
「まあ、そのほうが無事だろうな。だんなは倉橋屋の色後家をたらしこんだ風雷太郎さんなんだってね」
「たらしこんだんじゃなくて、たらしこまれたほうなんだ。誤解しないでもらいたいな」
「うぬぼれてるぜ。それで、昨日のお雪はどこへたらしこんだんだね」
「というと、おまえたちはまだお雪をねらっているのか」
「ねらっていやすよ。職の敵だからね。どうしてもあのあまの指を一本詰めて仕置きをしてやらなけりゃ、亀田屋一家の顔が立たねえんだ」
仙太の声音には敵意があふれているようだ。
「亀田屋の親分はなんていう男なんだ」
「亀吉っていうんだ。こんどばかりは親分もかんかんになっているんだから、おめえさんもつまらねえ色気は出さねえで、あっさりお雪を出

の時から人の殺し方を教えこまれているんだからね」

「人間にゃふいってことがあらあ」

「やみ夜のつぶてというやつか。そういえば、おまえは昨日、お雪に見事な目つぶしを食っていたなあ。あれもふいのうちかな」

雷太郎はどこまでもからかい顔だ。

「おい、もう一度聞くが、お雪をどこへかくしたんだ」

仙太はまだすごんでみせようとする。

「おまえはお雪の家を知らないのか」

「その家にいねえから、おめえに聞いているんだ」

すると、お雪は昨日あのまま並川の浪宅へ泊まったのかもしれない。

ということは、並川はまだ帰宅せず、おつゆの容態が悪くなって、手が放せなくなったということになりそうだ。

「かわいそうになあ」

してしまったほうがいいぜ」

「案外人のいい親分らしいな」

「なんだと――」

「女の職人にからかわれてそうかんかんになるようじゃ、職のほうの腕はあんまり大したことはないようだな」

雷太郎はにやりとわらってみせる。

「くそっ」

仙太の肩がぴくっと動いたのは、ふところの匕首に手をかけたのだろう。が、自分がこっちの抜きうちを警戒して左がわへ並んでいるから、その匕首も一足後へさがってからでないと突っかけるわけにはいかない。

「まあそうあわてるな。こんなところで匕首を抜くと、土地にいられなくなるぞ」

「なにをぬかしやがる。こうなりゃ男の意地だ」

「職の腕が細いとつい殺し屋になりたくなるようだが、そんなのはつまらない。殺しっこなら侍のほうが強いにきまっているんだ。侍は子供

「大きなお世話だ。おれたちが一度ねらったからには、どこへかくれていたってきっとさがし出してみせるんだ」

仙太は自分がひやかされたとでも思ったらしい。ひょいとそこへ立ち止まって、ぎろりとすごい目をむいてみせる。

悪たれ浪人

そこはまもなく駒形へかかろうとする材木町の一膳飯屋の前あたりだった。きんちゃく切りの仙太がふところの匕首に手をかけて精いっぱいすごんで見せたとたん、その飯屋からふいに五十年配の身なりはいささかくたびれてはいるが、体つきのがっしりとした浪人者が飛び出してきて、

「こらっ、きんちゃく切り、見つけたぞ」

と、仙太のほうへ一喝しながら刀の柄へ手をかけた。これも相当悪のきく面がまえのおやじのようだ。

「けっ、人違いをしちゃいけねえや、お武家さん」

一瞬ぎくりとしながらも、仙太はたちまちずぶとい顔になってやりかえす。

「とぼけるな。貴様はたしかに昨日そこの仲見世でおれの紙入れをすったやつに違いない。これでもおれは、昔、一度は十手を握ったことのある男だ。そのおれのにらんだ目に狂いがあってたまるか。昨日の紙入れをここでかえすかどうか、はっきり返事をしろ」

おやじ浪人の濁った目は、はじめからひどく殺気立っているようだ。

「冗談いいっこなしさ。いくらおまえさんの目が鷹のようにきくか知らねえが、そんないいがかりは迷惑だ。よしてもらいたいね」

仙太は相手の抜きうちを警戒しながら、じりじりと川っぷちのほうへ後じさりしていく。

「逃がすな、馬場うじ。そいつはたしか亀田屋一家の仙太というきんちゃく切りだ」

おやじ浪人の連れが飯屋から出てきて、仙太の上手の往来をふさいでしまう。これももう四十年配の剣客くずれといったような強そうな浪人者である。

雷太郎はけんか相手を二人に横取りされて、思わずぽかんと飯屋の軒下へさがって立つ。

「こらっ、仙太、もう貴様の逃げ道はないぞ。紙入れをかえすかどうだ」

「なにをぬかしやがる、あんぽんたんめ。うぬの紙入れをだれがはたいたか、そんなことはおれの知ったことじゃねえが、鷹のように目のきく二本差しがきんちゃく切りにふところをはたかれるなんざあ、人前で自慢になる話じゃねえや。さては、うぬは田舎まわりのごろんぼ浪人のなれの果てだな」

仙太の口から破れかぶれの啖呵が飛ぶ。いざとなったら川へ飛びこんで逃げるつもりなのだろう。

「おのれ、許さん」

おやじ浪人はかっとなって腰をひねったようだ。

「お待ちなさい。あぶない」

川へ飛びこむより抜きうちのほうが早いとんだけがをしそうなので、雷太郎は我にもなくとっさに声をかけていた。

「なんだ、貴公は。なんでとめる」

気合いを外されたおやじ浪人は、憤然としてこっちへ食ってかかってきた。

「たとえ職人でも、切られては気の毒だ。人命は紙入れよりはるかに重い。失礼だが、貴公の紙入れにはどれほど入っていましたな。わしが立て替えさせていただこう」

どうせただでは承知しないと見たので、雷太郎は頭からそう切り出してみた。

「ふうむ。貴公はこのきんちゃく切りの仲間かね」

おやじ浪人はそんな憎まれ口をきく。

「いや、別に仲間というわけではないが、わしは仏性のほうで、殺生は黙って見ていられない。金ですむようなら、仲裁料として貴公の紙入れの金を立て替えよう」

「そうか。それではわしもその貴公の仏性に免じて殺生はやめることにするが、紙入れの中には十両と少々入っていた。そこに持ちあわせがあるのかね」

いかにもこっちをこばかにしたような口ぶりだ。とたんに、

「うそをつけ。てめえの紙入れの中に入っていたのは、二分と小銭が二、三百ばかりだった。十両だなんて、あんまり大束なほらを吹くねえ、わらわせやがる」

と、仙太があきれたように悪態をあびせかける。

「黙れっ。わしの紙入れをすったおぼえのない貴様が、どうしてそんなことまで知っているんだ」

おやじ浪人はぬけぬけとやりかえす。

「おれの目はお閻魔さまの鏡とおんなじで、なんでも見とおしなんだ。舌を抜かれねえように気をつけやがれ。この大うそつきめ」

どっちもどっちといいたいところで、往来の上手下手にたかってきていた野次馬どもがおもしろそうにがやがやとわらい出す。

「おのれっ」

またしてもおやじ浪人が刀の柄へ手をかけようとするのを、

「まあ待て、馬場うじ」

連れの浪人者のほうが苦わらいをしながらとめて、

「失礼だが、貴公はたしか花川戸の倉橋屋の用心棒、風雷太郎うじでござったな」

と、こっちへ図星をさしてきた。

「さよう、おれはその雷太郎だが、貴公はどなただったかなあ」

「拙者は大沢鉄之助、連れは馬場吉五郎、見てのとおりの浪人者だが、聞くところによるとこ

んど風うじは倉橋屋の後家に見こまれて入り婿になるそうだ。まことにめでたい話で、そういう御仁の仲裁なら馬場うじにかわって拙者がお受けしよう。ただし、倉橋屋は百万長者だ。仲裁料は百両ときめて、今夜暮れ六ツまでに源森橋の上まで持参されたい。武士の約束、よもや異存はござるまいな」

大沢はもっともらしい顔をして、そんな無法なことを押しつけてくる。どうやらこのほうが馬場浪人より役者が一枚上のようだ。

「よろしい。その返事は今夜源森橋ですることにしよう」

相手は野次馬どもの手前、逃げ口上をこしらえたのだと見たので雷太郎は軽くうけ流しておく。

「百両だぞ、風うじ。いいだろうな。万一違約をすると倉橋屋へ押しかけていくから、そのつもりでいてくれ」

雷太郎はばかくさくなったので、黙って苦わらいをしていると、

「馬場うじ、まいろう」

と、大沢はおやじ浪人をうながして、ゆうゆうと駒形堂のほうへ歩き出した。

「けっ」

仙太はいかにもけいべつしたようにそっちを見送っていたが、ふいにこっちを向いて、

「だんな、礼はいわねえぜ」

そんなずぶとい言葉を投げつけるなり、さっと川上のほうの野次馬の中へ姿を消していった。

——どっちも照れている。

雷太郎にはそう見えたが、衆目の中へ一人取り残された自分のかっこうもまた道化じみていて、妙に照れくさい。

つるやはもうついそこだが、そうだ、お雪に早く知らせておいてやったほうがいいかもしれないと、急に気が変わって、そこから吾妻橋のほうへ引きかえすことにした。

それにしても、雷太郎はなんなく後味が悪い。きんちゃく切りの仙太の脅迫も、いい年をした悪たれ浪人どものいいがかりも、怖いなどとは少しも思わないが、悪たれを売り物にしなければ世渡りのできない人間が世の中にはあまりにも多すぎるようだ。

それをまた平気で聞き流し、見流しにできない自分の性分が、ちょいと荷やっかいなのである。今もそのお節介を、だんな、恩にはきないよと、仙太にわらわれてきている。

その伝でいくと、亀田屋一家の者にねらわれているから当分広小路へは出るなとお雪に注意してやりに行くのも余計なお節介ということになりそうだ。

現に、お雪はそれをちゃんと承知していて、昨日は平気で広小路へ出てきている。こっちはそういう跳ねっかえりをたしなめに行くのだが、

「大きなお世話よ、若だんな。跳ねっかえりはあたしの性分なんだもの、いまさらなおりゃしません」

と、鼻の先でわらわれるかもしれない。

それをまた承知の上で、どうしてもお節介をやきに行きたいのだから、我ながら困った性分だと思う。

——まあいいだろう。おれのお節介で百人に一人でも悪の道から救われる人間があれば、それだけ世の中が明るくなるんだ。

雷太郎はそうも思いなおしたりして、向島土手をいそぎ、長命寺の手前から土手をおりていった。

今日はその辺に新坊の姿も見かけない。

——はてな。お雪ははたして並川の家にいるかな。

ここまできてふっとそんな疑問がおこったが、三軒長屋のいちばん手前の並川の浪宅の台所口へ立つと、ふいに中から腰高障子があいて、

「まあ、やっぱり若だんなだったのね。新坊が迎えに行ったでしょう」

と、お雪が顔を出しながら小声でいう。
「新坊がどうしたんだね」
「あら、新坊に会わなかったんですか」
「会わなかったが」
「じゃ、行きちがいになったのかしら。さっき、一人で行けるっていうから、倉橋屋さんに行ってもらったんだけど」
「おれを迎えにか」
「そうなの。おつゆさんがね、ぜひ若だんなにもう一度新坊のこともたのんでおきたいし、なにか聞いてもらいたい話もあるというもんだから」
お雪の顔色はひどく暗い。
「おれはあねごに用があって、出先からこっちへまわってきたんだが、病人の様子でも変わったのか」
「ええ」
「並川うじはまだ帰らないんだね」
お雪はうなずいてみせて、
「でも、そのことは病人にいわないほうがいいわ。病人はもう帰ってこないと胸の中で覚悟しているようなのよ」
と、声をひそめていう。
「そうか。やっぱり昨日の夢を気にしているんだな」
雷太郎は自分まで急に胸が重くなってくる。
「夢はまだ時々見ているんじゃないかしら。目がさめると、よくまくらもとを見まわしているから」
「かわいそうに、新坊が心配しているだろう」
「ちっともそばを離れようとしないのよ。いじらしいくらい。それでもね、おつゆさんがあたしに、ぜひ若だんなにたのんでおきたいことがあるっていったら、おれが呼んでくるってすぐ立ちあがったわ。留守だと聞いて、がっかりして泣いているんじゃないかしらねえ」
そういうお雪の目がじんわりと潤んできたようだ。

「いや、大丈夫だろう」
口では答えたが、そんなことなら昨日お浦におつゆ親子のことを話しておくのだった、お浦が知っていれば決して冷たくあつかうような心配はなかったろうにと、いまさら雷太郎は後悔される。
「病人は眠っているのか」
「ちょいと待ってね。いま見てくるから」
お雪は気がついたように、そっと家へあがっていった。

母親の願い

「若だんな、どうぞ――」
病人は目がさめていたらしく、家の中からお雪がすぐに呼んできた。
雷太郎はなるべく軽い気持ちを自分でこしらえて台所口からあがっていく。
「おつゆさん、具合いはどうかな」
座につきながら気さくに声をかけると、
「横になったままですみません。昨日は、先生、どうもありがとうございました」
と、病人は目に感謝の色をこめて、物静かに昨日おいていった金の礼をいう。
たしかに昨日より気力のおとろえは目立っているが、お雪がいっていたとおりもう死期を悟っているらしく、顔色は案外おだやかだった。
「わしは出先からこっちへまわってきたんで、新坊とは行き違いになったようだが、なにかわしに用があるそうだね」
雷太郎はできるだけ明るく持ちかけていく。
「あのう、ぜひお願いしておきたいことがございまして――」
「新坊のことかね」
「はい。お雪さんもそこにいてくださいまし」
「ここで聞いてるわ、おかあちゃま」
お雪は茶をいれながら、わざと新吉の口まねをしてみせる。
「なにからなにまで、ただお世話になるばかり

で心苦しいのですけれど」
　おつゆはふっと目をつぶってしまう。
「いやだなあ。人間はだれだって生身なんだから、病気の時はおたがいっていうじゃありませんか。ねえ、若だんな」
「そのとおりだ。世話をする時は世話をする。だから、世話になる時は世話になる。それが世の中だと思えばいいんだ」
「あたしにその御恩がえしのできる時がありますかしら」
「いや、おつゆさんには新坊という立派な男の子がある。おつゆさんにできないことは、きっと新坊がやってくれる。母の血は子がうけついで、その子の体の中にちゃんと生きているんだ。いのちを自分一人のものと思ってはいけない」
「そうでございました」
　おつゆははっとしたように目をあいて、なにかを見すえるようにその目を宙にすえながら、
「実は、新吉にはこの江戸のどこかに身寄りの者がいるはずなのです」
　と、胸の中にあるものがようやく口に出てきたようだ。
「身寄りというと――」
「あたしの叔母と、その叔母には娘が一人あるはずです。生きていれば、叔母は四十二、三、娘はたしか二十になると思います」
「その人たちと別れたのは、おつゆさんのいくつぐらいの時なんだろうな」
「恥をお話ししなければわかりませんけれど、いまわの際のあたしのざんげ話だと思って聞いていただきます」
　お雪は茶わんをこっちのひざの前におきながら、ちらっと顔を見あげていた。
「大坂のほうの堺というところに、そのころ大和屋嘉兵衛という三代つづいた唐物問屋がありましたの」
　こんどは雷太郎があっと目をみはる。
「嘉兵衛の家内はお国といって、そのころ二十二、三でした。そのお国の姉のお藤というのが大和屋とは親類筋になっていて、大和屋の大番頭をつとめていた清蔵という者といっしょになっていて、あたしはその間へ生まれた一人なのです。そのころもう八つになっていました」
　そう間違いない。おつゆは駒形のつるやのお加世と従妹同士なのだ。道理で、はじめて昨日この顔を見た時どこかで見た顔だと思ったのは、お加世によく似ているからだったのだ。
「あたしはまだ子供で、事情はよくわかりませんでしたが、たしかにその年の二月に入るとまもなく、叔父の嘉兵衛が抜け荷とかの嫌疑で、ふいに奉行所へつれていかれました。叔母はその正月にはお加世という娘を産んで、ようやく肥立ったばかりでしたが、叔母も牢屋へ入れられるというわさがあって、これは源吉という下男がついて、その夜のうちに大坂のほうへ身をかくしてしまったのです。店の責任は大番頭だった父の清蔵にあるので、たぶん父も奉行所へつれていかれるのではないかと母とあたしは家でふるえていましたが、それから五日目に叔父は牢熱病というのにかかって、牢死してしまったのです」
「牢熱病ねえ。あれは牢屋などになれない堅気な人間には恐ろしい病気なんだ」
　雷太郎はそれとなくさぐりを入れてみる。嘉兵衛は病死か毒殺か、死因が重大問題なのである。
「あたしたちは牢熱病だと聞かされていましたが、後になってみると、それがはっきりしないところもあるんです。とにかく、吟味中に叔父が急死しましたので、抜け荷のほうはうやむやになってしまいました。そのために父はずいぶん金もつかったようです。そして、いよいよ大和屋はお構いなしときまった時には、肝心の叔母とお加世の行方がわからず、店は父が跡を引きうけてつづけることになったのです」
「それはそれよりしようがなかったろうな」

「あたしが十六の時、母のお藤が亡くなりました。その時、母は自分が大切にしていたべっ甲の櫛笄をあたしにあずけて、これを叔母のお国にわたしてくれとたのみました。風のたよりに、叔母と娘のお加世は、いま江戸で無事に暮らしていると聞いている。いつか一度はたずねていってこれを妹にわたし、姉は決して極楽へ行く気はない、自分から地獄へおちる気で死んだと、そういっておくれ、それだけいえば、妹にはよくわかるはずだからといって、まもなく世を去りました。そのころはあたしももう年ごろですから、だれからともなく、叔父の嘉兵衛があのとき奉行所へつれていかれたのは、父が馬場四郎吉という悪い与力に半分は脅迫されて、ありもしない抜け荷の密訴をしたのだというわさを耳にして、半信半疑でいたころでした」

「なるほど。そこで牢熱病というのがあるいは毒死だったかもしれないという疑いがおこってくるわけだな」

「父の清蔵はあくまでも牢熱病だと思いこんでいたようですから、毒死だとすれば馬場がやったことに違いないんです。母が亡くなってから、あたしはなにか世の中がいやになって、というよりやけになったというほうが本当かもしれません。母の三周忌がすむとまもなく、父に背いて、恥ずかしい話ですけれど、並川新之丞と駆け落ちをしました。江戸へ出て、ぜひ叔母をさがしたいという気持ちもあったのです」

「ああ、このあいだ並川さんが売りに行った櫛笄というのは、その時おつゆさんが堺から持ってきたものなんですね」

お雪がそばから思わず口を入れる。

「はい」

おつゆはじっと目をつむって、

「あの時はつらくて、おっかさん、あたしもきっと地獄へ行きますからと、心の中で母に何度もあやまっていました」

といいながら、みるみる涙があふれてきた。

「いいえ、あたしはそんなつもりでいったんじゃない。この十年もの間、よくそれを持ちつづけてきたと思って、本当は感心してしまったものんだから、ついロがすべってしまって、——ごめんなさい」

お雪はあわてて病人の涙をふいてやっている。

「その後、大和屋はどうなったろう」

雷太郎はそっちへ話を向けていく。

「父はその後も散々馬場にいじめられたようで、あたしが家出をするとまもなく病死して、店もつぶれてしまったそうです」

「馬場という悪与力のほうは、今でも堺でのさばっているのかな」

「さあ、どうでしょうかしら」

「いま馬場はいくつぐらいになっているだろう」

「父とおなじぐらいですから、五十だと思います」

「おつゆさんは馬場の顔を見ればこれがそうだとわかるか」

雷太郎はふっと、さっきのけんか相手の馬場吉五郎というおやじ浪人の悪相を思いうかべたのだ。そっちは四郎吉、こっちは吉五郎。名前は違うが、おれも十手を持ったことのある男だと威張っていたし、なんとなくくさいような気がするのだ。

「あたしには父の敵ですから、今でも一目でわかると思います」

「おつゆさんの話はよくわかった。わしがきっとそのお国親子をさがし出してあげるから、しっかりしているんだ。病なんかに負けちゃいかん」

おつゆのさがしているお加世はすぐ近くの駒形にいるのだ。さっそくここへ呼んできてやるのはわけない話だが、はたしてお加世がそれを承知するかどうか、これは一度お加世とよく話しあってみてからでないとうっかり口はきけな

い。
「風さま、あたしはもうそう長くはございません。母と約束したとおりまもなく地獄へまいります。いいえ、あたしはそれでよろしいのです。ただ心残りなのは、新吉のことだけでございます」
おつゆははっきりと目をあいて、その目がすがるようにこっちを見あげてくる。愛情にあふれている美しい母親の目だ。
「承知した。新坊はわしが引きうけて、必ず立派な男に育てあげる」
「うれしい、あたし」
その目からまたしても涙があふれてきて、おつゆは目をつむってしまう。
「ようござんしたねえ、おつゆさん。若だんなは男の中の男なんだから、もう新坊のことは心配しなくたって大丈夫よ。——それにしても、新坊はどうしたのかしら。おそいねえ、若だんな」
お雪が急にそれを心配しだす。
「よし、おれが迎えに行ってみよう。すぐにつれて帰ってくる」
病人は話し疲れてきたようだし、この辺が座を立つ潮どきだと雷太郎は思った。
「そうしてくれると、あたしも安心だわ」
お雪にもその気持ちは通じたらしく、うながすように口をそえる。
「じゃ、行ってくるから、後をたのむよ、あねご」
「後は大丈夫よ。でも、すぐに新坊といっしょに引きかえしてくださいね」
「心得た」
雷太郎が気軽に座を立とうとすると、
「風さま、どうぞお願いいたします、くれぐれも新吉のことだけは」
と、必死に両手をあわせてみせる。
「わかっています。任せておきなさい」
雷太郎はきっぱりと誓って立ちあがった。
「あねご、ちょっと——」
台所口までお雪を呼んで、

「ほかでもないが、あねごは当分広小路へ出かけるのは遠慮してくれ。亀田屋一家がうるさい」
それだけいうと、雷太郎はもうさっさと向島土手のほうへ歩き出していた。

顔を見にかえる

隅田川を舟できて、三囲稲荷の参道へあがるあたりに、竹屋の渡しというのがある。花川戸の店へ帰るにはこの渡しをわたったほうが近い。
雷太郎が向島土手づたいにその近くまできた時、いま向こうから着いた渡し舟に乗っていたらしく、五、六人の客のいちばん後から新吉が土手へ駆けあがって、ふところをおさえながらこっちへ走り出す姿が目に入った。
「おい、新坊」
こっちからもそっちへいそぎながら声をかけてやると、
「あっ、おじちゃまだ」
と、新吉は一生懸命の顔をあげて、幼い目をさっと輝かせる。いかにもああよかったといいたげな顔つきだ。
「新坊は花川戸へわしを迎えに行ってきたんだろう」
「うむ。おかあちゃまがおじちゃまにすぐ来てくださいっていうんだ」
新吉はその時の母親の顔を思い出したように、さっそく用件を告げる。
そういえば、この目はたしかにお加世にも似ているようだ。
「おじちゃまはな、新坊が出かけた後へ行って、今おかあちゃまに会ってきた帰り道なんだ」
「おかあちゃまに会ってきたの、おじちゃま」
「会ってきた。もう話もちゃんと聞いてきている。新坊は花川戸のおじちゃまの家がすぐわかったのか」
「すぐわかった」
「だれに会ってきたんだ」
「お店へ行ったら、小僧さんが玄関へつれてい

ってくれて、そしたら、おばちゃまが待っていたんだ」

やっぱり、お浦が自分で出て会ったようである。

「新坊はおばちゃまになんといったんだ」

「おれ長命寺の裏の並川新吉です、おじちゃまに会いたいんですといったら、おばちゃまは、おじちゃまは出かけていて留守だというんだ。おれ、困っちまったんだ」

「おばちゃまも困ったような顔をしたろう」

「うむ。坊やはおじちゃまにどんな御用があるのって聞くから、おかあちゃまが病気で、おじちゃまにきてくださいっていってますといったんだ。そしたら、おじちゃまは坊やのおかあちゃまを知っているんですねっていうから、おれ、昨日お雪姉ちゃまといっしょにきて、知ってるんですっていったんだ」

「おじちゃまはな、坊ややおかあちゃまのことを、まだおばちゃまに話してなかったんだ。だから、おばちゃまは坊やたちのことはなんにも知らないんだ」

お浦の当惑している顔が雷太郎には目に見えるようである。

「でも、おばちゃまは、おかあちゃまは死ぬかもしれないんですってというと、びっくりして、それなら坊やは早くお帰りなさい、おじちゃまが帰ってきたら、おばちゃまがきっとすぐ行くようにいいます、一人で帰れますかっていって、お菓子をつつんでくれたんだ」

新吉は大切そうにそっとふところを手でおさえてみせる。

この子はやっぱり母親の死期を知っているのかと、雷太郎はどきりとして、

「そうか、よくお使いができたな。いまもいうとおり、おじちゃまはもうおかあちゃまに会ってきている。おかあちゃまは新坊の帰りを心配していたようだから、早く帰って安心させてやるんだ。わかったな」

と、さとすようにいってやる。

「うむ、おれすぐ帰る」

「おじちゃまもまた後で行くから、ころばないように帰るんだぞ」

「うむ。おじちゃま、ありがとう」

新吉はそういうなり、もう家のほうへ駆け出していく。

——かわいそうに、あの子はまもなくみなし子になる。

雷太郎はそのいじらしいうしろ姿を見送りながら、思わず目頭が熱くなってきた。

孤児になる子供もかわいそうだが、あの子一人を残していく母親はもっとつらいものがあるに違いない。しかも、その母親も、その子も、今日は夫のこと、父親のことは一言も口にしていなかった。母親のほうは明らかに夫のことはあきらめていたようだから、それだけに、新吉一人をおいていくのがどんなにか心残りだろうと思いやられるのだ。

雷太郎はふっと屋敷の母のことが思い出されてきた。

お浦という女房を得て女心というものがよくわかった今は、義父と再婚した母への長い間のいわれなき不信感ももうすっかり消えている。それは少年期の潔癖からくるまったくいわれなき感傷にすぎなかったのだ。

——おれのおふくろも、新吉の母親のように、無断で家出をしたせがれのことをきっと心配しているだろう。

雷太郎は急に会ってみたいようなしみじみとしたものを感じてくる。

が、その肉親のなつかしさは、やっぱりお浦のほうにいっそう濃いものがあるようだ。おふくろさまより女房のほうが恋しい。それが男と女というものの正体かもしれないなと、雷太郎は我ながら苦笑しながら、足はさっさと竹屋渡しのほうへいそいでいた。

一渡お浦の顔を見てからでないと、どうにも

気持ちが落ち着かなくなってきたからだ。
時刻はやがて昼に近くなっていた。
「お帰りなさいませ」
玄関へ入ると、物音を聞きつけたお浦はもういそいでそこへ出迎えていた。
「おまえ、おれの足音がわかるのか」
「わかりますのよ」
お浦は深沈とした女房の微笑を見せてくれる。
「どうしてわかるんだろうな」
「御夫婦なんですもの、それが普通なのではありませんかしら」
「普通かなあ」
「普通ですのよ。だんなさまが外へ出ている間中、だんなさまのことばかり考えていますもの」
あっと雷太郎は目をみはりながら、病床のおつゆはなおさらのこと、夫の足音ばかり待ち暮らしていたろうと思うと、妙に胸が詰まってくる。

「お帰りなさいませ。案外早くもどれましたのね」
居間へ落ち着くと、あらためてあいさつをしなおす行儀のいいお浦なのだ。
「心配だから、用の途中で一度顔を見に帰ってきたんだ」
「なにかそんな心配なことが出先でございましたの」
「うむ」
「そういえば、さっき並川新吉という七つばかりの子供があなたをたずねてまいりましたのよ」
「実は、そのことなんだ」
お浦はなにかどきりとしたようにまじまじとこっちの顔を見ている。
「どうしたんだ」
「あのう、あの子は、もしやだんなさまの」
「冗談いうなよ」
雷太郎は唖然として、

「そうか、おまえにはまだなんにも話してなかったからな」
と、それしにしても思いもかけない誤解に、ついわらい出したくなる。
「わたくし、もしそれが本当でも、やきもちなどやきませんのよ」
「安心しろ、おれの子はおまえがこれから産むんだ。おれは女にそうだらしのないほうじゃない。もっとも、おまえには少しだらしがなさすぎるがな」
「あんなことを――」
お浦は顔を赤らめながら、それでも安心したように、
「まさかとは思いましたけれど、でも、世間にないことではございませんし――。女はやっぱりやきもちやきなのですね」
と、自分からいってわらい出す。
「つまり、それで亭主の足音がわかるようになるんだな」
「ふ、ふ、それはやきもちではありませんわ。もし間違いでもあったらと、そんな心配だけ。あたくし自分でもおかしい。もう一人でいても一人でいるような気がしませんの」
「それはそうだろう。おまえの体の中には、もうおれの血がいっぱいまじっているんだから、おまえは一人じゃないんだ」
「では、だんなさまはどうなのかしら」
「そうだなあ、おれもだいぶおかしくなっているようだ。おふくろさまのことを思い出しても、急におまえの顔が見たくなってくる。つまり、親より女房のほうがずっといいんだな」
「あら、お屋敷のほうになにかございましたの」
お浦はまたしても顔色をかえそうになる。
「屋敷のほうじゃないんだが、お加世の敵討ちの話な、そのほうがどうやら少しわかりかけてきたんだ。というのは、さっき使いにきた新吉のおふくろでおつゆという女が、当人の身の上話を聞いているうちに、お加世とは従妹同士だ

ということがおれにわかってきたんだ」
「まあ、――そのおつゆさんて方は死にかけているんですか。坊やはそんなことをいっていましたけれど」
「うむ、労咳だからな。気の毒だが、今日か明日だろう」
「お加世さんはそれを知っているんですか」
「いや、双方ともまだ知らずにいる」
「おつゆさんのだんなさまはどうしたのでございます」
「お浦、これは絶対に人に口外してはいけないぞ」
雷太郎は本当のことをいわずにはいられなくなってきた。
「大丈夫ですのよ。だんなさまのいけないということは、だれにも話しはしません」
「そうか。実はな、おとといの浪人強盗で、昨日番所で血を吐いて死んだ男が、新吉の父親の並川新之丞らしいと、おれにはわかりかけてきたんだ」
「なんでございますって――」
お浦もびっくりしたようだ。
「貧に負けてのことなんだな。だから、並川も死んでも自分の姓名は口にしなかった。それをまたおつゆ親子はなんにも知らないから、ここ四、五日並川が家へもどらないのを心配して待ちこがれている。その親子は、昨日の昼間、並川の帰ってきた亡霊を見ているんだ」
「まあ」
「おつゆは死期が近い。並川のことはもうあきらめているんだな。口に出してはいわないが、ひょっと不心得をおこして身をほろぼしたのではないかと、そこまで考えているようなんだ。おれは昨日はじめてお雪という風変わりな女につれていかれておつゆに会った。これもなにかの因縁かもしれない。おつゆは一人残していく新吉のことが心配で死にきれない。母親としては当然のことだ。それで、おれに、新吉のことはたのむと昨日そういっていたが、今日もう一度それが念を押したくて、さっき新吉におれを迎えによこしたんだ」
雷太郎はついでに昨日からのいきさつをざっとお浦に話して聞かせた。

功徳は人にささげる

「だんなさまは人の災難ばかりもらって歩くのですもの、あたくし心配で」
雷太郎の話をひととおり聞きおわったお浦は、おっとりとした顔にあふれるような愛情をたたえながら微笑した。
「おれは大体お節介にできているのかもしれないんだが、考えてみるとあのお加世の凶のおみくじをもらってやってからどうもおれの運は少し荒っぽくなってきたようだ」
雷太郎はわれながら苦笑が出る。
「でも、その凶のおみくじがあったから、あたくしの災難もあなたにしょってもらえたのかもしれません。愚痴はいえませんわ」
「なるほど、――すると、おれとおまえの結びの神は観音さまということになる」
「そうですのよ。深い縁があるんですわ」
「おれにいわせるとな、おれはおまえの災難をしょってやったかわりに、おまえという慈母観音のような女房にめぐり会えた。差し引き勘定では、おれのほうが得をしている」
「そうですかしら。あたくしいま、あなたの話を聞いているうちに、ふっと妙なことを考えていたんですのよ」
「どんなことだ。またやきもちのほうか」
「ふ、ふ、やきもちかしら」
お浦の顔がほんのりと赤くなる。
「話してみろよ」
「わらってはいやですよ」
「怒るかもしれねえな」
「怒られると怖いけれど、観音さまの話なの」
「観音さまがどうしたんだ」

「観音さまのおみくじを引いたのはお加世さんなんでしょ。あなたはそのおみくじをもらってやって、お加世さんの災難をしょってあげました。本当はお加世さんのほうへ縁が深いはずなのに、どうして観音さまはあなたをあたくしのほうへ縁を結びつけてくれたのかしら」
「そんなことはわかりきっているじゃないか」
「どうわかっているんですの」
「あの時はおれとお加世はまだ敵同士だった。無論、観音さまにはそれは誤解だとわかっていたが、お加世のほうに敵討ちという邪心がある。これはとても縁がないものと見て、おれをおまえのほうへまわしたんだ」
「ただそれだけかしら」
お浦はなにか少し不服そうである。
「この解釈では気に入らないようだな」
「だって、それではなんだかあっちは都合が悪いからこっちへまわしたみたいで、情がなさすぎますわ」
「いや、情の問題はなにも観音さまの責任じゃないんだ。たとえば、観音さまはこっちならたぶんうまくいくだろうからと見て、おれをこっちへまわした。しかし、おまえにそれだけの情がなければ、またおれをほかへまわそうと考えていたに違いないんだ」
「いやですわ、そんな。いまさらほかへまわされては困ります。観音さまにことわってくださいまし」
お浦は真剣な顔になって、冗談にもそんなことは考えたくないようだ。
「心配するなよ。おまえには観音さまが思っていたよりはるかに深い情があった。その情に変わりがないかぎり、おれをどこへもまわしはしないさ」
「あたくしの情に変わりがあるはずはございませんでしょう」
「なんだ、おれが怒るより先に、おまえのほうが怒っているじゃないか」

「あら、本当――」
お浦はおかしそうにわらい出す。
「観音さまにはもう一つ考えがあるんだ」
「あたくしが怒りたくなるようなことなら、やめておいてくださいまし。観音さまのお話は怖い」
「いや、こんどはおれのほうのことなんだ。おれはお節介で、多少無鉄砲でわがままなところがあるから、よっぽどしっかりした情の深い女房を持たせないと人生を誤る。おまえならきっと大丈夫だと見たから、おまえのところへおれをまわしたんだ」
「本当かしら」
うれしそうな顔をかくしきれないお浦だ。
「おまえは自分じゃ気がつかないだろうが、おれがまだ用心棒でいたころは、いつも底意地の悪い、どこかに険のある暗い顔をしていた。それがおれといっしょになったとたん、明るくなって、観音さまのような慈悲深い顔になった」
「それは、あなたがあたくしの災難をみんなしょってくれたからですのよ。あたくしにはいま自分の苦労などなんにもありません。ただ心配なのは、あなたの体に間違いがないようにと、ただそれだけですのよ」
「おれの体に間違いなんかあるもんか。おれにはおまえという慈母観音さまがついているんだ」
「おつゆさんには観音さまがついていなかったのかしら」
ふっとお浦の顔が曇る。
「いや、観音さまの慈悲にえこひいきはないはずだ」
「でも、あんまりお気の毒すぎるんじゃありませんかしら」
「おつゆは自分が慈母観音になって、親の罪、夫の罪、わが子の不幸をみんなしょっていくんだ。だからこそ、観音さまがおれたちを引きあわせて救いの手をのべてくれといっているんだ

ろう」
「ねえ、息のあるうちにお加世さんに会わせてあげたほうがいいんじゃありませんかしら」
「おれもそうは思うんだが、お加世がすなおに会うというかどうか、おれはそれを心配しているんだ」
「いいえ、お加世さんにもおつゆさんにも観音さまがついています。よく話をすれば、きっとわかってくれるんじゃありませんかしら」
慈母観音はきっぱりといってから、
「それに、お加世さんは敵討ちという邪心を捨てなければ、自分が救われないんです。つるやの主人の源吉という人は、おつゆさんのことを知っているはずだと思いますのよ」
と、いい知恵をつけてくれる。
「そうだ。源吉はおつゆの小さいとき顔をあわせているはずだな」
「もしあなたがさっき駒形で因縁をつけられた馬場吉五郎という浪人者が昔堺の与力だった馬場四郎吉だとすれば、これも源吉に顔を見せればすぐわかるんじゃないかと思うんですけれど」
「よし、わかった。これからすぐつるやへ行ってみよう」
「そうしてあげてくださいまし」
「途中でまた人の災難にぶつかったら、どうしようなあ、お浦」
「拾ってあげることですわ。それが観音さまのお心かもしれませんし、もしそれで功徳が一つ積めるようなら、それはみんなおつゆさんにあげることにしましょうよ」
「驚いたなあ。いつおまえはそんな立派な心がけになれたんだ」
雷太郎はわざと目をみはりながら、こいつは本当に慈母観音になりやがったと、内心お浦の顔に見とれずにはいられなかった。
「そんなに立派ですかしら」
「うむ、立派だ。あんまり立派になると、おふざけが怖くなる。罰があたるかもしれないからね」
「あんなことを――」
お浦は目でわらいながらにらむまねをして、
「それはそれ、これはこれですのよ。あたくしにはあなたという宝物があるから、この上の功徳はなんにもいりませんの。あんまり欲張ると、また底意地の悪い、険のある、鬼ばばあの顔になりますもの。あたくしはこの甘い顔でもうたくさん」
「そのとおりだ。そのほうがおれもおふざけがしいい。――じゃ、行ってくる」
雷太郎はいきおいよく立ち上がって廊下へ出ようとしたが、いそいで見送りに立ったお浦のすんなりとした立ち姿を見ると、ふっと胸が甘くなってきて、いきなりその肩を胸の中へ抱き寄せていた。
「まあ、あなたは――」
「いいから、もっと甘い顔をしてくれよ」
「いやですわ、そんな」
ほんのりと桜色に上気したお浦のとろんとした甘い顔を見ると、それだけで十分満足したようだ。
雷太郎はまもなくお浦に玄関まで見送られて倉橋屋を出た。
――それはそれ、これはこれか。
女房というものはいいものだと、雷太郎はひそかに満足である。これだけほれて、ほれられれば、少しぐらいだらしなくなるのはしようがないとも思う。おふくろより女房のほうがよくなるのは、人間、当然のことなのだ。
そんなことを考えながら、こんどは花川戸通りのほうへ出てくると、
「あっ、だんな――」
ふいに忠太が青い顔をして飛びついてきた。
「どうした、忠公、血相なんか変えて」
「すんません、だんな、すぐに行ってやっておくんなさい、恩にきまさあ」
忠太はこっちのたもとをつかんで、もうぐん

ぐん寺町横町のほうへ引っぱっていく。
どうやらまた人の災難にぶつかってしまったようだ。
「松葉屋になにかあったのか」
こっちへくるようなら、そこよりほかにない。
「へえ、たかり浪人らしいのが三人、とぐろをまいているんでさ」
「大河原組のやつか」
「そうじゃないらしいんで。なあに、相手が一人ぐらいなら、こういう時あっしが男をあげておきてえんだが、なにしろ三人じゃねえ」
忠太はため息をついている。
「どうだ、このごろお高のほうは」
あれっきりお高にはまだ会っていない雷太郎なのだ。
「おかげさまで、あっしの実意がだんだんわかってきたようでございんしてね」
「そうか、おまえはともかくも伝吉を片づけているんだからな」
「まあ、そいつを買ってくれたんでしょうね」
「しかし、自慢はするなよ。腹の中をのぞかれるからな」
「わかってまさ。あっしの実意なんてものは、ほかにあるんでさ」
「まさか、おなじ実意でも、下の物の洗たくなんかしてやっているんじゃないだろうな」
「御冗談で——。そこまでいけばしめたもんだが、まだそこまではねえ」
「妙なことをいうなあ。できれば下の物の洗たくをしてやるつもりでいるのかね」
「やりますともさ。深くなるほど帯を解く、歌なんてものはうまくいったもんで、——帯を解いて下の物まで解くようになりゃ、洗たくなんかお安い御用でござんすからね」
この男の人生観は多少違うようである。
「まあいいだろう。そこまで実意があるから、相手が一人なら刺し違えても男をあげておきたくなるわけだ」

「だんなを見習ってるんでさ。浪人組強盗をばっさっと片づけたんで、お浦さまもつい帯を解く気になった。けど、あの男ぎらいのお浦さまがどんな顔をして帯を解いたか、あっしはふしぎでたまらねえ」
寺町横町から馬道の四つ角へかかってきて、はてなと、雷太郎は思わず目をみはった。

逃げるおいぼれ

「どうした、お加世」
随身門のほうから足もとばかり見て歩いてくるお加世の前へ行って、雷太郎がいきなり声をかけると、
「あら、若だんな」
お加世はびっくりして顔をあげながら、なにかどぎまぎしたような微笑をうかべる。
「観音さまへおまいりしてきた帰りか」
お加世は黙ってうなずいてみせる。
「ちょうどいいところで出会った。おれはおまえにぜひ話したいことがあるんだが、その前に一軒用足しがあるんだ。用はすぐ片づくから、いっしょにそこまできてくれ。いいだろう」
雷太郎は押しつけるようにいって、向こうであきれたような顔をしている忠太のところへ引きかえす。
「だんな、この間のおみくじの娘さんですね」
忠太はあの時のことをすぐ思い出したようだ。
「うむ、駒形のつるやのお加世さんだ」
「知っていやすよ。つるやの看板娘ってのはこの娘さんだったのか」
忠太は正直にそのあざやかな娘ぶりにちょいと見とれているようだ。
お加世はおとなしくおじぎをしている。
そこがもう松葉屋の前で、この時いきなり出入り口の油障子があいて、どかどかと五、六人の客が先を争うように往来へ飛び出してきた。
「あっ、だんな、はじめやがったようですぜ」

忠太が血相を変える。

「よしっ、――お加世、どいているがいい」

雷太郎は客たちが出てしまうのを待って、あけっ放しの戸口からゆっくり松葉屋の土間へ入っていった。

見ると、右がわの台の中ほどに、なるほど柄の悪そうな浪人者が三人、もう十本ばかり銚子をならべて、真ん中のやつが突っ立って、台の上の吸い物椀を指さしながら、お高をつかまえてなにかわめいている。

驚いたことには、お高に因縁をつけているのはさっきのおやじ浪人馬場吉五郎で、一人はその時の相棒の大沢鉄之助、もう一人はそれよりも若い新顔の浪人者だった。

「こらっ、貴様はここの店の娘か」

「そうですのよ」

お高はびくともしない顔つきだ。これも評判の松葉屋の看板娘だが、このほうがお加世より三つほど年が上で、出入りの客種も違うから自然伝法が身について、年増娘だけに度胸もすわっているようだ。

「これ、ここの店では汁椀の種にみみずをつかうのか。これを見ろ、こんなものが人間に食えると思っているのか」

馬場おやじは居丈高になってお高をにらみつける。

「御冗談でしょう。家では、みみずだなんてそんな気のきいたものは吸い種につかっちゃいませんわ」

「うそをつけ。現に、この汁椀の中には、このとおりみみずが入っている。さては、貴様ら、おれたちを貧乏浪人と見てわざとこんないやがらせをやったんだな。承知しないぞ」

「おじいさん、そんなへたなお芝居はおやめなさいよ。いい年をして、みっともないわ」

「なんだと、へたなお芝居だと。だれがどこで芝居をしているんだ」

「おじいさんが芝居をしているのよ。あたしはえたちのような小娘などにばかにされてたまるか。それへ出ろ、無礼討ちにしてくれる」

どすんと一つ台の上をこぶしでたたきつけて、おやじは目を血走らせてきた。証拠の紙まで見つけられてしまっては、もう刀を抜いてひと暴れする以外に手がなくなってきたのだろう。

「馬場さん、だいぶ威勢がいいようですな」

ころ合いと見たので、雷太郎はついたてのかげから一足前へ出ていく。

「なにっ。だれだ、貴様は」

馬場は酒で濁った目をじろりとこっちへ向けて、

「なあんだ、貴様はさっきのきんちゃく切りの仲間の浪人だな。なにしにこんなところまでしゃばってきたんだ」

と、臆面もなくきめつけてくる。

連れの大沢は、こいつまた悪いところへといいたげな顔つきで、そっぽを向いてしまう。

「あんたはもと堺番所の配下の与力、馬場四郎

はじめから様子がおかしいんで、それとなくみんなにもいいつけて、あんたたちのすることを見張らせておいたんです。散々のんだり食ったりして、もうはじまりそうだなと見ていると、案の定、おじいさんはいまふところから紙にくるんできたみみずを出して、その吸い物椀の中へ入れたでしょ。あたしはきたないと思ったけれど、おじいさんが風邪薬にでもみみず汁をのむんならしようがないと思って、黙っていたんです。そのあんたの足もとに、みみずをくるんできた紙がそのとおり落ちているじゃありませんか。そんなに威張るのはおよしなさいよ」

お高は馬場浪人の足もとを指さしてきびきびとやりかえす。

「おのれ、ゆるさん。貴様は客に対してとんだ粗相をやっておきながら、その罪を客にしょわせようとする。けしからん娘だ。これでも、おれは若い時、朱総の十手を腰にさして悪党どもをふるえあがらせたことのあるおやじだ。おま

吉どのだと教えてくれた人がありましてな、再度でしゃばってきたわけです」
「なんだと。おれがその堺の馬場四郎吉ならどうだというんだ」
一瞬、馬場は解せないといったような目を光らせる。
「その前に、あんたにお引きあわせしたい娘がある」
雷太郎はおだやかにわらってみせながら、出入り口のほうへ、
「お加世、――お加世はいないか」
と、呼んでみた。
「はい」
やっぱり野次馬どものうしろから中をのぞいていたとみえて、お加世が悪びれた様子もなく土間へ入ってきた。
あっとお高が目をみはっている。
「お加世、堺番所の与力で、馬場四郎吉さんという名前は聞いていないか」
雷太郎は念のために聞いてみた。
「知っています。おとっつぁんをあのとき番所へつれていった人です」
「そうか。あの人がその馬場さんだ」
雷太郎はお加世に教えてから、
「馬場さん、この娘の顔に見おぼえはないかね」
と、馬場のほうへあらためて聞く。
「そんな娘は知らん。それは貴様のいろ女か」
「いや、馬場さんがその昔、横恋慕をした堺の大和屋の家内お国の娘、お加世というんだが、お加世はお国に似ていないかね」
「なにっ」
こんどははっきりと思い出したようである。
が、たちまちそらっとぼけた顔になって、
「大和屋なんかおれは知らん。だいいち、おれは馬場吉五郎で、四郎吉などという男じゃない。貴様までおれに変ないいがかりをつけやがる。あんまり甘く見ると承知しねえぞ」
と、明らかに逃げを打ってくる。

「馬場さん、その逃げはいまさらおそい。十九年前の馬場さんの顔を知っている者が江戸に三人いる。一人は当時の堺奉行天野主膳の用人田宮孫作、一人は大和屋の下男だった源吉、もう一人は大和屋の大番頭清蔵の娘でおつゆ、この三人に会えば真偽のほどはすぐわかる」
「黙れっ、きんちゃく切り浪人。もうゆるさん、表へ出ろ」
形勢不利と見た馬場は、凶悪な形相になっていきなり抜刀しようとする。
「待て――。ここで刀を抜いては、ここの店が迷惑をする。とにかく表へ出よう。――お加世、来い」
雷太郎はお加世の腕をとって、一足先に表へ出た。
野次馬たちがどかどかと後へさがって遠まきにする。
「大丈夫、若だんな」
さすがにお加世は血の気のひいた顔で心配そうに聞いた。
「心配しなくてもいいから、やつらが出てきたらなるべく離れているんだ」
が、三人はなかなか出てこない。なにか相談しているようだ。
「だんな、はい、てんびん棒」
そこの路地口からまわってきた忠太が、心得顔にてんびん棒を一本わたしてくれる。
「ありがとう。よく気がついたなあ」
「へい、なにしろお高の一大事でござんすからね」
この男はもうお高のことしかなにも考えていないようだ。
「そら出てきたあ」
「たのむよう、風雷さん」
野次馬が口々に叫んでひしめき立つ。
先頭は大沢鉄之助で、次が馬場四郎吉、しんがりは若い浪人者だ。
「風うじ、おれは貴公と約束があるはずだ」

大沢が雷太郎の前へ出て話しかけてきた。
「今夜暮れ六ツすぎに源森橋で会う約束だったな」
「そのとおりだ。百両持ってくることを忘れちゃいかん」
「その返事はその時するはずだった」
「それはそれでよろしい。そこでものは相談だが、ここで貴公が馬場と果たし合いをやることになると、朋友のよしみとして、我々も刀を抜かなくてはならん。それでは町内の者が迷惑をする。どうだろうな、この勝負は、今夜、源森橋でつける。そういうわけにはいかんかな」
大沢がそんな口実をこしらえてきた。
「馬場うじがそう希望するのかね」
「いや、これは我々の希望で、馬場もそれならそうしてもいいといっているんだ」
「そうか」
馬場を逃がす気だなとは無論わかっている。しかし、こっちとしても、ここで馬場をたたき伏せてみたところで、いまさらなんの足しにもならないことなのだ。
「一つだけこっちにも注文があるが、それを承知してくれるかね」
「どんなことだな」
「今夜源森橋へ必ず馬場うじをつれてきてくれること、武士の約束ができるかね」
「よろしい。大沢鉄之助も男一匹だ、金打しようではないか」
大沢はほっとした顔つきで、わざと肩を怒らせてみせる。
「金打には及ばない。それさえ承知なら、ここはおとなしく別れよう」
「馬場うじ、いいだろうな」
大沢はうしろの馬場に聞いた。
「いいとも、馬場吉五郎も男のはしくれだ」
しかし、馬場はもうこっちの顔を見るだけの気力はないようだった。
まもなく、三人そろって吉野橋のほうへ引き

あげていく。馬場のうしろ姿はことにおいぼれていて、哀れにさえ見えた。
お加世はくちびるをかみしめながら、じっとその馬場のうしろ姿を見送っている。

輪廻

「あねご、とんだ災難だったな」
雷太郎は店の軒下まで出て、事のなりゆきを心配していたお高に声をかけながら、てんびん棒をかえした。
「わざわざきていただいて、若だんな、どうもありがとうございました」
お高はちょいとまぶしそうな顔つきでていねいに礼をいう。
「また飲み逃げをされてしまったようだね」
「いいえ、そんなことぐらいこの商売にはつきものなんですから」
そういうところはさすがにあきらめのいいお高だ。
「まあ、そう考えてあきらめておくことだ。では、またいつでもきてあげるからな。——お加世、出かけよう」
雷太郎はこっちへも急ぎの用をひかえているので、お加世をうながして歩き出す。
「だんな、すんません。ありがとうございました」
忠太がうしろからわがことのように大きな声で礼をいっていた。
その忠太の一生懸命さがお高に通じて、早くいっしょになれれば、それはお高のためにも忠太のためにも決して悪い結果にはならないんだがと雷太郎は思うのである。
肩をならべて寺町横町へ曲がったお加世は、足もとへ目を伏せたまま、まだ口をきこうとはしなかった。さっき馬場吉五郎にいっていたこっちの言葉を聞いているはずだから、それがいま頭の中で大きなうずをまいているのだろうか。
「お加世、おまえ観音さまへなにを拝みに行っ

てきたんだ」
人通りがまばらになってきたのを見て、雷太郎はこっちから切り出してみる。
「おみくじを引きに行ったんですけれど、なんだか怖くて、あたしやめたんです」
お加世の顔へ当惑しているような微笑がうかんで消えた。
「引いてみればよかったのに。凶が出たらまたおれがもらってやる」
「もういいんです。観音さまのおみくじより、今日はもっと本当のおみくじを引いてしまったんですもの」
「そのとおりだ。さっきの馬場四郎吉、あれがおまえの父親大和屋嘉兵衛を牢屋へ入れた当時の堺の町奉行所配下の悪与力のなれの果てなんだ。源吉が顔を見れば一目でそれがわかるはずだから、もうのがれられない」
「あたし、おじさんからゆうべすっかりその話を聞いたんです」

「そうか。源吉はなんといっていたね」
「おじさんは大番頭の清蔵が馬場におどかされて抜け荷の調べ書を取られたことは薄々知っていたというんです。けれど、馬場は大和屋から大金を引き出そうという欲と、あわよくばおとっつぁんを助けてやるというのを口実におっかさんをねらっている。そのことは大番頭にもわかっていたんで、二人で相談して、とりあえず店の金を百両用意して、おっかさんとあたしを大坂へ落とした。そのうちに本当の吟味がはじまれば、抜け荷の嫌疑のほうは誤解だったとわかるはずだから、それまでおっかさんは大坂にかくれていることになったんだっていうんです」
「ところが、嘉兵衛は運悪く数日で牢死した。そこに問題があるわけだな」
それが毒殺だとなると、奉行職にも監督不行き届きの責任がかかってくるのだ。
「そのころ、おっかさんは若かったし、あんまり突然の不幸で気が立っていたもんですから、お奉行さまが一服盛らせたんだといって気が狂ったようになってしまったんだそうです。ほっておくと、あたしをおぶって堺へ引きかえし、いつ奉行所へ駆けこむかわからない。それでおじさんが無理にだまして江戸へつれてくることにしたんだっていうんです」
「すると、源吉は嘉兵衛が牢内で牢熱病にかかって急病死したということはわかっていたわけなんだね」
「死骸を見たわけではないからはっきりそうだとはいいきれないけれど、後で大番頭が大和屋をついでいるくらいだから、これはちゃんとおとっつぁんの死骸を引き取ってお葬式を出しているんだし、たぶん病死だったんだろうといっています。けれど、おっかさんは死ぬまで毒殺だといい張って、そのことになるといつも顔色を変えて怒り出すので、おじさんもさからわないことにしていたんですって」
「源吉はその後、大番頭とは文通もしていないのかね」
「それはしなかったようです」
「おっかさんが大番頭を恨んでいるんで、文通もできなかったのかな」
「そうかもしれません」
お加世はそういってから、ふっと口をつぐんでしまう。
道はいつか寺町横町を出て、花川戸通りへ出ていた。雷太郎はお加世をつるやまで送っていって、ついでに源吉に会っておくつもりだから、黙ってそっちへ足を向けていく。
「若だんなは女は信用できないっていってましたね」
お加世がふいにそんなことをいい出す。
「いや、それは前のことで、いまはそうじゃない。男ってものは、おふくろさまより女房のほうが好きになるものだとわかってきたんだ。女は死んだ亭主よりいまの亭主のほうがよくなってくる、そういうものらしいな」

雷太郎ははっきりとそう答えて、我ながらさばさばとした気持ちだった。

「そうかしら。そういわれると、なんだかわかるような気もするんですけれど」

「それでいいさ。お加世もいまに亭主を持てば自然にそういう気持ちになってくる」

「あたし、おっかさんのことを考えていたんです。おっかさんは一生おとっつぁんの敵討ちのことを考えていました。そして、あたしにはおじさんのことをとうとうおとっつぁんとは呼ばせなかったくせに、どうしておじさんと夫婦になる気になったか、それがあたしにはわからなかったんです。しかも、おっかさんは決しておじさんがきらいじゃないようでした。正直にいえば、やきもちをやくほど好きだったんです。おじさんがおっかさんを大事にしたのはあたりまえですけれど、あたしはおじさんを疑ったことがあるんです。おじさんはおっかさんといっしょになりたくって無理に江戸へつれてきたんだ、あのとき堺へ帰れば帰れたんじゃないかと思ったんです。すると、おじさんと大番頭とはじめからぐるじゃなかったのかしらと、そんな気までしてきたんです」

「なるほど。——今日観音さまへおみくじを引きに行ったのはそのことなんだね」

お加世のそういう気持ちはよくわかるような気がする。

「そうなんです。ゆうべおじさんの話を聞いているうちに、どこまでが本当なのかわからなくなってしまって、——でも、もしおみくじを引いて、おじさんと大番頭がぐるだったとわかってきたらあたしはどうすればいいんだろうと考えたら、急に怖くなってしまったんです」

「それはそうだろうな。そうなると、敵討ちの見当がまるで狂ってくる」

「あたしね、はじめて若だんなに出会った時、女が敵討ちだなんていまどきばかげた話だ、そんなことはお上にまかせておけばいいんだといわれたでしょ。あの時の言葉を思い出して、やっぱりそれが本当だったとしみじみ考えてしまったの」

「つまり、それが観音さまのお告げだったと思えばいいんだ。お加世が本当にその気になったんなら、観音さまにかわって、おれがもう一つ いい話をしてやろう。聞くかね」

「聞かせてください。あたし、うかがいます」

雷太郎は吾妻橋のたもとへ出て、わざと人通りのすくない川っぷちの道へお加世をさそっていく。

「おれは、昨日、お加世の話を聞いての帰り道で、ある女に向島土手の長命寺の裏の三軒長屋へつれていかれたんだ。そこに、今年二十七の女房が労咳を患って、新吉という七つになる男の子に看病されて寝ていた。亭主というのは上方の浪人者で、これは数日前に家を出たっきり帰ってこない。どうも出先でなにか間違いがあって死んでいるんではないかと思われる節があるんだ」

「そのおかみさんは、その御亭主の死んだらしいということを知っているんですか」

お加世はすぐに話に乗ってきたらしく、さっそくそんな心配をしだす。

「あの病気は神経が鋭くなっているんで、度々亭主が夢まくらに立つ。そんなことから口には出さないが、もう亭主のことはあきらめているようだ」

「よっぽど病気は悪いんですか」

「今日か明日かというところだろうな。それで、今朝おれがまたたずねていくと、こんな遺言をたのまれてしまったんだ。その女房はもと堺の大和屋の大番頭清蔵の娘で、名はおつゆ、母親はお藤といって、おまえの母親お国の姉にあたるんだ」

「本当なの、若だんな」

お加世はぎゅうっと痛いほどこっちの腕をつかんでくる。

「本当の話だ。お藤はおつゆの十五の時に世を去っている。その時おつゆは母親から櫛笄をわたされて、妹のお国親子は江戸にいる、亭主の清蔵が気が弱かったばかりに、大和屋はめちゃくちゃになった、妹になんといってわびていいかわからない、もしおまえが江戸へ出るような時があったら、ぜひお国親子をたずねあててこの櫛笄をわたし、いくじのなかった姉の罪をくれぐれもわびてくれるようにといわれたというんだ。その後おつゆは十八の時いまの亭主の浪人者と勝手に夫婦になって、母親の遺言があるから江戸へ駆け落ちをしてきた。叔母さんのことは始終気にはなっていたが、そのうちに子供はできるし、浪人者の貧乏暮らしで、たずねてまわるという暇もないうちに、自分は労咳で倒れた。背に腹は換えられなくて、大切な櫛笄も去年の暮れに米代になってしまった。このまま死んではまことに申し訳ないが、持って生まれた寿命であってみれば、もうしようがない。後に残る新吉をたのみます。そして、縁あって叔母さん親子にめぐり会うこともあったら、親の罪をしょっておつゆはこうして死んだと伝えてくれと、これがおつゆの遺言だ」

「それで、それで若だんなはあたしのことをそのおつゆさんに話してくれたんですか」

「いや、まだ話してはいない。事情が事情だから、まずお加世に会ってわけを話してからにしようと考えて、さっき家を出たとたん、忠公につかまって松葉屋へ引っぱっていかれる羽目になった。そこで、またお加世に出会って、しかも馬場吉五郎にまでぶつかることになったんだから、考えてみると、これは道草ではなくて、やっぱり観音さまのおひきまわしということになるんだろう」

「おつゆさんはまだ生きているんですね」

「うむ。まだ生きてはいるが、一切のこの世の罪を自分一人でしょって観音さまのところへ行けるのももなくだろうと思う」

「あたし、おつゆさんに会います。生きているうちに会いたい。これからすぐつれていってください、若だんな」

お加世は必死な顔になって、そこへ立ちどまってしまう。

八丁堀の友情

お加世のほうにおつゆと会ってみたいという気持ちさえおこれば、雷太郎はわざわざつるやまで足を運ぶことはなくなってくる。

「お加世、おまえ一度家へ帰って、源吉と相談してみろ。源吉はおつゆのことをよく知っているはずだから、きっといっしょに行ってくれる。なまじおれがおまえをつれていくより、そのほうがおつゆにしても水入らずで話がしいいだろう」

雷太郎はそういって、お加世はちょいと不服そうな顔だったが、駒形河岸で別れることにした。

雷太郎としては、この従妹同士の対面には双方の親たちの暗い宿命がつきまとっている。それは娘たち同士で解決させるのが本当だと考えたのだ。

それにしても、お加世の敵討ちというやっかいな問題が、堺へ出向くまでもなくこんな風に片づいていくとは思いもかけないことだった。

事件は、十九年前に、馬場四郎吉という堺奉行所配下の悪与力が大和屋の大番頭清蔵を抜け荷の嫌疑で脅迫した。そのとき清蔵がきっぱりとそれを否定してしまえば後の悲劇はおこらなかったはずだが、清蔵にそれだけの勇気がなかった。あるいはほかのことでなにか馬場に弱みをつかまれていたのかもしれない。

そのために、大和屋嘉兵衛は吟味中入牢ということで召し捕られることになった。

こういう吟味は、たとえ無実とわかっていても、それが立証されるまでには早くても半年ぐらいはかかる。馬場はその間に大和屋から十分

うまい汁を吸ってやろうとたくらんでいたに違いない。無論、牢内で一服盛ってやろうというほど馬場も極悪人ではなかったのだろう。

しかし、大番頭にすれば、馬場が嘉兵衛の女房お国に毒牙をのばそうとする気配を感じたので、これだけは未然にふせいでおかなくては、後で嘉兵衛が出牢してきた時、自分の身が立たなくなる。

そこで、下男の源吉をつけて、お国親子をとにかくひとまず大坂へ落とした。その留守に、嘉兵衛は不幸にして牢熱病にかかり、あっけなく牢死した。

もともと抜け荷は嫌疑だけのことだから、嘉兵衛の牢死で大和屋の無実は案外早く解決したが、家と夫をいっしょに奪われた若いお国は逆上して、奉行を恨み、いつ奉行所へ駆けこむかわからない。そこで、源吉は清蔵と相談の上、お国親子をつれて当分江戸へ難を避けることになった。

清蔵としては、その間中大和屋の留守をあずかり、あわよくばそのまま大和屋は自分のものになるのだから、お国親子の江戸落ちは内心望むところだったに違いない。

お国と源吉はいつごろ結ばれたか、それはまだ聞いてはいないが、当時源吉は二十六、お国は二十三で、源吉はお国親子に親切のかぎりをつくしたろうし、夫と家を失ったお国は心細い他国へ出て、たよりになるのは源吉一人ということになる。おそらく、その江戸下りの道中ですでに他人ではなくなっていたろうと思われる。しかも、この夫婦はあくまでもお国のほうが主人格で、源吉はそれに甘んじて黙々と今日のつるやを築いてきた。それだけ源吉はお国にほれこんでいたのだろうし、お国もまたそういう源吉の律儀さにいつか深い愛情を感じていたのだろう。その夫婦の情愛の濃さに、物心のついてきたお加世が、

「おじさんと大番頭ははじめから共謀ではなかったのか」

という疑いを持つようになったのも無理からぬことといえる。

が、この事件の悪人はあくまでも馬場四郎吉一人で、その悪心をしりぞけきれなかった清蔵の弱さにも多少の責任はあるが、これは悪人とはいいきれない。その後のなりゆきは、弱い人間同士がそれぞれの宿命に押し流されて、今日の大詰めへきたと見るほかはないのである。

現に、悪人の馬場四郎吉でさえ、大和屋をつぶしてしまうほど散々金をしぼり取っておきながら、結局は因果応報の浮き世の道理には勝てず、いまはおちぶれて江戸へ流れこみ、みじめなごろつき浪人の仲間入りをしている。

――要するに、お加世の敵討ちは、自分で手をくださなくてもすでに天がちゃんと裁いていてくれたのだ。

そっちはそれで一応片がついた形だが、雷太郎にはまだその大詰めの一役が残っている。馬場四郎吉、大沢鉄之助組との今夜の源森橋での対決である。

馬場と大沢と、さっき松葉屋にいた若い浪人の三人きりなら、今夜の対決もそう心配することはないだろうが、ああいう連中にはどこへ行ってもごろつき仲間がいる。悪いことには、大沢はこっちに倉橋屋という金づるのついていることを承知しているのだ。

その金が目あてで、いくらでも仲間が集まるだろうし、その中にどんな策士がいて、どんなあくどいことをたくらむかわかったものではない。

――おれは大丈夫だが、どんなことでお浦がとばっちりをうけないとはかぎらないからな。

雷太郎は一つにはそれが気になったので、お加世と駒形河岸から別れてきたのである。

いそいで倉橋屋へ帰ってみると、出迎えに出たお浦が、

「あのう、八丁堀の市村さまがおいでになって、

さっきからお待ちになっていますよ」
と小声で告げながら、なんとなく目のふちを染めている。
「そうか、それはちょうどよかった。おまえ、市村にからかわれたのか」
こっちも小声になって聞くと、
「いいんですのよ。しようがありませんもの」
と、お浦はうきうきとした甘い顔をかくそうともしない。
市村は人が悪いから、それとなくお浦を誘導尋問にかけてからかっていたのだろう。
それにしても、体のいそがしい市村がわざわざここをたずねて自分の帰りを待っていたとすると、なにかそれ相応の重大な話があるのだろうと、雷太郎はやっぱりちょいと気になる。
「やあ、よく来たねえ」
客の待っている表座敷へ入っていくと、
「だんなさま、お帰りなさいませ」
と、市村は目でわらいながらお浦の口まねをしてみせる。
「あんまりお浦をからかっちゃいけねえ。あいつはばかっ正直だからな」
「いきなりおっしゃるぜ。ばかっ正直にのろけられる身にもなってもらいたいね」
「そうか、お浦のほうがのろけたのか。そいつは失礼した」
「いや、結構です。若だんなはおふくろさまよりおまえのほうが好きだなんて、本当にお部屋さまにいったのか」
「あれえ、だんなはそんなことまで聞き出しているのか」
「うむ、聞かされた。その時のお部屋さまのたがのゆるんだ顔なんてものは、一度亭主に見せてやりたかったなあ」
「なあに、おれは毎晩もっとたがのゆるんだ顔を見つけているんでね、それでおふくろさまより女房のほうがずっと好きになってしまったんだ」

「こいつはまたすごい。いや、結構です」
市村はおおげさにあきれた顔をしてみせてから、
「実はな、若だんな、おれは今朝小川町の屋敷へ呼ばれて行ってきたんだ」
と、急に真顔になる。
「ふうむ。おふくろに呼ばれたのか」
「いや、会ったのは田宮さんだったが、無論、御母堂さまの息がかかっている。つまり、若だんなはどういう気でいるんだろうと老用人は心配しているんだ」
「うまくいっておいてくれたか、鶴さん」
「おれとしても正直にぶちまけるよりしようがないからね。これこれでいま花川戸の倉橋屋にいる、失礼だが若だんなは一風変わっている変人で、決して世の中をすねているというんじゃないが、堅苦しい旗本の生活にいやきがさしたんだ。その上、姉女房が貞女で、若だんなの好きなようにさせておくから、いまのところとても屋敷へ帰る気にはなれないだろうとよく話しておいた」
「ありがとう。それでいいんだ。家督は栄二郎がつげばいい」
「若だんなはそうあっさりいうがね、御母堂さまにしても、老用人にしても、こいつはそう簡単にはいかないやね。だから、おれは田宮さんに、一度あなたが倉橋屋をたずねてみるほうがいちばんいいだろうとすすめておいた。それもそうだなと田宮さんは考えていたようだから、たずねてきたら、若だんな、悪びれずに会ってやったほうがいいぜ」
「そうしよう。どうせ一度ははっきりさせておく必要があるんだ、たがのゆるんだ姉女房のためにもね」
「そのとおりだ。ゆるんだ姉女房のたがが、そう若だんなを体ごとまきこんでしまったんじゃ、もうどうしようもないだろう」
市村は苦わらいをしながら、

「時に、若だんなは、お部屋さまから聞いたところによると、また変な事件にまきこまれているようだな」

と、ふいに話題をかえてきた。

「だんなはつるやのお加世が堺の大和屋の娘だってことを知っているかね」

「つるやが堺の人間だってことは知っていたが、それが大和屋の娘で、大和屋におかしな事件があったってことは、さっきお部屋さまから聞いたばかりだ。そいつがまた若だんなの死んだおやじさまが堺奉行の時分の話だなんてのは、ちょいと恐ろしいような因果話だな」

「まあ宿命ってやつだろう。そのおやじさまが三島の宿で急病死して、おれの人生がちょいと狂った。そして、お浦のたがにまきこまれたばかりに、お加世とめぐり会った。まるで、話みたいな話だ」

「それで、お加世はそのおつゆって従妹に会う気になったかね」

「その気になったようだ。たぶん、源吉と相談して、いまごろ向島へ駆けつけているんじゃないかと思う」

「一体、おつゆの亭主の並川っていう浪人者は、どうして家出なんかしたんだろうな、病妻と子供を残して。少し薄情すぎやしないかね」

問題が痛いところへふれてきた。

「だんながその並川の身になって考えてみてくれ。家には病妻と子供が飢えに泣いている。自分は無能で金策の道がない。金が入らなければ家へは帰れない。だれだってそうなりゃしないか」

「なるほど――」

市村は鋭い目でこっちを見すえている。

「一切は馬場四郎吉という小悪党が一人いたばかりに起こった悲しい宿命さ。並川は一つ間違うと浪人者がだれでも落ちこみやすい仲間へ引っぱりこまれて、みずから自滅した。病妻の労咳がうつっていたろうし、当人にすれば自滅してはじめてほっとしたんじゃないかと思うんだ」

「ふうむ、労咳持ちの浪人ねえ」

どうやら市村の頭の中にもはっとひらめくものがあったようである。

その夜の源森橋

その夜――。

暮れ六ツすぎに、雷太郎は忠太にてんびん棒を一本用意させて花川戸の家を出た。

「ことによると、その馬場四郎吉というやつは、今夜、源森橋へは出てこないんじゃないかな」

その話が出た時、市村鶴吉はそういっていた。

「おれもそんな気はしているんだ。馬場というやつはずるい小悪党じゃあるが、すくなくとも浪人強盗になるだけの度胸はないとおれは見ている。だから、あいつはおれに今日旧悪をあばかれて、ひょっとすると江戸を逃げ出しているんじゃないかと、そんな気もしているんだ」

「まあそんなところだろう。問題は相棒の大沢鉄之助というやつのほうだ。こいつは若だんなのうしろに倉橋屋がついていることを知っている。駒形河岸で百両と吹っかけたのはその場のいいがかりだろうが、こいつが今夜源森橋へ出てくるようなら、うしろにきっと大物がついてくる」

「大物というと、本所の大河原かね」

「うむ。大河原は若だんなに二度ばかり仕事のじゃまをされてから、若だんなが目の上のこぶになっている。なんとかしてだれかにうまく消させてしまおうと、その機会をねらっているだろう。だから、大沢はここへ今夜の呼び出しを売りこみに行っているんじゃないかと思う」

「そんなことがまるっきりないとはいえないだろうな」

「もう一つ、おれは本所の定十から聞き出したんだが、大河原伝内は死んだ伝吉から倉橋屋の事情をすっかり聞き出している。そこで、一度自分から倉橋屋の店へ座りこんでみる気になって、この時も若だんなにじゃまをされてしまっ

た。その後で、伝吉はここへ強盗に押しこんで、あんな死に方をしている。理屈からいえば、倉橋屋の実子が後から入りこんだ後妻に家と財産を乗っ取られた上、その後妻に命までとられたということになる」

「形からいえばそうもいえるな」

「伝内はその形のほうを盾にとって、お浦という女は倉橋屋のせがれを殺させて倉橋屋を乗っ取った毒婦で、鬼にもひとしい人非人だといっているんだそうだ」

「なにかその裏があるのかね」

「無論ある。定十にいわせると、伝内はそういう人非人のお浦だから、おれがめかけにしても文句はあるまい、おれは死んだ伝吉から倉橋屋の権利をゆずりうけているんだと、そんな気でいるというんだ。つまり、伝内はお浦さまと倉橋屋の財産に欲をおこしている。それにはまず風雷太郎を片づけてしまう必要があると、その機会をねらっている。まあこんなことになるんだろう」

「この間ここへ入った浪人強盗も、その計画のうちじゃないのか」

雷太郎は念のために聞いてみた。

「大いにくさいな。伝内鬼はどんなあくどい手段でも平気で考え出すやつだし、またその手先になる浪人者がいつも屋敷にごろごろしている。そんなわけだから、おれのほうでも十分手はまわしてあるが、若だんなも決して油断しちゃだめだぜ」

市村はそう注意して帰っていったのである。

市村が帰った後で、雷太郎としては、伝内鬼がなにをたくらもうとそんなことは少しも恐れないが、このなにかのろいのかかっているような倉橋屋の家だけは一日も早く出たほうがいいようだと、その時はっきり腹をきめたのである。

「お浦、おまえ明日にもおれといっしょにこの倉橋屋を出る覚悟はついているんだろうな」

あらためてお浦の気持ちをたしかめてみる

と、

「あのう、それは小川町のお屋敷から御用人さまがたずねてくるということとなにか関係がございますの」

と、お浦にとってはむしろそのことのほうがいちばん気になっているようだった。

「いや、小川町のほうは心配しなくたっていい。おれはどんなことがあったっておまえのそばを離れやあしない。ただ、倉橋屋の財産にはなにか人の執念のようなものがかかっているんじゃないかと思う。それに、世間から倉橋屋の金が目あてでおまえのところへ入りこんだと見られるのはやっぱりいやだ。おれはおまえを裸のままここからつれ出して、新しい人生を長屋住まいから出発してみようと思うんだ」

「それでしたら、あたくしはどうなりとだんなさましだいですのよ」

「よし、それじゃいつでもここから出られるように、身のまわりのものをふろしき包みにしておくんな」

「はい、そういたします」

この姉女房は決して亭主のいいつけに逆らおうとはしなかった。

晦日に近いから、空に月はなかった。日が暮れるころから急に冷えこんできて、そのかわり晴れあがった夜空に星があかるくさえていた。

「だんな、さっきはありがとうございました。お高もよろしくいってくれるようにっていうことでしてね」

てんびん棒をかついでいる忠太は、川っぷちの道へ出るとさっそくそんなあいさつをした。

「どうだ、お高はいつごろ帯を解いてくれそうだね」

「それが、だんなの前ですが、案外早くなるかもしれねえんです」

「つまり、だんだん忠公の真心ってやつがわかってきたわけだな」

「さあ、そいつはどうだかわかりやせんがね、

さっきおかしなことがあったんでさ」
「手でも握ってくれたのか」
「そうじゃねえんです。目にごみが入ったって手でこすっているから、おれが見てやろうっていうとね、おとなしく顔を出しやがった。まぶたをかえしてみると、なにか張りついてやがる。いきなり舌でなめてとってやったんでさ。怒るかなと思ったら、きたないなあっていいやがって、それっきりでした」
「ごみはとれたのか」
「楽になったっていっていたから、とれたんでしょうよ。けど、だんな、きたないなあっていうのは、なめたほうのことか、なめられたほうのことか、どっちなんでしょうね」
忠太はいかにもうれしそうである。
「それがためしたかったらな、こんどごみをなめてやる時、ついでに黙ってくちびるをなめてみろ。それで怒らなければ、お高のほうにいつでも帯を解く用意ができていると思っていい」
「そんなまねをして、しかられやしねえかなあ」
「怒るくらいなら、目などなめさせはしないだろう」
雷太郎はそんな知恵をつけてやりながら、
「そうだ、今夜源森橋へ行って、もしあの連中が刀を抜くようだったら、おまえはすぐ逃げてしまうんだ。けがでもするとお高ががっかりするだろうからな」
と、ふっと気がついて注意しておく。
「そんなことをすりゃ、お高に愛想をつかされまさ」
「どうして――」
「若だんなはうちのためにこんなことになったんだから、今夜は大丈夫かしらって、お高はそればかり心配しているんです。だから、あっしは、大丈夫だとも、おれがいっしょについていくんだって威張って出てきているんですからね」
「そうか。それならなるべく遠くで見ていろ。なまじ手出しなどは決してしちゃいかん」

「あっしがもう少し強いといいんですがねえ」
当人も自分の分だけはさすがに心得ているようである。
そういえば、長命寺裏のおつゆの家からはまだなんのたよりもこなかった。たよりがなければ、おつゆはまだ息があるはずだ。お加世や源吉は生きているおつゆに対面できたはずである。
そんなことを考えながら、吾妻橋をわたって左へ切れ、中ノ郷の瓦焼き場の草っ原へかかってくると、行く手の源森橋の橋たもとにだれか立っているのが見えてきた。黒い人影は二つのようである。
「そこにいるのは大沢うじかね」
雷太郎はこっちから聞きながら、かまわず近づいていった。
「やあ、雷太郎うじか」
案の定、それは大沢鉄之助で、連れは馬場ではなく、松葉屋にいっしょにいた若い浪人のほうだ。
「馬場うじはどうしたね」
「あれもたぶんもう来るはずなんだが、どうだ、雷太郎うじ、約束の百両は持ってきているんだろうな」
大沢はぬけぬけと切り出してくる。
そのいやに落ち着き払った態度から見て、この男にそれほどの腕前があるとは思えないから、どこかに加勢がかくれていると雷太郎は見て取る。
「大沢うじはその百両が目当てではなくて、もうだれかにわしを売っていそうだな」
「そんないいがかりは置くことだ。貴公には金持ちの後家どのがついているんだから、黙って百両出したほうが身のためですぞ。ここで命をすてては、蔵に何万両あっても死に金になってしまう」
「大沢うじこそずるいぞ。わしから百両取っても、それは役得というやつで、わしの体は助からない。違いますかな」

「よろしい、もう一度聞く。百両出すのか出さないのか」
大沢は昂然と居直ってきた。
「だんな、わたしておきやす」
形勢険悪と見て、忠太が持っていたてんびん棒をうしろからひょいと左手のほうへ突き出してくれる。
黙ってそれを受け取った雷太郎は、
「大沢うじ、わしはそれほどお人よしではないんだ。そろそろそっちもしっぽを出したらどうだね」
と、にやりとわらってみせる。
「行くぞ、雷太郎」
じっとこっちを見すえていた若い浪人者が、もうこれまでと見てとったらしく、ふいにだっと踏みこみざま、火のような抜きうちをかけてきた。
それで十分仕とめられるという自信があったのだろうが、こっちはあらかじめ若いほうがあぶないとひそかに用心していたところだから、すっと一歩さがってその切っ先をかわし、相手が空を切って体勢ののびたところを、
「えいっ」
大きく踏みこんで、びゅんと右手のてんびん棒を片手なぐりにする。
てんびん棒は刀より長い上に、こっちの腕力が強いから速度も速い。
「わあっ」
相手は胴をしたたか打ちこまれて、あばら骨が二、三本折れたかもしれない。すさまじい絶叫をあげて、草つ原のほうへ横っ倒れになっていく。
無論、それっきり起きあがれないようだ。
「あっ」
それと見た大沢は、たわいもなく川っぷちの道を川下のほうへばたばたと逃げ出す。
そこの土手下から、伏せ勢がいっせいに立ちあがった。人数は五人ほどのようだ。

人魂を見る

――憎いやつ。
橋たもとに立った雷太郎は、むらむらっと新しい怒りが胸へ突きあげてきた。
彼らは自分の悪事のじゃまになるから、なんの恩怨もない正直な人間を集団で暗殺しようというのである。そこにはなんの良心もなければ、人間への慈悲もない。そのためにだれが悲しもうと泣こうと、ねらった獲物さえ自分のものにすればいいのだという貪婪残忍な山犬の牙があるだけである。
ゆるせぬと雷太郎は思った。
くせ者どもは一様に覆面で顔をかくし、川っぷちの往来から草っ原へかけて横隊を作って、黒々とこっちへ向かってきた。人数は五人である。
「だんな、大丈夫でござんすか」
雷太郎の背後の橋の上まで素早く身をひいた忠太が、あまりにも物々しい彼らの殺気に胴ぶるいをしながら声をかけてきた。
「心配するな。おまえはもっとさがっていろ。けがをするとお高が泣くぞ」
「だんなだってお浦さまが泣きまさあ」
忠太の声はふるえていたが、とっさに出たそんな冗談口が、必要以上に力みすぎていた雷太郎の緊張をいくぶん和らげてくれた。
――そうだ、おれにはお浦がついている。
一瞬ではあったが、じいんと胸にあたたかいものを感じて、それが大きな勇気になってくる。
「そこにいるのは風雷太郎だな」
五人の真ん中にいる覆面が横柄に声をかけてきた。それだけに、今夜こそはという自信が敵にもあるのだろう。
「さよう。貴公たちは五人そろっているところを見ると、このごろはやりの五人組みの浪人強盗かね」
雷太郎は負けずにやりかえす。

「黙れっ、われわれはいずれも大河原道場の剣客、このあいだ貴様に惨殺された気の毒な倉橋屋のせがれ伝吉のあだ討ちにきたんだ。覚悟するがいい」

覆面は浪人強盗を否定しようとして、つい大河原道場を口にしてしまったようだ。

「わかった。貴公はこじき伝内の片腕、渡辺の綱さんだな」

これも図星だったらしく、覆面はちょっと返事ができない。

「大河原道場へはすでに番所の隠密が入っている。貴公たち獄門首になりたくなかったら、今のうちにお慈悲を願っておくことだな」

「うぬっ、やっちまえ」

「たたっ切れ」

かっとなったようにいきなり抜力したのは、綱の左がわにならんでいる二人の覆面だった。

「わかったぞ。貴公ら二人はこのあいだ倉橋屋へ伝吉といっしょに押し入った浪人強盗だ。その構えに見おぼえがある」

これも雷太郎の舌刀だったが、図星だったとみえて、

「えいっ」

「とうっ」

二人同時にだっと地をけって踏んごんできた。こっちをてんびん棒一本と見て、いまのうちに口をふさいでおこうと思ったのだろうが、同時にとはいっても人間の動作にはおのずと遅速の差がある。いちばん左手のやつのもろ手突きのほうがわずかに速かったから、

「おうっ」

雷太郎のてんびん棒はそっちへうなりを生じて、びゅんと横殴りにする。

「う、うっ」

そいつが左肩から腕へかけて強打され、どっと前へ突んのめり倒れるのと、雷太郎がかえすてんびん棒で、

「えいっ」

上段から切りおろしてくる二番手の胴へ打ちこんだのと、まったく目にもとまらぬ連続技で、

「わあっ」

二番手はもろくも味方三人の目の前へ横っ倒しになっていく。

「それっ、今だ」

「のがすな」

残る三人がいっせいに抜刀したが、これはいまぶっ倒れた味方の体を飛びこえなくては前へ出られない。

「貴公たち、もうやめたらどうだ。ぐずぐずしていると捕り手の手がまわるぞ。貴公たちの悪事はすでに調べあげられているのだ」

倒れた二人は気絶して起きあがれない。後は三人だと見たから、雷太郎にはそれだけの心のゆとりが出てくる。

「くそっ、――とうっ」

こんどはいちばん右手の覆面が、これもなにか身におぼえがあるやつなのだろう、死にもの狂いでだっと切りこんできた。

「おうっ」

口をきいていただけ雷太郎は後手になって、こんどはてんびん棒を振り払う暇がない。切りこんでくるやつの目の前へさっとまっすぐ突き出したから、そやつはあっとそのじゃまなてんびん棒を引っぱらってきた。

その間に、ひらりと少し飛びさがった雷太郎が、たちまちてんびん棒を青眼に取りなおしたので、

「えいっ」

二度目の太刀を上段に振りかぶって切りこもうとした敵は、さすがに前へ出られない。強引に出れば、こんどは疾風のてんびん棒がどこへ飛んでくるかわからないからだ。

「えいっ」

「おうっ」

雷太郎の位置は橋の上になっている。橋幅は狭いから、二人同時にはかかれない。

「まずい。――ひけ」
それと見た綱が低く味方に声をかけて、自分から川っぷちの道のほうへ引きあげ出したのである。
「おぼえておれ」
正面の敵は大きく飛びのきながらそんな捨てぜりふを残して、味方二人の後を追っていった。
「忠公、こっちも引きあげだ」
雷太郎は忠太をうながして、向島土手のほうへ源森橋をわたり出す。こっちが無事にすんだらおつゆを見舞ってやろうというのが、はじめからの予定だった。
「やつら逃げ出しやしたね、だんな。ざまあ見やがれってんだ」
忠太がそんな口をきけるようになったのは、もう水戸の屋敷の前を出外れようとするころである。
「やっぱりすごいなあ、だんなは。倒れたのは三人、三人とも骨が折れていますぜ」
「しようがない。自業自得だ」
「そうですってさ。だんなをさそい出して切ってしまおうなんて、太い悪党どもでさ。甘く見ちゃいけねえや」
「しかし、いやな気持ちだなあ」
浮かない雷太郎の声音である。
「あれえ、どうかしやしたか、だんな」
「いや、別にどうもしやしないが、あの倒れた三人の中には、家で妻子が飢えに泣いていて、悪いとは知りながら、背に腹はかえられないやつがいるかもしれない」
雷太郎は並川新之丞の死を思い出して胸が重くなってくるのだ。
当人は自業自得でしようがないとしても、後に残る妻子のことを思うと世の中が暗くなってくる。
「そいつはしようがありやせんや。背に腹はかえられねえから、いやがらせをやってゆすったり、稼業物をただ飲み、食い逃げをされたんじゃ、しまいにはこっちが立っていかなくなっちまいまさ」
忠太は松葉屋のことを考えているようだ。
「たしかに、それはそうだな」
「けど、お高のやつもいってやしたぜ。そうしなければ食っていけないやつには、黙って見のがしてやるのも稼業冥利で、しようがないことなんだってね」
「ふうむ、お高もだいぶ観音さまに近くなってきたようだな」
「正直にいいやすとね、伝吉が江戸へ帰ってきた時には、もう店も自分の命もめちゃめちゃにされてしまうと思って、ずいぶん心配したらしいんです。その厄病神が死んでくれたんで、なんとなく仏心がついてきた。つまり、世の中は損得や金ばかりじゃないってことがいくらかわかってきたんでしょうよ」
「そうか。そこではじめて金には替えられない忠公の真心が自然に身にしみてきた。だから、目をなめられていやな気持ちはしなくなったってわけになるんだな」
「ひやかしちゃいけやせんや。目をなめてやったのは、なにも変な気があったわけじゃねえ。そうすればごみが取れると聞いていたから、ためしにやってみただけさ」
忠太は苦わらいをしている。
「それでいいんだ。金や損得でそんな親切はできない。金というやつは、まるっきりなくても困るが、少しありあまっても荷やっかいになりがちなものだ。人間働いて食う、これがいちばんしあわせなんだろうな」
「あれえ、だんなは金持ちのお浦さまを恨んでいるような口ぶりですねえ」
「いや、お浦を恨んでいるんじゃない。金が荷やっかいだといっているんだ」
「だって、せっかくある金を、まさか隅田川へ投げこんでしまうってわけにもいかねえでしょう」

「だから、おれはお浦の体だけをつれて西国巡礼にでも出ようかと考えているんだ」

それは非業に死んだ伝吉や並川新之丞への追善供養にもなることだし、本来無一物、そこに本当の人生があるような気がする。

雷太郎の胸へふっとそんな明るい光がさしてきた時、そこの桜並木の土手下から、ふんわりと青い人魂が一つ、暗い土手へうかびあがってきた。すでに長命寺の近いあたりだから、

——はてな、おつゆが迎えにきたかな。

と、そんなことが頭にひらめいたとたん、すぐ右手の桜の木の根元から、あっという人のうめき声があがった。

おかしい直感がした雷太郎が、とっさにてんびん棒を持ちなおしたのと、

「くそっ、——えいっ」

その桜の木のかげから黒い人影一つ猛然とこっちへ切りつけてきたのと同時だった。

「とうっ」

雷太郎はほとんど無意識に、ひびきが音に応ずるごとく、てんびん棒を横なぐりにしていた。

「わあっ」

たしかに手ごたえがあって、黒いくせ者はどっと土手下へ転落していく。

そのあたりから別の人影が二つばたばたとやみの中へ逃げ出していくのを、雷太郎は足音で聞いていた。

「だ、だんな、人魂だ」

いまになって忠太がこっちの背中へむしゃぶりついてくる。

しかし、人魂はもうそこにはなかった。

——おつゆがこっちの危険を知らせてくれたのかもしれない。

すると、おつゆはすでに息を引き取ったことになりそうだ。

「ありがとう、おつゆ。——南無阿弥陀仏」

雷太郎はそのあたりとおぼしいやみを思わず片手拝みにしていた。

その翌朝

おつゆが息を引き取ったのは、雷太郎が向島土手で人魂を見たのと、やっぱりちょうどおなじ時刻のようだった。

「おつゆさんはあたしたちと会えてとてもよろこんでいました。自分のふしあわせは自分でこしらえたようなものなのだから、だれも恨まない。あたしは自分の寿命というものがもうそう長くはないとわかった時から、大和屋一族の因果をみんなしょっていこうと覚悟していた。だから、お加世さんだけはどうかしあわせに長生きしてくれるようにといって、それは眠るように息を引き取っていきました。見てあげてください、このきれいな顔を——」

お加世はそういって、いまこときれたばかりのおつゆの顔を雷太郎に見せてくれた。

それはまったく一切の現世の苦悩からのがれたような安らかな死に顔であった。

「あたしは若だんなの前でおつゆさんにもう一度誓います。あたしはおじさんやお雪さんとも相談して、きっと新吉をつるやへ引き取り、あたしの弟として立派な一人前の男に育てます。おつゆさん、安心して成仏してください」

お加世は気丈にそう誓って、目頭を指でおさえながら、こみあげてくる嗚咽をじっと奥歯でかみころしているようだった。自分が泣けば新吉が泣き出す、それを思っての心やりなのだろう。

新吉はまだ母親が死んだとは思えない顔つきで、放心したように黙って母親をのぞきつづけていた。

「風さま、はじめてお目にかかります。若だんなのお話はお加世からよくうかがっていますので正直に申しあげますが、手前はお国とお加世をつれてあのとき江戸へ出てきてしまったのは、少し出すぎたまねではなかったかと、何度も一人で後悔してみたことがございます。堺へ

かえって大和屋をまもってやるほうが本当だったかもしれないと、それが悩みの種だったのです。しかし、今日おつゆさんに会ってみて、やっぱり江戸へきたほうがよかったのだとわかって、やっと安心しました。事の行きちがいは多少ありましたにしろ、こうなってみれば、仏も、新吉も、お加世も、いまではいちばん近い身寄りなんです。後のことは手前が一切面倒を見ることにいたしますから、今後ともどうぞよろしくお願いいたします」

つるやの源吉はそうていねいにあいさつをしていた。お国親子を助けて江戸で一軒店をおこすくらいだから、律儀そうな人柄で、これなら新吉をまかせておいても大丈夫だと、雷太郎は初対面ながら好感が持てた。

「若だんな、あたしは妙な縁でおつゆさんの死に水を取るようなことになってしまいましたが、これもなにか仏縁だと思うんです。ですから、新坊がつるやへ引きとられていっても、あたしはずっとこの家へ残って、この家で暮らそうかと思っているんです」

お雪はお雪でそんなことをいって、あいかわらず家の中を小まめに立ち働いていた。

「仏縁とはうまいことをいうなあ、あねご。おれの目から見ると、あねごこそ観音さまのように見える」

「お多福観音ですか、若だんな」

「お多福で結構。あねごのは損得を考えない善根なんだから、その身が立派に観音さまになっているんだ。よろしくたのむよ」

差し当たっての仏事のことも、その後始末も、この三人にまかせておけば心配ないと思ったので、雷太郎は後のことをたのんでおつゆの家を出た。

「驚いたなあ、だんなはこんなところへまで観音さまの手を伸ばしていたんですかねえ」

なんの前ぶれもなくいきなりそんな愁嘆場を見せつけられた忠太は、かなりびっくりしていたようだ。

その翌朝、雷太郎は市村から意外な知らせを耳にした。

それは、昨夜源森橋で三人、向島土手で一人、てんびん棒で打ち倒しておいた四人の浪人者が、四人ともまもなくとどめを刺されて死んでいたというのである。

無論、とどめを刺したのは、あのとき逃げた覆面の二人か、大沢鉄之助というやつか、この三人のうちに違いないのだが、これは気絶した四人のうちだれ一人が番所へあげられても一味の旧悪がばれてくる、つまりその四人の中に浪人強盗の片割れも入っていたので、そのロをふさぐためだと見ていい。

しかも、今朝本所石原町の大河原道場をさぐってみると、あるじの大河原伝内と、その高弟と称する渡辺の綱、坂田の金時で通っている悪剣客の二人が、どうやら昨夜のうちに行方をくらましているようだというのだ。

「惜しいことをしました。ゆうべ市村のだんなは石原町の自身番まで御出役になって、手下の者に大河原の屋敷を見張らせていました。あっしはだんなのおいいつけで、中ノ郷の瓦焼き場に張っていたんですがね、風さまが源森橋で三人までお倒しになった。やつらは舟を源森川に着けていたんですが、逃げた三人のやつはすぐにその舟を水戸さまのほうの岸へ着けたんです」

市村の知らせを持ってきた花川戸の駒吉はそう説明するのである。

「なんだ、親分はおれのあのてんびん棒踊りを見ていたのか」

「へい、まったくお見事なてんびん棒踊りで。殺し屋がずらりと五人出た時は、こいつはいけねえ、よっぽど御用の声で助太刀をしようかとまごまごしているうちに、二人片づいてしまった。なるほどなあと、ゆうべばかりは本当に感心してしまいやした」

「それで、親分はやつらの跡をつけたというわけか」
「そうなんです。若だんなはたぶん長命寺裏の病人を見舞うんだろうと、これは市村のだんなの話でわかっていやした。その若だんなをやつら三人は土手下づたいにつけていくんです。こいつは不意打ちをかける気だなと見たんで、あっしも子分といっしょにやつらの跡をつけやした。やみ夜でござんすからねえ、つけるのは楽ですが、こいつどんなことになるんかと気が気じゃありやせん。すると、長命寺の少し手前で大きな人魂が出たでしょう。あの時はどきりとしちまいやした」
「ふうむ、親分もあの人魂を見たか。おれはあの人魂に助けられたんだ」
雷太郎はいまさらのようにじいんと胸が熱くなってくる。
「若だんな、こいつは後でわかったんですが、ちょうどあのとき並川の御新造は息を引き取っていたんですってね」
稼業柄だけに、駒吉はなんでもよく調べているようである。
「あっしは後で聞いてなるほどなあと思ったんですが、若だんながまた一人あそこで倒した。あとの二人が逃げ出したんで、こっちはそれが役目だから、また二人の跡を追った。ところが、いきなり人魂を見た時、子分のやつがあっといやあがったんで、二人はこっちのつけているのを感づいたらしく、こんどはうまくまかれてしまいやしてね。よし、それなら源森橋のところへ先まわりをしろ、きっと一度は仲間の倒れているところへ引きかえすだろうってんで、そこへ駆けつけてみると、あの若いほうも、覆面をしている二人も、のどを一突きにされているんです」
「すると、その三人は大沢という浪人者がやったのかもしれないな」
「ことによると、そうかもしれやせん。その大沢ってやつが舟をこいでいやしたからね。あっしは子分をすぐ石原町へ走らせておいて、念のために大いそぎで長命寺のほうへ引っかえしてみると、案の定、こっちもやられているんでさ。そこで、市村のだんなは両方へ見張りをつけておいて、御自分は大河原の道場を取りまいていました。こんどはいやおうなしにやつらを引っつかまえる気だったんですが、大沢を入れて三人、一人も網に引っかからないんです。しかも、今朝になって調べてみると、大河原伝内まで消えている。つまり、ゆうべ若だんなの口をふさぎそこなったんで、やつらももういけないと考えたんじゃないかと思うんです」
駒吉はそう一通り説明してから、
「いずれ後ほど市村のだんながお目にかかるそうですが、こうなるとやつらは行きがけの駄賃にどんなあくどいまねをやるかわからない、十分気をつけてくれるようにってことでござんした」
といいおいて帰っていった。
――こいつはまるで地獄だ。
雷太郎はなんともやりきれない気持ちだった。自分が直接手にかけたわけではないが、これで六人の生命を断ったことになる。
もうたくさんだと思った。
「お浦、今日おつゆの葬式がすんだらおれは明日江戸を立つから、おまえも支度をしておいてくれ」
雷太郎は思いつめたような顔をしてお浦にいいつけた。
「支度はいつでもできていますのよ。どこへ行きますの」
「西国巡礼の気持ちで、上方へ行ってみよう。おれはてんびん棒が怖くなったんだ」
「そう気にすることはありませんのよ。そのてんびん棒で何人も助かっている人があるんですもの」
お浦はなぐさめるようにいう。

「それはわかっているんだ。おれはおつゆとおなじで、何人かの人の因果をしょってやって、結局自分は地獄へおちる人間にできているのかもしれない」
「大丈夫ですのよ。地獄へでもどこへでも、あたくしはきっとだんなさまといっしょに行きます」
「そうか、おまえといっしょなら安心だな。しかし、おまえのほうは極楽へ行けと鬼がいうかもしれないぞ」
「その時はそっと鬼にお金をつかませますわ」
「なるほど、賄賂を使うやつは地獄行きだな。やっぱりおまえは知恵がある」
「本当に明日、江戸を立つんですか」
「うむ、立つ。江戸はいやになった」
道中へ出ればはたしてくてんびん棒のいらない世界があるかどうかそれはわからない。しかし、当座のわずらわしい人との引っかかりがなくなるだけでも気が楽になるだろうと思うのだ。
ただちょいと心配になるのは、あまり外へ出つけないお浦の足のことである。が、それはわざと口にしなかった。弱足だから江戸へ残るとは決していわない女だし、結構駕籠屋に賄賂を使うぐらいの知恵は持ちあわせているお浦だと考えたからである。
昼を少しすぎてから、雷太郎は忠太をつれておつゆの野辺の送りをしてやりに花川戸の家を出た。
「だんな、駒吉親分に聞いたんですが、ゆうべの四人は四人ともとどめを刺されていたんですってね」
「うむ」
「仲間だからって油断はできねえ、それがああいう連中の因果ってやつでさ。仲間を刺したやつだって、ろくな死に方はしねえでしょうよ」
道々そんな話が出ていたので、竹屋の渡しをわたって向島土手へあがった雷太郎は、そこでふっと気が変わったのである。

観音さまのお守り

渡し場から土手へあがって、右へ行けば源森橋、左へ行けば長命寺のほうへ出る。雷太郎は黙って右へ折れていく。
「だんな、どこへ行くんです」
忠太が不審そうな顔をして聞いた。
「まあいい」
雷太郎は急にゆうべ三人の浪人者を倒した源森橋へ行ってみたくなったのだ。
無論、三人の死骸はすでに下人の手で片づけられてなんの跡も残ってはいないだろう。が、仲間のために無惨にも命を断たれた三人の亡魂は、まだ浮かばれずにそこに迷っているかもしれない。おそらく、これらの亡魂はだれ一人弔ってやる者もあるまい。
人間死んでしまえばひとしく仏というものになって、一切の罪は消えるのだ。雷太郎はせめて自分一人だけでもそれらの亡魂に合掌しに行ってやりたいと思いついたのである。
まもなく水戸家の下屋敷の長い塀つづきへかかって、その塀を出外れたところが源森橋だった。
「おや、だんな、あの御新造はまさか身投げってわけでもないんでしょうね」
忠太がふいにこっちのそでを引きながら小声でいった。
忠太にいわれるまでもなく、源森橋の上にうららかな春の日ざしをあびながら、貧にやつれた身なりではあるが、きちんと丸髷に結った武家の女房らしい女が一人、放心したように川下のほうを向いて立っているのを見かけて、雷太郎もどきりとした。
年ごろ二十二、三、さえない横顔を見せて、下腹のあたりがようやくそれと目につくほど大きいのは、身持ちになってもう五月はすぎている体に違いない。
まさかこの白昼身投げとも思えないが、あき

らかになにかを思い悩んでいるといった姿なのだ。

——ゆうべ倒した三人のうちの、だれかの家内かもしれない。

こっちにそんな仏心のあった時だから、雷太郎はとっさにそう思った。とたんにまぶたにうかんだのは、いちばん先にたたき伏せた若い浪人者のとがった顔である。

「御新造、どうかなされたか」

雷太郎はちゅうちょなく女のそばへ進んで、できるだけ何気なさそうに声をかけていた。

「はい、——あのう」

女ははっと我にかえったようにどぎまぎしながら、

「もうよろしいんでございますの」

と、いそいで両そでを前であわせている。

「さようか。なんでもないのならよろしいが、川風はまだ冷える。失礼だが、こんなところにいつまでも立っていては体にさわるのではないかな」

「はい」

「なにか心配ごとでもござるのか」

「いいえ、あのう、——いろいろありがとうございました」

女は当惑したように顔を赤らめてうなだれてしまうのである。

これ以上突っこんで聞くわけにはいかないし、人の親切には限度がある。お節介になってはかえって迷惑するだろうと気がついたので、

「失礼いたした」

雷太郎は会釈をして女のそばを離れた。

そのまま橋をわたって、左手の草っ原のそばまで行き、素早くあたりを見まわしてみたが、青草はいきいきとして、どこにも血のあとひとつ残ってはいないようだ。

——南無阿弥陀仏。

その草っ原のほうへ軽く合掌して、そっちはそれで気がすんだ。が、気になるのは橋の上の女房のほうである。

「引きかえそう、忠太」

ふたたび橋の上へかかると、さっきのところにそのままじっとうなだれていた女が、

「あのう、失礼でございますけれど——」

と、こんどは必死な顔をあげて自分のほうから声をかけてきた。

「どうしたんです」

「あなたさまはもしや、ゆうべこの辺で、浪人同士が切りあいとかをやって、三人切られたということを御存じのお方ではございませんでしょうか」

そう聞きながらも、さっと顔色が青ざめてくる。

「くわしいことはなんにも知らないんだが、わしはゆうべある家の通夜に行く途中、ここを通っています。その折、そこの草原の中にだれか人が寝ころんでいるのを見かけました。やみ夜でよくはわからないが、たぶん酒に酔った男だろうと思って通りすぎてしまったんだ。すると、今朝、町のうわさで、ゆうべここで浪人が三人切られていることがわかった。ことによると、わしが通ったのはその直後で、草原に寝ころんでいたのは酒に酔っていたのではなくて、切られた三人のうちの一人かもしれない。そんな気がしたんで、実はいまゆうべの場所を見にきたところなんだ」

うっかり真相は口にできないので、雷太郎は一応そんな風に説明しておく。

「あのう、なにかそんなあとが見つかりましたでございましょうか」

「いや、血のあとひとつないようです。あんたはその三人の浪人というのに、なにか心当たりでもある方なのか」

「はい、それが、あたくしも今朝ここで三人浪人が切られていたというわさを耳にしまして、まさかとは思うのですが、夫が二晩ほどもどりませんものですから、つい心配でたまらなくな

りまして」
「お宅はどこなんです」
「業平橋の近くでございます」
「御主人はなにか用があって外出されているのか」
「お恥ずかしゅうございますが、江戸へ出てまいりましてもこれという仕事もございません。それならいっそあたくしがまだ歩けますうちに故郷へ帰ろう、故郷へ帰れば知り合いも親戚の者も少しはありますし、筆子の指南をしてなりと暮らしは立つと相談がきまりまして、夫はその金策に出かけましたの」
女はすがるような目になってそう訴えるのである。
「一昨日、家を出たんですな」
「はい」
「金策の当てはあったんですか」
「あの人は心当たりがあると申していましたけれど、それがどこなのか、あたくしにはわからないのでございます」
雷太郎はふっと並川のことを思い出して、人ごとならず胸が痛くなってくる。
「失礼だが、御主人は酒のほうは」
「あまりいただきませんの」
「日ごろ、そんな果たし合いなどをされる気性のほうですか」
「いいえ、気質はおだやかなほうで、おれの腕ぐらいでは江戸ではなんの役にも立ちそうもないとあきらめていました」
「御新造、それならたぶん心配はない。御主人は今夜あたりたぶんもどるでしょう」
あの大沢といっしょにいた若い浪人者は、かなり酒も強いようだし、腕にも自信を持っていた。この女のいう夫ではなさそうだと、雷太郎はいくらか胸が明るくなって、ぜひ人違いであってくれと祈らずにはいられなかった。
「あの、本当に大丈夫でございましょうか」
「大丈夫です。御主人はあんたがまもなく母親

になられることをちゃんと知っているんでしょう」
「はい。あたくし子供を父なし子にしては大変だと思いまして」
女はそで口でいそいで目頭をおさえている。
「よろしい。わしがおなかの子のために、観音さまのいいお守りを進ぜよう。これを持って、早く家へおかえりなさい。冷えこむのがいちばん子供にさわるんだ」
雷太郎は手早く小判五枚を紙包みにして女の手にわたしてやる。
「いいえ、あの、こんなことをしていただきましては」
女はそれが金包みだとわかると、当惑したように押しかえそうとする。
「それはいかん。わしはそのお守りをあんたにあげるんじゃない。おなかの子にあげるんだ。それは観音さまのお守りなんだから、大切にしてください。今日うけた観音さまの御利益は、他日おなかの子が立派に育って、その子が観音さまにかえせばそれでいいことなんだ。神仏にさずけられたものは、すなおにうけなければいけません」
思わず強い語気になっている雷太郎だった。
「ありがたくいただきます、あたくし」
女はその語気に気おされたように、金包みを押しいただいていた。
「御新造、もし御主人が今夜も帰らないようだったら、八丁堀へ行って市村鶴吉という与力をたずねてごらんなさい。浅草の雷太郎という者から聞いてきたんだといえば、きっと力になってくれます」
「八丁堀の市村鶴吉さまでございますね」
「そうです。体を大切になさい」
「はい、なにからなにまで、ありがとうございます」
女が心から頭をさげているうちに、雷太郎はさっさと向島土手のほうへ橋をわたっていた。

「だんな、大丈夫でしょうかね」
小一町ほど歩いてから、忠太がたまりかねたように聞く。
「なにがだ、忠公」
「あの御新造の亭主でさ。本当に今夜帰ってくれるかなあ」
これもなにかを祈っているような声音なのだ。
「たぶん、大丈夫だろう」
「その亭主ってのは、たしかに昨日の若い浪人者じゃないんでしょうね」
忠太もやっぱりそれを心配しているようである。
「あれは違うと思う。あの若い浪人は、筆子の指南を思いつくような人柄じゃなかった」
「なるほど――」
「しかしなあ、ゆうべ死んだ浪人たち三人のうちには、いまの御新造のような家内を持っている男もいたんじゃないか、おれはそんな気がしてしようがない」
雷太郎の声はまたしても暗くなっている。
「けっ、そんな話はよしやしょうや、だんな。あっしはあの御新造が、明日、亭主といっしょによろこんで国へ立ってくれりゃ、それでいいんだ。いくら観音さまだって、そうそうは手がまわるもんじゃありやせんからね」
忠太は怒ったようにいう。
「それはそのとおりだ。あっちも、明日、江戸を立ってくれるといいなあ」
「あっちもって、こっちにも、明日、江戸を立つやつがあるんですかい」
たちまち忠太が聞きとがめてくる。
「うむ、こっちで明日江戸を立つやつは、雷太郎とお浦っていう甘い仲の夫婦者なのだ」
「なんですって、だんな」
「ただし、お浦のおなかの中には、まだ観音さまのお守りのほしい子供は入っていないだろうよ」

「驚いたなあ。明日だなんて本当なんですかい」
忠太はまったく啞然としているようだ。

餞別

翌朝、浅草寺の七ツ（四時）の鐘といっしょに、雷太郎はお浦をつれて花川戸の倉橋屋を旅立った。
それをいい出した翌日にはもうわらじをはくという、まったく足もとから鳥の立つような旅立ちではあったが、お浦はさすがに落ち着いていて、昨日雷太郎がおつゆの野辺の送りに出かけた留守に、思いきりよく一切店の始末をつけていた。
倉橋屋は大番頭の富右衛門を総支配人として、三人いる番頭がこれを助け、四人で相談しながら店をやっていく。利益は店中の者がその分に応じて分配される。これはお浦が前から考えていたことで、富右衛門とはかねがね下話が進んでいたから、これを機会にそれを実行に移せばいいので、話し合いはすぐついたようである。
そして、昨夜は立ち祝いをかねて、店中の者と心ばかりの膳をともにして、その席でお浦は、番頭、中僧、小僧、台所の女たちにまで形見わけをやって別れの杯をかわしていた。
これでお浦は倉橋屋を去って、完全に雷太郎の女房になったことになるのである。もっとも、お浦の財産はそのまま倉橋屋があずかってずっと運営していくことになっているのだから、その点まったく倉橋屋と縁が切れたわけではない。
「お浦さまのお部屋はそのままにしておきますから、江戸へお帰りになりましたら、いつでもこれまでどおりにお使い願います」
その席で大番頭富右衛門は何度もはっきりとそういっていた。
雷太郎が今朝の旅立ちを打ちあけたのは、八丁堀の市村鶴吉と忠太の二人きりである。

「そうか、かわいい子には旅をさせろっていうこともあるからな。しばらく恋女房といっしょに上方まわりをやってくるのも悪いことじゃない」

鶴吉はあっさりそういってわらっていたが、忠太のほうはそうはいかなかった。

「だんな、おれもいっしょに行きやす。ぜひお供につれていっておくんなさい。荷物でもなんでもかつぎます。だんなのいない江戸なんて、おれにはつまらねえ」

忠太は一生懸命そうたのんでいたが、

「忠公、それは考え違いだ。おまえがいなくなるとお高が困る。おまえはお高の心のささえになってやらなければいけない。いいかえれば、おまえがそれだけの男になるということは、おまえのためにも、お高のためにも、一生のしあわせをつかむかつかまないかのわかれみちになることなんだよ。よく胸に手をあてて考えてみろ」

と、雷太郎はくれぐれもそう諭して、供のことは承知しなかった。

その忠太には、お高と所帯を持つ時の用意金として十両、昨夜からおつゆの位牌といっしょに駒形のつるやへ引き取られていった孤児新吉のためには、養育費の足しにもと五十両、これは自分たちが旅立った後でそれぞれわたしてやってくれるようにと、ちゃんと包み金にして富右衛門にあずけてある。

だから、二人とも今朝は心残りひとつなく、安心して江戸が立てるのだ。

「お浦、忘れ物はないだろうな」

新しいわらじをつけて、玄関を出る時、雷太郎は念のためにお浦に聞いた。

「なんにもございませんのよ」

道行きを羽織って、手ぬぐいをあねさまかむりにしたお浦は、にっこりしながら答える。

「じゃ、出かけよう」

花川戸通りへ出る角まで店中の者がちょうちんをつけて見送ってくれることになっている。

ぜひ品川まで送りたいという者も富右衛門はじめ何人かあったが、これはみんなことわったのだ。

そして、名残を惜しむ店の者たちとは、約束どおり横町の角で別れた。

まだ夜明け前の暗い大通りへ、雷太郎が小田原ぢょうちんを手にして二人で新しい門出の一歩を踏み出すと、

「ごきげんよう、さようなら」

「お体を大切にしてくださいまし」

「一日も早く無事にお帰りをお待ちしています」

見送りの者たちは口々にそういって、いつまでもちょうちんを振っていた。

そのちょうちんの灯がしだいに遠のいて、星空の道が暗くなってきた時、

「だんな――」

ひょいとそこの角から忠太が走り寄ってきて、お浦とは反対がわのほうへ肩をならべてきたのである。

そういえば、見送りの者たちの中に忠太の顔は見えなかったようだ。

「どうした、忠公」

「いよいよお別れでござんすね」

「なあに、来年の今ごろには、また江戸へ帰ってくるかもしれないんだ」

「あっしはねえ、だんな、いい餞別を持ってきているんでさ」

「餞別というと――」

「いいえ、荷物になるもんじゃありやせん。その話がしたくって、わざわざあんなところに待っていたんです」

忠太はしみじみとした声音になっている。

「そうか、聞かせてくれ」

「あっしはここへ見送りにくる前に、観音さまへおまいりに行ってきたんでさ。だんなにさしあげる餞別ってやつが、あっしにはなんにもねえ。せめて御夫婦の道中の御無事を観音さまへ

願がけして、それを餞別にしたいと思いやしてね」
「ありがとう。その志だけで十分だ」
うれしいことをいう男だと、雷太郎は胸があたたかくなってくる。
「ところがね、だんな、あっしが願がけをして引きかえそうとすると、仁王門のほうからちょうちんをさげておまいりにくる夫婦づれらしい一組みがあるんでさ。しかも、旅支度で、二人ともぴったり肩を寄せあっている。どんな夫婦なんだろうと、信心のじゃまをしちゃ悪いから、かくれてそっと見ていやすとね、なんと、その女房のほうは、昨日だんながありがたい観音さまのお守りをやったあの身持ちの御新造さんなんでさ」
「ふうむ、ふしぎな縁だな。すると、あの御新造のつれあいは、ゆうべ無事に家へもどったことになるのか」
思わず目をみはる雷太郎の手をお浦がしっかりとつかんで肩を寄せてきた。その話はお浦にもゆうべ耳へ入れてあるのだ。
「そうらしいんです。あの時だんながいったように、筆子の指南を思いつくくらいだから、その御亭主ってのはきちんとした人柄のいい浪人さんでした。夫婦して賽銭箱の前へ立ちやしてね、御新造さんのほうが合掌しながら、観音さま、お守りをありがとうございました、このありがたいお守りで、きっとおなかの子供は立派に育てます。御恩は決して忘れませんと、はっきりいって拝んでいました」
「そうか、それはよかった」
これで一つの罪だけは消えたと思うと、雷太郎は肩の重荷が一つだけ軽くなったような気がする。
「すると、その御亭主っていうのがね、お浅、気がすんだらそろそろまいろう、新宿あたりで夜があけるはずだと、御新造の肩を抱くようにしやしてね、道は暗いが心は明るい、おれたち

夫婦の胸の中には観音さまの灯がともっているんだからなと、御新造をいたわりながら、仁王門のほうへ引きかえしていくんです。あっしはうれしくなっちまって、ついその夫婦のうしろ姿へ手をあわせてしまいやした」
忠太はくすんと一つ鼻を鳴らしている。
「なによりの餞別、ありがとう。すると、その夫婦は甲州街道へ出るんだな」
「そうなんでしょうね。みんなだんなのおかげでさ」
「いや、観世音の慈悲だ。わしはその橋わたしをつとめただけだ」
「ついでに、もう一つおまけの話があるんですがねえ」
「餞別におまけがつくのか」
「いいえ、こりゃ餞別にはならねえんで、——どうしようかなあ」
「まあ話してみろ。これから当分忠公の話も聞けなくなるんだ」
「そういやあそうですねえ。だから、あっしはお供がしたかったんだ」
「お高を一人でほうり出しておいていいのか」
「実は、そのことなんでさ。あっしはゆうべお高に、こんどはだんなのお供ができねえんだと話しやすと、お高のやつが今だんなのいったのとおなじことをいいやがった、あたしを一人でほうり出しておくのってね。——のろけるようですみません」
「いや、そののろけは餞別のうちになる。あやまることはない」
「そうですかあ。じゃ、本当のことをいいやすと、お世話になっただんなのお供ができないかわりに、御無事を観音さまへ願がけをしろといい出したのは、本当はお高なんでさ。なるほどとあっしは感心しやしてね、今朝観音さまの境内へ入っていくと、なんと、お高のほうが一足先にきて、ちゃんと待っていやがるんです」
「そうか、お高もわしたちの無事を祈ってくれ

たのか」
「へい、二度も三度もだんなには助けられていやすからね。それで、二人で観音さまへ願がけをしてから、お高がその観音さまの前で、あたしのような者でよかったら忠さんいっしょになってくれないかと、自分のほうからいい出したんです」
忠太はうれしそうに照れて頭をかいている。
「とうとう男の真実というやつが向こうへ通じたわけだな。おめでとう。忠公はたのみになる男なんだ。少しも遠慮することなどはない」
「そうでござんしょうかねえ。だんなにそういってもらうと、急に力が出てくるような気がするなあ」
「それで、お高はどうした。一人で先に家へ帰ったのか」
「それがね、あたしも陰ながらお見送りがしたいって、実は内緒なんだが、どこかその辺へいっしょにきているんでさ。すんませんが、内緒なんだから、知らん顔をしておいてやっておくんなさい」
忠太は声をひそめながらいう。
「よし、わかった。お高には後でおまえからよく礼をいっておいてくれ、わしたちがよろこんでいたとな」
「へい、そういっておきやす」
「そこで、もうこれまで見送ってもらえば十分だ。いい餞別はもらったし、忠公はここから帰ってくれ」
道はすでに並木通りを出外れようとしているのだ。
「かまわねえんでさ。せめて浅草橋まで――」
「それはいかん。いつまでもお高を一人でほうり出しておくのはよくない」
「そうですかあ」
「忠公、お高を大切にして、一生懸命働くんだぞ、いいな」
「へい、ありがとうござんす」

「では、ここで別れる。いい餞別を持ってきてくれて、どうもありがとう」
雷太郎はあらためて礼をいって、お浦の手を取って歩き出す。道は暗いが、雷太郎の胸の中は明るかった。

罪ほろぼし

そのおなじ朝――。
並木町のすりの親分亀田屋一家の子分仙太は、まだ夜明け前の向島土手を旅支度で足早に長命寺のほうへ向かっていた。
仙太は急に職にいやけがさして、昨日親分の亀吉に杯をかえし、その今朝、行く先はだれにも告げず、当分江戸から足を抜くことにしたのである。
職がいやになった一番の動機は、自分が仕返しをしようとねらっていた雷太郎に、駒形河岸であべこべに命を助けられてしまったことだった。その時は、恩にはきねえぞと啖呵をきって別れたものの、現にあぶないところを助けられているのだから、恩にきないわけにはいかない。
さて恩にきたとなると、その恩人がかばっている弁天お雪をつかまえて指を詰めさせるわけにはいかなくなる。
が、亀田屋一家としては、自分たちの仕事のじゃまをするお雪は、どうしても一度つかまえて仕置きをしなければ職仲間の顔が立たないのだ。
しかも、仙太はあいにくそのお雪が長命寺裏の並川の浪宅でおつゆの看病をしているのを見つけてしまったのである。それを親分に告げたものか、知らん顔をしていたものかと迷っているうちに、ふっと女にさえかなわない自分の腕が情けなくなってきて、いっそ職から足を洗ってしまえという気になったのだ。
仙太にはもと板前という立派な本職がある。すりから足を洗ったからには、当分上方へ行って包丁のほうの修業にみがきをかけ、もう一度

堅気の人生へ出なおしてやろうと思いつき、思い立ったが吉日で、さっそく江戸を立つことにしたのである。

その前にお雪に一目会って、今までの行きがかりをきれいに水に流していきたい。

どうせ気の強いお雪のことだから、そんなことあたしの知ったことじゃないじゃないかぐらいの悪態は飛び出しそうだが、こっちはもう堅気になったのだから、その我慢ができないようではとても真人間にはなれないと、仙太にはそんな気持ちもあるのだ。

まだ星かげをうつしている未明の隅田川の冷たい潮風が、真人間になった仙太にはほおにすがすがしい。

やがて長命寺の手前までくると、ふっとその横町からちょうちんが一つ、人魂のように土手へあがってきた。

——はてな。

いまごろだれだろうと、桜の木のかげへかくれて見ていると、それは意外にもきちんと身じまいをしたお雪だったのだ。

「やあ、お雪じゃないか」

「ああ、びっくりした。なんだ、仙の字じゃないか。どうしたのさ」

お雪はうさんくさそうに小田原ちょうちんを突きつけて、こっちの旅支度を見まわしている。

「おれはいま見てのとおり江戸を立つところなんだが、おめえこそ今時分一人でどこへ行こうってんだ」

「臭いなあ、仙の字。おまえ、行きがけの駄賃に、あたしの指を詰めにきたんじゃないのかえ。承知しないから」

お雪の全身に見る見る女豹のような闘志がみなぎってくる。

「違う違う。間違えちゃいけねえ、おれはそんなんじゃねえ」

また目つぶしでも食わせられちゃ大変だから、仙太はあわてて手を振って後じさりをする。

「違うって、どう違うのさ」

「おれは昨日亀田屋に杯をかえして、今日からは真人間なんだ」

「ふうんだ、聞いた風なことをいうんだね。そんなだましにゃ乗らないよ」

「いや、だますんじゃねえ。おれは本当に真人間になったんだから、そこでおめえにもこれまでの行きがかりは水に流してもらいたいと思ってな、いまおめえんところへあいさつをしに寄るところだったんだ」

「本当かえ、仙の字」

「うそはいわねえ。おれはもう堅気になったんだからね」

「よしておくれよ。それが本当なら、せっかくのお天気が雨になるかもしれないじゃないか。今日だけはぜひお天気にしておかなくちゃ困るんだからね」

「だって、あの御新造のおとむらいは昨日すんだんだろう」

「ああ、おとむらいは昨日すんだよ」

お雪はふっとうるんだ目になりながら吾妻橋のほうへ歩きだす。

仙太は気がついたように、いそいで並川の浪宅のほうへ合掌してから、お雪の後についていく。

「あの仏さんは、おれにも縁がないわけじゃない。おれは並川さんがあの御新造の大切な櫛笄を売った金を広小路ではたいた。それをまたおめえにはたかれたんで、余計な罪は作らずにすんだようなものの、今から考えるとやっぱり冷や汗が出る」

「仙の字、うしろからついてこられると薄っ気味が悪いから、肩をならべて歩きな」

「へい、すんません」

我ながら神妙だなと仙太は思い、堅気はこれでいいんだと内心うれしかった。

「あねごはどこへ行くんだね」

「品川へ行くんだよ」

「はあてね、あねごのいい人は品川にいるんかね」
「違うよ。そのいい人が今朝上方へ立つんで、品川まで見送りに行くんだよ」
「へええ、あねごのいい人っていうと、だれなんだろうな」
「花川戸の若だんなさ」
「なあんだ、花川戸のだんなか。けど、どうしてあのだんなが急にそんな上方なんかへ行く気になったんだろうな」
「恋女房のおかみさんといっしょに、西国まわりをやって、罪ほろぼしがしたいんだってさ」
「罪ほろぼし——。冗談じゃない、あのだんながどんな罪をおかしたっていうんだね」
「おまえ、おとといの晩、この向島土手で浪人者が四人殺されたって話を聞かなかったかい」
「そいつは聞いた。三人は源森橋のそば、一人はさっきの長命寺の手前のところ、四人とものどを一突きにされていたんだってね」
「そうなのよ。みんな大河原の地獄道場の悪浪人で、本当は若だんなを呼び出して切る気だったのさ。それを若だんながてんびん棒でたたき倒しておいた。ところが、四人とものどを突かれている。後で仲間が自分たちの悪事がばれないように四人ののどを刺して殺してしまったに違いないんだけれど、若だんなは人がいいから、それを自分のせいだと思いこんで気にしているんだってさ。ばかばかしいってありゃしない」
お雪は吐き出すようにいうのである。
「なるほど、その罪ほろぼしか」
「もう一つあるんだよ。おまえ、馬道の忠太って男知っている」
「うむ、知っている。松葉屋のお高に夢中になっている男だ」
「あたしはその忠太から聞いたんだけれど、おつゆさんの御亭主の並川さんが、いまだに出たっきり帰ってこない。どこかで死んでいるんじゃないか、あたしもそんな気がしてしようがないんだけれど、お人よしの若だんなわね、おとといの晩の四人の中にもそういう妻子をかかえているやつがいるかもしれない、その妻子のことを考えると江戸に居たたまれないっていっているんだってさ」
「そうか。なるほど、そう考えればそんな気にもなるかもしれねえな」
「おつゆさんは、一族の罪をみんな自分がしょって地獄へおちるつもりだって、そういって死んでしまった。若だんなはそれもかわいそうでたまらないのさ」
お雪はくすんと一つ鼻を鳴らして、いそいで涙を指で払いのけている。
「すまねえ。おれはその並川さんの大切な金をはたいているんだ」
仙太はじいんと目頭が熱くなってくる。
「仙の字、おまえさっき並川さんの家のほうへ手を合わせていたね」
「うむ、ほんのわびのつもりだった」
「わびないよりはいいけれど、あんなことじゃ罪ほろぼしにならないよ。おまえなんかもっとたくさんの人を泣かしているんだからね」
お雪は八つ当たり気味に、そんなむごいことをいい出す。
「だから、おれは一生かかって自分の罪ほろぼしはするつもりなんだ」
「それでおまえも上方へ行く気になったのかえ」
「そうじゃねえ。おれのもとの本職は板前なんだ。上方へ行ってその本職にみがきをかけてきて、おれは一生懸命かせぐ。そのかせいだ金で、きっと罪ほろぼしをする気でいる。おれはなあ、あねご、実をいうと花川戸のだんなに仕返しをしてやろうとねらっていたのに、このあいだ駒形河岸であべこべに助けられてしまったんだ。それからこっち、職にいやけがさして、とうとう亀田屋へ杯をかえしちまったんだが、いまあねごの話を聞いて、堅気になって本当によかっ

たと思う。花川戸のだんなには及ばなくたって、おれにだってその気になれば人助けはできるんだ。あねごにあいさつにきて本当によかった」

道はいつか吾妻橋のたもとを通りすぎて、本所河岸へ出てきている。

ぽつんぽつんと見える対岸の灯が浅草川へかげをうつして、ゆらゆらと水に流されていくように見える。

やがて、駒形堂が黒々と目についてきた。

その少し手前につるやがあるはずなのだ。

「仙の字、おまえも拝んでおやりよ」

ふっとお雪が川っぷちへ立っていう。

「なにを拝むんだ、あねご」

「あの辺がちょうどつるやだと思うのよ」

「まあそんな見当だろうが、そのつるやがどうかしたのか」

「くわしいことは後で話すけど、つるやのお加世さんと死んだおつゆさんは従妹同士だってことが、花川戸の若だんなのおかげでわかってやるつもりだった。その新坊は取りあげられてしまうし、花川戸の若だんなは上方へ行っちまうし」

お雪はしょぼんとなってため息さえついている。

送りおおかみ

「そうか、馬場吉五郎ってやつは、そんなにあくどいまねをしてきたおやじだったのか」

お雪から昔の大和屋の話を一通り聞かされた仙太は、さすがに義憤めいたものを感じて、おれは早く悪の道から足を洗う気になってよかったと、いまさらのようにそんな反省をさせられる。

「あたしはねえ、仙さん、やっぱり死んだおつゆさんがいちばんかわいそうな気がする。一生親の罪をしょって並川さんといっしょになったのだって、半分は江戸へ出てきたい気持ちがあったからなんだろうし、その江戸へ出てきてからだって、たのしい日なんか一日もなかったんじゃないかと思うわ」

お雪はおつゆの死に水を取っているだけに、そのことがいちばん胸にこたえているようだ。

「怖いなあ、一人の悪党のために、何人かの人の一生がめちゃくちゃになる。ことに、男ってやつは手前勝手なもんだからなあ。おれなんかもこれからは気をつけることにしよう」

「どう気をつけるんだえ」

「とにかく、男は働きのないのがいちばんいけねえんだ。並川さんだって決して悪い人じゃなかったんだろうが、女房子を養っていくだけの働きがなかった。だから、女房子が苦労した。そこへいくと、おなじ苦労はしても、つるやのお国さんのほうは後でいっしょになった源吉だんなに働きがあったからまだしもしあわせだった。働くってことが、男にはいちばん大切なことなんだ」

「ふ、ふ、よくそこへ気がついたねえ、仙の字」

「おかしなもんで、堅気になろうと思った時かね、おつゆさんの位牌は忘れ形見の新坊といっしょに、ゆうべつるやへ引き取られていったのさ。気の毒なおつゆさんだったけど、いまはきっと安心していると思うのよ」

お雪はちょうちんを持ったまま両手をあわせて、じっとそっちへ瞑目する。

やみにくっきり浮かんだその白々とした横顔をちらっと見て、

——こいつはまったくいい女だなあ。

と、仙太は思わずほれぼれとしながら、いけねえ、こいつが煩悩というやつだと気がついて、いそいで自分も神妙に合掌していた。

この川っぷちの暗い道は、両国へ出るまでずっとつづく。

「寂しいなあ」

黙って歩き出したお雪が、しばらく歩いてからつぶやくようにいった。

「どうしてだ、あねご」

「あたしはおつゆさんにかわって新坊を育てて

ら、世の中がまっすぐに見えてきたんだな。花川戸のだんなのおかげかもしれねえ」

「忠さんも昨日そんなことをいっていたっけ。おれは花川戸のだんなのすることを見ているうちに真人間らしい性根ができかけてきたのに、いまそのだんなにいきなり上方へ行かれちまうのは本当に困るんだって」

話しながら歩いているうちに、道はいつか深川河岸へ出て、上ノ橋をわたっていた。夜明け前の川風が身にしみてきて、足もとを照らしているちょうちんの灯がわびしい。

「これもなにかの縁というやつなんだろうな。おなじ朝だんなといっしょに江戸を立つ。しかも、行く先もおなじ上方なんだ。とても道連れなんていう柄じゃないが、おれは陰ながらだんなのお供をするつもりでいるんだ」

仙太の胸へなんとなく希望がふくらんできた。

「仙の字、あちらさんは夫婦連れなんだから、おまえにはあたしがいっしょについていってあげようか」

お雪がふっと冗談のようにいい出す。

「上方までいっしょに行ってくれるのか」

「そうよ」

「からかっちゃいけねえや。おれはこれですぐ本気になるほうなんだ」

仙太はあきれて苦わらいをする。

「本気にしてもいいんだよ」

「けど、いっしょに道中をするとなると、おれはきっとおまえの体に手を出すぜ」

「ばかだねえ。女房にしてくれる気なら、手を出したっていいじゃないか」

「そりゃ、手を出すからには女房にする気だが、——からかっているんじゃねえだろうな」

「だって、仙の字には板前という本職があるんだから、女房を養っていくぐらいの男の働きはあるんだろう」

「その働きはある。まじめにかせぎさえすればいいんだからな」

「女房がついていないと、せっかく上方へ行っても、仙の字はまたいつぐれ出すかもしれない。だから、あたしをつれていったほうがおまえのためだと思うんだけれどねえ」

「いやに恩にきせるんだなあ」

「ふ、ふ、本当はね、あたしもこの辺で弁天お雪なんていい気な稼業から足を洗いたくなったのさ。堅気になりに上方へ行くっていうおまえさんが、急にうらやましくなった。これが本音なのよ」

お雪はしみじみといいながらわらっている。

「おめえが本気なら、いっしょになってやってもいいぜ」

仙太は思いきって高飛車に出てみた。

「無理にでなくたっていいのよ」

「わかったよ。おめえはどうしてもおれに恩をきせてありがたく女房にしろっていいたいんだな」

「そんな女じゃいやなの、仙の字」

「しようがねえ。じゃ、ありがたく恩にきるから、おれの女房になってくれ」

「いいわ。あたしはきっと日本一あんたのいい女房になってあげる」

この女は負けずぎらいで、ひどく気が強いから、一生しりに敷かれるだろうなとは思ったが、しかし、おれには過ぎた女房だと、仙太は急にうれしくなってくる。

「おれはなんだかこう世の中がぱっと明るくなってきたような気がする。おれは親も兄弟もない風来坊で、いまのいままで一人ぼっちだったんだからなあ」

「それはあたしだっておんなじさ。だから、日本一たよりになる御亭主になってくれなくちゃいやだから」

「なるとも、きっとなってみせる。だからよう、もう手ぐらい握ってもいいか、お雪」

「ばかねえ。あたしはもうおまえの女房じゃな

いか」
　その手は、つとお雪のほうから握りにきていた。
「ありがてえ。冷たい手をしているんだなあ」
「手の冷たい女は情が深いんですってさ」
「そうか、そいつはなおすばらしいや」
「ねえ、あたしたちだれかにつけられているんじゃないかしら」
　ふいにお雪が耳もとへささやいてくる。
「なにっ、つけられている――？」
　どきりとしてうしろへ耳を澄ますと、たしかに人の足音がする。しかも、一人ではなく、二人のようだ。
「なるほど、やっぱりおまえはおれより勘がいいな」
「つけているのは侍だと思うんだけど」
「そうかもしれねえ。足音が重いようだ」
「どうしよう。ちょうちんを消そうか」
「よし、消しちまえ。ひとつ、あそこへかくれて様子を見てやろう」
　ちょうど永代橋のたもとへ出て、そこに火の番小屋らしいのがある。中は暗いから、番人は留守のようだ。
　お雪がちょうちんを吹き消したとたんに、仙太はお雪を引っぱってその小屋の中へ駆けこんでいった。
「大丈夫かしら。こんなところで見つかると逃げ場がないよ」
「なあに、気がつくもんか。それにしても、追いはぎならもうとっくに追いかけてくるはずなんだがな」
「しっ」
　足音はひたひたと早足になって、小屋の前へさしかかりながら、
「二人とも逃げてしまったようだな」
「うむ、惜しいことをした。一人はきんちゃく切りの仙太、女はお雪というやつだった」
　どっちもどこか聞きおぼえのある声で、あいにく二人とも小屋の前で立ちどまってしまったようだ。
「おかしいなあ。仙太とお雪は敵同士のはずなんだが、いまごろどうしていっしょに歩いているんだろう」
「わかった。あの二人は雷太郎が間に立って仲なおりをさせたんだ。その雷太郎が今朝上方へ立つんで、品川あたりまで見送りに行こうというのだろう。どうだ、おれのこの勘は」
「まあ当たっているとしておこう。しかしなあ、馬場、おれたちがあそこで雷太郎夫婦を見かけたというのは、まだ悪運がつきていない証拠と見ていい。そうは思わないか」
　相手を馬場と呼んだ声で、そういっているのは相棒の大沢鉄之助だと仙太にはすぐわかった。
「そのとおりだ。夫婦のふところをあわせると、どうすくなくても百両の上になる。しかし、二人は上方まで行くんだ。こうなると、この仕事はこっちだけでやりたい気もしてくるな」
　馬場の声が冗談のようにいう。
「それはだめだ。どう力んでみたところで、二人きりでは残念ながら雷太郎にはかなわない」
「計略というやつを用いてもだめかな」
「まずあきらめろ。だいいち、殿さまの一行もおなじ道を行くんだから、もしそんなことが知れると、せっかく雷太郎をやっつけても、こんどはあの連中にこっちがやられてしまう」
「そうか。すると、やっぱりこの幸運は大河原さんにすそわけをするか」
「そのほうが安全だろう。大河原さんにすれば、雷太郎のために江戸落ちをやらなければならなくなったんだから、夫婦で旅に出たとわかれば、こんどこそやっつけずにはおかないだろう」
「それに、雷太郎を切ってしまえば、かねがねねらっていたお浦が手に入る。こんなうまい話はないからなあ」
　馬場のいやらしい声が低くわらっている。

——くそっ。

仙太はむかむかして、激しい怒りに体中がふるえてくる。

「おまえさん、いけない」

それと気配で感づいたお雪は、とっさに仙太の首っ玉へ両手をからんで、口で口をいそいでふさいでしまう。

「それにしても、大河原さんはもう来そうなもんだな」

「なあに、当分江戸の女は抱けないんだ、たっぷり名残を惜しんでいるんだろう」

「あっちは深川、こっちは吉原、しかもこっちは吉原にしたおかげで思いがけない拾い物をしてきているんだ。その上お雪をものにしようというのは、少し欲が深すぎる」

そういっているのは大沢のほうで、

「しかし、お雪という女も脂の乗ってくる年ごろだからな」

と、馬場はまだ未練があるようだ。

そのお雪の胸をしっかりと抱き寄せながら、仙太は思わず、

「くそっ」

とうめいていた。

「我慢するのよ、おまえさん」

お雪は男の首っ玉をおさえつけるようにして、力いっぱいほおずりをする。

「おお、きたようだぞ」

「三人そろっているな」

馬場と大沢は小屋の前を離れて、ひたひたと橋のほうへ進んでいく足音がする。

「殿さま、お早うございます」

「おお、おぬしたちまいっていたか」

「実はすばらしい土産物を持ってきております」

「ふうむ、土産物をな」

「まあ、歩きながらお話ししましょう」

一行の足音はひたひたと橋の上へかかっていくようだ。

「助かったわ、おまえさん」

今になってお雪はがたがたと体にふるえがきて、夢中で仙太にしがみついていく。

母と子

雷太郎とお浦は朝日の明るい高輪海岸へ出て、やがて大木戸へかかろうとしていた。

この辺までくると、江戸から東海道へ出る者がみんな落ちあってくるから、前後におなじような旅支度の人の姿が絶えない。こっちは女づれで足がおそいから、そういう人たちが、失礼しますとか、お早うございますとか声をかけて、何人も追いぬいていく。

「毎日、こんなに旅へ出る人があるんでございましょうか」

初旅のお浦は、おどろいたように聞いていた。

「江戸は広いからな、用があって旅へ出る者、用をすませて帰ってくる者、まあ毎日こんな風だと思っていいだろう」

「あたくし、こんなに道中をするお仲間がいるとは思いませんでしたのよ。これなら心丈夫ですわ」

お浦は安心したように、そんな無邪気なことを口にする。

「それは仲間がいるということは心丈夫にはちがいないが、中には人の路銀をねらっている悪いやつもいるんだから、油断はできないんだ」

「ごまのはえというのでしょう」

「そうだ。路銀に困って追いはぎに早変わりをするやつもいるだろうしね」

「あたくしにはだんなさまがついていますから大丈夫ですのよ」

その点お浦はなんの不安も感じていないようだ。

「兄上——」

大木戸を出たとたん、まだ二十前とも思われる身なりのきちんとした若侍が、つかつかと雷

太郎の前へ出てきた。弟の栄二郎である。
「栄二郎、どうしておまえこんなところへ」
雷太郎はまったく意外だった。
「八丁堀の市村が教えてくれたんです」
母親似の栄二郎は、明るく微笑している。
「そうか、市村から聞いたのか」
「兄上は上方まわりに出かけるんですってね」
「うむ、しばらく上方へ行ってくる。栄二郎、わしは両親に無断で屋敷を出た。これはわしのわがままからで、ほかになんの理由もない。わしは窮屈な旗本がいやになったんだ。幸い、家にはおまえがいてくれる。後のことは一切おまえにまかせるから、わしにかわって両親のことはたのむよ」
ちょうどいい機会だから、雷太郎は自分の気持ちをはっきりと打ちあけておく。
「兄上はずるい。わしだって窮屈な旗本はあんまり好きじゃありません」
「まあそういうな。おまえは弟に生まれたんだから、兄貴のいうことはきかなくちゃいかん。それに、おれはもう屋敷を出てしまったんだから、家督はぜひおまえがついでくれ」
「そのことは、兄上が上方まわりをして帰ってから相談します。旅立ちの日に、こんなところで兄弟げんかでもありませんからねえ」
栄二郎はそんなおとなぶったことをいう。
「しかし、よくきてくれたなあ、栄二郎。こんなところでおまえに会えようとは、思いもかけなかった」
雷太郎は胸があかるくなりながら、
「そうだ、ついでだから引きあわせておこう。栄二郎、これが浪人風雷太郎の女房お浦なんだ。——お浦、これがおれの弟の栄二郎、天野家の跡取り息子だ」
と、双方を引きあわせる。
「お浦と申すふつつか者でございます」
お浦はあねさまかむりにしていた手ぬぐいを取って、ていねいにおじぎをする。

「わしは天野家の次男栄二郎です。まだ跡取り息子じゃありません」
栄二郎はきっぱりと兄の言葉を訂正している。
「いいえ、ぜひ跡取り息子になっていただきませんとあたくしが困ります。そのかわり、お兄上のことはきっとあたくしが引きうけさせていただきます」
お浦も負けずにやりかえす。
「姉上のことは市村からよく聞いているんだ。兄上が天野直太郎になっても姉上が困らないようにすれば、それでもいいんでしょう」
「あのう、それはやっぱり上方から帰ってまいりましてから御返事することにいたします」
「うまいなあ、姉上も。そうだ、姉上に会いたがっている人がいるんだ。ちょいとこっちへきてください。——兄上はしばらくそこで待っていてください」
「どうしたんだ、栄二郎」
「まあ、まかせておいてください」
「そうか。お浦、行ってみるがいい」
「はい」
栄二郎は先に立って、そこの海ばたに並んでいる休み茶屋の中へ入っていく。
——はてな。栄二郎はだれにお浦を会わせるつもりなんだろう。
雷太郎はちょいと見当がつかない。ことによると、天野の忠義者、老用人の田宮孫作でもきていて、お浦に一本くぎをさしておく気かなと、そんことも考えてみる。
しばらくして、その茶店の中から、意外にも母のお直の方が、わざと普通の武家の新造といった地味な身なりで、ひょいと出てきた。お浦がその後につづき、少し離れて八丁堀の市村鶴吉と栄二郎が肩をならべてくる。
「おかあさま——」
さすがに雷太郎は目をみはったまま口がきけない。まだ四十前にしか見えない若々しい母で

ある。
「直太郎、上方へまいるそうですね」
「はい。身勝手なまねをいたしまして」
「いいのですよ。元気で行っておいでなさい」
「おかあさまはわざわざ小川町から出てこられたんですか」
「お浦に一目会いたかったし、そなたの顔も見ておきたいと思って」
「申し訳ありません」
「さあ、人目につくといけません。これで気がすみましたから、きげんよく二人でお立ち」
気丈な母の目がうるんでいる。
こっちも涙が出てきそうだ。
「では、お言葉にしたがいます。——市村、ありがとう」
みんな市村の采配だとわかったので、そっちへ礼をいう。
「なあに、ほんのおれの餞別のしるしなんだ」
市村はわらいながらいって、前に出ようとはしない。じゃまにならないようにと心がけているのだろう。
「かたじけない。——栄二郎、後をよろしくたのむよ」
「兄さんはずるい」
栄二郎はまだそんなことをいっている。
「お浦、道中は体に気をつけて、お願いしますよ」
「はい、お方さまもずいぶん御健勝で——」
「ありがとう。また江戸で会いましょうね」
「恐れ入りまする」
お浦はいそいで手ぬぐいを目に当てていた。
「では、お別れします。——お浦、まいろう」
雷太郎はお浦をうながし、思いきって品川のほうへ向かう。
「元気でね」
母はもう一度はっきりそういってくれた。
——思いがけなく、母の顔を見た。
雷太郎は感慨無量で、しばらくはどこを歩いているのか夢の中にいるような気持ちだった。
母はお浦に会いたかったのだといっている。そのためにわざわざ七ツ（四時）起きをして、小川町から出てきてくれたのに違いない。
そして、せがれの嫁に会ってくれたのだ。
「お浦、おふくろさまはおまえになんといっていたね」
雷太郎がお浦にそう聞いたのは、もう品川の宿へ入ってからだった。
「もったいなくて、あたくし」
お浦もまだ夢心地からさめきらないらしく、足元ばかり見て歩いている。
「おれのおふくろは、あれでなかなかきびしいほうなんだ」
「本当にいいおかあさまですわ」
「びっくりしたろう、いきなり前へつれていかれたんだからな。栄二郎も意地の悪いことをする」
「母上、お浦どのをおつれしましたと栄二郎さんにいきなりいわれた時は、どきりとしてしまって、どうしようかと思いましたの」
「それはそうだろうな」
「あたくしがふつつか者でございますとあいさつをしますと、あなたのことは市村から聞いてよく存じています。直がたいそうお世話になっているとかで、ぜひ一度会いたいと思っていました、これで安心しましたと、おかあさまはおっしゃるんです」
「日本一のいい嫁だとほめてくれなかったか」
雷太郎はやっとそんな冗談口を取りもどしていた。
「恥ずかしい、あたくし。おかあさまは、直は生一本で強情なところがあります、その上、世間知らずですから、あなたのようなしっかりした嫁でないととてもうまくいかないでしょう、よろしくたのみますって、あたくしをあなたの嫁にしてくれましたの。涙が出てしまいました」

「そうか。おまえはおふくろさまがいうとおり本当に日本一のおれの花嫁なんだ」
「あたくし、栄二郎さんもいい弟さんだと思います」
「あれはおれより天野家のいい跡取り息子になれる男なんだ」
「姉上、おかあさんは兄貴を姉上に引きわたしてしまったんだからよろしくたのみますと、おかあさんの前でそんなことをいうのですもの、顔が赤くなってしまって」
「あれもおれに似て、ずばずばとものをいうほうだからな。——しかし、とにかく市村からもいい餞別をもらってしまったなあ」
「本当にねえ」
お浦もしみじみといいながら寄りそってくる。
道はいつか品川を出外れて、涙橋へかかっていた。
「お浦、おまえくたびれたろう」
浅草の花川戸からここまで、道のりにすればたっぷり三里半は歩きつづけている。旅なれない女の足には相当こたえているはずなのである。
「いいえ、おかあさまにお目にかかってから、なんですか急に足が軽くなってしまって、人間なんて正直なものですねえ」
お浦の顔色はあかるい。
「しかし、あんまり無理はしないほうがいいんだ。先の長い旅だからな。あそこに茶店がある。ひと休みして行くことにしよう」
涙橋をわたって鈴ガ森へかかろうとする海端のほうに大きな一本松があって、その下にいつもよしず張りの掛け茶屋が店を出している。
その店の前へかかると、中からふいに旅支度のお雪が走り出てきて、
「お早うございます。お待ちしていましたのよ、若だんな」
と、なつかしそうにあいさつをした。

天の声

「どうした、お雪、旅支度だな」
雷太郎は思いもかけなかったので、目を丸くした。
「ええ。少し思い立ったことがあるもんですから——。御新造さま、お早うございます」
お雪は如才なくお浦のほうへもおじぎをする。
「向島のお雪さんですね」
初対面のお浦は会釈をかえしながら聞いていた。
「はい。若だんなには新坊がいろいろお世話になりまして」
「とにかく、ここでひと休みしていこう」
雷太郎が先に立って茶店へ入っていくと、その床几にこれも旅支度の仙太が、照れたような顔をして一服つけていた。
「はてな、仙太うじも旅に出るのか」
「お早うござんす、だんな。あっしは、昨日、並木町の親分に杯をかえしてもとの板前にかえりやしたんで、これから上方へそのほうの修業をしに行くところなんでさ」
間違われては大変だというように、仙太はいそいでそんな言い訳を口にする。
「それは結構だ。そうか、おまえには板前という本職があったのか」
雷太郎はこっちの床几へ掛けながら、あらためて仙太の顔を見なおす。こうして見ると、なるほど争われないもので、昨日まで悪たれていた顔の険しさがすっかり消え、きりっとした江戸前のなかなかいい男ぶりである。
お浦がこっちの床几へきて掛けると、お雪は澄ましてその仙太のほうの床几へ並んで掛けている。
「なるほど、もう二人は敵同士ではなくなったわけだな」
雷太郎がわらいながら二人の顔を見くらべる

と、
「お雪、早く話しちまえよ。具合いが悪くてしようがねえや」
と、仙太は当惑したようにお雪をうながしていた。
「なにさ、そんなに照れることはないでしょ、もう御夫婦になっちまったんだもの」
お雪はずばりといいながら、さすがに目のふちがほんのり赤らんでくる。
「そうか、それなら照れることはないわけだな」
雷太郎はおだやかにうけてやりながら、それにしても昨日まで指を一本詰めるの詰めないのと敵意に燃えてにらみあっていた二人が、どうして急にそんな気になったのか、なんとも解せない。
「本当のことをいいますとね、若だんな、あたしは昨日忠さんから、若だんながお浦さまをつれて今朝上方まわりに江戸を立つと聞いたんで、びっくりしちまったんです。まあ、おつゆさんのおとむらいは無事にすんだんだし、新坊もつるやさんのほうへ引きとられることになった。後の心配はなくなったようなものの、あたしたち若だんなが江戸にいなくなるのはやっぱり寂しいんです。それで、あたしはせめて品川までお見送りしたいと思って、今朝夜明け前に向島の家を出てきました」
「すまんなあ。ありがとう」
雷太郎はその気持ちをうれしくうける。
「お雪、こんどはおれの番だ」
そばから仙太が引き取って、
「あっしはねえ、だんな、さっきもいうとおり、職の杯をかえして堅気になったからには、こんどどこで会ってもいざこざのないように、これまでのことは水に流して江戸を立ちたいと思ったんで、今朝早く向島の家をたずねることにしたんでさ。その二人がばったり長命寺のところで出会ってしまったということになるんです」
「あたしははじめ、またけんかにきたなと思ったんで、負けるもんかと度胸をきめながら、どうせ行く道はおなじ品川なんで、いっしょに歩き出したんです。その時、この人が黙って向島の家のほうへ手をあわせていたんで、おやと思いました」
「なあにね、あっしは並川さんの大切なふところをねらったことがある。そのために死んだおつゆさんに苦労をかけているかもしれない。そんなつもりがあったんで、わびごとのまねをしたんですがね、お雪は意地が悪いから、手をあわせたぐらいで罪は消えるもんかと悪態をつきやがった」
「考えてみると、いくら強がっていても、女なんて根は弱いものなんですね。悪態をつきつき川っぷちの暗い道を歩きながら、この人のいうことを聞いているうちに、あたしはだんだん自分が寂しくなってきちまったんです。それで、この人が本当に板前になって罪ほろぼしをする気になっているんなら、あたしがそばについていてやったほうがいいんじゃないかと、ふっとそんな気になっちまったんです」
「お雪がおまえの女房になってやろうかといい出した時はちょいとびっくりしやしたがね。負け惜しみはぬきにして、あっしはこんなありがてえことはねえと思いやした」
「およしよ、おまえさん。人さまの前で、そこまでいうもんじゃないよ。おかしいじゃないか」
お雪は仙太をたしなめながら、その目がうれしそうにわらっている。
「そうかなあ。けど、だんな、男ってやつは女房というものがきまると世の中がまるで違って見える。おかしなもんでござんすねえ」
仙太はそのよろこびを少しもかくそうとしなかった。
「そのとおりだ。おれも女房を持ってから、世の中が明るくなった」
お浦は黙ってわらっている。
「だんなでもそうでござんすかねえ。じゃ、だ

んなもありがたい女房だと思っていやすか」
「いやだなあ、おまえさんは。——そんなことは自分だけでそう思っていりゃいいんだっていうのに」
「だって、よろこびは人にもわけろっていうぜ」
「ばかだねえ。女房を人にわけてどうするのよう」
「ちげえねえ。こいつは人にゃ金輪際わけられねえや」
「それより、おまえさん、あの話があるんだろう」
「おっと、それだ。——ねえ、だんな、話がそうきまっちまって、じゃいっしょに上方へ行こうと、二人で手を取りあって下ノ橋のあたりまできやすとね、どうもだれか跡をつけているようなんでさ」
仙太は急に真顔になっていた。
「まだ夜明け前のはずだな」
「そうなんです。人っ子一人通っちゃいやせん。しかも、一人の足音じゃない。たしかに二人だ。追いはぎにねらわれたかなとびっくりしやしてね、佐賀町通りから永代橋通りへ出たところで、こっちはちょうちんを吹き消し、ちょうど橋たもとにあった火の番小屋へかくれたんでさ」
「うまく追いはぎはまけたようか」
「まくにはうまくまけたようですがね、あいにくその二人がまもなく番小屋の前へきて立ちどまりやがって、惜しいことをしたなあ、女のほうはたしかにお雪だったと話しているんです」
「すると、顔見知りのやつなんだね」
「そうなんです。なんと驚いたことには、一人は大沢鉄之助、一人は馬場吉五郎なんでさ」
「ふうむ」
雷太郎もこれはちょいと意外だった。
「しかもねえ、だんな、その二人はゆうべ吉原へ泊まった帰りで、今朝だんなが花川戸を立ってくるのを見たらしいんです」
「なるほど——」

「こいつは殿さまにいい土産ができたと二人で話しているところへ、ゆうべ深川へ泊まった大河原伝内が渡辺の綱と坂田の金時をつれてやってきやしてね、やつらも今日東海道へ出るところなんですね、五人そろってがやがやと永代橋をわたっていきやした」
「あいつたちは道中のどこかで若だんなを待ち伏せする気らしいんです。それを教えてあげようと思って、あたしたちはさっきからここで若だんなのくるのを待っていたんです」
「ありがとう、よく教えてくれた。しかし、おまえたちにそんなところを聞かれてしまうとは、やつらの悪運もいよいよつきるところへきているんだな」
雷太郎にはそうとしか考えられないのである。
「それで、だんな、どうしやす。相手は五人、こっちはあっしを入れて男は二人ということになるんですがねえ」
仙太はこっちの加勢をしてくれるつもりでいるようだ。
「どうなのかしら。少し遠まわりでも、いっそここから甲州街道のほうへ道をかえては」
お雪が相談するようにいう。
「せっかくだがな、お雪、おれはこのまま東海道をのぼることにする。災難というものは、いくら逃げようとしても逃げきれるものじゃない。自分の知恵と力で乗り切っていくのが本当なんだ。正しいものには天の加護があるはずだ。現に、こんどの災難を事前におまえたちが教えてくれたのもそのあらわれの一つだとおれは考えたい」
「そりゃあたしだって若だんながあんな悪党などに負けるとは思いたくないんです」
「無論、おれは負けないように努力はする。しかし、たとえば負けたとしても、おれのこんどの旅は罪ほろぼしのために思い立ったことなんだ。全力をつくしてもなおかつ及ばなければ、

それは天命とあきらめて悔いは残さないつもりだ。——お浦、おまえはどうする」

雷太郎は念のために聞いてみた。少しでも恐怖の心があるようなら、無理につれていくのはかわいそうだからである。

「あたくしはさっきおかあさまから、だんなさまのことをくれぐれもたのまれています。それに、だんなさまはあたくしがそばにいなければ寂しいのでしょう」

姉女房は落ち着きはらってそんなことをいう。

「恩にきせるようなことをいうんだなあ」

「ふ、ふ、あたくしはさっきおかあさまにお目にかかってから急に強くなりましたの」

災難のことなどは別にそう気にもしていないようだ。

「そうか、それならおれも安心だ。——こっちはそういうわけだが、お雪のほうはどうするね。仙太も馬場に見つかるとただではすまない体なんだろう」

「だんな、あっしも罪ほろぼしの旅なんでさ。災難から逃げたんじゃ真人間にゃなれやせんからね。ぜひお供させてもらいやす。お雪、おまえはどうなんだ」

「ふうんだ、おまえさんだって、あたしがそばについていてやらなけりゃ寂しいくせに」

「御新造のまねをしちゃいけねえや。生きるか死ぬかの正念場じゃねえか」

「おまえさんこそ、しっかりするんですよ。いざとなれば、おまえさんよりあたしのほうがよっぽど強いんですからね」

「そういやあ、まあそんなもんだがね。じゃ、あねご、よろしくたのんます」

「まかせとき——」

話はあっさりとまとまったようだ。

「では出かけるとしよう」

二組みの夫婦が鈴ガ森の掛け茶屋を立ったのは、やがて五ツ（八時）を少しまわったころだった。

五両で売る

「だんなさま、よい道づれができてよろしゅうございましたね」

雷太郎と肩をならべて先に立つお浦がうれしそうにいう。

それをうしろから仙太と肩をならべてついてくるお雪が、すぐに引き取って、

「御新造さまにそういっていただくとあたしたちも張り合いがありますけれど、本当はせっかく水入らずで道中をなさろうと思っていたのに、こんなじゃまが入って御迷惑なんじゃありませんかしら」

と、いくぶんからかい顔だった。

「そんなことございませんのよ。あたくしたちは遠慮なく水入らずのつもりで仲よく歩きますから、そちらさまも気がねなどなさらないで、いくらでも仲よくしてくださいまし」

「まあ、うれしい。では、あたしはこれからなんでも御新造さまを見習うことにしますわ。ねえ、うちのだんなさま」

お雪はさっそくお浦の口まねをしている。

「よせやい、小っ恥ずかしい」

仙太は照れたようにいって、

「ねえ、だんな、やつらは出るとしたらどの辺で出てくるでしょうね」

と、これはまだ大河原組のことを忘れかねているようだ。

「そうだな、常識からいって、追いはぎ強盗が目的なら昼間は出ないはずだ。人目があるからな」

「なるほど、すると無理な夜道さえかけなければいいってことになりやすね」

「そのとおりだ。しかし、やつらはずるいから、なにか小細工をたくらむんじゃないかとおれは思う」

「どんな小細工でござんす」

「それはちょいと見当がつかないが、いずれに

せよ、こっちが落ち着いていさえすれば、小細工などはすぐ見ぬけるはずだ。まあ、おれにまかせておくがいい」

雷太郎はさほど心配はしていなかった。悪党はたいてい太陽と人目を恐れる。ということは、こっちには常に太陽と人目という大きな味方があるということなのだ。油断さえしなければ、悪党など恐れることはないのである。

「落ち着いてさえいりゃいいんですね、だんな」

「そのとおりだ」

「わかりやした。あっしはこれからだんなを見習うことにしやす」

その悪党の小細工は、大森の町へ入ろうとするあたりで待ちかまえていた。

「やあ、だんな、お早うござる」

そこの庚申堂のかげから旅支度の大沢鉄之助と馬場吉五郎がのこのこ出てきて、大沢のほうが如才なく雷太郎にあいさつをした。

「お早う」

雷太郎は軽く会釈をかえしただけで、わざと立ちどまろうとはしない。

「失礼だが、だんなは奥方づれでどこへ行かれるところか」

ずぶとい大沢はけろりとした顔つきで、お浦とは反対がわのほうへもうさっさと肩をならべて歩き出している。

お浦がそっとこっちの手へつかまってきた。

「お浦、心配しなくてもいいよ。大沢うじは怖い顔はしているが、心は案外やさしい御仁なんだ」

「そのとおりでござってな、わしは根は親切な男なんだ。——しかし、だんな、美しい奥方でござるな、うらやましい」

大沢は歯の浮くようなことを口にする。

「いや、家内は顔かたちだけではなく、慈母観音のように心の美しい女です」

「さようさよう。だんなはまったくしあわせな男だ」

「ありがとう」

「どこまで行かれるところかな」

「家内はわしがあぶない目にばかりあうので、ひどく心配してねえ、上方へ寺まわりに出かけるところなんだ」

「なるほど、寺は上方が本場だな。そういえば、おとといの晩は失礼した。わしはあんなつもりじゃなかったんだが、若いやつらはとかく気が立っているんでねえ」

さすがに大沢は多少気がひけるようだ。

「あの晩、わしは、源森橋のところで三人、長命寺の近くの土手で一人、気絶させておいた。それを後からきて四人ののどを突き刺して殺したのはだれなんだね」

「知らんなあ。しかし、わしでないことだけは信用してもらいたいんだ」

「それは信用しよう。もし貴公がやったとすれば、今朝わしの前へは出てこられないはずだからね」

「そうだとも——」

「しかし、手はくださなくても、わしが四人を気絶させさえしなければ、あの四人は命を落とさずにすんだかもしれない。死んだ四人は自業自得かもしれないが、あの四人に親兄弟妻子があれば、その人たちがまことに気の毒だ。現に、わしはあの翌朝、源森橋へ行って、そういう女房に一人出会っているんだ」

「ふうむ、どんな女房だったね」

大沢はぎくりとしたらしい。

「二十二、三の若い女房で、身持ちのようだった。しょんぼりと源森橋の上に立っているんで、いろいろと話しかけてみると、浪人している主人が金策に出たまま三日ほど帰らない。ゆうべここで浪人者が三人切られたと聞いたんで、もしやその中に主人がまじっているんじゃないかと思い、心配して出てきたんだが、もう死骸の片づいた後だったというんだ」

「なるほどねえ」

「あの四人の中にほかにもそういう気の毒な肉親や妻子が何人かいるんじゃないか、——現に、あの晩息を引き取ったもと堺の大和屋の大番頭の娘おつゆも、夫が金策に出たまま七日も八日も帰ってこない。幼いせがれの新吉といっしょに、切ないおもいで夫の帰りを待ちわびながら、その帰りも待たずに死んでいってしまった。世の中にこんな哀れな話はないと思うんだ」

これはうしろからついてくる馬場吉五郎に聞かせてやるためにわざと持ち出した話だった。

「たしか並川とかいう浪人だったな」

「うむ、並川新之丞というんだ」

「並川はまだ行方がわからないのかね」

「わからない。前後の事情から考えてみると、これもあの晩の四人のようなみじめな死に方をしているんじゃないかと思う。おつゆが息を引き取る時、いいことをいっているんだ。自分は、親の罪、夫の罪、わが身の罪、それをみんなしょって地獄へ行くつもりだから、後に残るせがれ新吉だけはせめてしあわせになれるようにとね」

「それがまあ母親の本音だろうな」

「母親というものはことに、死んでもあの世から子供のことを心配しているものなんだ。もし生きているとすればなおさらのことだ。そんなことを考えると、わしは自分の手で死にいたらしめた四人、その肉親の人たちみんなが気の毒になってくる。その罪ほろぼしに夫婦でこうして西国巡礼を思い立ったわけなんだ」

南無阿弥陀仏とお浦が口の中でとなえて、そっと合掌する。

「なるほどなあ。だんなはたしか倉橋屋のせがれ伝吉も手にかけているはずだからなあ」

これはあきらかに大沢のいやがらせである。

「そういえば、わしはあの晩貴公と顔をあわせているような気がするんだがねえ」

すかさず雷太郎がそんな思いきった舌刀を飛ばす。

「違う違う。冗談じゃない、それはだんなの誤解だ」

「誤解なら誤解でいいんだが、貴公たちはどこで大河原さんたちと別れたんだね」

「おかしなことをいうんだなあ。大河原がどうかしたのかね」

大沢はそらっとぼけようとする。

「大河原伝内、渡辺の綱、坂田の金時の三人は、ゆうべ深川の青楼へ泊まって、今朝早く東海道へ向かっているはずなんだ」

「なんだ、だんなはそんなことまで知っているのか」

大沢は苦わらいをしながら口をつぐんでしまう。

まもなく花が咲こうという季節で、両がわが青麦畑の晴れた街道にはうらうらとかげろうが燃えている。

「お浦、くたびれたか」

「いいえ、まだ大丈夫ですのよ」

「おまえ、案外足が丈夫だねえ」

「いやですわ。今からくたびれていたんでは、西国巡礼などできはしませんもの」

二人とももう大沢の存在など気にもかけてはいない。

「お雪、くたびれたか」

うしろで仙太がロまねをしだす。

「なにいってるのよう、ばかばかしい」

「おまえは気も強いが、足も強い」

「おだてたってだめよ。くたびれたらおまえさんにおんぶしてもらう気でいるんですからね」

「あきれたもんだ。御新造さんはそんなことといわなかったぜ」

「御新造さんがいわなくたって、若だんなはあんなにやさしいんだもの、いまにその気でいるんです」

仙太組も大沢や馬場を無視して、のんびりとやりあっている。

「だんな、どうだろうな、いい種があるんだが、

五両ほど奮発する気になれんかな」
大沢は戦法をかえてきたようだ。
「その種によりけりだな」
「つまりだな、だんなが奥方とたのしい道中をつづけるにはぜひ必要な種なんだ。たった五両では安いもんだぞ」
「だんなさま、買っておあげなさいまし。これも罪ほろぼしの一つでございますわ」
そばからお浦がやさしくすすめる。
「そうか。おまえがそういうんなら喜捨することにしよう」
雷太郎はふところから紙入れを出して、小判五枚、手早く紙包みにして、
「大沢うじ、いい値でその種というのを買ってしんぜよう」
と、大沢の手にわたしてやる。
「さすがに奥方は話のわかりが早い。実はな、だんな、我々二人は大河原組と江戸を落ちることになっていたんだが、大河原は金のない我々をつれて歩くのが面倒くさくなってきたんだな。それで、どこまでも仲間に入りたいんなら、ここでひとつ手柄を立てろといい出したんだ」
「手柄というと――」
「つまりだな、だんなたちへうまく道づれになっていっしょに歩いているうちに、大河原たちが途中でけんかを吹っかけに出てくる。それと見たら、かまわず二人で奥方を引っさらって逃げろという計画だったんだ」
「あんまりうまい計略でもないな」
「そのとおりだ。まさか仙太組がいっしょだとは気がつかなかったんで、うまくいくと思ったんだが、種がばれていたんじゃしようがない。我々は五両もらってこの仕事から手を引くことにする」
「大河原たちはどこに待ち伏せしているんだね」
「そいつは聞いていないんだ。しかし、今日どこかで待ち伏せしていることはたしかだから、

まあ十分気をつけていくがいい」
大沢がそういって立ちどまったのは、もう生麦村へかかろうとするあたりだった。

てんびん棒踊り

「なるほど、こっちが落ち着いてさえいりゃ、いくら悪党どもでもちょいと手の出しようがねえようですねえ、だんな」
大沢と馬場が五両もらっておとなしく江戸のほうへ引きかえしていくのを見て、仙太が感心したようにいった。
「それは相手にもよるが、どんな悪党でもおなじ人間なんだから良心はある。頭の狂っているやつは別だが」
死んだ伝吉などはその頭の狂っているほうで、最後まで人間らしくなれなかった組だと、雷太郎はふっとそれを思い出したが、口には出さなかった。わざわざお浦にいやなことを思い出させることもなかろうと気がついたからである。
「仙さん、よかったねえ。あたしたちはこうやって明るい道が歩けるようになって」
お雪はうれしそうにしみじみという。
「よせやい、そんなことをいわれると、おれは顔が赤くならあ」
「いいじゃないか、それが頭の狂っていない証拠なんだから」
「けど、だんな、これで二人のほうは片づいたようなものの、まだ大物が三人残っていやすぜ」
仙太はそれが心配そうだ。
「そうだなあ、大物三人はあの二人のようなわけにはいかないかもしれない」
「大河原ってやつは、おなじ気ちがいでも色気ちがいのほうかもしれやせんぜ。あの二人にお浦さまをさらって逃げろなんていいつけているところから見やすとね」
「それもあるだろうが、お浦を人質にこれば、こっちの太刀先がにぶる。そんなことも計算に

入れているんだろう」
「だんなさま、こんどはどうしても刀を抜くようになりますかしら」
お浦がそばからおっとりと口を入れてくる。
「こんどはどうもそうなりそうだね」
「だんなさまはいつもてんびん棒でした。あたくしなるべく刀は抜いてもらいたくありませんのよ」
「なるほど、西国巡礼が刀を抜いたんじゃおかしなことになるな。こうしよう、――仙太、どこかその辺で、用心のためにてんびん棒を一本ゆずってもらっておいてくれぬか」
「承知しやした。御新造さんはやっぱり観音さまにできているんですね」
そのてんびん棒は川崎で中食をとったとき仙太が手に入れてくれた。
川崎から神奈川へ二里半、神奈川から程ガ谷へ一里九町、今夜は程ガ谷泊まりの予定にしていた。江戸の花川戸からだと、ちょうど九里半ほど歩くことになる。
神奈川の宿を出るとまもなく、台の茶屋という丘を一つ越えるようになる。坂をのぼりきった丘の上に茶店が一軒あって、そこからは神奈川の海が一目で見晴らせる景勝の地だ。
そこから下りにかかると、両がわが松林になって、この松山は両方ともかなり奥が深い。
雷太郎たちがここへかかってきたのはすでに七ツ（四時）に近い時刻で、この辺がどうも臭いなと見ていると、案の定、その松山の中からふいに渡辺の綱と坂田の金時がつかつかと街道へあらわれ、行く手へ立ちふさがった。
大河原伝内はまだ松林の中に立ってこっちを見ている。
「お浦、さがっておれ」
雷太郎がお浦をうしろへさげると、
「だんな、へい、てんびん棒」
仙太が心得て、かついできたてんびん棒を雷太郎にわたす。

「みんな、落ち着いているんだぞ」
雷太郎はそういいおいて、ゆっくりと二人のほうへ進んでいった。
「御両所、妙なところで会いましたな」
「黙れっ、貴様は倉橋屋の後家をたぶらかしてせがれ伝吉の財産を横領した悪党、我々両人ここで伝吉の敵討ちをするから、さよう心得ろ」
なにか因縁をつけなければ追いはぎが働けない。頭の狂っていない証拠だ。
「そういう御両所は、先夜伝吉といっしょに倉橋屋へ押しこんで、金蔵から二千両持ち出そうとしていた」
「なんだと――」
「その上、おとといの晩は、源森橋のほとりで三人、長命寺の近くで一人、仲間の口をふさぐために気絶している四人ののどを突いて殺害している」
「黙れっ、根も葉もないことを――」
「いや、白をきってもだめだ。貴公たちの罪状はその人相書きといっしょにすでに江戸町奉行所から街道筋の宿場宿場へ伝達されている」
「くそっ、来い」
「たたっ切れ」
綱と金時が血相をかえて同時に抜刀したのは、自分たちの罪状を自分からみとめたことになる。
「おうっ」
雷太郎はとっさにてんびん棒を青眼にかまえながら、松林の中の大河原の行動がさすがに気になる。彼は二人にこっちをまかせておいてお浦をねらっていると読めるからだ。
雷太郎としては、できるだけ綱と金時のほうを早く片づける以外に手段はないのである。
「えいっ」
「とうっ」
綱も金時も雷太郎のてんびん棒の威力は十分知りつくしているから、そう無造作には切って出られない。

すでに西へ傾いた明るい夕日が松林の中を斜めに走って、悪党どもの顔を鬼のように赤くそめている。

「おうっ」

雷太郎は手間どってはいられないので、こっちからじりじりと間合いを詰めていった。

「えいっ」

「とうっ」

綱と金時の額に必死の脂汗が光り出して、じりじりと後へさがり出す。歯をくいしばってはいるが、どうにも自分から切って出るだけの勇気は出ないようだ。

「どうした、綱、金時、切れ切れっ」

松林の中の大河原はなんとなくあせってきたようだ。すでに夕刻に入っているから、宿場へいそぐ上り下りの旅の者がおいおい道を堰かれて集まってくる気配がある。人だかりができては、お浦をねらうどころではない。大河原は気が気ではなくなってきたのだろう。

——よし、大河原がこっちへ気をとられている間は安心だ。

雷太郎は前進をやめた。無理をすれば、こっちの体勢にもどこかに無理が出る。けがのもとなのだ。

「切れっ、綱。相手はてんびん棒だ」

大河原がまたしても叱咤するように叫び出す。

「えいっ」

「とうっ」

二人のほうには全然切って出るだけの気力がない。というより、どっちかが先に切って出るだろうと、おたがいにそれを待っているように見える。

「あっ、だんな」

「だんなさま」

突然そんな金切り声がうしろで起こった。

とたんに、目端にかけていた大河原伝内が、たまりかねたように抜刀するなり、

「えいっ」

気合いもろとも、横合いから大きく踏んごんできたのである。

「おうっ」

むしろそれを待っていた雷太郎だから、同時にびゅんとてんびん棒が風を切ってそっちへ横なぐりをかける。

「う、うっ」

大河原は自分の切りおろす一刀のほうが速いと十分それだけの自信はあったのだろうが、腕力のある雷太郎のてんびん棒の速度のほうがわずかに速く、一刀を振りかぶった大河原の胴へ痛打を入れたのだ。

大河原が大きくのけぞったとたん、

「おうっ」

そこに乗ずるすきを見いだした綱が、真っ向からこっちへ切りこんできた。

「えいっ」

それはちゃんと計算のうちに入っている雷太郎は、大河原の胴を取ったてんびん棒をつばめがえしに右へなぎ立てていたので、

「わあっ」

綱もまたあざやかに胴を打ちこまれ、がくんとそこへ両ひざをついている。それを見た金時は、まるで脱兎のように松林の中へ逃げこんでいった。

「だんなさま——」

うしろからお浦がさすがに我を忘れたようにすがりついてきた。肩で大きく息がはずんでいる。

大河原も綱も一撃で気絶しているようだ。どっちもあばら骨が何本か折れているはずだ。

「行くぞ、お浦」

雷太郎はお浦の手を取って歩き出した。

お浦は足がすくんでいて思うように足が進まないようだ。

「どうした、お浦。てんびん棒踊りはもうすんだんだよ」

「あたくし、足がすくんでしまって」
「おぶってやろうか」
「人が見ていますもの」
街道にたまっていたその人目も、すぐにうしろになっていく。
すんでみれば必死の闘いも案外あっけなく終わったようなものの、雷太郎はこうしてお浦の手を取って歩いている自分がなんだかうそのような気がした。
それを見ていたお浦にすれば雷太郎以上の恐怖があったらしく、二人ともしばらく口をきく気にさえなれなかった。
うしろからついてくる仙太もお雪も、黙って歩いている。
坂をおりきって青麦畑の明るい道へ出てから、
「だんなさま、てんびん棒踊りにしてようございましたね。あたくし、うれしい」
お浦ははじめてほっとしたようにそんな口をきいた。
「おれはそれより、大河原はおまえをねらいやしないかと思って、いちばんそれが心配だった」
「大丈夫ですのよ。あたくしにはお雪さんも仙太さんもついていてくれたのですもの」
「そうだったな。あちらさんと道づれになっていなかったら、こんどはあぶないところだった」
雷太郎はお雪には目つぶしの卵を投げる芸のあるのを思い出して、ふと微笑がうかんでくる。
「あねご、どうもありがとう」
「どういたしまして——。あたくしこそ、御新造さまがすっかり落ち着いているんで、助かりましたのよ」
「いいえ、本当は足がすくんでしまって」
「そいつはあっしもおんなじですがね。なあに、だんなには観音さまがついているんだから」

仙太はそれを本気になって信じているようだ。
「あたしたちは観音さま御夫婦のお供ね」
お雪がうれしそうにいってわらった。
夕日がだんだん赤くなってくる、おだやかな春の街道である。

●江戸おもしろ事典

江戸の職人衆

生まれぞこないでない江戸っ子はだれか

江戸っ子の生れぞこない金をため
江戸っ子の死にぞこないは倉をたて

という川柳がある。

江戸っ子といえば、水道の水で産湯を使ったというのが自慢である。江戸生まれ、江戸育ち、祖父の代から江戸に住んでいる者、つまり三代目あたりから、チャキチャキの江戸っ子というそうだが、川柳の江戸っ子は商店の旦那衆、まして侍ではなじまない。

江戸っ子は五月の鯉の吹きながしで、威勢はよいが、腹になんにもない——銭も脂肪もないスカンピンの裏店借家人のイメージである。落語に出てくる熊さん八つぁんといった手合いだ。おせっかいやきの見えっぱり。おちついて、じっくりと大仕事をやるような人物にはほど遠く、したがって名もなく貧しく、しかし楽天的な庶民像。それも、同じく貧しい者でも、行商人などの小商人よりも、職人の方が江戸っ子のイメージが濃い。

商人となれば、どんな小商い人であっても利ざといもので、資本をふやして商売をひろげていこうという気構えがあって、金をためようという心がけも確かなものだ。

そこへいくと、職人は腕が金のなる木で、腕に覚えの手職で、どこへいってもお天道さまとおまんまはついてまわるという自負がある。その自負心が、

「宵越しの金はつかわねえ」

と、啖呵をきらせた。江戸時代になると、人口の都市集中がすすみ、貨幣経済も発達して、

特に江戸は日本一、いや世界一のマンモス都市になっていたから、職人の稼ぎどころも多かった。その日の稼ぎを全部はたいたところで、あすの仕事があれば、じたばたすることもない。——で、仕事はあったか？

「火事と喧嘩は江戸の花」

と、江戸っ子がおかしな自慢をするくらいで、実に火事が多かった。半鐘がジャンとなれば、いやでも仕事があるわけだ。

一度大火事があれば、三年は食えたというからすさまじい。火事になれば自分たちも焼け出されることもあるのだが、そこは体が資本なので、

「あしたはあしたの風がふく」

あすを思いわずらうことなかれ、同時にきのうをふりかえることもなく、働けばいい。そんな風潮の都市に住んでいれば、

「あの野郎、欲かいて小金なんかためやがって、職人の風っ上にもおけねえや……」

と、意気がってもみたくなろう。

たしかに、金に淡泊なのが職人の気質であった。

高村光雲は、高村光太郎の父で、皇居広場の楠公銅像をつくった明治時代の高名な彫刻家だが、幕末、仏師高村東雲のもとに弟子入りしたとき、東雲に、

「銭勘定するようでは立派な職人にはなれぬ」

といわれたという。

職人は、金をためるような生まれぞこないであってはならなかったのだ。

だが、これにも裏もあれば奥もある。親方にもなれない平職人たちは、小金がたまるほどの賃金がなかなかとれなかったのだ。宵越しの金は使わねえでなくて、使いたくても使えなかったのが実状であった。だれだって、宵にも使いきれないほどの銭があって、文句をいう者はいるまい。生まれぞこないといわれてもいいから、金がほしいのが本音であろう。

職人の業種はどんなものがあったか

ありとあらゆるものがあった、というほかはない。たとえば、家に関するものをざっとあげれば、

大工・左官・建具師・屋根屋・経師屋・畳屋・石屋・かまど築き……。

さらに、大工の使う道具をとってみても、鋸をつくる職人、鋸の目立てをする職人等々。

江戸時代と今日では、生活様式が大いに変わってきている。が、昔も今も同じ人間であるから、根本の生きかたは同じである。したがって、今日使っている道具も、昔の道具の変化発達したものとして考えられる。

今日使っている道具類の歴史をちょっと考えてみて、それらが江戸時代では職人の手仕事でつくりだされたものであると気がつけば、職種はおのずから理解できよう。

以下、職種をあげてみよう。

○土木建築関係

大工、左官は前にあげた。木挽職などがある。広重の浮世絵などでみられるが、大きな丸太を前挽鋸などの大きな鋸で、何日もかけて角材や板材に挽いたものである。今日では製材所で、電動鋸があっというまに製品化する。屋根屋などもある。

○金属工業関係

鍛冶（刀・包丁・農具）・鋳物師・磨師（刀・鏡）・錺師・縫針師（針の糸をやっと通すほどの小さい穴も手仕事であけたものである。現在は、その技術の伝承者もいないといわれている）・鋳掛屋・象眼師・金彫師・金粉師・螺鈿師……。

○化学工業関係

漆掻・布曝・紙子師（紙子は紙でつくった衣服で、おもに防寒のため胴着にもちいられた）・湯熨屋・紺屋・白粉師・塗物師・蒔絵師……。

○窯業・土石工業関係

○土器師・瓦師・焼物師・火桶作・かまど師・硯師……。

○紡織工業関係

機織・木綿打・足打・縫物師。足打は、刀剣の下げ緒や柄糸などを組み織る職である。足打（付）折敷になると、白木作りの足の付いた折敷になって別の職。

○製材・木製品関係

指物師・数珠師・車作・臼師・桶師・位牌師・木彫師・楊枝師・面打・仏師・檜物師……。

○竹草蔓類製造関係

物指師・茶杓師・箸師・畳師・籠師・笠張・箒師……。

○革毛骨角製造関係

足袋師（皮足袋）・雪踏師・弦師・鎧師・刷毛師・水嚢師（水嚢はみずこしで、底を馬の尾の毛でつくったもの）・巾着師・角細工師・青貝師（青貝は螺鈿の材料となる貝で、貝殻の真珠光をおびた部分をきって漆器などにはめこんで飾りとする）・印判師……。

○紙・布製造関係

唐紙師・嘉留多師・団扇師・水引師・人形師・張子師……。

○食品工業関係

豆腐師・素麺師・菓子師・餅師・飴師……。

○印刷製本関係

経師・表具師・板木彫・表紙屋……。

○器械器具関係

竜骨車師・鞴師・秤師・桝師・天秤師・時計師……。

○その他

絵師（仏絵師）・琴師・墨師……。

（『風俗辞典』＝東京堂刊＝より抜粋）

以上のほかに、まだまだ多くの職種がある。たとえば庭師・植木師などはあげていない。

とにかく、職人と呼ばれるように、その職についている以外の者の追従をゆるさぬだけの技術をもっていなければならない。

「細工は流々、仕上げを御覧じろ」
といえるほどの自信を自分の腕にもっていたのが職人である。

職人になるにはどんな苦労があったか

職人になるには、その職の親方のもとに弟子入りして修業するほかない。親の家業をつぐために、親にみっちり仕込まれることもあれば、親と子の間ではどうしても甘えがちだからというので、同業者のもとへ弟子入りさせられることもある。この子は気がきいているから大工にさせようと大工の親方のもとへ弟子入りさせたり、あそこで弟子を欲しがっているから（弟子は労働力でもある）というので、事の好きらいや才能の有無にかかわりなく弟子入りさせられることもある。

多くは親方の労働力確保と、子の将来の生活のために徒弟奉公する。

弟子入りは十一、二、三歳ごろまでに行われた。資格は第一に、賤民でないことであった。ついで前科がないこと、その技術について未知であること、などがあげられる。

十代はじめの少年では、あとの二つはほぼ問題はなかったろう。才能・資質も時に問題にされた。何日か仕事をさせてみて、その結果で採否をきめる親方もいた。少年たちも何日かいて、自分に向いた仕事でなければ、弟子入りをやめてもよかった。

さきにあげた高村東雲も、光雲がお目見えにきたとき、入り口から光雲の振る舞いの一切を見て、そのさわやかさに感心して、弟子にとることにしたという。

しかし、いったん弟子入りしたら、もうやめられない。途中で逃げ出したら、一生、その職につけないという厳しい制裁があった。

話がきまると、弟子入り奉公人側から、親としかるべき人物（村名主・町名主・大家等々）の保証人の連判のある請状を差し出すこともあった。が、普通、男と男の約束で、口頭ですませたもので、口約束でも反故にされるようなことはなかった。

徒弟は、親方のもとに住み込みである。親方は技術を教えるとともに、衣食住の一切を世話した。給金は与えないが、夏冬二回のお仕着せを与えた。休日は、正月と七月の年二回の藪入りだけである。

徒弟は、親方からみれば安価な労働力であったから、修業の名のもとで、ずいぶん苛酷なあつかいをうけたものだ。

「昼は仕事先で一日働き、暮に戻れば水を汲み風呂を炊き、夜食をおわってから四つ（午後十時）過ぎまで夜業をさせられ、朝もはやくから起きだして、めしを炊いたり、掃除をしたりして仕事に行く」（『松翁道話』）

下男下女のあつかいだ。子守などもさせられたし、兄弟子たちにまでこきつかわれたものだ。

現代みたいに、良い環境が教育効果をあげるなどという考え方はない。苦労は買うてでもせよ、修業はつらければつらいほど身につくと信じられていた時代だ。戦前、昭和のはじめごろでさえ、徒弟奉公は地獄といわれたほどだったから、江戸時代の修業は並みたいていのものではなかったろう。

その地獄もじっと耐えしのんだのは、奉公先を逃げ出したら、もはや一生、食っていけないと覚悟しなければならない、厳しい世の中であったからだ。

下男下女のあつかいというが、子守もめし炊きも、修業の一つであった。下男働きをしているうち、職人の家庭の雰囲気を身につける。

職人はいかにも職人らしい雰囲気を身につけてなければ、人が信用しなかった。江戸時代はとくに厳しい身分社会だから、職人は職人らしく、商人は商人らしくあらねばならなかった。職人のくせに武士みたいに横柄だったら、だれが仕事を頼みにくるだろうか。

親方にどなられ、兄弟子にどつかれて、人にかくれて何度か泣いて、一般に六、七年、十八、九歳くらいで年季もあけ、一通りの技術を身につける。親方もよかろうとなると、親方から道具一式などを贈られて一人前の職人となる。しかし、慣習として、これまで育ててもらったお礼として、一年あるいは数年は親方のもとで無償で働いた。これをお礼奉公という。

お礼奉公をすませて、本当の一人前の職人といわれる。だが、一人前になったからといって、ただちに店を張ることができるかというと、そうでもない。職人たちは、大工職仲間だとか轆轤挽物職仲間とか、仲間を結成して、過当競争におちいらないようにしている。その仲間にはいらなければ、店を張る、すなわち親方にはなれない。仲間に加わるには、明き株があり、加入金の準備がなければならない。親方にならなければ、手間賃取りとなって、昔の親方や他の親方に雇われることになる。渡り職人である。江戸っ子の生まれぞこないは、明き株をねらい、加入金をためるために、せっせと働いたものである。

職人の暮らしはどんなだったか

職人は普通、出職と居職にわけられる。出職は大工・左官などの、よそに出て仕事をする職人をいう。居職は印判屋・錺職人など、自宅を職場にする者をいう。

職人の話になると必ず引用されるといってもいいのが、高村光雲の『戊辰物語』である。ここでも引用してみよう。

「月に一両二分あれば、親子五人はたいして心配もせずに、寝酒の一合ぐらいずつ飲んでゆけた。一日の手間が、下駄屋とか印判屋とかの居職が三匁、三百五十文、つまり今の三銭五厘、大工、左官という出職は照り降りをみるから三匁七分五厘、四百十二文ですこしばかり割がよかった。そばが十六文に寿司が八文という御時世だ。職人なんかの住む九尺二間の棟割り長屋、今のバラックのお隣りのようなものであるけれども、一月八百文（八銭）も出せば、大家のはげ頭などにビクともいわせなかった」

そのころ、一両はだいたい六貫四百文の両替だから、一両二分は九貫六百文＝九千六百文である。

これでみると、分に応じて贅沢な暮らしをしなければ食べていけた。そして、江戸のような消費経済の発達した都市では、仕事がなくて困るようなこともないのだから、

「宵越しの金はもたねえ」

と、啖呵もきれたわけだ。

しかし、ちょっと怪我したり病気になって仕事を休まねばならなくなったら、どうするか。健康保険もなければ失業保険もない。

「職人十日十人扶持」

という言葉もある。一日に一人分の食い料しか稼げない、という嘆きの言葉である。

労働時間は、だいたい八時間から十時間くらい。太陽が地平線から顔を出す時刻、明け六ツ（午前六時）には起き出して洗顔、食事をすませて家を出て職場にゆき、五ツ（八時）ごろには仕事につく。中休み・昼休み・八ツ（おやつの語源）の中休みをして、日が暮れる前に仕事をしまい、家に帰る。そして、夕食をすれば暮れ六ツ（午後六時）前後ということになる。

今日のような照明はないのだから、お天道さまとともに起きて、お天道さまとともに寝るというのが、一般の生活リズムであった。燈油も高いのである。そのため、夏と冬では労働時間に長短があった。しまりやの商人は、家普請などはできるだけ冬場はみあわせて、夏場を選ぶようにと戒めていたものだ。

江戸をはじめ、全国の城下町には、職人の業職の名をつけた町名が多い。

鍛冶（屋）町・紺屋町・瓦町・鋳物師町・鍋屋町・桶屋町等々……。

これらは、城下町建設のとき、同職の職人が集団で居住させられたのである。それは、領主の手工業品の需要に応じさせるためと、職人統制の便のためであった。

領主は、町に名主・職人頭・肝煎を置いて、諸職人を取り締まらせた。

たとえば、江戸の紺屋町は、北紺屋町や神田紺屋町など六町を数えるが、これを紺屋頭土屋五郎左衛門が支配していた。

五郎左衛門は、幕府の御細工所から染物生地を受けとり、これを紺屋町各名主に命じて町中の紺屋にふりあてて染めさせ、製品ができあがると集めて検査した上で、御細工所へ納めた。

これを国役という。仕事で納める税金といっていい。国役は大工・鍛冶屋などにも課せられた。大工など一年に何日働くか、日数がきめられていたものだ。いうまでもないが、幕府ばかりでなく、諸大名も職人に国役を課していた。

五郎左衛門ぐらいになると、へたな旗本などもおよばないほどの見識があったし、裕福であった。なにしろ五郎左衛門は、関東九カ国の紺屋から藍瓶役を徴収する権利を許されていた。藍瓶役は瓶一つに米一斗、寛文以後では銭にかわって二百文をとりたてていた。

五郎左衛門以下でも、名主や肝煎になると、名字帯刀を許された職人もいた。手職人と違って特権職人は、人もうらやむ生活をしていたものだ。

	天保六年（一八三五）			安政二年（一八五五）		
	手間賃	飯料	計	手間賃	飯料	計
上大工	匁 三・三	匁 一・三二	匁 四・六二	匁 四・五	匁 一・五	匁 六・〇
下大工				三・三	一・五	四・八
上屋根葺	三・三	一・三二	四・六二			
畳刺	三・三	一・三二	四・六二			
上左官	三・三	一・三二	四・六二	五・〇	一・六	六・五
建具職	三・三	一・三二	四・六二			
瓦葺						銭 五四八文
手伝						銭 三四八文

（『体系日本史叢書』16・生活史Ⅱ）

右の表の賃金は、大火事などの非常時の幕府公定賃金である。

両替率が変動してはなはだつかみにくいが、金一両＝銀六十匁＝銭六貫文とすれば、銀一匁は六百文。上大工は天保年で二千七百七十八文、安政年三千六百文となって、高村光雲がとりあげた大工の賃金よりずっといい。一度の大火で三年食えたというのも、まんざら嘘でもない。この上大工も下大工も親方であろう。この下に平職人がいる。

職人の仕事ぶりはどんなだったか

「職道第一に心懸け倹約を相守り身持法のごとく相慎申すべく候」（堺の大工仲間の規約）

ということで、よく働いたものである。職人の手足、身体まで、その職業にふさわしいように変形するほど働いた。

帝塚山学院大学教授大谷晃一氏の話だが、福島県の三春の張り子人形をつくっている老婆の右手親指が、第一関節から鉤の手に曲がったままになっているのを見て、声をのんで驚かれたという。

老婆の指は、人形の木型に紙を張って、目や口などの凹凸にぴったりあわせるために力をこめて押さえつづけて六十年、ついに指は曲がったまま固まってしまったのだ。

左官のよく使い込んだ鏝は、剃刀のようになり、指一本ぐらいやすやすと切り落とせるという。

安永三年に書かれた『富貴の地基』などによると、律儀・正直・丁寧を心がけて他職をうらやましがらず、ただ一心不乱に働きぬけ、と教えている。もっとも勤倹貯蓄は職人だけのものではない。

しかし、職人もいろんなのがいる。よく働くものもいれば、適当にずるける者もいる。

たばこのむ又あのあとじゃ鉋とぐ

今日では電気ガンナを使うので、職人が鉋を

とぐ姿をみることが少なくなった。昔の大工は、よく鉋をといだものだ。一日の半分は、鉋や鑿をといでいるのではないかと思えるくらいだった。この鉋とぎは、依頼した者からみると、むだな時間に思える。そこでつい、

おやつには研ぎ分ばかりちとへらし

と、お茶菓子も加減したくなる。

きれない鉋よりきれる鉋の方が仕事も早いし、仕上げもいいのだが、しかし日雇い仕事と請負仕事では、職人の働きぶりも違ってくるものだ。

高みにて主の御意得る松作り

庭師・植木職人は、梯子をかけて高いところで仕事をしている。仕事を頼んだ旦那は、下からあれこれ希望をのべる。このときばかりは、職人が旦那を見下ろして受けこたえしている。

指似隠しや鍋の鋳掛の火が飛ぼう

鋳掛屋が仕事をしていると、好奇心の強い子供たちが集まってきて、しゃがんで熱心に見ている。その中には女の子もまじっていて、かわいいワレメがのぞく。

「おいおい、大事なとこを火傷でもしたら、どうするんだい」

念のために、江戸時代にはパンティー、ズロースはなかった。

こんなかくしどころが現れた話では、

鏡とぎすこし出したで顔がふえ

江戸時代の鏡は青銅製、白蠟を混じた銅板に水銀をぬって反射させた。それがくもると、ザクロの皮を干したもので磨いた。磨くときは、鏡を下に平らに置いて、その上にのしかかるようにしたものだ。力をかけると、勢い尻があがる。夢中で磨いているうち、褌がゆるんで、おもしろいものが顔を出すのである。

「あれ、ごらんな……」

と、女中衆が袖ひき目ひきして、笑いをかみ殺している光景が想像される一句である。

職人気質は何をもたらしたか

気質は、それぞれの環境によって培われる。武士気質もあれば商人気質もある。

職人気質も、職人の仕事を通じて生まれ育ったものである。宵越しの金は持たぬという意気も、火事と喧嘩は江戸の花で、喧嘩早いことを自慢する威勢のよさも、職人気質の一面を物語るものである。

本当の職人気質は、自分の職業の神の前に出ても、恥ずかしくない仕事をする精神から発するものである。自分の分を守り、ひたすら仕事に精を出し、すこしでも良いものを、美しいものを、人さまに喜んでもらえるものをつくりだすことにつとめ、

「もし、お気にいらなければ、工賃はいりません」

といえるだけの、自信と誇りが職人気質である。人さまから仕事をさせてもらって渡世がなりたっているという謙虚さを忘れては、いいものはつくれない。

注文を受けても自分の気がむかなければ一年でも二年でもほっておくとか、金品をどんなにつまれても仕事をしないなどという、いわゆる名人気質などは話としてはおもしろいけれども、それは奇人の話であって職人のものではない。

職人は、先にあげた堺の大工たちがいうように、職道第一と心がけ、「道」の倫理をわきまえた者たちである。

江戸の職人たちは、数々のすぐれた作品を残している。それらを残した職人は、ほとんど無名の人たちである。今日の工芸家のように、作品を必要以上に誇ろうとはしない。ましてや、傲岸な芸術家ぶるところもなかった。彼らは、ひたすら渡世のため、人に喜ばれる日常の具をつくったのである。

人に喜ばれるものをつくる——これが昂じて工賃よりも賞賛の方を大事にする気がある、こ

れが職人の気質であろう。

幕末、職人たちは、まったく異質な西欧文明に接することになった。彼らは驚いた。が、驚きをのりこえて、異質文明を自分のものにとりいれてくる。これは、くどいようだが、日夜、工夫に工夫を重ね、技術を磨いていこうという気風、技術の伝承があったから容易であったのである。

大村益次郎は、宇和島で、書物の上からだけで軍艦＝蒸気船をつくった。造船は科学技術、工業力の結集・総合の上になりたつ。日本にはそんな土壌はなかった。が、つくりあげた。その蒸気機関をつくったのは、嘉蔵という、しがない細工師であった。

現代日本が、先進工業国といわれているのも、江戸の職人たちの伝統を受けついでいるからである。

（松永義弘）

山手樹一郎長編時代小説全集　71

三百六十五日

発行——一九七九年一二月一五日初版第一刷
一九八三年一〇月二〇日初版第一二刷

著者——山手樹一郎©

装画——国貞（静嘉堂文庫提供）

装丁——玉井ヒロテル

発行者——和田欣之介

発行所——株式会社春陽堂書店
東京都中央区日本橋三一四一一六
〒一〇三 ☎東京二七一一〇〇五一　振替東京〇一一六一七

印刷製本——城北印刷製本センター

◆——定価はカバーに表示してあります
乱丁本・落丁本はおとりかえします